
東方夢幻抱影

銀花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢幻抱影

【Zコード】

Z8911P

【作者名】

銀花

【あらすじ】

一つの存在がその世界に“生まれた”。産まれたのではなく、生まれた。妖怪という一つの種の中で原初種に属する青年は、これららどのような道（歴史）を歩み始めるのだろうか。そしてその果てにあるモノとは

0・存在の生誕（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

存在が生まれる。

それはどのような事柄なのだろうか。

生命が産まれるということは概ね想像しやすい事柄だろう。何せこの世界で生きている存在は新たに産みだされた存在なのだから。しかし、存在が生まれるということを想像出来るだろうか。

端的に言えば、何もない空間に突如発生するモノとでも言えればいいだろうか。

無から有を創り出す。世界を構成する等価交換の法則に真っ向から喧嘩を売っているような事柄だ。

普通、正常、常識的、全般的、一般的ならばそのようなことはあり得ないだろう。

そんなことが出来る存在など神以外には いや、一端の神ですら成し得ることは出来ない。出来るとしたらこの“世界”を構成し創り上げた創造神くらいか。

本来ならば存在し得ない筈の存在。

それを人は “異分子”^{イレギュラー} と呼ぶ。

それを是と取るか否と取るかは人それぞれだろう。

だが、仮にそのような存在が生まれたとするならば、それは既に “異分子”^{イレギュラー} でないのかもしれない。

存在し得ない筈の存在が存在するから “異分子”^{イレギュラー} と呼ばれるのならば、既にそのような存在が存在しているのならば、それは世界に組み込まれた歯車の一つとしても捉えられるのではないだろうか？

その問い合わせ持つてゐる存在はこの世界を創り上げた創

造神くらいだろ？

故に、その問い合わせの正しい解は誰にもわからない。

そう 誰にも。

「…………」

目を開けた。息をした。周りを見た。
この三つの行動が一瞬にして行われる。辺りは静謐を帯びた深い
森。その中で俺は眼を覚ましたらしい。

というより、俺とは誰だ？

疑問を口にした瞬間、突如激しい頭痛が襲いかかって来た。
グッと呻き声を上げながら膝を付く。幸いに、この場所は
森の中でも最も深い場所なのか俺以外の生命体の存在を感じられない。

だから俺は身体の力を抜いて地面に横たわる。襲われる心配がないのなら無理に力む必要もないだろう。

数分くらい経った頃だろうか、漸く今し方まで俺を苛ましていた
頭痛も收まり立ちあがれるようになる。

「俺は…………」

靄が掛かっていた頭の中が急にスッキリとした。まるでソフトの
ダミーファイルを検索し、そのダミーファイルを駆除したことによ
りソフトが正常に稼働するようにな。

「 ”知識” は存在する。だが、 ”歴史” がない？」

「――で、言つ俺の ”知識” といつものは文字通りの意味であり、 ”歴史” といつものはその存在が歩んできた ”人生” のことを指す。 ”知識” は本来ならば ”人生” を歩むことによつて蓄えられる情報だ。

しかし、何故か俺には ”人生” はなく、あるのは ”知識” のみ。

「あり得ない現象、だが ”ありえないなんてことはありえない” 」

俺という存在は存外節操がなかつたようだ。
知識にしても一般常識からマニアックなものまでありとあらゆる分野の知識がこの頭の中に詰め込まれている。
今零した言葉もその中にあつた言葉の一つ。だが、それは限りなく真理に近いものだと俺も思う。

「――の世にあるのは1%から99%だけ。0%と100%という ”絶対” という言葉は存在しない。」

「ま、そんなことは今はどうだつていいとか」

今ここでそんな論弁を垂れている暇などはない。

「今は今後のことについて考えるか。幸いなことに俺には膨大な ”知識” があるから生きてはいけるだろつ」

まずは辺りの散策から始めるか。

せめて水を摂取出来ることを探さないと。こんな森ならどこかに泉でも湧きでてるだろつ。欲を言えば果実が欲しいところか。

俺が自分という存在を自覚してから十日ほど経過しただろうか。幸いなことに森の中の泉を発見することができ、またその近くにナニカの果実が生っていたので飢え死にすることはなかつた。

また俺を襲うような獣もおらず、のんびりと過ごすことが出来た。

ここでこの十日ほどでわかつたことをいくつか挙げてみよう。まず一つ目、重大なことだが俺は人間じゃないかもしない。どういうことだ？ と思う人もいるかもしねないが、俺にも詳しいことがわからない。ただ、俺がそう思つたことの確証としては、まず人間にすれば俺は異様に身体能力が高すぎる。“知識”を見るに、人間の50メートルの記録は5秒を切ることはなかつた筈なのだが、今の俺は一息する刹那の間に走ることが出来る。他にも単純に放つた右ストレートで大木を貫通させるなど、到底人間では到達し得ない身体能力をこの身体は有している。

次に一つ目、これは前のものと被る内容だが、俺には特別な“力”があるらしい。

どのようなものかと言われば形容しがたく、何と言うか力を込めなければ霧みたいなもので、力を込めれば指向性を持たせることができたり、球状や円錐状など色々な形にも変化させることが出来る。

正直、これを発見した時には自分を人間とは思えなかつた。別にどうつてこともなかつたが。

話を戻すが、その力について“知識”から検討を付けようと思つたが、イマイチわからなかつた。“知識”的方ではそれらしいものは確かに存在していたが、どうやらそれはお伽噺の中でしかなく現実では存在し得なかつたらしい。故に検討を付けることが出来ない。

”知識”の中についた力の名称などを挙げると、まず人間が修行することで身に付けることが出来る”靈力”。これは応用などが効き辛いが五種ある内の三番目に力が強い。

二つ目が”魔力”。これは人間が修行することで身に付けたり、その他には魔法使いという”種族”が扱う力だ。これは力が弱いが応用が広く汎用性が高い。また力自体は少ないが、それを補うような応用法もあり威力だけを見れば他の力とも見劣りはしない。

三つ目は”氣力”。これは人間に限らずありとあらゆる生命体が持つ力。生命力と捉えても間違いではない。これを鍛える手っ取り早い方法は身体を鍛えること。これに限る。また力の方は力も弱く、応用も聞き辛いが身体能力を向上させるという点に置いては他の力を上回る。

四つ目、これが一番俺の力に近いと思われるもので、名称は”妖力”。

名が体を表すとはこのことで、字面でわかる通りこれは妖怪と呼ばれる存在が扱う力だ。これは他の力とは違ひ鍛錬によって容量が増すのではなく、月日を積み重ねることによって増えて行く。つまり、歳を取った妖怪ほど力のある妖怪になるというわけだ。また、これは力、応用力などは中々で一番バランスが良い力だと言えるだろう。

最後の五つ目は”神力”。

これも字面からわかる通り、神様が扱う力だ。これは他の力とは別格で力、応用力ともトップの性能を誇る。が反面、容量を増やす為には信仰を増やすしか方法はない。それだけなら簡単に聞こえるが、この力の厄介な点は信仰でしか増えないという点。もし信仰がなくなってしまえばその力は失われる。つまり、五種の内、一番強

い力ではあるが、一番維持が難しいという点を持つ。

「IJの中で神力は除外される。俺が誰もいないところで信仰される筈もないからな。次に省かれるのは靈力と魔力か？ 確かに才能があつたと言つてしまえばそれでお終いだらうけど、どうもそう思えないんだよな。魔力なら周りの自然に何かしらの影響を与えるだらうし、靈力ならもう少し神聖に近い雰囲気を漂わすだらうし。何せ俺の力つてどつちかつていうと負の方面っぽいしな。氣は保留つてどこか？ あり得そうなのは 1が妖力。もしこれなら俺の存在は妖怪つてことになるな。2が氣力。これならどんな存在でも持つてるから別に俺が持つってても可笑しくはない。3、4が同着で靈力と魔力。才能がないって切るのは些か早いだらうし。5でまあののが神力つてどころか」

掌に渦巻く力の奔流。

それを放出するのではなく固定。そして形成。形作られるものは漆黒の両刃の長剣。

だが、その形も数秒すれば崩れ去り、力は霧となつて霧散する。

今度は上空に向かつて力を放出する。量は自分が出せる最大限。蒼海を思わせる極太の奔流が空を裂く。それはまるでSF小説に出てくる宇宙戦艦のレーザーのようだ。空を裂いた奔流は少しづつ威力を弱めていき、最終的にはこれも霧散する。

「威力としては後者が使い勝手が悪いか。前者は使い勝手は良さそうけど、まだ使いこなすだけの力量はないと」

概ねの事は理解した。

「とりあえずは鍛えればいいんだろ？ 身体も力も全部

」

「」がどこかなど俺に知る術は今のところ存在しない。

それどころか、もし俺の”知識”の知るところであっても今の俺は化物扱いで迫害、いや殺されるだろう。

ならばどうするか？ そんなものは決まっている。

殺されないほど強くなればいい。誰も俺に挑む気が起きないほど

の高みに到達すればいいだけだ。

0・存在の生誕（後書き）

初めまして、銀花と申します。

今回、東方projectの一次創作を書き始めましたが、やはり中々に難しいですね。

キャラが大量に存在する点や、この作品は幻想郷成立の前、それも大昔から始まりますので原作キャラは中々出てこないなど。長い目で見て貰わないと初めの方は面白くないかもしません。

それでも精進しながら執筆していくので、皆様生温かい視線で見守つてくれると幸いです。

また、感想なども頂けると私のモチベーションが上がるるので、お暇な方は是非。

1・初の実戦は死闘（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

1・初の実戦は死闘

あれから十年、いや二十年は過ぎ去つただろうか。未だに俺はこの深い森を壙おぐりとし、ただ只管に自己の鍛錬を努めていた。

身体能力の向上は元より、足の運び方などの武術全般、妖力であろう力の使い方。武器を使用したという仮定での近接戦闘と遠距離戦闘。

ありとあらゆる様々な訓練を日夜明け暮れていた。

そして、この頃から自分は人間ではないナニカということを無理矢理理解させられた。

理由は何故かと尋ねられれば、それは甚く単純であり、俺という存在がいくら歳月を積み重ねようとも容姿はおろか、身体能力の低下などが見られなかつたからだ。いやそれどころか能力は増す一方だつたと言つてもいい。

それと同様に俺が扱う力も増す一方。この事から考えると、やはり俺は妖怪という種族に分類され、また扱う力も妖力で十中八九間違いないだろう。

「ま、俺が人間だろうが妖怪だろうが別に構わない訳だが」

大体、何を根拠として”妖怪”という種族を指すのか。

妖怪には様々な種類が存在する。有名どころを挙げれば小豆洗いなどの実害を与えない妖怪も存在すれば、茨木童子などの細かい区分で言えば鬼に属する存在も、大きな目で見れば妖怪という一括りで表わされてしまう。根本的なところを見れば全く別の種族である筈のそれらはどうしてか一緒にされてしまう。

これには理由があるのだろう。妖怪の根本的な概念というものは

人が畏れる”何かよくわからないもの”だ。人間という種は理解出来ない存在に恐怖を抱く存在である。

故に恐怖から形作られる妖怪という存在の元を正せば”何かよくわからないもの”となるのだ。

だからこそ、小豆洗いや茨木童子など全く別の存在である筈の二つとも妖怪という大枠で一括りにされてしまう。二つとも、根源的に言えば”何かよくわからないもの”だから。

「”何かわからない”。それはつまり俺が人間かもしれないということでもある」

人間の中でも”何かよくわからない”存在が偶に存在する。それは得てして奇人や狂人、変人などと称されて迫害を受けるだろう。だが、それでも根本的なところは人間である。それがどれだけ人間から離れていようと。

「別に人間に執着するつもりも更々ないけどな……」

これだけ論弁を垂れたが、結局の話、俺は人間だろうと妖怪だろうと別に構わない。

「俺は俺だ。そこに何人足りとも割り込む隙間などは存在しない」

自分が自分である信じている限り、俺は俺で在り続ける。種族など些細な事に過ぎない。信念が、魂が俺で在り続けるならば、どのような種族になろうとも俺は俺なのだ。

今日も今日とて、俺は鍛錬に明け暮れる 筈だった。

本来ならば聞こえる筈のない唸り声が俺の耳に届く。それは獸ような鳴き声であり、俺がいる場所より更に奥のところから響いてくる。

行くべきか行かまいべき数瞬の内に思考し、俺は進むといつ選択を取る。

どうせ、今この瞬間に行かなかつたとしてもいはずはこの声の主とは顔を合わせるだろう。ならば油断している隙を突かれるより自分から仕掛けた方が大分とマシだというだけ。

一步一步、眼の前の地面を踏みしめるように進む。勿論、進軍途中で不意を突かれてもいいように周囲の警戒は万全だ。小枝を踏む音に少し吃驚するが、心を落ち着ける。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか

生命の躍動、つまりは生物の呼吸音が俺の耳に届く。
距離は……近い。

最後の一歩を踏み出し、鬱蒼と覆い茂る木々を抜けた。その先には

「おいおい……。北欧の神殺しの御人ですか？」

眼の前に現れたのは巨躯の狼。

未だ日が昇っている時間帯だというのに、その狼が持つ漆黒の毛並みのせいで辺りは夜のように薄暗く感じてしまう。

その姿は”知識”にある災厄を齎す狼”フェンリル”のようだ。

眼の前の狼は俺が仮に与えた名に恥ずることのない威圧感をこちらに放つてくる。

「待て待て。何でこんな化物級の存在がこんなところに居る？ そ

れ以上に何で俺は今までこいつの存在を知らなかつた？ こいつほどだったら間違いなく気付くだろ？」

そうは言つたものの、俺にはある程度の検討は付いていた。
こいつは恐らくではあるが俺と同じように生まれたのではないの
だろうか。それならば説明が付く。俺もその空間に突如存在したよ
うなものだつたから。

だが、今は理由など必要ない。今必要なのは、どうやつてこの場
を切り抜けるかの一点に尽きる。

こんな化物を野放しにしていたら間違いなく俺が餌食にされる。
だが、今この場所で俺はこいつに勝てることが出来るか？
あいつも俺と同じような存在ならば、生まれたてだろうがそれな
りの知能を有しているだろう。それを打ち破ることが出来るのか？

「退けば待つものは死。ならば行く」、か

俺の気配を感じとつたのか、今まで様子見をしていた狼も臨戦態
勢に切り替わっていく。

集中しろ。

自己暗示……には程遠いものだが、自身の神経を戦闘状態へと切
り替える。

想像しろ。

掌に渦巻く妖力が形を成す。そのまま形成されたものは漆黒の長
剣。

前を向けッ！

狩らなければ狩られる。ならば狩ればいいだけの話！

俺は地を踏みしめ、そのまま狼に突撃する。

爆発的な速度で地面を疾走する俺は先手必勝とばかり、駆け抜けている速度を上乗せした突きを放つ。最早音速を通り越すそれは、自身の狙い通り眉間に吸い込まれる。が

「チイツ！」

音速を超えたそれを、狼は自身の巨躯を物ともしない動きで避ける。

突きを放つことによって流れた身体を慌てて戻そうとするが、その隙を見逃すはずもなく狼は両の手に生えるギロチンのような爪を振るつた。

瞬時に掌に琥珀の盾を形成。その盾で巨躯の剛腕から繰り出される爪を真正面からは防ぐ気は流石に起じる気がしない。だから受け流すような形で斜めに構えた。

交錯は一瞬。ズドンと重い力が腕に加わるが斜めに構えたことによりそのまま狼の爪は盾の表面を滑り落ちる。

今度はこちらの番だ。

爪が盾の表面を滑った時に狼に肉薄。そのまま身体の捻りを加えた回し蹴りを一発。勿論のこと、これで決まるとは到底思っていない。蹴りをぶつけたことにより俺の身体は反動で狼と距離が取れる。反動により宙を滑空している間に手に持つ漆黒の剣を投擲する。本来ならば武器を手放すということは自殺行為に近いことだが、俺が扱う武器は自身の妖力がある限り無限に創りだすことが出来る。

放たれた剣は狼の脇腹に命中。致命傷とまではいかないが、それでもダメージを与えることは出来た。

ドクドクと溢れ出る狼の血が地面に零れ落ち、まるで地面が硫酸でも掛けられたかのような音が鳴り響く。

「おいおい……、血が硫酸みたいなのは洒落なつてなくないか？」

引き攣り笑いを起こしているのが自分でもわかる。

何せ自分は接近戦を封じ込められたのと同じなのだ。下手に傷でも付けようものなら、それによつて出来た傷から噴き出る血により俺が敗北する。

故に、俺が出来る戦闘方法は遠距離戦に限られた。

しかし、如何せん俺は遠距離戦は未だ苦手だ。

「けど泣き言を零したつて始まらないんだよな……」

息を吐き、吸う。

身体の中に存在した酸素を取り換える。未だ敵意を滾らせる狼がそこには居た。

両の掌に渦巻く奔流を瞬時に形成。深紅の槍が一本形成される。

「疾ッ！」

右手の紅槍を投擲。瞬時に手には四本のナイフを形成する。

一本目の槍を避けようとしているところに時間差で四本のナイフも投擲する。それに気付いた狼が振り払おうと腕を振るうが遅い。

一本目の槍も四本のナイフも最終の一本を当てる為の布石でしかない。最後まで残つっていた紅槍を脳天日掛け投擲する。

一本目の槍は追加のナイフに気を取られて避けそこなつたのか足に直撃している。そして狼は殺傷能力の低いナイフを振り払うため腕を振り上げている。つまりは最後の一本を防ぐ手立てはない

۲۰۱۱۰

これで終わりだ
ツ！

投擲された槍に気付いた狼であるが、時既に遅し。こちらに顔を向け恐怖に打ち拉がれた つ！？

普通ならば先ほどの槍を放つた時点で俺の勝利で終わる筈だった。

「ガアアアアアアアアアアアアツ！」

こちらを向いた狼は、あろうことかその口内から炎を噴き出す。それは伝承通りの“フェンリル狼”そのものだった。

吐き出された炎は、天を焼き焦かすかのよくな熱量を放ち、炎の進行上に飛来していった深紅の槍を消滅される。

突然のこととて呆然として為、その炎が自身の身に迫っていることを刹那の間忘れていた。

「三、四、五」

そのまま俺は煉獄の炎に閉じ込められた。

1・初の実戦は死闘（後書き）

とりあえず、休みが終わるくらいまでは一日一話投稿が出来そうです。

それが終わると週に一、二回とこりくらいでどうか。

2・能力覚醒 “Junction of Idea”（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「グルルウウ……」

狼が唸り声を上げる。唸り声はそのまま雄叫びへと変わり、それはまるで自身の勝利を周囲に誇示しているかのようだった。それはそうだろう。狼が吐き出した炎は正真正銘の魔界の炎だつた。

対象に一度燃え移れば、対象を燃やしきるまで燃え広げる」とない業火。命中すれば必殺のそれが命中したのだ。普通ならばそれで勝利は確定している筈なのだ。

「ガア？」

燃え尽きる筈のない業火が少しづつではあるが鎮火していく
る。

だが、煉獄の中でゆらりと浮かぶ黒い影。

それは

「本気で死ぬかと思つたぞ……」

眼前から襲い掛かってくる猛る業火。左右に避けている時間など

ならば盾を身体全体に覆つか？いや、それも無理だ。深紅の槍を

一方的に消滅させる程の威力だ。今現在の俺が出せる盾じゃ一方的に消滅の一途を辿るだろう。

なればどうする？

俺はここで死ぬのか？

俺は何も成す前に潰えるのか？

そんな終焉おわりを俺は認めるのか？

そんなこと、認められないに決まってるだろッ！

迫り来る業火が鮮明に見れる。モノクロだった世界に色が戻る。その中で、まるで自分以外の時間が止まつた感覚だ。

その不思議な体験をしているなか、それ以上に不思議な体験が俺を襲つた。

それは俺が保有している”知識”とは違う”知識”。それはまるで身体が”識つている”ような感覚。

理屈などはなく、自分唯一人だけが理解出来る公式ちじき。他人などは意味はなく、自身にしか意味はない。

「不燃の概念を付加」

意識したわけじゃなかった。ただこう口にすべきと思つたから。そうした瞬間、俺は”識つている”という状態から”知つている”という状態にシフトした。知識を有したことにより情報を理解す

る。

「何とまあお強い」とで……」

俺を覆う琥珀の膜は”不燃の概念が付加されている”。

つまりは迫り来る業火がどれほど強力だろうと燃えることはない。

「さあ、反撃といこうか

「さて

俺が新たに手に入れた能力は単純でありながら、強大なものだ。名は”概念を付加させる程度の能力”。名前からわかる通り、俺の能力はこの世界に存在する物質、または妖力などの五種の力に俺が想像することの出来る”概念を付加”することが出来る。

例えば、先程の”不燃”の概念は、俺の身体周りを覆うように形成した膜に付加させた訳だ。

これだけを聞けばとても有用に聞こえはするが、やはり欠点は存在する。

まず一つ目だが、付加させる概念は正確に想像しなければならないという点。これは比較的に達成しやすい。

だが一つ目が問題だ。

その問題とは概念を付加させる物質の許容量の概念しか付加させることが出来ないという点だ。これは簡潔言えば超高性能なパソコンソフトがあるうと、それを機動出来るだけの性能のパソコンがなければ使いこなすことは出来ないということ。

つまり、ここで言う付加させる物質がパソコン本体に当たり、概念がソフトとなる。

「どこまで付加出来るかはこれから的重要課題だな」

纏う琥珀の膜は解かず、新たに掌から流れ出る奔流を形作る。それは翡翠色の小剣が両手に握られた。

「消火の概念の付加」

そのまま翡翠色の小剣一本を乱舞する。すると小剣が通った場所の炎を勢いを失つて鎮火されていく。

鎮火されていくその光景を俺は眺めた。

「第一ラウンドといこうか」

俺の姿を確認した狼は動搖したような呻き声を上げる。あつちもどうやら俺が生きていることが予想外だつたのだろう。正直、自分でも予想外だつたが。

今この隙を逃す程俺は甘くない。

概念を付加された翡翠の小剣を霧散させ、新たに蒼海の大剣を形成。形成と同時に概念も付加する。

「切斷の概念を付加」

大剣を担ぎ上げたまま狼に肉薄する。漸く呆然状態から回復したのか防御行動を取るが 甘いッ！

「霸アツ！」

尻尾と腕を防御に回したその上から一刀両断する。斬撃は一瞬で、痛みを感じる前に絶命しただろ。血飛沫が降り懸かる前に前線を離脱した為、飛沫が懸かる前に退避することも出来た。

「一段落……といつところか」

息を吐いて、そのまま大の字に倒れる。

「今日はもう無理だ」

そのまま眼を閉じて眠気に身を任せた。

あの巨狼との戦いから数十年、俺がこの世に存在してから一世纪くらいの月日が経過した。

結局、あれからあの狼のような化物は存在せず、狼と出会い前の二十年間のような静けさの中で俺は過ごしている。

あの戦いから俺はより一層鍛錬に励み、今では徒手空拳から武具の扱いはそれなりの域に達したと思う。また、俺の中の妖力も増え続け、形成の幅も広がった。

あれから一番訓練、というより開発したのが自身の新たな力である”概念を附加させる程度の能力”だ。

大雜把などこなはあの極限状態で確認していたので問題はなかつた。何が問題だったかというと、どれくらいの物質にどれくらいの概念を附加させることが出来るかという点のみ。

今のところ俺が実際に付加させた概念は不燃、消火、切断、硬化、燃焼、凍結、感電といったランクで言えば最底辺のものだけだ。

これより上位と言えば必中や無効化といったものは未だに付加することが出来ない。出来ないと言っても想像が欠如しているという理由ではなく、単にその概念に耐え得る物質が存在しないだけだ。もし耐え得る存在があるならば今すぐに付加させることが出来る。だが、今この場所にある物と言えば木々か俺の妖力。しかし、木々は勿論のこと俺の妖力でさえそれらの概念は付加させることが出来なかつた。

「何か良い方法はないものか……」

と言つても、この場に居るのは俺のみであり、俺以外の存在はない。

故にこのように呟いたといひで返す存在はない。

それを考えてから氣付いた。

居ないのならば居る所を探せばいい。いつまでもこんな陰湿な森なんかに居る必要は全くなかったのだ。

確かに最近までは自身の鍛錬や能力の開発などで急がしかつたが、今は人段落が着いている。ならば早速この場所から移動しよう。もしナニカに襲われようと、今では俺も中々の実力者（と思つ）だ。早々遅れは取らないだろう。

「善は急げだ」

早速この森から出発する準備に入る。準備と言つても俺が所持しているものと言えば、ここに存在した時に着用していた黒の気流しのみで、他の物などはない。

身一つで放浪の旅をするのは些か不用心かもしれないが、準備出

来るものもないのだ。しょうがないだろう。

後は適当に自分で作つた樹の水筒と、大きな葉で作つた風呂敷にいくつかの果実を入れて背中に背負う。これで準備完了だ。

「それじゃ早速行きますか」

俺は初めてこの世界に存在してから歩み始めた。

目指すは森の外の世界。ただ出口はどっちにあるんだろうか？

どれだけ歩いただろうか。

幸い、あの森から脱出するのに一日も掛からず、意氣揚々と辺りを散策していた。

だが、それからは見える景色は広大な草原や高原、それに前と似たような森ばかり。人間という種族が住んでいる気配一つない。

流石におかしいと俺は考え始めた。

”知識”にはこの世界には60億以上の人間が住んでいるという。ならば一人くらい見掛けてもおかしくはない筈だ。確かに”知識”にはオセアニア大陸やアフリカ大陸といった人口の少ない地域は存在する。だが、その地域は比較的人間が住みにくい地域。つまりは乾燥して穀物が育ち難い等の問題を抱えているからだ。

しかし俺が居る場所は緑豊かな大自然。こういう場所なら反対に人間という種は繁栄し、またその数を増やす。なのにこの辺りには人っ子一人として存在しない。

「どういふことだ？」

だが、漸く生物の気配を捉えることが出来た。

生物と言つても獣などの動物などではなく、それなりの文化を持つ生命体だ。風から流れてくる匂いやその風に乗る力の残滓などを感じる。

距離にすればそう遠くない内にその場所へ辿り着くことが出来るだろう。

俺は少しだけ嬉しくなり歩く速度から駆ける速度へとシフトさせる。

またそれと同時に妖怪と/or/ことがバレたら面倒なので、自身の妖力を出来るだけ外に漏らさないように抑えつける。制御は力を扱う上で最も大事な技術の一つだ。故に俺もそれに関してはお手の物と/or/ことのもの。

「さて、と

そのまま草原を駆け抜けて行く。

と言つても、流石に一昼夜では辿り着くことが出来ず、何回かは野宿をする羽目にはなってしまったが。

それでも俺はその生命体が繁栄している場所に辿り着く。

そしてそこで目にした物は

「なんじゅうじゅう……？」

眼の前には“知識”の中では小説などでしか登場する「」とはなかつた街並みがその場所には存在していた。

2・能力覚醒 “Junction of Idea”（後書き）

能力名：概念を付加させる程度の能力

世界に存在する物質、または力に概念を付加させる能力。
概念には容量が存在し、また物質と力には共に概念を受け入れられる許容量が存在する。

仮に物質の許容量が10とし、概念の容量が20と仮定したならば、その物質は概念を受け入れるだけの許容量が存在せず、そのまま世界から消滅してしまう。

反対に物質の許容量が30、概念の容量が5とするならば、物質は概念を受け入れ、その概念の能力が付加される。勿論、物質には残り25分だけの許容量が存在する。その為、他の概念も一緒に付加させることも出来る。

また、高度な概念の方が低度の概念よりも世界に顕現出来る時間は短く、例えば50の概念と10の概念ならば10の概念の方がより長く世界に顕現することが出来る。なお、50の概念と10の概念×5、つまり結果的には50の概念ならば、後者の方が長く顕現することが出来る。つまり、低度の概念を複数付加させる方が時としては有効ということでもある。

主人公は感覚的に概念の容量と物質の許容量を判断することが出来る。

（暫定的概念の容量）

不燃 - 3
消火 - 3

樹などの自然物質	- 0 . 5
主人公の妖力	- 1 0
（暫定的物質、力の許容量）	（
無効化	- 1 0 0
命中	- 5 0
凍結	- 6
感電	- 5
燃焼	- 5
硬化	- 5
切断	- 5

3・未来都市（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

大都市と称しても間違いではないその街並は、俺の中にある”知識”とは似ても似つかわしくないものだつた。

乱雑と住居が立ち並ぶのではなく、ちゃんとした区間整理は勿論のこと、大都市に相応しい長高層ビルや大型ショッピングマート、果てには超大型ディスプレイなど、常識的範囲はここまでだつた。俺が眼を剥いたのが空に”滑走”する車のような物体。車と言つても大型四輪車などのようなフォルムではなく、どちらかと云うと小型の戦闘機に近いが。無理矢理に言葉で称するならば、それはエアライドマシンとでも言つべきか。

それに伴い発展したのか、その都市には宙に浮かぶ建物など、どのように浮かび、どのように動力を得ているのか全く以て理解出来ないものだと多彩に存在する。

俺はすぐさま妖力を少しだけ解放し、自分の身体周りに琥珀の膜を覆う。その膜には不可視と氣殺の概念を附加させた。これにより俺の姿は誰にも発見されることもなく、また感じられることもなくなつた。

ここまで馬鹿げた発展をしているのは当初の俺も予想していなかつた。これでは妖力を隠すだけでは正体などすぐさまバレるかもしれない。だからここまで入念に自身の姿を隠す。

「もしかすると俺の”知識”とは別の年代、または別の世界に俺は存在したのかもしれないな」

現に俺の”知識”の中にはこれほどの技術力を持つた国や企業などは存在しなかつた。

ならば考えられることは一つのみで、一つは俺が持つ”知識”か

ら数世紀、または數千世紀先の未来に俺が存在しているのか。

もう一つは俺が持つ”知識”の世界とは別の世界、つまりは異世界や並行世界に俺が存在しているのかの一つだけだ。

ここで俺が困る世界は異世界の方だ。並行世界の場合ならば俺が知る”知識”と似たような歴史が展開されていく。ならばそれは俺にとつては利点なる。先を知っていると言うことは、それだけ危険から回避出来るということと同じであるからだ。

しかし異世界の場合は違う。異世界の場合、俺の”知識”は全くと言つていいほど役に立たなくなる。いや、それ以上に足を引っ張るだけの愚物になるかもしない。何故なら、俺が常識と思つてゐる”知識”もその異世界では非常識にも成り得る可能性を秘めているから。

俺は自分が感知されないということを理解しながらも、警戒は怠らないように辺りを散策していく。

街行く人々の服装は十人十色、”知識”内にあるような若者のファンションから”知識”内には存在しないようなもの、果てには奇抜なものや少し頭が可笑しいだろうと思われるものまで。

だが、その全員に共通するものは笑顔。誰も彼もが幸せそうに歩いていく。

これだけ大きい都市ならば、それだけ抱える闇もまた濃いはずなのに、その闇は姿を見せない。不思議に思つて薄暗い路地のような場所にも顔を出してみるが、予想していた風景に出くわすこもない。

人間という種は生物の中で一番醜く、意地汚い。他者を蹴落とし個人の幸せを追求するからだ。それは種本来が持ち合わせる感情なのでどうこう言つことはしない。

だが、だからこそこの現状は可笑しい筈なのだ。

誰も彼もが幸せそうな顔をしている。本来ならばこれを貶すことなど以ての外であり、貶している俺が悪い。俺も別に貶すつもりな

「何がどうなつたらいいまでなるのか……」

「何がどうなつたらいいまでなるのか……」

住宅街に足を向けて見てもそれは変わらない。

幼い子供達が公園のような場所を笑顔で駆け巡る。その親たちであらう人間達は、そんな微笑ましい姿を見ながら親同士の交流を育む。その公園には老人たちも集まり、健康の為か趣味かはわからぬが、それでも笑顔が欠けるようなことはなかつた。

だが、よくよく考えてみれば、何故俺はこれほど悩んでいるのか。別にここに住んでいる人間達が幸せだと俺に害がある訳でもないのに、どうして俺はここまで悩んでいたのだろう。

嫉妬？ 確かに今まで一人で生きてきた俺には眩しい存在だつた。だが、それだけで別にどうも思わない筈。ならば何故？

「知らない内に俺の中の”俺”が嫉妬でもしたのか？”知識”を見るからに俺が俺として存在する前の”俺”は人間だつたみたいだし。そこから人ではないナニカに存在が変われば、それは嫉妬の一つくらいはしたくなるものか」

そう勝手に結論付ける。

そうでもしないと面倒なのだ。誰にも迷惑が掛からない結論の付け方なら、特に問題ない。

「さ、散策を再開するかね

」

俺は俺なのだから。

それにしておこの大都市は馬鹿みたいに広い。

昼にここに辿り着いたと言うのに、今の時刻は逢魔ヶ刻。実に六時間ほど散策したというに、未だ都市の端は見えない。というより、俺が今都市のどの辺りに立つてているのか知覚出来ない程の広さなのだ。

時には大型ショッピングモールの中などにも入ったが、それでも一都市にしては面積が広すぎる。

ならばここは国という単位で見るべきか？

もしかするとこの都市と思っていた場所は国であり、ここを中心部には行政機関などが全て集まっているのかもしれない。それならばこの広さも納得出来る。

「そんな考察もどうでもいい。今は夜をどうやって越すかが問題か……」

さて、本当にどうするか。

別段野宿でも問題ない。公園で横になつてもいいのだが、如何せんどこに公園があつたかなど既に遙か彼方へと吹き飛んで行つている。

ここは辺り一帯は人々が慌ただしく行き駆つている。

俺は今現在、確かに他の存在から視覚することも知覚することもされないだろう。

だが、俺は見えない感じとれないだけであり、そこに俺は確かに”存在”している。つまり、俺という存在は見えない感じとれないだけであり、運悪く触れ合つてしまえば俺がその場所に存在しているとバレてしまう。

もしそうなつてしまえば酷いどこのでは済まないだろう。見えな

いし感じとれないのに、確かにその場所にはナニカが存在している。これほど不気味な存在はない。

そうなってしまえば、この辺りの人間はどうにかして俺という存在を消し去る筈だ。俺も透明になつていい訳でもないので攻撃されればその攻撃は俺本人に直撃する。俺もそれなりの攻撃ならば耐えきる自信はあるが、これほどの科学文明が発達している場所だ。重火器系統が飛び出してきてもなんら可笑しくない。いや、もしかするとレーザー兵器する飛んでくるかもしね。

「もしそんな未来兵器が登場してたら流石の俺でも無理だろ……」

想像したくもない未来を想像してしまい、俺はブルツと身震いする。

ブルツと身震いした瞬間、途轍もない悪寒が俺を襲う。じつとりとねつとりとしたような、まるで全身の細胞を隈なく観察されるかのような、そんな感覚が襲つた。

その感覚は一瞬で消え去つたが、俺は嫌な予感が拭えず辺りを見渡す前にその場から駆けだした。

荒い息を吐きながら大都市の中を駆け巡る。

その間、何回かではあるが見えなく、そして感じることの出来ない筈の俺を捉えていいような視線を感じた。

ありえない筈ではあるが、その考えを即座に打ち消す。俺は生まれた瞬間にどのようなことを考えた？

「”ありえないなんてことはありえない”　ツ！　糞ツ、能力の使用で慢心しすぎたかっ！？」

勿論、俺をどのような手段かはわからないが確認している存在が牙を向けることもないかもしない。

だが、それは反対に牙を向ける可能性もあるわけだ。

ショーレーディングガーの猫という思考実験の名称を聞いたことはあるだろうか。

あれは量子論に関する実験なのだが、内容は極めて単純。箱の中に一匹の猫と放射性物質のラジウムを一定量、ガイガーカウンターを1台、青酸ガスの発生装置を1台入れておく。

もし、箱の中にあるラジウムがアルファ粒子を出すと、これをガイガーカウンターが感知して、その先についた青酸ガスの発生装置が作動し、青酸ガスを吸った猫は死ぬ。

しかし、ラジウムからアルファ粒子が出なければ、青酸ガスの発生装置は作動せず、猫は生き残る。

一定時間経過後、果たして猫は生きているか死んでいるか、というものがだ。

これは最終的に生きている確率が50%であり死んでいる確率が50%という一つのパラドックスを起こす。

今俺が置かれている状態もこれに似ている。俺が襲われる確率と襲われない確率は50%ずつというパラドックスを抱えている。これは結局どうなるかはその時になってしまわない限りわからないというものだ。

だからこそ俺はあの場所から逃げだしたのだが

「見つけたっ」

いつのまにか眼の前は壁が立ち塞がり袋小路となっていた。

「中々私が誘いこむルートに逃げ込まないから少し困ったわよ。普通の存在なら絶対に選ぶであろう道も選ばないなんて、流石の私も

焦つたもの

まさか後ろから聞こえる声の主は俺が逃げるであろう道を先読み
いや、最終的にここに辿り着かせる道を俺に選ばせていたと言
うのか？

それが本當だというのなら、この声の主はどれほどの知略と策謀
を持つていると云つのか。

「でも鬼じつにもこれでお終いよ、貴方の負けでね。さあ、姿を現
しなさい」

これは詰み、か……
仕方ない

「これでいいか？」
「あら」

姿を現すと同時に俺は振り向く。
そこには赤と青の配色を明らかに間違えたであろう、そんな服を
身に包む残念美人がそこには立っていた。

3・未来都市（後書き）

ここ数日、寝て起きたら気持ち悪い。

正月で食生活のリズムが崩れたせいであろうかねえ。

まあ三日三晩、三食を雑煮で乗り切るってのは些か無理があつたか

orz

そろそろまたもな食事に変更しよう。でも雑煮は美味しいんだけどなあ……

4・邂逅（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「やっぱり人間じゃなかったのね。微かにだけど妖力の残滓が辺りに漂っているわ」

そう冷静に入れる女性ではるが、俺はそうではいられない。

ただでさえ自身の存在を感じかれるということは危ういということに、見つかった相手が天才と称賛しても可笑しくない智謀の持ち主。どうすればこの場から切り抜けられるか。ただそれだけを必死に考え続ける。その為の時間稼ぎ。

これほどの智謀の持ち主ならば、そのようなことは簡単に見抜かれるかもしれないがやらないよりはマシというもの。

「……あんたは何者だ？ 人間にすれば些か身体に内包する力が大きすぎるような。それにその力は何なんだ？ 一般の人間が持つ力とは少し違つ気が」

「あら、そこまで解るなんて予想以上に優秀ね。貴方自身が持つ能力もそうだし」

「……世辞は結構。流石の俺もあんたと真正面から殺り合つと負けは必死なのは理解している」

「そうかしら？ それにその言い方なら真正面からじゃなければ私に勝てるの？」

「……気に触つたのなら謝る。別にあんたを貶める気なんてせりふらないわ」

さて、本当にどうしようか。

頭でも口先でも全く勝てる気がしない。だからと言つて武力行使に出たところで反撃されるのが落ち。

「 そう言えれば貴方の名前は？ ちなみに私の名前は八意永琳。貴方
は？」

「名前 」

そう言えば俺の名前は何だつたか。

この世界に存在し始めてから名前を使う場面など丸つきり無かつたのですつかりと忘れていた。

相手の機嫌を損ねるのはマズいと即座に判断し、"知識"に埋没する自分の名前を探していくが一向に見当たらない。そこで思いだした。俺には自分の"歴史"がないのだと。つまりは自分の名前もないということ。

本来ならすぐに気付くであろう事柄も、他者と関わり合つことのない生活を送っていたせいで全く気付かなかつた。

そんな様子を訝しんで眺める八意と名乗つた女性。いつまでもこいつしているわけにはいかないので、即座に白状する。

「スマン。俺には名前がないんだ」

「名前が……ない？」

流石にこの答えは天才でも予測し得なかつたのだろう。

啞然とした表情でこちらを見ていた。

「 ああ。俺は存在してこの方、他者と関わり合つ生活を送つてなかつたからな。だから自分の名前がないことにも気付かなかつたし、苦労することもなかつたんだ」

「 …… 」

そう答え、暫しの沈黙。

八意は何かを思案しているような顔で硬直し、俺も今行動するわ

けにはいかなかったので同じように硬直する。

思案に要した時間はキックカリ三分ジャストというところ。
そして再度口を開き言い放つた言葉は俺の度肝を抜かした。

「貴方、私の家に住まない？」

「……………はあ？」

俺の答えに啞然とした表情をしたあちらに対し、俺はあちらの答えに呆然とした表情を向ける。

この女は何を言っているのか。そもそも、自分が言った言葉の意味を理解しているのか？

俺は妖怪であり、あんたは人間。人間と妖怪が混ざり合って生きていけるわけがないだろう？

「心配はいらないわよ？ 私はこう見えてもこの街で一番の権力者なの。つまりは私が言った言葉は黒であらうと白になる。そういうことよ」

「そういうことって……。あんた、本当に自分が言った言葉の意味を理解してるのか？」

「ええ、当然。貴方が考えている結論を述べてしまえば、人間と妖怪が一緒になつて暮らすということでしょう？」

意味を理解しておきながら尚、その言葉を吐きだすのか。

「それは同情や憐憫のつもりか？ それなら」

「違うに決まってるじゃない。確かに一割、いえ一分くらいはそのような感情が入った事は認めるわ。でも私の感情の大部分を占めているのは”興味”、これに尽きるの」

「興味？」

「ええ。どういう能力かは知らないけれど、この都市はこの世界で一番安全な街だと自負しているわ。私が都市設計なんかもやつたし、勿論妖怪対策の結界の展開などもね。でも貴方はそれの全てを乗り越えてこの都市に入つて来た」

そこからハ意の心情がつらつらと述べられる。

その顔から察せられる表情は、子供が親から待ち望んでいた贈り物を貰つた時のような感じだ。

大人びた表情から一転し、子供のような煌く瞳をこちらに向けるハ意を、どこか俺は羨望とした表情で見つめていた。

「最初は何かの間違いかプログラムのバグかと思って放つて置いたけど、一時間二時間経つても一向に直る兆しは見られなかつた。流石に放置はマズイと思つて調べてみたら

「そこには俺がいたというわけか」

「ええ。初めそれを見た時は啞然としたわ。何せ至高の天才とまで称された私が設計した都市の中を闊歩してるので？ でも、すぐにそんな気持ちは消え失せた。そして残つた感情は歓喜」

「本物の天才故に普通の生活では満足出来なかつた。本物の天才故に自分に解らないことなどなかつた。だからか？」

「ふふつ、貴方も天才じゃない。こうも容易く天才の私の思考を読みとることが出来るなんて他にはいなかつたわよ？」

「これくらいならすぐに予想は付くさ」

人間でない俺がそれに気付くとは些か皮肉なことか。

天才は得てして普通の人間からは理解され難い。また、天才もまた普通の人間ことを理解し難い。

それは別に可笑しなことではなく、普通なことであつて、また天才と普通を一緒の区切りにするのも間違いなのかもしない。

天才とはそれ一つで一つの種族と捉えると考えやすいが。

他種族の感情などそう易々と理解出来るものではない。

「それで、どう?」

「……あなたの利は自分の知らない”未知”の探求。だが俺の利は?
?」

「そうね。ここでの衣食住の提供でどうかしら?」

「別に俺は自給自足が出来るんだが?」

「あら? もしこで断るならどうなるかわかつてingのかしら?」

そう。結局はその結論に達する。

この取引に俺の利があろうとなからうと、もしこれを断つてしまえば俺は侵入者として撃退される。いや、撃退ならばまだしも、下手すれば滅されるかもしね。かもしねと言つたが、八意なばら間違いなく滅してくるだろ?。

ならば俺はどっちにしろこの取引を受けるしか道は無い。それに衣食住は提供してくれると言つてingのんだ。俺に利がないこともない。いや、どちらかとこうとあるか。

元々、俺は他種族の存在と触れ合つ為にここへやつて来たんだ。ならこの八意の提案は願つてもないもの筈。

ただ俺がこうして不安に思うところは、先ほどから八意の眼は怖い。恐怖というよりも圧力というべきか。いや、確かに恐怖もあるのだが、俺が言つ恐怖とは別物のような……

「……OKOK。その条件を呑もつ

「物分かりがいい人は好きよ? なら早速行きましょうか

「行くつてどこに行くんだ?」

「貴方がこれから住む家 つまり私の家よ」

どうやらこれから一波乱がありそうだ

あの出会いから既に数日の月日が経過した。
その日数で俺が理解したことと新たにあつた出来事をいくつか振り返ろうか。

まず理解したことは、永琳（ハ意と呼んでいた初日にこう呼べと無理矢理変えられた。ちなみに手には何かの注射器と表情は笑顔なのに全く笑つていらない瞳を灯して）は一戸建ての住居を所有しており、その広さは3LDKに喧嘩を売つているような住居。それは最早屋敷というに相応しい代物だ。

ただその広さを持つ屋敷に住まう人間は永琳だけで、後はお手伝いさんなどしかいない。閑散とした屋敷はどこか物寂しい。

他にも永琳がこの都市で一番の権力者と言つていたのは間違いでなく、永琳のこの都市での立ち位置は賢者のようなもの。

都市の頭脳と言つても過言ではないその力を振るい、都市設計から政（政治といつても根幹となるものを都市を運営する評議会に提出するだけ）や永琳自身が得意とする医療関係など多岐に渡る。

永琳がもし駄々を捏ねて部屋から出ない一ート生活を送つてしまえば、忽ち都市の機能は停止するだろう。それほど永琳の都市での重要性は高い。

故に永琳の言葉はこの都市では絶対なのだ。

こうして俺が安心してここで暮らせるのも彼女のおかげ。今の俺の身分は永琳の義弟。何故義弟なのかと一度問うてみたのだが、それが一番簡単だつたとか。

初めは妖怪の俺が暮らしていけるかと不安に思つたが、どうやら俺の能力は途轍もなく有用らしい。俺が纏う妖力の膜に認識阻害の概念を付加するだけで、都市の人間は全て俺を人間と認識しているのだ。

「 、『飯よ

「直ぐに行くから少し待つていてくれ」

今日はこのへんにしておこうか。

またすぐに振り返るつもりだが。といつよりも少しずつ振り返らないと、俺の脳が情報を全て把握することが難しい。

故に何日かに渡つて何回も過去の出来事を思い出すと言う作業が必要なのだ。それほどしなければいけない程、俺の生活は変化したのだった。

4・邂逅（後書き）

原作キャラの一発目は八意永琳先生でした。

それにもしても、先史の頃の年代がイマイチわかんないんですよね。公式にも月に移住を果たしたのが何万年頃前か書かれていないです。

適当に10万年ほど前の設定でもしまじょうかね。

5・神の威を扱い統べる者（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

5・神の威を扱い統べる者

「とりあえず、名前を決めましょーか」

永琳に家に連れられ、初めに提案したことはそれだった。

「いつまでも私も貴方を貴方ばかり言えないし、名前を決めないと戸籍登録もしないといけないからね」

「ふむ」

「それでだけど、どんな名前がいい？ 貴方が好きな名前を戸籍に登録するから」

「好きな名前……」

名前とは他者から「えられるものが基本で、自分で自分の名前を決めるなど余程に稀有な生まれでしかあり得ないだろ。」

普通ならばそれを決めるのは親であり、そうでなければ親の知り合い、また養子などであれば義父や義母が名付けるものだ。作品に名前、銘を与えるのも自分ではあるが、それは自分から自分の作品、つまり親（自分）から子（自分の作品）に「える」と同義。故に自分で自分自身に名付けることなど考えられるはずもない。

それは俺にも適用されるもので、必死に頭を悩ましてみるがこれといった妙案は浮かばない。

「特に無い、といふか自分で自分の名前を決めるのはどうも……」

「それもそうねえ」

「そう相槌を打つ永琳。」

すると名案でも浮かんだのかポンと手を叩く。

「それなら私が貴方を印象から名前を名付けるわ。それでいい?」「別に構わないが……。けど、出会ってまだ数時間だぞ? そんな

短時間にその人間の印象なんかは判るもんか?」

「印象なんてそんなに難しく考えるものじゃないもの。その存在の本質を知るにはそれなりの時間と労力が掛かるかもしないけど、印象だから」

「それもそうか」

「それで質問なんだけど」

「そう言つて聞いてきたことは、俺の能力について。

どうやらそれを聞きたくてうずうずしていたらしい。俺の能力の話を聞いている時の永琳は、本当の子供のように眼を爛々と輝かせて俺の話を熱心に聞いていた。

基本的に俺が説明し、それで足りないとこを永琳が説明し俺が補足するという形で行われる。

時間にすれば一時間ほどでその説明は終わりを告げ、その頃には俺は喉がカラカラになつて力尽き、対象的に永琳は充実した表情を顔に表していた。

「説明を聞く分には本当に強力ね。下手すれば“神殺し”だつて不可能じゃない能力でしよう?」

「確かに、な。ただそれほどの概念だと付加させる物質に問題がある。それこそ本当に“神を殺した”という概念を持つ神具クラスのものとかな。でも、もしそんなものが手元にあるのなら態々俺が概念を附加させずとも“神殺し”は可能だろうよ

「そもそもね。それでも貴方の能力は神の領域に踏み入っているのも間違いないじやない

「ただ俺が使いこなせていないだけ、というわけだ」

「やつこつじ」と

予想外に俺は「こにやつて来た」とは間違いじゃなかつたのかも
しれない。

永琳も無暗に俺に害を為すよつた様子は見られないし、話せば中
々に楽しい奴もある。それに彼女が誇る頭脳は俺では思い付きも
しないことを思い付く可能性がある。

それを踏まえても、俺がここに来たことは間違いでなかつたとい
うことを示す。

「そうね、……神の領域、力を加える、ほんとう真に限りなく近い虚うそ」

「永琳……？」

ブツブツと咳きだすその姿はどこか恐怖を誘つものがある。
それは美女ならば余計に恐怖は増して行く。

「 決めたわ」

「 何を？」

不意に顔を上げて声を出す永琳。

本当に吃驚するから前以て予備動作なんかを入れてくれ。予備動
作なしに行動されるのはキツい。というより、何で永琳が予備動作
なしで大抵の行動が出来るのか。

徹底的に無駄を省くという点では納得出来るが、それはどれほど
難しいことなのか。俺でも百年と生きているが私生活の予備動作ま
では消し去ることは出来ていない。戦闘面などなら問題ないほどな
のだが。まあ絶対に必要不可欠というものではないので問題はない
が。

「何をつて……、貴方の名前に決まつてゐるじゃない

「あ、そう つて、もう決まったのか？」

流石は至高の天才というわけか。

「ええ。神の領域に足を踏み入れる貴方は神の力を借り受けているようなもの。神の力、つまりは神の威を借り受ける。だから貴方の名前は“神威”よ」

「“神威”」

神威 文字を崩せばカムイと表せることができ、それは“知識”の中に存在するある地方の民族が信仰する靈的存在のことだ。その民族は特有の世界觀を所有しており、カムイは動植物や自然現象、あるいは人工物など、あらゆるものにカムイが宿っているとされる。

一般にカムイと呼ばれる条件としては、“ある固有の能力を有しているもの”、特に人間のできない事を行い様々な恩恵や災厄をもたらすものである事が挙げられる。

カムイは、本来神々の世界であるカムイ・モシリに所属しており、その本来の姿は人間と同じだといつ。

また、カムイの有する“固有の能力”は人間に都合の良い物ばかりとは限らない。

例えば熱病をもたらす疫病神なども、人智の及ばぬ力を振るう存在としてカムイと呼ばれる。このように、人間に災厄をもたらすカムイは悪しき（ウヨン）カムイと呼ばれ、人間に恩恵をもたらす善き（ピリカ）カムイと同様に畏怖される。

カムイという言葉は多くの場合“神”と訳されるが、このようにむしろ“魔神”と訳すべき場合もある。

上記の事から、“神威”と言つ名前は本当に俺に当て嵌つている気がする。

「どうかしら？」

「いいんじやないか？」

いや、これが一番良い気がする。名は

体を表すとはまさにこの事だろ」

「そう？ ならその名前で戸籍登録してくるわ。あ、勿論この名前
が嫌なら捨てても構わないわよ？ 別に戸籍登録する為に必要だつ
ただけだから」

そう永琳は言うが、そう言うわけにはいかない。

「いや、俺はこれから“神威”と名乗るよ。改めてよろしくな、永
琳」

「ええ、こちらからもよろしく、“神威”」

こうして、俺の名前は決まった。

思えばこれが初めて他人から送られた贈り物プレゼントだつた気がする。

さて、一月もこの都市に住まえば大抵のことが解つて来る。
例えば、どうやらこの都市の人間は俺の“知識”の中に存在す
る“人間”とは少し違い、何故か寿命というものが存在しないよう
だ。

寿命が存在しない理由、それは“穢れ”がないかららしい。
ならばその“穢れ”とは一体何か、そう思い調べてみると、“穢
れ”とは生きる事と死ぬ事。生きることを最善とすることで発生す
る死の匂いらしい。

流石によくわからなかったので纏めて作用だけを見ると、穢れには
物質や生命が本来持つていてる永遠を失わせる作用があり、同時に寿
命が発生する。それは多かれ少なかれあると永遠を失うため、変化
していくことは避けられない。変化には精神的なものも含まれてい

る。

現在の地上は穢れが蔓延つてゐるが、永琳が製作した結界によつて遮断されているらしい。故に都市外の殆どの生物に数百年未満の寿命が発生しているとのこと。勿論、俺みたいな例外も存在している。

それだといふのに都市には赤ちゃんや子供、少年や美女や青年、老父母等々様々な年代の層が暮らしている。

不思議に思いながらもそのことについて永琳に聞いてみると、どうやらこの結界内ならば肉体は精神に引っ張られるらしい。

つまり精神が成熟していく度に身体は変化していくということ。なのでいつまで経つても子供のままの人間や早い段階から大人になる存在など色々らしい。

この事から俺が存在している世界は、“知識”の世界とは別の異世界^{ザーワールド}_{アナ}なのかなと思つたが、どうやらそうでもないらしい。

この都市には色々な書物なども多数存在しており、その中のものをいくつか拝見したところ、“知識”の中の遙か古の時代の情報がそこには存在した。

だが、これらを拝見するも、“知識”の中心世界となつていた日本という国家を代表する文化が見られない。

これほど発達した文明ならば、それだけ多くの年代を重ねた筈なのだがその様子は見られず、それ以上に神話等の書物が多数存在していることから、今俺がいる世界は、“知識”の俺が存在していた年代よりも遙か昔ということになる。

だが、ここで矛盾が発生する。俺が知る“知識”の中にはこれほどの文明を築いた文明は存在していない。

いや、もしかするとそれは知られていないだけで、本来ならばこの程度の文明も存在し、何らかの原因で衰退、または破滅を迎えたのかもしない。

「平行世界に限りなく近い異世界アナザーワールドとでも言ひべきか？」

手に持つ書物をパタンと閉じ、俺は帰路に着く。
今では俺もこの都市に馴染み、幾人かの知り合いも出来た。心苦しいことは、俺が妖怪だと皆を騙しているといつも。だが、こうする以外方法ない。

そんな葛藤ジレンマが俺を襲うが、それはどうしようもないと既に諦めた。それに全員が知らないわけでもない。俺の家主である永琳は知っているだけマジだというもの。永琳も妖怪である俺を偏見で見ることもないで、正直気楽なものだ。

「あ、そろそろ帰るか」

時刻はそろそろ黄昏時。
早く帰らなければ永琳が雷を落としてしまう。
そうなる前にちゃんと帰宅しないとな。

5・神の威を扱い統べる者（後書き）

ここに少しのアンケートをば。

アンケート内容は単純で、この永琳編を後どれくらい続けて欲しいかというものです。

一応、最短 の場合なら後4話で終了します。内、三話が別れの話になるので、日常話は一話しかありません。これでいいのならそのまま行きますが、「もっと日常話が読みたいっ！」という人は、どれだけ読みたいかを感想に書いて欲しいです。

期限としては次の投稿まで、つまり明日ですね。

短いかもしませんが、そのところは御了承して頂きたいです。

6・テート？（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

6・デート？

「そう言えば……」

いつものように、永琳を眼の前にして朝餉を消化していく俺は何かを思いだしたように咳いた。

その咳きを永琳も聞こえたのか、ふと手に持つ食器を下すしてこちらを見る。

どうかしたのか、そんな表情がありありと見られる。

永琳が食器を下したのを見計らって俺も同じように茶碗を卓の上に乗せ、今まで疑問として胸の内に残っていた物を吐きだした。

「永琳は初めて出逢つたあの時、どうやって俺を見つけたんだ？あの時、俺は不可視と氣殺の概念を附加させていたから見つかる筈がないと思つていたんだけどな」

「ああ、あの時？」

成程、と永琳は口ずさんだ。

それからすぐにネタばらしに入る。

「あれは単純な話、私は熱源探査機サーモグラフィーを使つただよ。確かにあの時、貴方は気配も無かつたし、視認することも出来なかつた。でもありとあらゆる探査機を使えば結構簡単に見つけられるものよ」「それが熱源探査機サーモグラフィーだつた訳か……」

まさかそのような探査方法をされていたとは。
それなら俺がその場に感じられなくとも、また見えなくとも的確に追い詰めることが出来る訳だ。

何たつて、サーモグラフィー熱源探査機には確かに俺の姿がクッキリと映っていた
だろうからな。

「そうこうじよ

そう言い終わると、永琳は残っていた朝餉を消化させていく。
俺もそれに倣つて同じように消化していく。

今朝の朝餉は永琳が作ったもの。勿論のこと、俺が作る日もある。
それは一週間の内、初めが永琳で最後が俺、間の五日間は家のお手
伝いさんが手懸ける。

初めの内は、俺も美味く作ることが出来なかつたが、俺には”知識”だけは大量に存在した。 ”知識”があるのなら俺に足らないものは経験のみ。だから俺は永琳が出掛けて家に居ない時に懸命に練習したのは良い思い出だ。

今では永琳には流石に劣るが、そんじょそこらの料理人以上の腕前になつたと自負している。

だが流石は天才の名を持つ永琳。

俺がいくら練習しようとも、あいつの味以上の料理を作ることは未だに出来ない。

「御馳走様」

「はい、お粗末をまでした」

そんなことを考えながら永琳の朝餉を全て消化しきる。

「今日は何か用事はあるかしら?」

そんな質問を投げかけられる。

ここに一月以上住み着いた俺であるが、今までこのような質問を

掛けられた覚えは無い。

不思議に思いつつも、俺はその質問に返事する。

「別段急ぐようなことは何一つないけど……何か用事でもあるのか？」

「いえ、そろそろ一緒に出掛けても良い頃だからね。それでどう？」

「それはデートの御誘いと取つても？」

「クスッ……。それは貴方次第よ、神威」

そこまで言われて断るのは漢じやないだろう。

「ならお供させて頂きますよ、お姫様プリンセス」

「あら、ならちゃんとエスコートして下さるのかしら？」「御任せを。貴方の騎士ナイトがどこまでもお連れ致します」

「ならば貴方に任せますわ。私の王子様」

一月も一緒に住めば、このよつな言葉遊びもお手の物。打てば響くよつな永琳との会話は中々に愉快なもので、俺の一つの趣味にすらなりつつある。

だが、それはあちらも同じよう

「さ、出発は9時頃だから。遅れたら承知しないわよ？」「任せておけって」

俺も見惚れるよつな笑顔で微笑んでくれた。

大都市を練り歩く一組の男女。

片方は服のセンスだけは少しピントがズレている（と思つて）いるのは俺のみで、永琳や都市の住民はそうではないらしい）絶世の美女と冴えない男。

永琳が言つには俺も秀麗な容姿をして居ることだがイマイチわからない。

基本的に自分の事といつもの理解し難く、他人のこともまた理解し難い。ならば一体俺達は何を理解して生きているのだろうか？

「またくだらない考え方？ 折角こんな美人が一緒に居るんだから、偶には羽目を外しなさいな」

腕組む力を入れ直し、豊満な双丘が俺の組まれている腕に押し付けられる。

そんな行動にドギマギしながらも、表情には出さないよう心掛け、冷静な面持ちで永琳に返事した。

「くだらないって……、まあ折角いつやつて初めてのお出かけの中にそんなことをするのは些か無粋だったな。ゴメン」

「くだらないと言わるとどこか傷つくのだが、この場面でそんなことを考えていた俺がこの場合は悪いだろ？」

見栄などは張らずに素直に謝る。

「フフッ、別に気にしてないわよ。貴方がこんな状況なのに普段通りの振舞いをするものだから、少し意地悪をしたくなつただけ」

クスクスと意地の悪い笑みを浮かべる。

「こんな状況？」

「ハア、わからない？ まあ貴方ならわからないうて言つでしよう

ね

「いつもより周りの視線が強いことは理解出来るけど、それは永琳
田当てだらうしなあ……」

「そつかしら？ もしかしたら貴方田当てかもしけないわよ？」

「俺？ ないない。俺より絶世の美女の永琳を見るだらうよ。そ
れに永琳はこの都市の超有名人だしな」

「ツ　！」

「どうかしたか？」

「い、いえ、何でもないわ」

「そつか？ どことなく顔が赤い気が

「ほり、行くわよっ！」

「あ、ちょ　タクツ。お姫様はとんだじやじや馬だこと」

手を振り切つて先を行く永琳に後ろから追いかける。

追いついた時には先ほど見掛けた頬の赤みは消えていた。永琳の
言つ通り俺の見間違いだったか？

永琳に追いつくと、自動的に腕に抱きつかれる。

苦笑しつつも、俺は別段とその行動に嫌悪感はない。いや、むし
ろどこか嬉しいとすら感じていた。

百年間もの間たつた一人で過ごしていった弊害か、俺はイマイチ感
情を表に出すことが難しい。いや、鬪氣や殺氣といった、戦闘に関
するものならいざ知らず、喜怒哀楽でいう喜と楽が中々。

「あら？ 少し着流しがズレてるわよ」

先ほどまではあんなに怒っていたと言つて、十数秒経てばすつ
かりと元通り。

まるで新婚、いや手の掛かる弟のように俺を甘やかす。

アツチはそうでもないようだが、俺からしてみればそうとしか感

じられない。別にそれが嫌だとかいうわけではないのだが、少しくすぐつたい気持ちになる。

「ん。ありがと」

「どういたしまして。さ、買い物を続けましょ」

「それは構わないんだけど、何か買う予定もあるのか?」

「そうねえ。私生活に必要なものをいくつか。私の家にあるのは私の分と、後はお手伝いの人のしかないから、貴方の分の追加が必要なの」

「あー、それは助かる」

「この場合は謝るべきなんだろうか。

でも永琳の場合、謝つても苦笑で済ましそうで気を使つてしまつ。

「フフツ、別に気にしなくていいわよ。貴方を私の家に住まわせたのは紛れもない私本人。それなのに貴方に文句を言つのは些かお門違いというものよ」

「なら、ありがとうつて返した方がいいな」

「ええ。そつちの方が私も気持ちがいいわ。あ、後、何着か貴方の服を買おうが迷つたんだけど……」つちは別にいいわね、うん

「どうして?」

「貴方はその気流しが似合つすぎで、他の服だとどうしても見劣りしてしまつから」

永琳はそう絶賛するが、そんなに似合つているのだろうか?

「どうせ貴方はよくわからないとでも思つてるのでしょ? ならそれでいいじゃない。私が言つだけじゃ、不満?」

「そもそもうだな」

考えてもわからないのなら、いつそのこと放つておいても構わないだろう。

抱きつかれている腕を少しこちらに引き寄せる。

ちょっとだけポカーンとしている永琳。レアな絵だ。

「行くんだろう？」

クイックと引っ張つて、目的地であるショッピングセンターの方を指す。

「 そうね」

永琳もそれに答え、先ほどより少し上機嫌になりながら歩みだす。それに付き従い、俺も歩み始めた。

燐々と照らす太陽は、まるで永琳一人を照らし出すスポットライト。そのスポットライトに照らし出された永琳は、さながら舞台に上がる女優のよう。

その形容がまるで正しいかのように、今日の永琳は綺麗に思えた。容姿じゃない。いや、容姿も確かに綺麗だが、それ以上に中身、つまりは心が綺麗に思えたのだ。

「ほら、行くわよ。最初は食器を見て、その後に衣服関係、それから

そんな永琳の隣に居る俺は、本当は幸せなことなんじゃないだろうか？

「 そんなに慌てなくてもショッピングマートは逃げないよ」

そんな思いを抱きながら、大都市の中を歩む。
隣には微笑む永琳が居て、俺もそれに釣られて笑っていた。

6・テート？（後書き）

とつあえず、日常話を後二話、別れ話を二話、そして閑話を一話挟んで永琳編を終了する予定になりました。

もう少し日常話を書いても良かつたんですが、如何せん話のネタが尽きました。とこより、先に別れ話を書いていた為、下手に日常話を弄るのが怖かったのが本音ですが（汗

アンケートに協力してくださった読者様方、本当にありがとうございました。
これからもより一層精進していくので、これからもよろしくお願いします。

7・春眠暁を覚えず（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

7・春眠暁を覚えず

朝の微睡まどいみ。

春眠暁を覚えずとはまさにこのことだらうか。

柔らかい春の日差しが窓から差し込み、温かく俺を包み込む。

その明るさからいつて既に起床しなくてはいけない時間帯なのだが、この心地よさから抜け出すことが出来ずにある。

精一杯頭を持ち上げるがそれもすぐに脱力させられ、ボスンと枕に頭は墜落する。

あああ～、と声にならない声を上げ、もぞもぞと布団の中を這いすり回る。

これが至福の時というものが。そんなくだらない感想が頭の中を過った瞬間

「 いつまで寝てるの？ もつ起きる時間よ

バサツ、と俺が被つていた布団は剥ぎ取られる。

いくら季節は春という穏やかな気候であろうとも、今まで熱が籠つていた布団が剥ぎ取られてしまえば、春の穏やかな微風であろうとも少しの寒さを感じてしまう。

ブルツ、と身震いを一つして、このよつたな暴虐に及んだ張本人をジト眼で見つめる。

「起ひすならもつ少し方法つてものがあるだろ？」

眼先の前に立つ、この大きな家の持ち主であり、そして俺のこの都市の法律上の姉に当たる永琳は聞いても苦笑で済ませる。

「と言つてもねえ。折角貴方の為に作つた朝食が冷めるのは頂けないもの」

「あへ、それについては謝るけど……」

それを言われてしまえば、俺に反論する余地など残つてはいない。すぐにベッドから腰を上げ、永琳に朝の挨拶をしてから着替えに入る。

「手伝いましょうか?」

「必要ないからっ!」

顔が赤くなつてゐるのを自覚しながらも、必死に押し留め平常心を装いながらそう言い放つた。

今日も今日とて、俺は惰眠を貪り食つてゐる。
というより、今日は一段と春の陽気が強く、既に俺の頭の中から起きるという選択肢を消していた。

温かい日差しに柔らかな布団、これだけの要素が揃えば、人間どこでも乐园エデンへと早変わりだらう。

ああ、本当なら起きなくてはいけないのに、それを春は邪魔をする。

既にうとうとし始めた俺の頭には霞みが漂い始め、いよいよ睡魔に襲われる。

もう、無理

「 い 」

何かが聞こえた。

意識は深層に埋没していたが、その声により表層へと引き戻される。

思考は未だ回転しない。ボオツとした頭ではイマイチ現状を理解出来ずにはいる。

しようがない、意識がハツキリするまでこうしておくか。

そう結論付け、俺は横に存在するナニカを抱きしめる。抱きしめた瞬間、何か声が聞こえた気もするが気にしない。

柔らかなナニカは俺に温もりを与え、それは布団が与えてくれるものとの比ではなかつた。片時も手放したくない、そんな感情が俺の胸の内に浮かび上がる。

そんなナニカはまるで自身に意思があるように、勝手な動きを見せる。

ゆつくりと、それでいて優しく俺の頭を撫でながら語りかける。

「お 、 い 」

それはまるで聖母に包まれているような感覚。

親など居ない俺がそんな表現をするのは些か可笑しな気もするが、これが一番現状を的確に表している表現だと自負している。というより、これ以外の表現が見つからない。

優しい声色、温かい温もり、全てを包み込む包容力、それらが全て揃つたものを聖母と呼ばずして何を言つ?

「お な い、神 」

そんな自論を垂れていたが、よくよくこの声を聞いてみればどうかで聞いたことがあるような気がしてくる。

それは

「起きなさい、神威」

瞳を開けると一番最初に入つて来る景色は、本来ならば自分の部屋か布団だらう。

しかし今日だけは違つた。

一番最初に目に入つた光景、それは俺の大切な義姉。いつも通りのセンスがぶつ飛んだ服を身に付けている永琳だつた。

そんな永琳は先ほどの表現通りの聖母のよつな笑みを浮かべ、俺を撫で続ける。その合間に時折起きなさいという言葉を投げかけている。が、正直、その顔を見ていれば起きて欲しそうには到底見えない。

本当に嬉しそうに、それで楽しそうに俺の頭を撫でているのだ。それをどう見たら起きて欲しそうに見えるのか。

だが、それでも俺は覚悟を決めて起きよつ。それは何故か？ んなもん決まつてゐる。いつまでもこんな恰好は俺が恥ずかし過ぎる！

「……おはよう、永琳」

「あら、やつと起きたのね。おはよう、神威」

聖母のよつな笑みをこれでもかと放つてくる永琳に、俺は何とも言えない。

「一応聞くけど、何で俺の布団に入つて、あまつさえ頭を撫でてる

のか問いたい」「

ムクリとベッドから起き上がり、俺は永琳と相対する。
その眼はこの間と同じようなジト眼。だが永琳は朗らかな笑みを崩さない。

「だつてこの間、貴方が“起こすならもう少し方法つてものがあるだろ？”って言うから変えてみたのだけど、嫌だつたからしら？」

そんな笑顔で言われば、俺は何も言えないんだけど。

「それじゃ神威も起きたことだし、そろそろ朝ご飯を食べに行きましょうか。折角の熱々の白米も冷めたら美味しいものね」「OK。着替えてから行くから先にいっておいてくれ

やう言つと永琳は扉の前まで移動する。が、何かを思い出したかのよつてひらへ振り返り

「あ、着替えるの手伝いましょうか？」
「またその流れかよつ！？」

そんなこんなハプニングを乗り越え、朝食も取り終えた。
こんなことを言つているのは既に昼食も取り終えた頃で、今は二人して縁側に座っている。

にしてもこの家はどんな構造なんだろうか。外観は洋風なので、一見中の造りも洋風で統一されていると思っているとそうでもなく、今俺が座っている場所は和風の縁側であるし、眼の前に広がる光景

は日本古来の日本庭園だ。

全く統一性というものを感じられない。和風や洋風、流石に中華は混ざつてはいないのだが、どちらかといつと洋風があるのに中華がないといふことに違和感を感じる。

時代の先取り、そう言えば聞こえはいいだろ。実際、都市の住民からは沢山の羨望をこの家は受けている。が、俺からしてみれば甚だ可笑しいとしか感じられない。

和風も洋風も統一性があるからこそ美しく感じられると言つのに。美味しい食材を全て混ぜ合わせれば美味しい料理になるのではなく、美味しい食材を的確に調理するからこそ美味しい料理が出来ることと同義だ。

どちらの長所を全て混ぜ合わせればいいといふ話ではない。だと言つのに……

「別に困るような事柄はないからいいけども」

はあ、と溜息を零し食後のお茶で喉を潤す。

それに永琳もそれを理解していながらもこんな可笑しい家を建てたのだろう。そうでなければこつも変哲な家が出来あがる筈もない。

これはあれか。“知識”にあるパブロ・ピカソの絵画のようになじみ人ではその美を理解出来ないと同じことなんだろうか。

「にしても……」

春の朗らかな陽気は朝でなくとも、強い。

昼という時間帯であつてもそれは一向に止む気配は見せず、それ以上に朝よりもその気質は強まる。ポカポカとした日差しが俺を包み、しだいに俺の意識は微まこと睡む。

「あら？」
「ん~？」

その声は紛れもなく永琳の声。
だが、それを確認する気力も俺には存在し得ず、既に頭が船を漕
いでいる。

「もう……。ほひ、いつちに頭を倒しなさいな」
「ん~」

「ひん、と俺は頭を倒す。
すると柔らかな太股と女性特有の甘い匂いが俺を包み、そのまま
眠りの世界へと引きずり込んで行く。
そんな様子を苦笑しているのか、少しだけ永琳の笑い声が聞こえ
た。

「ゆつくり眠りなさい」

ああ、その声は届いたのだろうか。
それを確認する前に俺は意識を落とした。

後日談、といつのは些か早いものだが。

その後、俺が眼を覚ましてみると、永琳も俺と同じよつて午睡を
微睡んでいた。

しかしそくあの体勢で、しかも身体を全く揺りすりすり寝られるな。
少しだけ感心し、すぐに身体を起こす。

そのまま俺は変わりばん」のように自身の膝に永琳の頭を乗せる。
所謂膝枕。

「起きた時の永琳の反応が見ものだな」

クツクツとその時の光景を夢想し、俺は穏やかな夕暮れを過ごし
た。

P.S やはり永琳の反応は面白いものだつた。

顔を赤くさせ、オロオロとしている様は実に面白い。

普段あれだけお姉さんキャラだから、少しでも崩れると、な
あ？

7・春眠暁を覚えず（後書き）

今回は特に書くことがありませんね。

近況報告としては、冬休みの宿題を甘く見過ぎていた（汗
二日三日もつくなれば終わるかなー、なんて夢見てたけど、一
やつてみたり馬鹿みたいな量が……。手が潰れるorz
）

8・離別と決意と（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

8・離別と決意と

「月面計画?」

晩御飯を終え、そろそろ就寝时刻になると、つい時間帯に永琳は俺に宛がわれた部屋へと足を運んできた。

話しがあると、俺は椅子を進め茶受けを出すと、切り出し始める。

名前から察するに、月に幾らか関係している事柄だ、と、これが理解出来る。

しかし理解出来るのは、ここまで、それをどうするのか全く見当がつかない。

だからこそ、永琳の次の言葉で度肝を抜かれた。

「ええ。この都市に住んでいる人間全員を月へと移住させ、そこで楽園を建造する計画よ」

「はあつ!？」

そんな無茶いや、永琳という天才が居たならばそれは可能かもしれない。

「貴方の予測通り、このプロジェクトの主任はこの私よ」
「……この計画は永琳が立てたものじゃないな」

確認ではなく、確証を以て永琳に質問する。

大体、永琳がそんな面倒なことをして得られる利が想像出来ない。現時点でも最高峰の財力や権力を持つていると言うのに、それ以上を目指す理由がない。

その返答はやはり俺が予測していたものと同じであり、永琳はええ、と答えて先を進める。

「「」の計画は元々貴方がこの都市にやつて来る前から既に立ち上げられていた計画なの」

「理由は？」

「穢れという概念は知ってるわよね？ その穢れは既に地上のほぼ全てを覆ってしまった。覆われていないのはこの都市の中だけ。けど、それも後百年が限界というところなの」

「それをこの都市の権力者共が恐れたと」

成程、大筋は見えてきた。

「話しが早くて助かるわ。その時は私も特にこの地上に未練があつたわけでもなかつたからそのプロジェクト進めて行つた。けど

「俺という存在が現れた、と？」

「ええ。今まで他人という存在に全く興味を持てなかつた私が唯一興味を持つことの出来た存在」

天才故の孤独。

俺の予測が正しければ永琳は万以上の歳月をたつた一人で過ごしてきた筈だ。巧妙に隠してはいるが、身体の奥深くに隠されている、人の身には在り余る程の膨大な量の“力”がそれを証明している。

そんな途方もない年月を孤独に過ごしてきたのならば、初めて興味を持つことの出来た俺という存在はどれほど有難かつただろうか。

「言いたいことはわかつた。結局、俺にも月について着て欲しい、

そう言いたいんだろう？」

「……ええ」

そんな俺を失うことは永琳からしてみれば耐え難い恐怖だらう。初めて手に入れた心の安穏の地。それをみすみす手放さなくてはならないという恐怖。

だが、反対に俺からしてみても永琳と離れ離れになることは耐え難い苦痛なのだ。

永琳という出逢う百年ほどの間、俺はたつた一人で生活をしていた。隣には誰もおらず、ただ一人で自分を研磨し続ける毎日。

だが、それでも

「それは断る」
「理由を聞いてもいいかしら？」

俺の答えは予測していたのか、あまり動搖は見せない。

だが、それは見せないだけであつて、彼女の心の内は荒れ果てているだろう。それでも冷静に、感情を表に出さないよつて自制しているだけであつて。

「もし月に行つてしまえば、それはある種の閉鎖空間に囚われるのと同義だらう？ 俺はな？ そんな牢獄のよつな暮らしが嫌だし、何と言つても変化のない生活なんか一種の拷問に近いと考えてるんだ」

「…………」

「この都市で生活しているのもいざとなつたら外に出られるからだ。もし月まで行つてしまえば、流石の俺でも抜け出すことは不可能だろうからな。あ、勿論この場所に住んでいるのは永琳もいるからってのも入るな」

結局はそういうわけなのだ。

俺は停滞を嫌い、変化を望む。しかし、この都市の住民は変化を

嫌い、停滞を望む。

停滞なぞ、俺からしてみれば生きる」とを放棄しているとしか思えない。

双方の意見が食い違えば、最終的にどちらかが折れるしかない。そして俺の方は折れるつもりなど一切ない。つまり、俺はこの場所を出て行くという選択肢しか取れないというわけだ。

「……私も貴方がそう言つだらうとこうことは理解していたわ。それでも」

「違つていて欲しかつたか」

「当たり前じやない。今じやもつ貴方は私にならなくてはならない大切な存在よ？ それをそう簡単に手放せるはずもないじやない」

「……ゴメン」

「……謝るへりこなり一緒に来てよ」

永琳と一緒に暮らしてもう何年になるだらうか。

十は既に超え、俺と永琳の仲の良さは都市でも周知の事実となるほどこの都市に俺は馴染んだ。

時たま、知り合いからまるで夫婦のよつだとまで揶揄されたこともあつたつけ。

それだけの年月を共に暮らしてきた中、彼女が弱音を吐いたことなど一度も無かつた。

しかし、今はそんなことすら忘れて彼女はみつともなく弱音を吐いた。

俺からしてもそんな永琳はなくてはならない存在だ。

それでも、それでもっ！

「「ゴメン、やっぱそれだけは肯定出来ない」

「……そう

そう呟いて永琳は俺に抱きつく。

一瞬身体が強張るが、すぐに力を抜いた。

永琳の身体が小刻みに震え、鼻を啜る音が聞こえたから。

「なあ、永琳

「……なに？」

「用面計画も今すぐに行われるってわけじやないんだろ？」「

—えテ

「それじゃまたまた一緒に暮らせる時間は残ってるんだ。最終的に別れる運命なら、その別れる瞬間までは一人して笑つて過ごしそうよ。折角の時間が台無しになるだろ？」

「それに一生会えないってわけでもない。永琳が月面計画を成功させればこっちに戻つて来ることも出来るだろ？ それに俺も能力を使えば月に行くことだって不可能じゃない」

「……」で一番やつてはいけないことは、永琳がこの計画を放棄する」と。

もしそんなことをしてしまえば、永琳が今まで築いてきたものを全て失うことになる。やうなつてしまつと俺の安全はおろか、永琳の安全の保証すら危うい。

それに俺が言つた言葉も強ち間違いじゃない。

俺の“概念を付加させる程度の能力”ならば地上と月を繋げる概念を付加させることも出来るだろう。強いて言えば、切断の最上位概念である“空間切断”といふところか。

「……それもうね」

いつのまにか泣き止んだ永琳は俺から離れこちらを見つめる。瞳は涙を流したせいか赤いものの、それ以外はいつもの永琳だ。

「それに計画も無理すれば後50年くらいは遅延させることも可能でしようし、その間にどうすれば再開出来るか考えた方が有用よね」「おいおい……」

完全にいつもの永琳に戻っている。

小悪魔な笑みを浮かべ、何かを思索している永琳こそ、俺が良く知る永琳なのだ。

今、彼女の頭の中では何百、何千と常人では到底考えることの出来ないほどの膨大な情報が駆け巡っているだろう。そんな彼女を見て、俺は笑みが浮かんだ。

やつぱり永琳はこうじやないとな。

「それじゃそろそろ寝るから戻ってくれるか？ もう日付が変わる頃だろ？」

元々、永琳がやつて来た時刻は一つの針が頂点に差す一時間前というところだつたが、結構話し込んでしまった為、既に一つの針は頂点を通り過ぎている。

カップに残っていた紅茶も飲み干し、設置されているベッドの脇まで移動する。

「今日は一緒に寝てもいいかしら？」

ふと、そんな幻聴が聞こえた。

ありえない、そう思いながら俺はベッドの中に入り込み、お休みとの声を永琳に掛け眼を瞑つた。

未だに永琳は部屋から出ようとする気配はないが、俺はそんな些細なことなど気にしていられない。

必死に先ほど聞いた幻聴を頭から振り払おうとしている最中に、俺の身体に柔らかいナニカが当たる。

特有の甘い匂いが鼻孔を擦り、柔らかいナニカは俺を温かく包むつて！？

「え、え、え、え、永琳っ！？ 何やつてんだよつー？」

「何つて……、一緒に寝てもいいかしらって聞いているのに、貴方が答えてくれないから」

「いやつ！ 返答がなかつたら駄目だと普通は思つだろつー？」

柔らかいナニカの正体は、外れていて欲しい予想だつた永琳本人だつた。

「御免なさいね、私つて普通じゃないから。とこりうことで「わふつ！？」

先ほどまでは後ろから俺を抱きしめる形だつたが、今は驚きと共に永琳の方振り返つていていた為に真正面から抱きしめられる。つまりは豊満な双丘が俺の顔に惜しげもなく押し付けられているというわけだ。若干息苦しいものの、柔らかい双丘が俺を包む為、圧迫感はあまり感じられない。

そこから女性特有の甘い匂いが俺の思考を麻痺させていく。魔性の女とは永琳のような女性を言つのだろつか。

「もう何でもいいか。んじゃお休み」

少しだけ恥ずかしいものの、別に嫌という訳でもない。

それに永琳には少し罪悪感も沸いているこの状況で、どうすればこれを断れるだろうか、いや断れまい。

つらつらと眠気に襲われつつもそのようなことを考へる。

「お休み、」

眠りに落ちる前、永琳のそのような言の葉が聞こえた。

声が小さいのが原因か、それとも俺が認識出来なかつたのが原因か、どちらかはわからなかつたが、最後の言葉だけ聞こえなかつた。ただ、その言葉を呴いた声に混ざる感情は、とても優しいものだつたのだけは感じとれた。

悲しいことに、今日で冬休みは終わりとこいつ悪夢（泣き色々とやりたいことはあつた筈なのに、どれ一つとして終わらなかつた気がします。）

明日からはまた学生生活が始まり、面倒臭い。別に学校は嫌いじゃないですよ？ 友達と喋ったりするのは楽しいですし。ただ授業が、ね。面倒なんですよ。まあ大半の人が同じような事を思つてこるのでしううが（笑）

学校が始まつたらびにまで一日一話投稿を続けられるか、それだけが問題です。

結構忙しいですしね、この時期は何かと。

話は変わりますが、今日は成人日でしたね。

私の従姉も出掛けに行つたようです。まああの人既に結婚してるので、今更成人つて言つてもねえ？

しかも子供まで産んで、何で私が出産祝いを上げなくちゃいけないんでしよう。一応私はまだ学生という身分なんですけど。

金なんて毎月金欠状態ですよ。小説の買い過ぎが原因ですけども。

まあ赤ちゃんが産まれるところはめでたいことなので文句はありませんけど。

それでも私にまでお年玉を強請るのは間違つてるでしょ？ 生後数カ月の赤ちゃんにお年玉つて喧嘩売つてんの？

9・酒盛り、それは御乱心の序曲でもある（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

9・酒盛り、それは御乱心の序曲でもある

「お酒を飲みましょ」

そんな言葉から始まつた今日の酒盛り。

いきなりの事で流石に狼狽する俺だったが、そんな様子すら無視して永琳は話を進めて行く。何でも、比較的珍しいお酒が手に入つたからだとか。

どのくらいの物かと聞いてみれば”万年物”らしい。
どれだけ掘り出し物だよ……

意気揚々と告げる永琳に俺は何も言えることなく、また俺もその名酒（靈酒や神酒と呼んでもいいかもしない）をタダで呑めるのだからこれと書いて不満を述べることはない。
時刻は夜の帳が降り切つた頃。黄昏も過ぎ去り、明るむといつものが失われた時間帯。

そんな時間帯に俺と永琳は共に家の縁側に腰掛ける。

手には御猪口を持ち、傍らには一升瓶。一升瓶には銘が刻まれていて、そこには”神殺し”の文字が。
……物凄くヤバい予感しかしないんだが。

内心冷や汗をダラダラと流しながらその一升瓶を見つめた。

「あら、そんなに熱心に見つめて……。もう呑みたいの？」

そんな様子を永琳は勘違ひしたのか、そのような言葉を漏らす。スマン、その反対だ。全く呑む気が失せてきた。

そんな内心は永琳に理解されず、彼女は笑顔で俺と自分の御猪口にトクトクとその酒を注いでいく。

顔を近付けなくともその酒気は感じられ、今まで呑んだことのないほどの度数だろう。

まるでムワムワと酒気が霧のように感じられる。

そんな酒を何て事はないかのように呑み干して行く永琳には感嘆せずにはいられない。

これでも俺も男だ。

女性である永琳が呑み干したのならば、男である俺も呑み干さなければ尊厳に関わる。

氣を引き締め、そのまま御猪口を口に運び

「ゴフッ！？ カハッ……」

「あらあら

「ゴフッ、……正直舐めていた。

何だこれは、本当に酒という飲み物に分類していいものなのか？ どう見積もつても度数は80以上。下手すれば大台の90か？ 吞んだことはないが、”知識”内の最高度数を誇るスピリタスとタメを張れるんじゃないかな？

一口呑んだだけでフラフラする頭に活を入れ、そのまま残っている酒を喉に下す。

一度喉に通してみれば、後は”慣れ”といつものびびつとでもなる……と思つ。

「予想以上に化物酒だな、これは……」

俺に畏れを抱かせる初めての存在が酒とは思つてもいなかつた。

そんな様子を可笑しそうにクスクスと笑う永琳。そのまま自分の御猪口に再度その化物酒を注いでいく。

俺も意地を見せながら注いで貰う。

「そんなに無理して呑まなくてもいいのに……」

「確かに度数が物凄いことになつてるけど、美味いことは美味しいからな、これ」

クイック、と御猪口を傾け嚥下する。

喉を焼きつくすような感覚が暴れまわり、口の中には何とも言い難い深みのある味が支配する。

その深みは長い年月を過ごした証なのだろう。

度数は確かに高いが呑み難いことはない。それ以上に、味だけを見れば、酒の初心者ですら好むものだろう。ただ、唯一の欠点がこの馬鹿みたいに高い度数だろうか。

「ふう……」

横を見れば、色っぽい息を吐く永琳。

度数の高いアルコールのせいか、既に頬に赤みを差し、女の色香を醸し出す。

酒の芳醇とした匂いと、女性特有の甘い匂い。それらの御陰で酒の酔いよりも頭がクラクラする。

艶ある永琳の姿はいつ見ても飽きない。といつも、滅多にそのような姿を見せないのが原因か。

そんな姿を一人占めできる俺はどれほど幸運者なのだろう。

「どうかしたの？」

「……別に

「そう……」

隣に座る永琳は、そのまま俺に撓垂れ掛かつて来る。それを邪見に扱うこともなく、俺はそのままにさせておく。柔らかな感触と、少しの重み。その重みは永琳が確かにこの場に存在していることを明確にしてくれる、大切な重みだ。

言葉はなく、ただ夜風が音を鳴らす。

季節はそろそろ木々が葉を散らす冬に近い。紅葉も既に終え、後は冬を越す為に力を蓄えるだけとなつた木々が寂しげに佇んでいる。木枯らしが庭に吹き、少しだけ肌寒さを感じた。

それを永琳も感じたのか、先ほどよりも強く、優しくこちらに寄りかかつてくる。

たつた一人だけの宴会。

周りに何もなくとも、一人にとつてはそれだけで幸せだった。

そう思つてた時期も俺にもありました。

雲行きが怪しくなつてきたのはいつ頃だつただろうか。静々と二人で呑みだして一時間くらい経つた頃だつたか？ その頃から時たま喋る永琳の言動が狂つてきた気がする。

最初は少しベタベタし始めた。その頃の俺は別にその永琳の奇行を何とも思わず、ただただ苦笑を零すのみだつた。その後に永琳の呂律が回らなくなつてきた頃からか。あの頃に完全に永琳は酒に呑まれて壊れた。

「うふふ。か～む～い～」

今ではこんな感じだ。

いつもの凜々しいお姉さんキャラはどうに行つたんだ？ 完全に阿保の子みたいだ。

それでも女の色氣を失わない辺りは流石としか言いようがない。

「ねえねえかむいつてばあ～」

「ああもう、どうかしたのか？」

グイグイと首を引っ張つて来るので、仕方なく永琳の方向を向く。正直、あちらを振りかえりたくはなかつた。現在の永琳の衣服は、酔つた勢いか大層肌蹴つている。本当にギリギリの所で持つてているのは、男の視点からしてみれば、最早悪意にしか感じられない程だ。これが見えていれば注意するなんなり出来るし、見えていなかつたらそれで良し。だが、今は中途半端にも程があり、先ほども注意したが効果はなかつた。

「んで？ 何か用事か？」

「おねえちゃんつて呼んでみて～？」

「…………はあ？」

「だ～か～ら～」

いや、聞こえていないんじゃなくて、言つた内容を理解出来ないだけだ。

「ほりは～や～く～」

「いや、ちよ、少し待とうな？」

「い～や～。いますぐじゃないとだ～め」

上目使いで下から見上るとか、どれだけズルい戦法を使うんだ

！？

ほんのつと赤く染まつた頬に、少しだけ潤んだ瞳。熱を孕んだ吐息が首に吹きかけられ、思考を正常に働かせることが困難となる。

「あ～、その、な？」

「お、ね、え、ちや、んつていつて。ね？」

「あ～う～」

覚悟を決めるしかないのか……ツ！？

「…………」

「…………」

「…………お

「お？」「

無理だつて！

恥ずかしすぎる。だから妥協点を見つけよ。そうしなければ今
の永琳だと絶対に涙を流す。

「…………姉ちゃん」

「はいっー！」

「うわっ」と

俺が姉ちゃんと呼んだ瞬間、永琳は俺に飛びついてくる。

「えへへ～、かむい～」

「はあ～。」JUTちはあれだけ恥ずかしい思いをして言つたつてのこ、
「うわせこつなに幸せそつで……」

苦笑を零しながら、さりげりと零れ落ちる永琳の髪を撫でる。

気持ちいいのか、くすぐったいのかはわからないが、少しだけ身を捩つて声を出す。が、嫌な雰囲気は感じられない。

髪を梳きながら、これからのこと夢想する。

いつまでこのような平穏が続くのか。いつまでこのような幸せが続くのか。

永遠などはありえない、こともないかも知れない。だが、この生活も後少しすれば終わりを迎える。

それを悲しみで終えるのか、喜びで終えるのかは俺達次第。

「かむい」
「どうかした？」

だが、そんな取りとめもないことも、この笑顔を見ていると霧散していく。

「わたしはかむいの」と、だーいすきつ、だからね?」
「ああ」

普段は大人っぽく、けどどこかピントがズレタ俺の大切な“姉さん”。

「俺も大好きだよ、姉さん」

一こんな思い出で俺達の記憶が埋まれば、それは幸せなことなのだ
うひ。

「頭痛い……」

フラフラしながら俺の横を歩く永琳は呟く。

それは昨日あれだけ酒を呑んだし、完全に酔っぱらってたからな。

「一日酔いくらいなるだろ？」

だが、今の様子を顧みると、どうやら永琳には昨日の記憶がすっぽりと抜け落ちているようだ。

つまりは昨日の醜態を全く覚えていないと言つて。

なら俺がすべきことは？

当然

「大丈夫か 姉さん？」

「な、えつ！？ か、神威つ！？」

「クククツ、ほら、一日酔いの薬は俺が持つてくるから休んでおけよ」

クツクツと一人で忍び笑いをしながら、永琳自身が調合した一日酔いの薬を取りに行く。

後ろは振り返らない。どうせ永琳は顔を赤くしながら狼狽することだろう。実際、今もまだ混乱したような声が聞こえてくる。そんな様子を永琳は見られたくないだろ？

「それは人の事を言えないけどな 」

俺自身の顔も、すっかりと赤く染まっていたのだから。

9・酒盛り、それは御乱心の序曲でもある（後書き）

とうとう学校が始まってしまいました。

まだ今日は始業式と授業が一時間と軽い物でしたが、明日からはフルの時間割。全く以て面倒です。しかも冬休みの宿題が終わっていないというこの状況（笑）まあ次の授業までという指定、その授業が終末なので余裕はまだありますけど。

それでも勉強に時間を取りられるのは痛い。。

と、言いつつ、私もそろそろ真面目に勉強に力を入れようかと思う今日この頃。

得意科目はいいとして、苦手科目である英語と、後は資格の勉強をいくつか。

資格と言えば、うちの学校で一人国家資格取った人がいましたね。確か情報処理関連のやつ。

いいですよね、私もそれくらい出来ればいいのですが……

とりあえずは簿記でも勉強しましょうかねえ。

10・100年目の記念日（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

永琳と出逢つてから幾歳の月日が流れただろうか。

両手の指を使おうと、両足の指を使おうとその数は足らない。

外は雪が覆い積り、幻想的な雪景色を創り出す。

雪見酒、と洒落込みたいところだが、今田は今年一番の寒さで、流石に縁側などでゆつたりと呑むことは出来ない。

だから、今日の所は家の中で祝おう。

二人の出逢いからけよひ五百年経つた、今日この日を。

「乾杯」

いつもは日本酒に分類されるものを嗜む両者だが、今日は料理に合わせてワイン種を嗜む。それに伴つて用意されている料理は洋食。態々祝いの席ということで洋食を選んで作ったのだろうか。別に俺としては和食で祝つても然して問題でない。

確かに”知識”に存在するクリスマスやバレンタインデーなどは全て西欧の文化を中心としており、それに伴つて洋食を食す機会も断然と増えるだろう。

だが、今ここでそのようなことはあまり関係ない筈だ。それなのに、どうしてか都市の住人は記念日と言えば洋食を手掛ける。

疑問に思いつつも、最終的にはどうでもいいかとの結論に至る。

いつものことだな。

テーブルマナーは”知識”にあつたし、長い年月も懸けてきてい

るので完璧だ。これでも永琳に時たま付き合つて高級レストランなどに外食の機会も存在した。故にそのようなスキルも併せて身に付く。

まあここまで長々と語つた訳だが、今日はそのような公の場所ではなく、また食事の席には永琳しかいないので、そこまで気にすることはない。

ただ、今までの経験上身に付いてしまつてゐる為、どうしても気になつてしまふだけである。

力チャヤ力チャヤと、一定のリズムで音が刻まれ、小さな咀嚼音が部屋の中を木靈こだまする。

口数は少ない、というよりも日本人にとつて食事中の会話はマナ一違反……とまではいかないが、少し行儀が悪いと判断される。が、反面歐米などでは食事中の会話は比較的大切。洋食を食べる日本人、俺は一体どつちを守ればいいのだろうか。

「どちらでもいいんじゃないから。別にここには私と貴方しかいないんだし」

そんな悩みを見透かすように永琳は言葉を放つ。

「まあ、それを言えば全ては事足りるけど、な……」

「ならそれでいいじゃない。可笑しな人ね」

「うわつ、それは少し酷くないか?」

談笑には笑顔が付き物、温かい笑みが産まれる。

ヴィンテージ物であろうワインは甘みが強く、まるで高級なジュースのよう。それで深みは失われず、芳醇な匂いが鼻一杯を支配する。

練乳以上の白さを見せるそれは、純白な生糸のようで、本当に飲

み物なのかと疑つてしまつ。

今日の料理を手掛けているのは全てお手伝いさんのもの。どうやら口頃の感謝の思いらしいが、俺達は特に彼らにした覚えはない。そう言つたのだが聞いては貰えなかつた。

「メインディッシュはステーキか」

「高級霜降り……。一枚十数万、いえ数十万は飛ぶ代物ね」

「どんだけ高級品を引っ張つてんくんだよ?」

「それだけ彼らの感謝の現れなんでしょう。別にそこまで気にしなくてもいいのに」

俺以外の存在に滅多に見せることのない苦笑を彼らに向ける。それだけ永琳も彼らに気を許した証なのだろう。

俺が来る前では絶対に見られなかつた光景、それが今見ることが出来ている。

良い光景……なのだろう。少しだけ落胆、いや嫉妬に似た感情が俺の胸に渦巻いているのを除けば。

今まではあの表情は俺一人だけに向けられていた。それが他者に向くと、何故か大切なものを奪われた、そんな感覚に陥つてしまう。そんなことはないのに。それはいい兆候だというのに。

醜い

そんなことは自分が一番理解している。

浅ましい

そんなことは自分が一番認識している。

賤しい

そんなことは自分が一番把握している。

自分の事なんだ。それくらい当然だろう?

理解して尚、それを考えてしまうのは俺が愚者だからだろうか。

「……神威?」

「何でもないよ」

「そう? どこか辛そうな顔をしてたから。大丈夫ならそれでいいけど……」

気付かれた?

「私はいつまでも貴方が一番大切なだから、そんなに不安そうな顔をしなくても大丈夫よ?」

「……ははっ。ああ、そうだよな 」

永琳が俺のことと気付かないことの方が少ない。

今回の事が気付かれたのだけ、偶然ではなく必然。

だが、それはどうした? 永琳は何て言った?

結局、勝手に悩んで、勝手に自己嫌悪に陥っていたのは俺自身であり、俺だけ。

本来ならば考えなくていい事を考えるのは俺の欠点だと、あれほど理解していなれば同じ轍を踏む。

「……やっぱり俺は途轍もない愚者だな」

そんな欠点全てを含んで、俺という存在は形成される。

最早、それがなければそれは俺という存在ではないのかも知れない。

なら、それは死ぬまで俺が抱えて行くべき事柄。降ろすことなどしない、してやらない。

いつのまにか、曇っていた心は晴れ渡る。

決心は自覚して漸く効果を得る。

「美味しいなあ……」

「ええ、そうね」

彼らが作ってくれた、俺達の為の料理。

それを俺達は精一杯の感謝を込め、堪能していく。それが彼らに返せる唯一の恩返し。

笑みを浮かべ、最大限の感謝を込め、それらを完食した。

「「御馳走様でした」」

一人は同時にそう言い終わり、同じ動作で席から立ち上がる。

そこに取り残されるのは一人が食べ終わつた食器群であり、またそれらを片付けるお手伝いの人間だけ。

数人のお手伝いの人間は食器の片付けに入り、またあるお手伝いはテーブルの掃除や部屋の掃除などに取りかかる。

その中で一番老齢しているお手伝い、いや執事は去つて行つた一人の方向を見つめ、そして 頭を下げる。

「本当にありがとうございます。こんな我等を救つてくれて、そして我が主の心を取り戻してくれて」

一つは自分の主である女性へ、もう一つはそんな主を光の世界へと連れ戻してくれた男性へと感謝の言葉を贈る。

彼らは俗に言う没落貴族という階級の人間に使えていた人々。基本的にこの都市の没落貴族という者は大抵犯罪の手を染めていた人間を指す。そんな人間に仕えていた人間の周りの評価はどうなるだろうか。そんなものは簡単だ。

軽蔑、軽視、侮蔑、蔑み、その他諸々の悪感情のみで、良い感情など持たれる筈もない。

その御蔭で彼ら達は行き場を失つた。

そんな彼らを救つたのが、今の主人に当たる永琳。永琳は偶然新たな家を手に入れ、そしてその屋敷を機能させるためには多数の有能な手伝いを要していた。

しかし、有能な人材という者は得てして少なく、またいたとしてもそれ相応の資金を要する。そんな時に彼らと出逢つたのだ。

巷の評判は悪いが、能力は優秀。悪かつたのは前主人であり、彼らに何の落ち度もないことを理解した永琳はすぐさま彼らを雇つた。そこから彼らの生活は変化したのだ。

だが、それも良いものだつたのか悪いものだつたのかは難しいところだ。

永琳は神威がこの家にやつて来るまでは無感動、無反応が基本だった。どんな事にも動じず、また反応しない。

しかし彼が来てから彼らの主人は良い意味で変わった。

表情をよく^{おもて}面に出すようになり、笑みが増えた。

それは彼らでは出来なかつたこと。それを神威はやり遂げた。
故に彼らは神威に感謝する。自身達が敬愛する主に笑みを灯してくれて、と。

だから彼らは一人の為に働く。

それがいつか終わりを告げるものだろうと、それまで、最後まで

働き続ける。

それが彼らの生き様なのだ。

完璧に風を引いた……。しかし鼻水が酷いことに。ポケットティッシュ一つじや、鼻まで授業を乗り切ることが出来なかつた（泣）

やつぱり原因は年甲斐もなく、夜9時頃から公園で鬼ごっこをしたのが悪かったのか。糞寒い中、クラスメート12人で鬼ごっこ。その後は長い滑り台を12人連結して滑るなど、傍から見れば阿保集団にしか見えなかつたでしょうね。

楽しかつたけど。

1.1・模擬戦（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

上下左右360°に飛び交うのは、色とりどりの力の塊。その飛び交う力の形状は基本的に弾であり、それらは弾幕と称しても可笑しくない密度を誇る。

そして俺がいる場所もまた空中であり、同じように弾幕をばら撒く。それと相対しているのは敵ではなく、本来ならば味方である筈の永琳。

喧嘩……ということでもない。

ただ、最近は運動不足だと呟く永琳が俺の訓練に参加しているだけ。だが、どこで話は拗れたのか、普段の俺の訓練は近、中、遠距離の武器を使った戦闘訓練。その後に現在俺と永琳が放っているような弾幕を飛ばしたり、レーザーのように放つたり。最後に能力の摸索。その辺りだ。

しかし、今日だけは違う。

今日の訓練の目的は実戦闘を想定した模擬戦。故にこうして俺と永琳は相対し、互いが持つ力をあらん限り使い、相手を撃墜しようとしているのだ。

勿論、本来ならばここまで力を入れないだろうが、負けた方には罰ゲームが存在する。故に一人は本気なのだ。

「疾イツ！」

俺は永琳の弾幕を搔い潜り、両の手に持つ翡翠の小剣で切り裂きに接近する。が、搔い潜つたと思えた途端、新たな弾幕が俺を襲う。安全地帯かと思えばそれが危険地帯など、天才の永琳が支配する弾幕を搔い潜るのは一苦労だ。

ただでさえ自力の差は歴然としている。それに追加して、俺はこの方実戦、それも対人戦闘を経験したことがない。今日がこの世界に存在して初めての対人戦闘なのだ。

それで永琳に勝つことは些か難しい。

だが、そんな弱音を吐露するつもりなどさららない。出来なれば”死”。そんな世界を俺は生き抜いてきたのだ。ならば今も勝てない理由などどこにも存在しない。

無茶、無謀？ そんなことは一番俺が理解している。しかし、そんなことは関係ない。やるかやらないか。ただこれだけなのだ。

「烈風の概念を付加」

翠の扇に概念を付加し、そのまま勢いよく振り抜く。

振り抜かれた扇からは疾風のような風が吹き出し、迫りくる弾幕を吹き飛ばし、吹き飛ばせなかつたものも進路を変更させる。

刹那だけ俺と永琳を繋ぐ一本の微細の道が開けた。

その隙を見逃すはずもない。

即座に翠の扇を破棄し、瑠璃色長剣を一本形成。それらに切断の概念を付加させ、一撃必殺と成す。

「破アツ！」

瞬時に距離を詰め、二刀の長剣を振るう。神速の連撃に相応しい斬撃が永琳を襲う。

「まだまだ甘いわね」

切断の概念を付加していると一瞬で看破され、永琳はそれならばと、その一刀の長剣を滑らせるように受け流す。

いくら身体を力により強化し、また行動の瞬間だけより多くの力を纏わせると言つても、それだけで長剣、それも切断の概念を付加されているのを受け流すなど正気の沙汰ではない。

だが、それでも永琳はそのよつた神業をやり遂げ、その瞬間に離脱を図った。

「力量差は天と地ほどの差があるな……」

最早笑いしか出でこない。

飄々とする永琳の表情に崩れは見られなく、俺は連撃により少しだけ息が上がっている。

「結構これでも冷や冷やしてるのよ?」

「どの顔でそんなことが言えるのや」

俺は苦笑を零し、永琳は微笑する。

これが歴然たる力の差。百年も生きていかないヒヨックが万以上の時を過ごした存在に届くものか。

「 けど俺は諦めが悪いぞ?」

周囲に色とりどりの弾が形成され、それらの一つ一つに概念が付加されていく。だが、概念と言つても軽いものでしかない。

手に武器は今は形成しない。

初弾は百一百もの小型の弾幕を雨霰のよつて永琳の頭上から広範囲に渡り降り注がせる。

避けるか防ぐかの一択しか用意されてない道。永琳は避けるとう選択を選んだ。

正解を言つてみればそつちで正しい。もしも防ぐという選択肢を取つていたのなら、今頃永琳はその場から身動きが取れなくなつていただろう。そうなつていたのなら、俺は特大の妖力砲を叩きこんだのだが。

しかし永琳は正しい選択肢を迷わず選ぶ。

「だが避け切れるか？」

人間は眼の前から来るのは対処しやすい肉体構造になつていて、反面、左右や頭上からのものには咄嗟に反応しにくい造りとなつてゐる。

降り注ぐ弾幕は永琳を襲うが、永琳は何の事はないという表情でそれを避け続ける。

「まあ避けられることが次の布石になるわけだが」

次の行動へ俺は移る。

新たに弾幕を形成し、今度は普通にそれを撃ち合つ。先ほどの雨霰あめあられの印象を消し去る為に。

数分間撃ち合えば、両者が陣取る位置も大分と変わって来る。

基本的に両者が居座るは空中。相手より上を取ることは空を飛ぶ戦闘でアドバンテージになる。故に両者は常に相手より高い位置を取ろうとする。

「そろそろだな

本来ならば消え去つてゐる筈の弾幕。それは未だに地面の中に埋

まっていた。

「再結成の概念を展開」

地面が微量ながら力の脈動を感じとれる。

これは能力を使用した俺だから解ることで、永琳には何も感じと
られていない筈。

ゆつくりとだが確実に。残滓だつた筈の妖力は周囲の妖力と混ざ
り合い、残滓から塊へと変化していく。

変化した妖力は待機。これで準備は殆ど整った。
後は永琳をあの場所に引きずり落とすか。

飛び交う弾幕をスレスレで避けながら、最後の仕上げへと入る。

「天墮」

それはまるで天が墮ちてくるようなもの。

俺が放てる最大容量の妖力を天高く壁のよう^にに形成し、それをそ
のまま墜落させる。

それには重圧の概念が付加されており、近くに行けばいくほど重
圧が掛かる。

「墮ちろッ！」

「クツ！？」

永琳の遙か頭上からそれは墮とされ、流石の永琳も避けることは
出来ず、それを耐え忍ぶしか選択はなかつた。
飛ぶ羽を^もがれたイカロスは地上に墜落する運命しか残されてい
なかつた。永琳もそれと同じ。

空高くからその壁により地上に墜とされる。だが、流石は永琳といつといふ。普通の相手ならばそれだけで地上へと墜落し、そのまゝ重圧により潰されるだろうが、永琳はそれを耐える。

墜ちる速度もそこまでなく、地上にぶつかろうとしたままでのダメージは入らない。それを理解しているからこそ永琳もそこまで必死の形相にはならない。

「だが甘い ッ！」

地表から数メートルといつといふ。

そこで俺が仕込んだ罠を紐解く。

永琳が墜落するであらう場所は、先ほど俺が雨霰あめあられを降らせた場所。そこには地表面、または少し中に妖力の残滓が残っていた。

その残滓には再形成の概念が附加されており、それを先ほど発動。それにより残滓は塊へと変化、それは俺が扱える力へと同じようにな变化してくる。

「俺の勝ちだ ッ！」

その妖力の塊を形無きものから相手を弔刺あわいさしにする緋色の槍へと変化させる。

身動きの取れない永琳にこれを避ける手などは最早存在しない。確実に俺の勝利だ。

「なつ！？」

「これにて終局よ ッ！」

串刺しにされた永琳は姿を消し、俺の後ろに陣取る。

首元には小さなナイフが握られ、それは確実に俺の頸動脈に当て

られていた。

「身代わり、か？」

可笑しい。俺はあの時完全に永琳を捉え、そしてずっとそれを眼で追いかけていた筈だ。

入れ替わる隙など見せもしなかつたし、存在もしなかつた。それだというのに……

「いえ、ちょこっとズルをしただけ」

そういうて解放された俺に見せるものは……粉？ まさか

「想像通り、これは服用者に幻覚作用、それも相手が想像するもの見せるタイプのものよ」

「反則臭え……」

ということは、俺がずっと見ていたものは全て幻覚だつたというわけだ。

だが、どのタイミングでそれを仕込まれたんだ？ 永琳の薬だから無臭だろうから、全くわからなかつた。

「貴方が私に雨霰あめあられを降り注いできた時よ。あの時にバレないように散布したの。何か貴方が策を弄してきそうだったからね」

そう簡単に言うが、そんなことを感づけ、実行出来る存在はどれほどいるだろうか。

両の手で事足りるだろう。

「完敗……だな」

敗北宣言を永琳に告げ、俺と永琳の模擬戦は終了した。

罰ゲームは俺が決行することに。

内容は至つて単純、今日一日、寝る時に抱き枕になること。
どうやらこの間の一件で味を占めたらしい。

「うふふ、やっぱり抱き心地がいいわ」

別に俺に害になる事もないのをビックリともしない。気恥かしさを除けばの話だが。

まあ敗者は何も語らず、勝者の言いなりになつておくか。これが気に入らない存在なら刃向かつてるとこりだけどな。

「それじゃお休み、永琳」
「お休み、神威」

11. 模擬戦（後書き）

久しぶりの戦闘描写。

朝6時から超特急で執筆したので、所々可笑しな点が多いかもしれません。

作者的に東方世界の強さ順は、

（純粹な力のみ）

- | | |
|----|---------|
| 1 | ・永琳 |
| 2 | ・映姫 |
| 3 | ・諭訪子 |
| 3 | ・神奈子 |
| 5 | ・紫 |
| 5 | ・幽香 |
| 7 | ・萃香 |
| 7 | ・勇儀 |
| 9 | ・幽々子 |
| 10 | ・フランデール |

いまいち作者は地靈殿と聖蓮船のキャラがわかりません。どんだけ強いんだろう？

- | | |
|----------|------|
| （総合戦闘能力） | |
| 1 | ・永琳 |
| 2 | ・諭訪子 |
| 2 | ・神奈子 |

4 · 映姫
5 · 紫
5 · 幽香
7 · 幽々子
8 · 萃香
8 · 勇儀

10 · フランデール

イメージ的にこんな感じ？ 無論反論は認める。というより、誰々はこりだから順位的にこりじゃね？などのアドバイスが欲しい。まあ永琳は一番強いと思うんだよ。戦略然り、生きた年月然り。諏訪子、神奈子も土着の頂点と大和の頂点ということでそれなりに強いと思つ。

12・想いを胸に、ござ旅立つ（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

12・想いを胸に、ござ旅立つ

永琳が弱音を俺に吐き出してから幾年が過ぎ去つた。

月面計画は滞りなく進行され、既に来年には第一陣の出発者がこの場所を発ち、月の裏側へと飛び去つていく。

ただ、先ほどは滞りなく進行されたと言つたが、それは表の人間、つまりは都市の住民や権力者共に対してだけであり、実際には違う。

何たつて、俺はこの都市に来てから既に100年、一世紀以上の月日をこの場所で過ごした。

もつと詳しく言えば、月面計画のことを永琳本人から直接聞かされてから既に50年は経過している。

それほど、永琳は俺と過ごす為に計画を緻密に遅らせてきたのだが、それももう終わりに近い。70年を過ぎた頃から永琳は都市の中央に呼ばれることが多くなり、週の一、二日ほどしか家に居ることが出来なくなり、80年を超えると週に一度だけ、そしてこの十年程は月に一回というところか。

それでも永琳はそれをやり遂げた。

そして来年、とうとう彼女はこの地球という大地を発つ。

それは　俺と永琳との別れ意味していた。

「長かったな……」

今宵は綺麗な十五夜。真丸な月が屋根裏に座り込む俺と永琳を優しく照らす。

手には杯を両者は持ち、時期外れの月見酒と洒落込んでいた。

漸く月面計画は完了を迎へ、その主任であつた永琳も短いながらも休暇を取ることが出来た。

休暇の月日は丸々一年間。本来ならば長く感じるそれも、永久を生きることの出来る俺達にとつてはほんの刹那の時間でしかない。それでも俺達はそれを後悔で染め上げることなどしない。

トクトクと杯に酒が注がれる。

白く透明なそれを一気に煽るようにして飲み干した。

「そうね……。この30年間は本当に苦痛だったわ」

酌を返す。

それを永琳は俺と同じように飲み干して行った。ほう、と息つく。その姿は抗いようのない色香を漂わせる。

顔を上げれば白く輝く大きな月。それは美しくも、俺と永琳を引き剥がす憎き敵。

だが悪いのは月ではない。月自身は何もしていいのだから。

悪いのは変化を恐れたこの都市の権力者共と、自身の未来などを特に考えていない住民達。

これが八つ当たりだというのも勿論わかっている。だが、そうせずにはいられない。

「至福を得られるのは残り365日」

「それが過ぎ去れば共に別れの道へ」

「それがどれだけ苦しいことだらうと」

「避けては通れぬ慟哭の道筋」

乾杯、といふには些か小ちいを音を共に奏でる。

注がれた酒の水面に映る月はゆらゆらと揺らめき、まるで実体を感じさせない。それは俺自身の未来の不確かさを表しているよう。また、それは永琳も同じ。

自分の未来像は砂漠に投影される陽炎のように浮かんでは消え、それは実態があるかのように見え、その本質は虚像。移り行く時間、年代の中、自分は果たしてどのようにして生きているのだろうか。

注がれた杯をちびちびと傾け、そのような取り留めもないことを考える。

それはそれらが訪れるまで解る事などあり得ないのに、性分ゆえかどうしても考えてしまつ。

百聞は一見に如かず、千聞とてまた然り。百考は一験に如かず、千考とてまた然り。

どれだけ聞こうと考えようと、一回の拝覧、体験に勝るものはない。

「幸せって何なんだろうな？」

ふと、そんな咳きを漏らしてしまつた。
それを律儀に永琳は拾つて返す。

「人それぞれでしょうね。こうやって大切な人と過ごす時間を幸せと感じる存在もいれば、ただ一人で静かに過ごすことを幸せに思う存在もいる」

「それもそうだよなあ……」

「神威の幸せの定義は？」

「俺？」俺は

「

俺はどうなんだろうか。

永琳との生活はどうだ？ 勿論のこと幸せに決まっている。だが、一人でいることは苦痛か？ それも時と場所による。本当に独りならばそれは寂しいことだが、近くに大切な人がいる時の一人はさて寂しくはない。

結局は簡単な話なのか。俺は

「俺は大切な存在が近くにいる。これだけで幸せなんだろうな」

心の吐露。

別に一緒に居なくとも、その大切な存在が心の片隅にいれば俺は幸せなのだろう。

「例え遠くに離れていようと、心はいつも

「隣に居る？」

「そういうことだな」

苦笑を零しつつ、注がれた酒を飲み干した。

ああ、そうだ。俺はこうも単純だったのだ。
離れようが離れまいが、距離があろうが無からうが関係ない。
そこに大切な存在が居るかいないか、それが問題だったのだ。
だからこそ、俺は永琳からあの話を聞かされた時も自分の信念を押し通したのだ。

「そうね……」

そう言って、永琳も残っていた酒を飲み干す。
そして綺麗な微笑を零した。

「そう考へれば私もやつていけるかしら？」

「一つの杯から霊は消えた。
別れの時は　近い。」

都市の外れ、圧倒的な広さを持つ高原と本来ならば呼べる場所。そこは今、そのような姿は跡形も見られず、そこに建設されているものは仰々しい工場や荷物を運ぶための道路、そこを通るトラック、果てにはロケットに近い形状をしているものの、"知識"の中に存在するロケットとは似て非なる物など。

「」のことを話しているから解ると思つが、今日「」の日が月面計画の始動の日時。

つまり

「　お別れだな」

俺と永琳の別離の日もある。

先ほどの光景が目に見える丘に、俺達一人は立つていた。

俺の言葉に真正面から、毅然とした表情で永琳はこちらを見つめる。

あれほど泣き言を零していた本人とは思えない様で、些か可笑しく感じてしまう。だが、それを^{おもて}面に出したりはしない。それは永琳の成長した証であつて、どこにも笑う要素など存在していないのだから。

ただ可笑しいと思えたのは、あのような光景を一度見ているから。

懐かしこよつたな、そのよつたな感情が湧き上がつて来ていたのだ。

「ええ……、そうね」

口数は両者共に少ない。

二人とも大切な存在との別離など初めての経験なのである。そのような場面でどのような言葉を投げかければよいのか全くわからぬいのだ。

だが、それは悪いことなのだろうか。

どのような存在にも初めてといつもの時は当たり前のよつて存在する。

それを恥だと思つ存在はいるだらうか？

「俺は」「私は」

二人の声が重なる。似た者同士の頑固者。融通が効きにくく、また不器用。

だが、性根は優しく、温かい眼差しで両者同士で見守り合つた。

天才な彼女と、愚直な俺。

俺では到底思い付かない考え方を思い付くと言つのこと、偶にドジをやらかす彼女。

恥ずかしがり屋な彼女と、意地つ張りな俺。

俺は知つてゐる。俺の手を握る時、彼女はいつも顔が赤くなつていたことを。

優しい彼女と、意地悪な俺。

毎朝俺が寝坊すれば優しく起こしてくれ、何かあれば力になつて

くれた。

「お前と過ごさせて幸せだった」

「貴方と過ごさせて幸せでした」

声は重なり、一つの詩を作り上げる。

それは相手の幸せを願うハーモニー。

その空間が、空気が、風が、草が、光が、その詩を奏で上げる。空気が震え、空間が震動し、風が舞い、草が鳴き、光が照らす。

そんな中、俺達は謳い続ける。

観客は誰もおらず、主演は主人公と美女のみ。たつた一人の為だけの壇上は輝き続ける。

確かにその場所にはその一人しかいなかつたが、その空間は一人を祝福していた。

「「いつの日か、また出逢うその日まで」」

そして詩は終わりを迎える。

言葉はない。ただ一人は互いの瞳を見つめるだけ。だが、それでも伝えたい意思は確かに伝わる。

意思と意思が交われば、そこに縁が生まれる。

縁とは他者との繋がり。眼には見えないが、それでもちゃんと繋がりを持っている。

それは途切れることなく、どれだけの時間が掛かるようと、いつかは再び混じり合う。

それが何千年、何万年の月日が経とつとも

意思是既に伝わり、言葉を交わす意味は無くなつた。

ならば早々に俺はこの場を去りつ。いつまでも居れば、それだけ未練が大きくなる。

「それじゃ少しの間のお別れだな。永琳、いや――」

だから最後に。最後にこの言の葉を。

それが当たつているのか、間違つているのかはわからない。それでも、この言葉だけは送つておこう。

「さよなら、」

「ツ―？ あ、貴方――！」

そして俺は永琳と別れを告げた……

12・想いを胸に、こぞ旅立つ（後書き）

今日から二日ほどはシリアスな展開に入ります。

まあそう言つても、私の力量ではシリアス（笑）くらいにしかならないんですけどね。

正直、シリアスは苦手。かといってコメディや日常が得意と聞かれればそうでないと答えるし、戦闘シーンもどこか可笑しな感じがする。

一体私は何が得意なんだろう？

13・心情と助言（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「あつ……」

私の言葉が届く前に彼は去っていく。
黒の気流しを身に纏い、漆黒の髪を無造作に風に靡かせる彼。
最初に出逢つたのは既に百年という歳月の前。出逢いは最悪であり最高。そんなものだった。

私は都市の守護者であり、彼は都市の侵入者。

本来ならば交わり合うことなどありえない組み合わせ。それでも私と彼は交わり合つた。

妖怪という存在でありながら、その力は神に匹敵する。そんな力を持つていた彼。

妖怪という存在でありながら、その笑顔は私を安心させた。

妖怪という存在でありながら、彼の存在で私の心を埋め尽くされた。

「神威……、貴方は……」

最後に呴いた彼の言葉は、私の本当の名前。

人間という存在の名前ではなく、という存在である時の名前。
それはこうして暮らす為に捨て去つた名前。

。

それは　の一柱の名前であり、また私が　であつた時の名前。
それは知恵の　と称される程、私は　から信頼されていた。
事実、　が直面した大きな問題の多数を私は解決に導いてきた。
一番大きな事件は　が　に閉じこもつたことだつただろう

か。

今ではもう意味の無い記憶。

人の身でこの世界に生きる時に決心したことだ。
既にこの身は ではなく人の身。それでも

「それでも彼はまだ私をその名前で呼んでくれた……」

ギュッ、と胸元で一つの髪留めを抱え握る。
それは彼が私に送つてくれた初めての贈り物^{プレゼント}。

「名を捨てるという行為はその存在を否定することと同義。でも彼
はそんな私を肯定してくれた……」

溢れだす涙は止まりを知らない。目尻から涙がポロポロと零れ落ちる。

手で拭おうが、それは意味を成さない。

堤防が決壊したように、ダムに鱗割れが入ったように、溢れだす涙は地に落ちる。

「神威……、私は貴方の事を」

溢れ出るのは涙だけでなく、彼と過ごした思い出。

いつも独りで食べていたモノクロの食卓に、鮮やかに色づけてくれた彼。

普通の人では理解出来ない私の話を、対等な立場から聞いてくれた彼。
笑うという行為を出来なかつた私に、それの大切さを教えてくれた彼。

億という歳月を経てさえ、空虚な心しか持てなかつた私を満たしてくれた彼。

愛、そんな陳腐な言葉の意味を教えてくれた　彼。
そう、私は

「　愛しています」

吐き出された言葉は、自覚しながらも等々伝えられなかつた私の想い。

今はそれを伝えるべき相手はいない。
でも

「次に出逢つた時、ちゃんと言葉にして伝えるから

いつのまにか心の雨雲は去つていた。
零れ落ちる涙も既に乾いている。

「さあ、行きましょうか」

一步一步大地を踏みしめる。

これを逃せば、後どれほど年月を過げば次感じとれるかわからぬ。故に、しつかりと。自分といつ存在が居たといつ証を刻みつける。

もう迷わない、振り返らない。

彼はそうやって先に進んだ。なり

「私もそつするのがいい女つてものじょうへ

あれから七日、俺は一人高原を彷徨い歩いていた。

行く当てなどなく、ただ只管に彷徨い続ける。目的地などは設定しない。ただ気儘に、風に流れるよう歩み続ける。

拠点を失った俺だが、それは遙か昔、百年ほど前も同じように旅していたではないか。ならばどうして同じように振舞えないことがあるというのだ。

心にはいつも彼女が。それだけで俺は歩んで行ける。

辺りには梅の花が咲き誇り、春の賑わいを大いに見せる。未だ桜という花が見られないことから、やはりここは俺の知る”知識”より遙か古の年代だということを実感させられる。

「出会いと別れの季節……か。言い得て妙なものだな」

クスッ、と一人で笑みを零す。

だがその瞬間、どこからか力チツ、とまるで時計の針が刻んだような音が聞こえた。その音が聞こえれば、次には懐に今まで感じられない重みが発生する。

その事に少しだけ驚きながらも、俺の服にそのような仕掛けを施せる人物は一人しか心当たりがない。しかもその人物が俺に書成すような仕掛けを施す筈もないことも理解している。

だから先に心を落ちつけ、そして件の重みに手を付けた。

「手紙？」

俺の懐から姿を見せたのは一通の手紙。

中を開けると、やはり仕掛けた本人は永琳だつた。長年の付き合いなので筆跡を見るだけで確認出来る。

震える指を叱咤しながら、俺はその文字を追つていく。

『この手紙を読んでいるところとは、貴方と私は別れて七日の月日が経つたと言つことになるわ。

手紙は私が編んだ術式を貴方の服に施して、施してから太陽が七度、貴方の頭上へ昇れば現れるように編んだものよ』

成程。だから今まで俺はその存在の一端すらも感じとれなかつたのか。

しかし、俺が感じとれない程の術式を編むとは、流石は天才。これでも気配感知などは得意分野なんだけどな、一応。

『どうせ私の事だから、貴方と別れるその瞬間まで本当に言いたかつたことは伝えきれなかつたでしょうね』

筆跡から、この文を書いている永琳の苦笑している顔を簡単に想像出来る。

『だから文で伝える　なんて味氣のないことはしないわ。
だつて自分の想いは自分の声で伝えるからこそ伝わるものでしょう?』

何を伝えたかつたのか、それは俺には全くわからない。

だが、その事柄を本当に伝えたかつたことだけは理解出来た。何せ、これほど筆を握り締めながら書いた文だ。それほど想いがあつたのだろう。

『だから私がこの手紙に書く事柄は一つだけ。
洒落たものじゃなくて、現実的な事柄。

本当ならもつと別れを惜しむようなことを書くべきなんでしょうけど、それは私の性格じゃないし、今更そんなことを書いても貴方

を辛くさせるだけだから書かないわ。

書くのは私と貴方が再開する為の力になる助言、これだけよ』

その文を読んだ瞬間、心臓がドクン、と跳ね上がった。
そしてその助言をいち早く見る為に、俺は次の文章を眼で追い掛けた。

『そんな大仰なことを言つたけど、私が伝えることは些細なことよ。全ては貴方任せになるし、本来ならば私と貴方が共にいる時に伝えるべきことだつたと思うけど。

でもこれを思い付いたのはこの文を書くほんの少し前。どちらかというと、これを思い付いたからこの文を書いたようなものね。だからと言って、残りの一週間をこれの為に割きたくはなかつたの。貴方との最後の時間をこれ以上削りたくなかったの』

申し訳なさそうな、悲しそうな顔が俺の頭の中に浮かび上がる。
だが、俺は声高に叫びたい。そんなことはない、と。

『たつた一つの小さな事柄。
それが火種となつて、私と貴方を温める大きな灯火となつて欲しい、そう願うわ』

ギュッ、とその手紙を握り抱える。

数秒間はこうする他なかつた。それでもしなければ流さないと決めた涙が零れそうだつたから。

意地でも流さないと決めた。そんな子供のような強情。
泣きたいときは泣けばいい、他の人はそう言つが、俺はそうはしない。

別れは笑顔で、そしてまた逢つ時に泣けばいい。

そう俺は決めたんだ。

『私が伝えること、それは

そこに書かれている顛末は本当に些細なことだった。

たが、それはまた重要なことで、今までどこにいて気が二つかなかつたんだという事柄でもあつた。

『貴方が付加させる名もない物質や力に”名”を与えることよ。 ”名”とはその存在を証明する記号であり、 その存在に力を与えるものもあるわ。

例を挙げれば神具関連かしらね。
イザギ あめのおはね

神代の時代、伊邪那岐が天尾羽張を用いて火之夜藝速鬼あめののははり。

殺したことにより、天尾羽張はただの神剣ではなく
”神殺し”の概念を持ち得たことは知っているわよね？

これらのことを利用して貴方が扱う物質や力に名を与えるの。それは勿論偽物でも構わない。偽物だろうと、世界に本物があるのなら、それは本物の力の0.00000001%くらいは宿るわ。

本来ならばあまり意味のない
こともないけれど
でも、貴
方の場合は違う。

貴方が必要とすることはただ一つ、概念を付加させるだけの許容量を持つこと。だから偽物であっても本物を^{まね}贋作ればそれは本物に近くなり、そしてそれだけ本物と同じ性能を得ることが出来るようになる。

つまりはそれだけ許容量は大きくなると言うことよ。これを利用するなら、扱うもの名前に近い形状の方がベストね。近ければ近いほど、それには力は宿る。

名は存在を確固たるものに作り換えるだけの力を持っているの。

「これを私は”偶像の理論”と呼んでいるわ

簡単に纏めると、名もない物質に既に存在している物質の形状を真似たり、同じ名前を『えれば、それは既に存在している物質に似る』ということか。

『地上と月を繋ぐような存在は流石の私でも思い付かないけど、貴方なら必ず思い付く筈。だから貴方が訪れる这件事を待ち望んでいるわ。

勿論、私もただ待つて『いるだけの女じゃないけどね』

そう締めくくり、手紙は終わりを告げた。

俺は握りしめすぎてクシャクシャになつた手紙を綺麗に折り畳み、また懐に仕舞い込む。

零れるは涙ではなく笑み。

「ありがとな、永琳……」

「これで永琳との再開に一歩近づくことが出来た。

「時間は在り余るほど存在してゐるし、千年、いや万年ほどあれば成し遂げられるか」

常人なら途方もないような時間だが、生憎と俺は不老不死（に近い）。そうでなくとも億くらいの歳月は生きると思う（）だ。

千や万の月日が過ぎようと、一生から考えればそれは刹那と時にしか過ぎない。

「さあ、行くか

永琳と別れてから、漸く本当の一歩を踏み出せた気がした。

13・心情と助言（後書き）

この話に出てくる は、東方の元ネタから由来するもので、公式設定などではありません。俗に言つオリ設定。に入る言葉も、それなりの知識（中学生ほど？）があればすぐに埋まるようなものなので、正直 にした意味はあつたのかは疑問です（笑）

今回の心情の吐露、大事なのは、

永琳 神威の感情は“愛情”
神威 永琳の感情は“親情”

ということです。

永琳は神威のことを愛していると自覚しましたが、神威は依然と大切な存在なのだが、その感情は愛ではないということ。言つてしまえば、唯一無二の心友みたいなもの？

閑話・ある秘書の日記（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

月 日

月に私達が移住して来てから早十数年の月日が経過した。月面計画については滞りなく完遂され、昨年内に最後の月人もこの月面へ移住が完了されたことが確認されている。

こちらでの私の仕事は地上にいた頃と変わりなく、月の頭脳と称されるハ意永琳様の秘書を続けている。

秘書、と言つてもあの人は優秀すぎる所以私の仕事など殆どなく、やることと言えば資料の整理だとか休憩の準備だとかそんなものだ。それでも飽きずにやれるのはそれだけ私がハ意様のことを尊敬しているからだろう。

の方ほど頭脳明晰な人を私は見たことがない。まあだからこそ月の頭脳などと呼ばれるのだが。

そう言えど、の方の義弟様を最近は見ていないと思った。

名前は確か……神威様と申しただろうか。ハ意様の唯一の親族であり、そしてハ意様が唯一心を許している男性。

私も数回ではあるが拝見したことがある。と言つても私が拝見する時は隣にハ意様が控え、まるで兄弟というよりも恋人のような雰囲気を漂わせていたが。

あれほど大切にして存在だ。今も月のどこかに住んでいらっしゃるのだろう。

今度ちゃんと挨拶をしに行かなくては。

少し前に感じた疑問を直接ハ意様に尋ねてみると、驚きの返答が返された。

どうやらハ意様の義弟、神威様は地上に残つたそうだ。

驚きつつもその理由を尋ねてみると、あまり返事は返つてこなかつたが、唯一ハツキリしていたことは、どうやら神威様は月での生活は牢獄で暮らしているようなもので嫌だとか。

私自身はそのような感想は持つたことがなかつたので余りピンとこなかつたが、ハ意様はそれを理解していたようだ。

これが凡人と天才との差なのだろうか。

そう言えば神威様もハ意様と同じように天才と称されるほど知識を保有していた。

天才は得てして凡人には理解出来ない境地へと辿り着くことが多
い。

出来れば私もそのような境地へと辿り着いてみたいものだ。

今日は少し不穏な噂を聞いた。

不穏、と言つても月に直接関係があるかと問われれば、それは否
と答えるほど些細なものだが。

その噂とは、どうやら地上に残つてゐる月人の施設、つまりは私達が住んでいた都市に月から爆撃するというものだ。

何故そのようなことをするのかと私は疑問に思つたが、上の人間

はどうやら地上に残る生命体がその施設などを用いて月に侵攻してくれるのを恐れているらしい。

馬鹿馬鹿しい、正直その一言に頗る。

何故なら、私達がこうして月に辿り着けたのはハ意様がいたからであり、もしハ意様がいなければ私達は未だに地上に、いやもしかすると既に穢れに塗れて死んでいたかも知れないのだ。

それだというのに上の人は、まるで自分達の御蔭でこうして月での暮らししがあるかのような声を上げている。

まあそれを真に受けている存在など、今の月の民には誰一人としていないだろうがな。

月 日

どうやらこの間に聞いた噂は決行されるらしい。

そこで私は重大な事実を思い出した。

地上には未だハ意様の義弟でいらっしゃる神威様が存続していた筈だ。

私は急いでその計画を潰そうと思つたが、如何せん私自身は一回の秘書相当の権力しか持ち得ない。

これでは駄目だと思い、すぐさまハ意様に連絡を入れようとするが、ここ数ヶ月は連絡が着かない。どうやら上の人は仕事を任せられ、それを成し遂げているらしい。

まさか上の人間はそれを知つた上での計画なのかつ！？
どうする！？ 時間が余りにも足りなすぎる。

直接私がハ意様に伝えようにも、秘書である私にすら仕事先は教

えられていない。それほどの極秘プロジェクトなのか？

糞ツ！ どうして私達凡人は ここまで無力なのだ？

月 日

あの計画は今日の真昼間、それも評議会場近くの大型ディスプレイでその光景をありありと放映した。

その映った姿は無残にも碎け散つた私達の故郷。それだといづれに月の民は歓声を上げている。

ギュッ、と手から血が零れるほど握り締めるが、今はそのようなことを気にする程の余裕が私には存在しなかつた。

月 日

そして悲劇は起きた。

八意様が極秘プロジェクトから帰還し、その事実を聞いた瞬間、彼女は涙を零しながら崩れ去つた。

嗚咽と共に洩れる声には神威との言葉。

周りはそんな様子の八意様を慰めようとすると、お前達にそのような権利など存在しない。勿論、こんな惨状を止めることが出来なかつた私にも。

そのまま八意様は部屋へと戻り、そして（何かを書いた痕が見えるが霞んでいて読めない）

月 日

地獄、そう言い表すのが最も正しいと言わんばかりの惨状をハ意様は引き起こした。

地上爆撃の計画を立てた関係者全てをハ意様は皆殺しにしてしまつた。顔は血に塗れ、手には人であつたでろう肉が握られている。その光景を目撃した他の人間数十人がかりで漸くハ意様を止めることが出来た。

私はそんな光景を眼にして動けなかつた。

だつて……ハ意様は笑みを浮かべながら、まるで人ではなく虫でも殺すかのような瞳でそれらを殺していたから。

私は引き留める権利など存在しているとは思えなかつた。どこまで憎悪が溜まればあのような表情かおを出来るのだろう。どれほどの悲哀を感じればあのような瞳まなこを出来るのだろう。そうまでさせたのは紛れもない私達なのだ。それなのに、どうして私達は彼女を止めることが出来るのだろうか。

月 日

あの惨状を引き起こしてから、ハ意様は左遷させられた。

今でも月の頭脳という二つ名を持つが、それを遺憾なく發揮される場は滅多なことでは用意されることがなくなつた。

今のハ意様の月での立場は学者兼医者と言つたもので、それなり

に信用はされているが、あの一件からは月の民から受けが悪くなつた。

もしかすると、上の人物はこれを望んでいたのかもしれない。

一般人でありながら、その才能を遺憾なく發揮し、そして民の信頼を勝ち取つたハ意様を失意のどん底へ蹴落とす為に。

實際、そのような思惑があつたのかどうかはもう知る事は出来ない。それを知る人間は全て死んでしまつたのだから。だが、それでもそのような事件の御蔭で甘い蜜を啜つている人間もいるということが現実だ。

神威様、私のこの想いは正直お門違いのハつ当たりでしかありません。

それでも私はこの想いをぶつけます。

どうして貴方はハ意様の隣に居てくださらなかつたのか。

貴方さえ、貴方さえいてくれれば（何かを書いた痕跡は見られるが、その上から何十ものマジックで塗りつぶして先が読めない）

「君にはある人物の家庭教師をやつて貰いたい」

「……私に？」

「ああ、月の頭脳という異名を取る君に」

「……ええ、別にやつてあげてもいいわ。どうせ私にはすることなどもう存在していないしね。それでその子の名前は？」

「月の姫、輝夜」

闇話・ある秘書の日記（後書き）

これにて太古の時代、平たく言えば永琳編終了です。
計15話と何気に長かつた。もつとテンポ良く話を進めて行く予定
だつたんですけど、いつしかここまで伸びた（笑）
これだと原作開始まで後何話を消費するでしょうかね。

次は放浪の時代と、言わば縄文時代開始までの間のお話です。この
間で原作キャラは予定では一人、オリキャラが一人が主役というと
ころでどうですか。

内、原作キャラも設定崩壊を所々起こっているので、半オリキャラ
と思った方が精神衛生上はいいかもしません。

そんな銀花が執筆する小説ですが、これからも沢山の読者様が楽し
めるよう精一杯やっていくつもりなので、どうぞよろしくお願ひし
ます。

14・実験結果、それと同時に起る氷河期（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

14・実験結果、それと同時に起る氷河期

それは突然の出来事だった。

永琳と袂を分けてから早十数年の月日は経ち、俺は流浪の旅に身を任せていた。

どういう理由かはわからないが、あの都市以外に人間という種は未だ姿を見せず、この日本列島であろう場所に存在するのは動物か低級の妖怪だけ。

成すべきことは未だ成せず、ただただ放浪し己を磨くだけ。そんな毎日をこの十数年間を続けていた。

「ん？」

遙か彼方の空から降り注ぐとする一條の光。

その光景を見た瞬間、俺の世界はスローモーションへと移り変わる。

こんな雲一つない天候に雷か？ そんな考えがスローになる時間の中で浮かび上がり、即座に否定。雷ならば、それこそ光速の速度を誇る。だが、あの一條の光はそれほど速くはない。

ならば

次の思考に転じようとしたところで、那一條の光は地上へと突き刺さる。それと同時に耳に迫り着く轟音。

銅鑼の鐘を至近距離で聞いたような轟音が鳴り響き、顔を顰める。そして漸くあの一條の光の正体を看破する。

あれは雷でもなんでもない。あれは

「 爆撃ツ！？ 天高く、そしてこの時代で唯一あんな物騒兵器を造るのは 月の爆撃かツ！」

月には永琳がいる筈。その永琳がこのような行いをするだらうか？ 答えは否。

そうすると、この爆撃を計画、実行した存在は誰か。そんなものは簡単に理解出来る。

「あの馬鹿共めがツ！」

永琳に月面計画を実行させた都市の権力者共だらう。

大方、自分以外の知能を生命体がいないことを知つていて尚、訪れる事のない恐怖に怯え、その恐怖を取り除くために地上に残る施設を爆撃したといふところか。

爆撃が落ちた場所はここからはそれなりに距離がある。
だが

「爆撃事態はないけど、衝撃波やその他諸々はこっちに来るよな…

…ツ！」

地上に落ちた時の轟音とはまた違う音は段々とこちらに迫つて来ることがわかる。

時間で表したのなら、それは刹那の間に行われる出来事だが、今の俺の体感時間はどうしてか長い。故にこうして思考を展開することができる。

それでも爆撃の衝撃波は確かにこちらへやって来る。

流石の俺もそれをノーガードでやり過いすことは出来ない。何らかの対処が必要。

そしてその対処も一筋縄ではいかないだろ。月から地上へ爆撃し、そして尚地上の施設を全て破壊するだけの威力を誇っているで

あらうものだ。そう易々と防げるものではない。

「想像開始」
「イメージスタート」

迫り来る爆風と衝撃波。

それらが迫り着くほんの刹那の前に、俺の眼前に光り輝くナニカが形成されていく。

それは“知識”に存在するギリシア神話の盾。

主神ゼウスが娘であるアテナに託した防具。鍛冶神ヘーバイストスによつて作られたとされ、形状は楯であるとも、肩当てまたは胸当てのようなものであるとも言われている。

その後に英雄ペルセウスが、目を合わせた者を石化させてしまう魔物メドウーサを討伐し、その首を持ち帰つてアテナに捧ると、アテナはその首をアイギスにはめ込んだと伝えられている。

その伝承に基づかれた想像^{イメージ}によつて俺は形成する。

「“アイギス”！」

永琳によつて手に入れた新たな力。

形成された物質に“名”を与え、今まで以上に確固たる存在としてこの世界に顕現させる。

激突まで体感時間で後3秒。

「鉄壁の概念の付加」

激突まで体感時間で後2秒。

「遮断の概念の付加」

激突まで体感時間で後1秒。

「衝撃吸収の概念の付加」

激突まで体感時間で 衝突。
身体に伝わり来る衝撃は微細もなく、俺を焼けつつくとする爆
風は届かない。
失明しそうな程の光に思わず目を閉じたが、俺には怪我一つ負つ
ていない。

「無傷……か。実験は上々。だが、それでもまだまだ足りないか」
俺にとって、先ほどの爆風などただの体の好い実験にしか過ぎな
い。

確かに威力だけを取つてみれば中々の脅威になり得るだろう。し
かし、防ぎきれないという確率は億に一つとてなかつた。この世界
に絶対などは存在し得ないことを理解しているので、100%防げ
るなどと驕ることはなかつたが、それでも防ぎきる自信はあつた。
防げない確率など京に一つというところか。

だからこそ、俺はこの十数年で手に入れた新たな力を試してみた
のだ。

どれほどの結果を出せるのかはわからなかつたが、結果は上々。
今までならば、先ほど付加させた概念を三つ同時付加など到底不
可能な所業だつたが、御覧の通り、俺はそれを成し遂げることが出
来た。

それから理解出来る通り、永琳の推察は正しかつたということ。

「後はこれを磨いていくだけかな……」

実験の結果に満足し、笑みを浮かべ俺は一人頷く。
足を進める。俺が目指す場所に辿り着く為に。

それにしても酷い。

この間の一件 地上へ月からの爆撃 により、地上はその爆撃と衝撃、並びに爆風などによつて荒れ果てた大地に成り果てた。それと同時に狂いだす気候。あの一件が起こる前までは安定していたそれだが、あれから崩れ出し、今では氷河期と呼んで差し支えがないほど気温が著しく低下した。

それにより生命を持つ者達の大半は死滅したが、それでも健気に生き残つてゐるの少なからず存在する。

「少し寒いな……」

そんな中、俺は少しだけ寒いという感想だけで生き抜いている。それには理由があり、それは俺の服に適温の概念を附加させ、それにより俺の体温はほぼ常温に保たれているというわけだ。

「にしても、今初めて自分は妖怪という種族で良かつたと思えた。何たつて、もし俺が人間だつたら食料がなくて餓死していただろうしな」

妖怪という種族は別に食料というものを摂取せずとも生きていける。

妖怪に必要なのは唯一つ、恐怖という概念だけ。恐怖さえあれば妖怪は生きていける。それもそうだ。妖怪自身、恐怖から形作られ

ているのだから、自分の根本を構成しているものさえあれば生きていけることは明白の理。

数は少ないが、確かにこの大地には未だに生命ある存在が生きている。

それらの存在が持つ恐怖が遠くに存在する俺に還元され、俺はこうして生きているという訳だ。

「でもこれからどうするかね。流石にずっと訓練というのも味気ないんだが、それ以外にすることはないし……」

何か面白いことでもないものか。

適当に目的地なく彷徨い歩く俺だが、一向に俺以外の存在は滅多に見られない。唯一見れるのが何かしらの動物だけであり、あの一件までは数は少なかつたが見ることが出来た低級妖怪も、恐怖という食料が無くなつた事により、その存在を消失に導かれたようだ。

今ではこの大地に残る妖怪は俺くらいのものか。

いや、探せばまだいるだろうが、この馬鹿みたいな天候だ。いくら妖怪と言えど参るだろう。こんな天候で活発に行動出来るのは俺くらい。存在したとしても、どこか山奥でひつそりと暮らしているのだろう。

「この状態で生き残つている妖怪は俺みたいな特殊性を持つ存在か、俺以上に昔から存在している大妖怪の一択だろう。下手に藪を突いて鬼を出すのは俺もしたくないし、な

今は一人で能力の向上に努めるくらいしかやることがない。

まあ後数千年後くらいにはこの天候も回復し、それと同時にまた新たな生命体や妖怪が産まれだすだろう。

それまではこうしておくかな。

「想像開始」
「イメージスタート」

想像するは鎖。

俺が初めて死闘を演じた巨狼を縛る、ドワーフにより作られ軍神テュールによつて繋がれた魔法の紐。

それは猫の足音、女の髪、岩の根、熊の腱、魚の息、鳥の唾液から形作られるものであり、それによりフェンリルを捕縛する、食り食う者。

「“グレイプニル”！」

顯現される銀鎖。

その長さはイメージした狼を縛る為に巨大で、全長数十メートルほどあるだろ？

「ツ……」

が、次の瞬間にその銀鎖は弾け飛び、この世界から消滅する。

「想像が足らなかつたか……」

原因是単純明快であり、ただ単に俺の想像力が足らなかつただけ。だが、猫の足音や魚の息を想像しろと言われてもそう簡単に想像することは難しい。

「永琳の“偶像の理論”もちゃんと想像出来れば力になるけど、想像が弱かつたら本物に引っ張られて形成を維持することも困難になるな」

どんなものにも長所と短所が存在するということか。

「ま、そこも今後の課題といつ」とか

気を取り直して訓練に励むとしよう。

俺はそう思い、上を向いた。

14・実験結果、それと同時に起る氷河期（後書き）

最近旧作と東方求聞史紀、それに東方儂月抄が欲しいくてしょうがない。

でも、現実的な問題として資金がない。

大体、小説代で毎月諭吉を飛ばしてるのが原因だらうけど。

話は変わりますが、来週の火曜日から試験が始まるようです。書き溜めはいくつもありますが、試験期間中を乗り切るだけの数はないというのが現状。

頑張つて執筆はしているんですが、眠い。他にも読みたい小説ややりたいゲームなどが積まれてる状態なので、中々にキツイ。

一日が48時間にならないかな？（逃避

15・大妖怪の交わり（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

15・大妖怪の交わり

氷河期、それは地球の気候が長期にわたって寒冷化する期間で、極地の氷床や山地の氷河群が拡大する時代であり、氷河時代とも呼ばれるものだ。

それは一定の周期で起こり得るもので、氷河期の中の寒い時期を氷期、氷河期の中のかなり暖かい時期を間氷期と呼ぶ。

その一定の周期は、本来ならば何千万年や何億年という超長期的に起こるものなのだが、近頃まで襲つていた寒気は数千年で收まりを見せた。

これは自然があるべきように起こつたものではなく、人為的に起こされたものだつたからだろう。だからこそ、地球という世界は異常を戻す為に、本来ならば一度起つれば超長期間起こり得る寒気がこれほど短期間で収まつたのだ。

事実、あれから数千年経過した今では、気候も元に戻り、気温も正常値に回復し、多くの動植物の命が新たに芽吹いた。

動植物が増えれば、それらの存在が持つ恐怖を餌に、低級妖怪も少なからず世界を闊歩するようになる。

だが、ここで一つの厄介事が発生し始める。

低級妖怪とは名前通り、力は弱く、また知能などは動物並み。しかし動物達が有する感覚器官とでも言つべきものか、それを有していない。それはつまりは相手の力量も弁えずに対立して存在が増えるということだ。

目に付くもの全てを襲いかかるという、限りもない愚をそれらは行つ。

生ある者が生ある者を襲つ。

それは力ある者が力無き者を食物とする食物連鎖の新たな始まり。草食動物が草木を食べ、その草食動物を肉食動物が食べる。だが、その肉食動物も己が持つ恐怖を糧に存在する妖怪に食されていく。

巡り廻る。

それが世界が創り出した一つの真理。

途絶えることの無い、世界が続く歴史。

生ある者はやがて生ある者の食物となり、そして輪廻の輪に還され、またこの世界に生まれ落ちる。

弱者は強者により輪廻に還り、いつしか世界に舞い戻り、そして強者を輪廻の輪に還す。

「食物連鎖、輪廻転生。それは世界が生み出した構造であり真理。それらの歯車が一つでも狂えば、世界は崩壊へと導かれると思つんだが　お前はどう思つ?」

俺がこの世界に存在し、既に数千年、それも万に近いほどの時を生きた。

今では俺も特殊な能力を所有する一介の妖怪ではなく、圧倒的強者の座に位置する大妖怪の一員。

そんな俺という存在に、無謀にも敵意を見せる存在が一つ。

首元がチリチリする程の濃密な殺氣。それは最早自分の存在を隠そうとすらしていない。

真正面から喰らい尽くす。そんな目算なのだ。

振り向けば、そこには絶世の美女が存在する。だが、このような殺氣を放つような存在が普通などあり得ない。

背には漆黒の六枚羽、十一枚の翼があり、金色の髪が相まって、

より一層その者の容姿を彩りづける。

だが、そんな容姿よりも眼が行くのは、手に持つ大剣。自身が持

つ羽と同じ漆黒のそれは、眼の前の少女の身体では到底持ち上げることなど不可能なほどの重量がある筈なのに、彼女は悠々とそれを手にしていた。

「さあ？ 私はそんな難しい話はよくわからないわ」

「……俺に何か用か？」

「言わなくてもわかつていいでしょ？、”大妖怪”さん？」

いつしかそのような名前で俺も呼ばれるようになった。

殺氣はそれと同時に一段と濃さを増す。それはまるで”死”そのものを具現化した感じだ。

ギシリ、と空間が殺気だけで軋み始める。どうやら眼の前の存在は、俺と同じ大妖怪。

「一応な、”大妖怪”」

「なら 踊りましょう？」

瞬間、俺と眼の前の美女は激突した。

「せつかちだな……ツ！」
「よく言われるわ……ツ！」

両者の間で交錯する二つの剣。

漆黒の大剣を咥え込むは純白の大剣。ギチギチと鍔迫り合いをしながら、相手をそのまま押し切ると両者が力を加える。

埒が明かないと相手は悟つたのか、鍔迫りの状態から巧みに刀身を滑らせ、そのまま距離を稼ぐ。

距離は目測にして凡そ三十メートル。一介の人間ならばそれは結構な距離となるのだが、如何せん俺達は人間の常識を壊す妖怪。三十メートルの短い距離など、刹那の内に詰められる。

しかし、距離を詰める前にあちらの一手が完成する。

彼女の周りを漂う漆黒の弾。その色はまるで深淵に繋がっているようで、一度囚われてしまえば抜け出すことが出来ないという印象を受ける。

「舞い踊りなさい、始原の闇よ 」

舞うは闇、奏では終焉の調べ。

宙を踊るかのように接近していく漆黒の闇は、ある意味幻想的な風景と言えよう。

しかし、その実態は危険極まりないものだ。

「……切断の概念を付加」

大剣を霧散させ、すぐさま翡翠の小剣を一本形成する。迫り来る闇を己の身体一つで全てを切り落として行く。だが、切り落とした闇は切断されながらも消えることなく、ただ数を増やして行くだけに留まった。

「貴方は闇を切れる事でも思つて居るのかしら？ 闇とは恐怖の根源であり、形無き力よ。貴方はそこに存在して居ないものを切ることが出来るのかしら？」

クスクスと嘲笑い、こちらを見下したような視線を向ける。

俺はそれについて何も言わない。それを諦めの表情と取つたのか、彼女はより一層笑みを深め、闇を出現させる。

どうやら彼女の能力は、今までの攻防から見るに”闇を操る程度の能力”らしい。

闇とは非常に単純にありながら、単純であるからこそ厄介だ。

彼女も言った通り、闇とは恐怖の根源であり、形無きもの。しかし、彼女の能力の使用法から考えてみれば、形無き闇に形を「与えることも可能だろう。勿論質量を持たせることも同様に。

闇には今挙げたような物理的作用から、恐怖に至るなどの精神的作用もあるだろう。

前者はどうとでもなるし、後者も俺の能力で無効化出来る。

故に勝率は結構高めなのだが

「普通に強いんだよな、あいつ。永琳と同等とは言わないけど、俺とは同等くらいだし」

襲いかかる闇をどう対処しようものかと思案しながら、俺は闇を捌いていく。

切れれば数が増えるのなら切らなければいい。数千年と磨いてきた技術があれば、その程度は造作もない事柄だ。

やはり一番手っ取り早いのは、彼女自身に直接ダメージを与えることか。

闇は効かないと言つても、それは精神的作用だけであり、物理的作用ならば普通にダメージは受ける。ただ耐えられるということだけであつて、何度も受ければいつかは俺が敗北してしまう。ジリ貧になる前にやはり攻めてしまうのが吉か。

「なら 想像開始」

想像するは剣。

ケルト神話に登場するダー・ナ神族の王、銀の腕ヌアザの所有する剣。

一度鞘から抜き放てば相手を眩惑させ、抜刀状態から振り抜けば、その斬撃を相手は抵抗することさえ出来ず、に両断されると伝えられている。

ダグザの大釜、ブリューナク、リア・ファルと並ぶ四種の神器の一つであり、フィンジアスより来たとされる、”光の剣”の意を持つ魔剣。

「クラウ・ソラス」！

鞘に収められた一本の長剣が俺の手元に形成される。

それを彼女は危険と判断したのか、より一層闇は濃度を増し、俺を屠ろうとする。

舞い踊る深淵の闇を俺は紙一重で避けて行き、勝利に必要な概念を付加させていく。

「光の概念を付加

付加させる概念は神話に基づくもの。

本当ならば前者ではなく後者の伝承に基づく概念を付加したかったのだが、今の俺ではそれを付加させることは不可能だ。

それを再現しようと思えば必中の概念、切断の概念、それから風刃の概念などを付加させなくてはいけない。それだけの許容量は未だ持つことは出来ないでいる。

それにこれは最近になって判明したことだが、本来ならば容量が10の概念と10の概念ならば、許容量は20あれば事足りるのだが、特定の概念の組み合わせだと必要許容量は一倍にも二倍にもなつてくる。

例を挙げれば必中の概念と風刃の概念はそうなつてしまつ。

どうしてこうなるのだろうかと考え、一つの答えに辿り着いた。予測ではあるが、組み合わせがカツチリと噛み合つもの、つまりその一つが合わさることによって、より強大な力を生みだす時にそうなるのではないかと俺は思う。

先ほど例に挙げた組み合わせならば、風刃の概念は不可視の斬撃が飛び、それは必中の概念を持つ為に絶対に敵を切り刻める。

これは遠距離からの絶対的攻撃という一つの極地に辿り着いている。だからこそ、必要になる許容量が多大なものになるのではないだろうか。

燃焼の概念と切断の概念を組み合わせた時はそんな風にはならなかつたし。

そうなると、大抵の神話に登場する武器はそうなつてしまつ。

今俺が形成した光の魔剣“クラウ・ソラス”然り、北欧神話に登場する災厄を齎す杖“レーヴアテイン”然り。

「眩惑の概念の付加」

完全に彼女は俺が持つ長剣の異常性を感じとつたのか、先ほどまで浮かべていた嘲笑を引っ込め、必死の形相でこちらに突撃してくる。

だが

「必中の概念の付加」

遅すぎると。

「輝け、魔剣よ ッ！」

鞘に収められた長剣を一気に振り抜く。

鞘走りを追加された剣速は音速に迫り、日本刀でないにも関わらず居合抜きは成立していた。

刀身に描かれたローン文字が全て表に現れた瞬間、世界は光で包まれた。

それは必中の概念の持つ光。その光を見た所有者以外の者は眩惑に陥ってしまう。

「これで終わりだ」

いつのまにか距離を詰めた俺は、クラウ・ソラスを振りかぶった

15・大妖怪の交わり（後書き）

はい、一応の原作キャラ?が登場です。

名前は出ていませんが、大方の人は予想できるでしょう。まあこの子も公式設定ではないんですけども。

話は唐突に変わりますが、最近の悩みを一つ。

何故か最近寝ても数時間、いえ一時間に一回眼が覚めるんですけど。その後はすぐにまた寝つけるけど、また一時間後に起床。そんな睡眠環境。

これって何かの病気？ それともただの不眠症？ どうなんでしょうね。

16・狂人（前書き）

この作品は原作「東方project」の二次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「な……ツー?」

間違いなく俺は手に持つクラウ・ソラスで彼女を一刀両断した。血飛沫を上げないのは少し疑問に思つたが、それでも確かに彼女の身体は二つに割れた。その瞬間を俺の瞳は確かに確認している。だが、彼女に”死”は訪れない。

「残念。私には物理的な攻撃は効かないわ。それじゃあね”大妖怪”さん」

一つに割れたその身体は闇のように溶け、そしてまた一つの身体へと戻る。

少し俺は見誤っていたのだ。彼女は確かに妖怪であるが、それ以上に”闇”そのモノだったのだ。

形無き闇をいくら斬り飛ばしたところでそれに意味はない。

その驚愕な事実に、俺の身体は刹那の内ではあるが硬直する。そんな隙を窺々逃す彼女ではない。その刹那の隙に自身が操る闇を以て俺を支配しようとした。

俺の身体に纏わりつく闇は俺の心の隙間に侵入しようとする。ネバネバとドロドロと、そんな形容し難い感覚が俺を襲う。それは闇が俺を呑みこもうとする証なのだろう。

だが、そんな行動に”意味はない”。

「う、そ……。私の闇が効いてない……?」

呑み込もうとしていた闇はやがて消えてなくなつていく。
俺自身に何の異常も来たしてはいない。

「残念だつたな。俺にはそういうモノは効かないんだよ

懊きの声を上げる彼女の腕をガシッと摑む。

俺が身に付けている氣流し。それは俺と共に存在し、今までずっと共に過ごした服だ。

年月で言えば数千年、それほどの長い年月を俺と共に過ごした一品。年月を積み重ねた一品とはそれだけで一種の力を宿す。

それに加え、それを所有していたのは多大な力を持つ大妖怪。そんな大妖怪の妖力を数千年もの間受け続け、吸収しているのだ。既にその氣流しはただの服ではなく、防具。それも概念兵装や道具、神具とまで昇華された存在だ。

そんな幻想を持つ氣流しに、俺はありとあらゆる概念を存在してからずつと付加させ続けてきた。

初めは耐熱や耐寒などの生活を快適にさせることから始まり、その後に物理防御などの下位概念の防御系のもの。

千年が経過した頃には鉄壁や遮断や衝撃吸収と言った神話上に出てくる宝具の概念の追加し、今では無効化などの最上位概念までもが付加されている。

無効化の概念は、自分の同等、または下位の特殊能力（精神掌握や眼の前の彼女が扱う闇など）全てを問答無用に無効化するという、反則クラスの概念だ。

故に俺は彼女の闇に纏わりつかれようと、呑みこまれることはなかつた。

「物理的なものが喰らわないんだつたら、”力”を直接ぶち当てる

らそれなりのダメージは通るよな?」

「え、ちょ 」

「遠慮なく、行くぞ?」

既に俺の掌には光り輝く力の奔流が渦巻いている。

収縮に収縮を繰り返し、あまりの高密度の力の塊のせいでその空間だけは軋み歪み始めた。

そんな力の塊に冷や汗を垂れ流す眼の前の美女だが、そんなことは知らない。喧嘩を売つて来たのはあつちだ。ならそれなりの覚悟もあると、勝手に自己完結しておく。

「ま、死にはしないだろ? から安心しておけよ」

「そんなことで安心出来るわけ 」

「聞く耳持たないさ。んじゃ、なッ!」

吐き出された白銀の光線は彼女を容易く呑みこんで行く。
捉えていた腕は既に離し、彼女は白銀の光に呑み込まれこの場所を強制的に退場された。

光が通つた場所は地面が抉れ、最早天変地異の前触れではないかと危ぶまれるほど酷い爪痕を残す。

「……別に俺のせいじゃないよな?」

「やつと見つけたわ……ッ!」

荒い息を吐きながら俺の眼の前に姿を現す一つの影。

それは数日前に死闘を演じた漆黒の羽を持つ美女。金色の髪を無造作に垂れ流し、折角の美貌に鱗が入っている。

「ん？ お前は数日前の……。やつぱり生きてたのか」

「当たり前でしょっ！？ 貴方の御蔭でこっちはよくわからない場所まで飛ばされて、拳げ句の果てには貴方の攻撃で一日一杯は行動出来なかつたし、もう踏んだり蹴つたりよ！」

「それはどう考へても自業自得でしかないだろ？ 喧嘩を売つて来たのはそっちだしな」

俺は嘆息をついて彼女の方に向き直る。

「そう言えれば名前は？ いつまでも代名詞で呼ぶのも面倒なんだが」「何で貴方に私の名前を教えないといけないのかしら？」

「お前は負けただろ？ 敗者なら潔く勝者の言い分を聞いておくものだぞ？」

「ま、負け！？」

「誰がどうみてもそうだろ？が。俺は無傷でお前は一日行動不能のダメージ。ほら、どっちが勝者なんてわかりきつたことだろ？」「

額に青筋が浮かびピクピクと痙攣している。

それでも喚き散らさないのは、それなりのプライドを有しているからだろ？が。

手をプルプルと震わせている姿を見ると、思わず失笑を浮かべてしまいそうになる。だが、流石にそこまでしてしまえば俺という存在がろくなしどとなつてしまふので堪え切る。

わなわなと口を震わせ、言おつか言わまいが悩む心情が手に取るようになかかる。

そして遂に彼女は決心し、言葉を発した。

「…………ルーニア」

「ルーミア、か」

どうしてこの時代にそのような言葉があるのかはわからない。
語源などは元はよくわからないところから来ているので、別段問題ないと言えば問題はない。

だが、少しの疑問が浮かんだだけ。いつものことだ。

「ちなみに俺の名前は神威な。いつまでも貴方つて呼ばれ続けるのも何か癪だし」

「神威……」

何回か彼女 ルーミアは俺の名前を呟く。

本来ならば微笑ましい光景に見えるのだが、ルーミアはまるで怨嗟を込め、俺の呪い殺すかのような憎しみの瞳を輝かせ呟き続ける。正直、物凄く怖い。ただでさえ彼女は”闇”を操るというのに。下手をすれば間接的に呪いを操る事を可能になるかもしれない。呪も元を辿れば、根源となるものは”闇”そのものだからな。

漸く顔を上げたと思えば、今度は親の仇を見つけたような瞳でこちらを睨みつける。

「名前も顔も匂いも妖力の質も存在の質も闇の色も 全部覚えたわ」

「恐い……」

巫山戯ているのではなく、本気で怖い。

”知識”に存在する”ヤンデレ”なるものに迫るほどの狂気がそこには感じられた。

「今日は見逃してあげるけど、次出逢つたら」

狂った笑みを浮かべたルーニア。

背中を這いずり回るような寒気が俺を襲う。

「 次出逢つたらちゃんと殺してあげるから」

そう言つてルーニアの身体はしだいに透けて行く。
どうやら自身の身体を闇と同化させ、そのまま闇に漬けこむつ
もりらしい。

数秒もすればルーニアは完全に闇と同化を終え、この場所から去
つていく。

しだいに漆黒の闇も濃さを薄め、普段通りの景色を俺に見せる。

「……物凄く危険人物に目を付けられた気がするんだが、気のせい
か？」

冷や汗は止まる事を知らず、俺は近い未来を夢想する。
狂気を纏い、狂った笑みを浮かべたルーニアがこちらに迫つた來
る光景

「 本気でヤバいって！ 不幸な未来しか想像出来ないぞー！」

迫り来る未来は俺をどのように導くのだろうか。

出来れば幸せな道、あるいは平穏な道を歩かせてほしいが、まあ
無理だらう。

既に眼を付けられればヤバい存在に眼を付けられてくる。この時
点で幸せから百歩ほど遠のいている気がする。

「これも自業自得に入るのかな……？」

半泣きになりながら、俺は一刻も早くこの場所から離れようと決心する。

いつまでもこんな場所に留まり続ければ、いつアイツがやって来るかわかったものじゃない。

ここまで俺に恐怖心を与えたのは二人と一つ目だ。大いに誇るがいい。あ、やっぱり止めて貰つてもいいですか？

はい、二人目の原作キャラであり、主人公である神威とバトルを繰り広げたのは今宵の妖怪ルーミアでした。

まあこのルーミアは二次設定であるEXルーミアですけど。

EXルーミアを知らない人の為に少し説明を。
原作ルーミアの頭に付いているお札が取れることによつてルーミアが覚醒するという二次設定。

プロポーションはロリからグラマーへ。
髪形がロングまたはベリーロング。

背中に羽が生える（作中では漆黒。他の設定では純白といつものも）。

カリスマが大幅に増量。
巨乳になる（笑）。

大きな十字剣を持つ（作中では漆黒の大剣と表記。多くの場所ではストームブリングガーが採用されているらしいよ）。

能力は色々別れるところだけど、ここでは“闇を操る程度の能力”的ま。使用方法が多彩になり、暗闇を創るだけでなく、闇そのモノを扱い攻撃したり、闇を使い精神的攻撃も可能に。

とまあこんな感じにレベルアップされます。

別に知らなくても作中の微量な設定だけでも大して問題ないかと。
EXルーミアなんぞ殆ど半オリキャラですし。

17・執念深き怨敵（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

恐怖の足音は聞こえなくても、心の奥底でそう思つてしまえば自身を蝕んで行く。

例えば、風呂場での出来事だ。自分は鼻歌を歌いながら悠々と髪の毛を洗净している。だが、ふとした時に自分の後ろに誰かいるのではないかと思つてしまつた。そうするとさあ大変。自分は髪の毛を洗净し、眼を開けられない。しかし自分の後ろのには誰かが居る気がする。

勝手に自身で幻想し、勝手に自身で恐怖を抱き、勝手に自身で闇に墮ちる。

それは本来ならば人間という種が持ち合わせる思考。だが、それはいつしかどのような種にも持ち合わせる思考となりつつあった。草食動物だろうが、肉食動物だろうが、妖怪だろうが関係ない。全ての種の存在が平等に等しく持ち合わせる思考。そのように変化していくのだ。

「絶対近くにいる気がするんだよな……」

俺は少しだけ拳動不審になりながら辺りを忙しなく見渡した。数百年前に出逢つた狂人。狂人というのは些か酷い氣もするが、あの狂つた笑みと殺氣を感じとれば誰でもその呼び名を呼んでしまうだろう。それほど酷い。

漆黒の大剣を片手に、凄絶たる笑みを浮かべ、金色の髪を振りまわして俺に迫り来る彼女は、正直鬼気迫るものがある。

あれから数百年経つた今でもその狂氣は変わらず、一定の周期ごとに遭遇を果たす。

今まで負けたことはないが、敗北すれば間違いなくあいつは俺の命を刈り取るだろう。故に俺はあいつから逃走する。

未だに俺はあいつを殺しきる術を得てはいない。"闇"そのモノを殺すことなど、普通ならば到底出来るものではない。どちらかといえば、俺の場合は不老不死などなら屠りきれるのだが。だがあいつは確かに"生"を持っている。だから不死殺しの概念を付加しようとも無駄なのだ。

そう、あいつ ルーミアの根源は"闇"。

世界には光が満ち、それと同じだけの闇がある。光が濃ければ、それだけ闇も濃くなる。

世界に朝があり夜があるよう^ヒ。世界に正義があり悪があるよう^ヒ。世界に正があり負があるよう^ヒ。

それはどこにでも存在する。

そう 僕の隣にも。

「見^ヒつけたつ！」

「 ッ！ 吃驚するからいきなり真横に出てくるのを止めろって言つてるだろつ！？」

突如、空間から滲み出るよ^ヒに出現するルーミアに、俺は毎度同じセリフを投げかける。

「フフツ、私が貴方の言い分を聞くとでも思つてゐるのかしら？」

「思つてないけど、言わざにはいられないだろ^ヒが……」

「そう。そんな無駄な行動に時間を費やすなんて、本当に貴方は可笑しな人ね」

「お前に可笑しな人なんて言われたくないんだがな……」

軽口を叩き合いながら、響き合ひ衝突音。

それはルーミアが持つ漆黒の大剣と俺の純白の大剣が噛み合つた音だ。

ここ数百年間、俺とルーミアが出逢う度にこのよつた戦闘 い
や、殺し合いを興じている。

殺し合いと言つても、俺には彼女を殺す術は未だ持たないので、俺は一定のダメージを『え彼女を撃退し、彼女は俺を殺すのがこの歪な関係に終止符を打つ唯一の 方法だ。

だが、当たり前の感情として俺は死にたくない。だからいつも彼女に一定のダメージを与え、帰つて貰うようにしている。

舞台で上演される舞いのように、俺たちは剣戟を交わす。
両方の刃が鳴らす音色はそれだけで観客を酔わせるハーモニーを奏で、死闘から滲み出る殺氣は観客を狂わせる。

ギラギラとした狂気を宿すルーミアの視線は逸らしたくなるが、もし逸らしてしまえばそこで俺は朽ち果てることになるだろう。
刹那の隙が命取り。そんな戦闘を俺とルーミアは繰り広げる。

宙に停滞する幾本もの緋色の槍がルーミアを貫こうと飛翔する。
ルーミアには物理的攻撃は全くと言つていよいほど通らないので、緋色の槍には波動の概念のなどを付加し、形成されている妖力で傷つける構成を取つてゐる。他の武器なども同様。

故にルーミアにとつて俺の武器は最大の脅威とまではいかないが、それでもノーガードだと中々の威力という鬱陶しい仕上がりになつたと自負している。

「想像開始

イメージスタート

想像するは槍。

アイルランドの神々トゥアハ・デ・ダナーンの持つエリン四秘宝の一つであり、北方のゴリアスの都でエスラスによって守られていた魔槍。

トゥアハ・デ・ダナーンがフォウォール族と戦ったモイトウラの戦いの折、神々の王ヌアザとエスラスによって全知全能の太陽神ルー・ラヴァーダに手渡された

「チッ！ 想像^{イメージストップ}停止ッ！」

想像（創造）を一度止め、荒れ狂う嵐のよつたルーミアの攻撃を受け流すことに専念する。

永琳が考えた”偶像の理論”は、創造する武具の綿密な設計図を頭の中で想像しなくてはいけないという欠点を持つ。

それを疎かにしてしまえば、下手に実在したであろう武具に引っ張られる形となりこの世にその形を維持出来なくなってしまう。

だからこいつは自分と実力が拮抗した相手だと中々扱うことが困難なのだ。

戦闘をしているというのに戦闘と関係の無い思考が頭の大部分を占める。それはカーレースのゲームをしながらチェスをするようなもの。

だが、俺はその欠点を補うべく思考錯誤し、一時的にではあるがそれを補う策を見つけ出した。

それが”想像停止”^{イメージストップ}。数分の間ではあるが、自身が想像した事柄を頭の片隅に保存する思考方法で、これにより少しずつはあるが、ゆっくりと想像出来るようになつた。

「想像^{イメージリスタート}再開」

穂が5本に分かれしており、5つの切つ先から放たれた光は一度に5人の敵を倒したと言われている。

その能力は”必ず勝利をもたらす”や”投げると稻妻となつて敵を死に至らしめる灼熱の槍”などと言われ、生きていて意思を持つており、自動的に敵に向かつて飛んでいくとも言われる。

それは聖槍でありながら魔槍であるという一面を持つ神具。

「想像完了」
「プリユーナク」

手に現れる空色の長槍。

伝承に基づき、その槍の穂は5本に別れ、切つ先からはパチパチと光が輝く。

この槍に付加されている概念は、伝承通り絶対勝利 という因果を操るものは流石にまだ付加出来ないので、それに近い必中の概念、それから光熱の概念、灼熱の概念などを付加している。

数百年間も戦えば相手の戦術など解り切つたもので、ルーミアも俺が持つ槍の危険性は十一分に理解している。

だが、その槍がどのように危険なのはルーミアには解らない。漠然と、あの槍は危険だという危機感は全身が発しているだろうが、何がどうなつて危険なのかは理解出来ていない。

だからルーミアはその槍に対し、どのように対処すればいいのか解らなかつた。

退くべきか退かないべきか、一瞬の思考の下、ルーミアは退くという判断を下した。

大剣に纏う闇を牽制に、そのまま剣を振るつた反動を使い後方に流れる。

だが、その選択は間違つた。いや、ある意味正しく、ある意味間違つていたと言うべきか。

この槍には必中の概念が付加されている。その時点で退いたところで意味は成さない。この槍を防ぐ方法はただ一つ、防御に専念する」ことのみ。

「あ　まいッ！」

手から投擲された空色の槍は空を裂き、轟音を奏でながら飛翔する。

その速度は既に音速を超え、自身の脚力と妖力で後方へと退避するルーミアに一瞬で追いつき、そのまま喰らいつく。避けようと急激な方向転換の為にサイドステップで避けるが、必中の概念が付加されているブリュー・ナクからは逃げられない。

普通ならあり得ない軌道。一度投擲された槍が真横に90°。折れ曲がるなど誰が想像できようか。

例にも漏れず、ルーミアはそのようなことは予測していなかつたようだ、完璧に槍はルーミアの腹部を捉え、貫き通した。

「ギイ、ガツ！？」

本来ならば物理的攻撃を受け付けないルーミアではあるが、俺が投げつけた槍にはふんだんに妖力を纏わせており、尚且つブリュー・ナクには灼熱と光熱の概念が付加されている。前者は普通の炎、後者は光の熱。“闇”そのモノであるルーミアにとつて前者は勿論、後者は途轍もない痛みが身体を蝕んでいるだろう。

だが、ここまでしてもルーミアに“死”を迎えることは出来ない。

「今回はこれで終幕だな。さつさと家に変えれ、狂人」

「ハア、グ……」

未だ痛みにより声を発せないだらう。
憎々しい表情でこちらを睨みつけてはいるが、肝心の声は全く出
ない。

「では、失礼する。もうそろそろ諦めて欲しいんだがな、こんなス
トーカ&通り魔紛いの行動は……」

いつも通りの終局、いつも通りの別れ。
世界はどんな時でも平常に動いていた。

17・執念深き怨敵（後書き）

この間も言いましたが、この時代の主役は神威とルーミア、それから原作キャラ一人とオリキャラとなります。

まあオリキャラと言つてもテンプレな人ですけども。

テンプレは余り使いたくないので、これからはテンプレとなりそうなシーンは気合で回避、または変更していきます。

ＰＳ・学校の授業を受けたくないでゴザル。別に学校は嫌いじゃないけど。

18・宿敵（とも）（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「ねえ、今度はどこに行くの？」

俺の腕を取る、金色の髪を纏う美女がそう囁く。
俺をそれを嘆息氣味にこう答えた。

「なあ、前々から思つてたんだが、何で俺とお前は一緒に行動しているんだ ルーミア？」

そう、現在進行形で俺の腕を取つてるのは、数万年前まで殺し合いを続けていたルーミア本人だつた。
数万年前までは出逢う度に剣と取り、お互ひの命を無きものにしておつとし合つた間柄の筈だ。

それなのに

何時からだらう。こいつから狂氣が消え去つたのは。
何時からだらう。こいつがあの狂つたような笑みを浮かべなくなつたのは。

何時からだらう。こいつから恋慕のよつた笑みを向けられるようになつたのは。

何時からだらう。そんな間柄に安らぎを感じたのは。

本当に、何時からだらう……

「今更そんな無粋なことを聞くの？ もう少し乙女心つていこうのを理解したらどうかしら？」

小悪魔チックな笑みを浮かべ、挑発的に俺を見つめる。

そんな表情を浮かべられては、俺も反論することは出来ず、苦笑を浮かべる他ない。

いつの時代も女性の方が強いものだ。肉体的にも精神的にも。まあ俺が肉体的に負ける存在は永琳くらいしか居ない訳だが。

しかし、本当に俺は何時からルーミアと共に行動をするようになつたんだろう。

始まりは確か、三万年ほど前だつたか。

幾度なく繰り返された戦争。幾度なく繰り返された会話。幾度なく繰り返された憎悪。

そんな関係に嫌気が差し、どうにかして終焉を齎そうと考えていた頃、どうしてカルーミアから狂気が消えた。

その理由を未だ俺は知らない。いや、本當なら“識つている”的かもしれないが、生憎と俺はルーミアとそんな関係を数万年間も続けてきた。そんな長い時を経てしまえば、記憶だつてそれなりに摩耗していく。

まあそこは置いておいて、それから俺が感じるルーミアの印象はガラッと180°変わった。

以前まで、ルーミアが向ける俺への感情は狂気と殺意、それから憎悪と悪い感情しかなかつたが、ある時からそれが変わり、彼女から向けられる感情はライバルに向けられるようなもので大半が締められていた。

それから俺とルーミアは宿敵^{とも}みたいな関係に移り変わったのだろう。

今でも時たまあるが、前みたいに死闘ではあるが、両者は相手を殺すことが目的ではなく、切磋琢磨、相手より強くなりたいという願望から、を行つてゐる。

「はいはい、俺の負けでいいよ。タクツ……」

「ほり、そんなに拗ねないの。折角のカツコイイ顔が台無しよ?」

「はあ……」

今ではこんなやり取りとしているのだが、数万年前の俺が見れば驚愕することこの上ない。

いつしか手を組むことすら田舎となり、二人の距離は本当に近づいた。

「それで、今度はどこに行くの？ 北？ それとも南の方かしら？」

「そうだな」

今現在いる場所は、大体ではあるが中国地方の辺り。近畿圏には少し届かないことと、四国の島国が見えないことから山陰地方辺りと予測される。

気候区分は夏真っ盛り。別段それが理由という訳ではないが、関東、または東北の辺りに赴くのも一興か。

「近^{ちか}淡^{つあ}海^{うみ}を超^こえて東^{とう}に行^く」

「近^{ちか}淡^{つあ}海^{うみ}？ ああ、あの綺麗で大きな湖のことね」

納得いったとばかり、ルーニアはうんうんと頷く。

「IJの時期だとあの湖で水浴びしたら気持ちよさやつね」

その光景を思い浮かべているのが、ルーニアは楽しそうな笑みを浮かべた。

だが、その楽しそうな表情の片隅に、小さく、本当に小さいが悪戯を思い付いた時の笑みも浮かんでいた。

その笑みを浮かべた時、対象となるのは俺。嫌な予感しかしない。

「なさ早速行きましょう。善は急げというでしょ？」

「何を急くことあるのか……。それに急がば回れといつ言葉を知らないのか？」

「思い立つたが吉日つて言うでしょ？」

「急いで事を仕損じるんだがな……」

こんな言葉遊びをする一人の間には、楽しそうな笑みと確かな絆が存在した。

近淡海ちかつあわうみとは淡海あふみの湖とも呼ばれ、近江国、つまりは滋賀県に存在する日本最大級の湖、琵琶湖のことを指す。

滋賀県の6分の1を占め、魚類や底生動物など50種以上の固有種を含む生物相に富んでいる。

後幾ほどの年月が過ぎ去れば訪れる縄文、弥生文化では交通路としても利用されるようになる筈。

こんな言い方をしているのも、どうこうわけか俺の内に存在している“知識”の御蔭だ。

あれから数日を掛け、漸く俺達は今脳内で話題になつている近淡海ちかつあわうみ、琵琶湖わうみに辿り着いた。

俺としてはルーミアが浮かべた笑みに嫌な予感しかしなかつたので迂回路を採用としたのだが、それをルーミアが却下。仕方なく琵琶湖を経由する形で関東圏に入る形となつた。

眼の前に広がる大きな湖は、“知識”に存在する湖とは全く異な

つており、元々の自然状態でその姿を残している。

まあ現在の年代であればそれは当たり前のことなのだが、やはりそれを自身の目で確かめてくると感じ方は違つてくる。

全くと言つていいほど人の手が入つていないその湖は、まるでサファイアのように碧く輝き、透明感ある水は深い筈の底を綺麗に見通すことが出来るほどだ。

生命の水。そう例えてもなんら可笑しくない程の清涼さ。

「涼しいな……」

夏真っ盛りである筈の気温だが、湖から運ばれる風は冷たさを帶び、暑さというものを忘れさせてくれる。

「ほら、折角こんな所まで来たんだから涼んで行きましょ~？」

そう言つてルミーナは俺の手を取り、湖の畔まで足を進める。周りの木々が自然の城塞となり、まるでこの場所は現世から隠された秘境のよう。木々の御生い茂る果実を取つて齧つてみると、ギツシリと詰つた実と、口から零れ落ちるほどの水分を含んだ甘い汁が迸る。

「う~ん、はあ。気持ちいい場所ね」

伸び伸びと身体を伸ばす彼女は深層の令嬢のよに様になつていた。

「早速水浴びでもしまじょ~か」「は？」

俺が聞き返す前に彼女は自分が纏っている衣服を全て脱ぎ捨てた。産まれたての赤子のような姿をする彼女に、俺はすぐさま眼を反らす。だが、一瞬だけ眼に映り、その光景は頭の中で繰り返し投影される。

白磁のように綺麗な肌。女性の象徴であるたわわに実った双丘。女性でありながら高身長であろうそれは、完全なプロポーション、美の究極とでも言える造形美を醸し出し、普通の男なら刹那の時で籠絡されるだろう。

そんな様子を意地悪く観察していたのか、からかうのよつた声で俺に話しかけてきた。

「あら、どうしたのかしら？ 顔が林檎のように真っ赤よ？」

「……別に何でもない」

「」ここまで直接的なことは今まで体験したことがなかつたのでどう対処してよいかわからぬ。

永琳でさえ、慎みというものはけやんと持つていた。それが夜一緒に寝たりする関係であつても。

「神威も一緒に入らない？」

「抱き付いて耳元で喋るなつ！？ 俺はいいから一人で入つて来いつ！」

「ツマラナイ人ねえ。折角こんな美女が誘つてあげてるのに。一生に一度のチャンスかもしれないのに、それを棒に振るの？」

「……あ。ほら、さつさと水浴びでも何でもしてこい。俺は食べられる果実なんかを集めてくるから」

「……わかつたわよ」

抱き付く腕を離し、ルーニアは漸く俺から身を離す。

そのまま一言一言会話し、ルーミア湖の方へ歩み進めた。少し経つた後にちやぽんといつ音と、バシャバシャという音が聞こえてくる事から、ルーミアが湖で水浴びをし始めたことが判る。

「気儘なものだねえ……」

俺は一刻も経たずして目的の物を集め切った。

食用の果実から暖を取る為の薪等々。自然という者が溢れているこの場所ではすぐに集められた。

というより今思い出したんだが、ルーミアってどうやって身体を乾かすんだ？

「放つておいたらそのうち乾くでしょ？」「

「……眼の前に男がいるってのによくそんな恰好を晒せるな？ 襲われるとか考えたことはないのか？ 一応俺はお前より強いんだが」「

予想通り、ルーミアは自然乾燥という選択肢を選んだようだ。後ろを向いているからわからないが、今のルーミアはまさしく水も滴る良い女、という状態だろう。本来の使い方はこんな意味じゃいや、確かに色気なんかもあるけど、何か違う気がするんだけどな。

「あら、別に私はそうなつても一向に構わないわよ、貴方のことは好きだし」

「そんな軽々しく言葉じゃないと思つんだけどな……」

まあこれも普段通りの光景だ。

俺が何を言おうとルーミアを口で言ひ負かしたことなど数少ない。所謂“言つても無駄”といつことだ。

「……………バカツ」

そんなことを考えていたから、彼女の寂しそうな咳きは耳に届かなかつた。

1-8・宿敵（とも）（後書き）

この間面白くなかったラノベを50冊ほど売りました。

50冊買つ金額を仮に1冊600円と仮定すると、その金額は実に30,000円。

しかし、結局売れた値段は1／10の3,000だけでした。

これつて売値としては高く売れたのか安く売れたのかイマイチわからませんが、それでも損失27,000円は結構デカイ（泣

27,000円もあれば色々出来るのに……

PS・明日からルーミアがどうして神威と共に行動しているかの理由を説明していきます。

19・闇（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

”闇”の妖怪。

それはこの世界に初めて生まれた妖怪、原初種の中の一匹であり、文字通り”闇”そのモノである。

具現化された闇がその妖怪を作り、その妖怪が闇を創り出す。

金色の髪を纏い、背には漆黒の大きな羽。手にはこれまで漆黒の大剣を握り締め、漆黒のドレスを身に纏う。

身体を構成する部分以外は全て漆黒の彩りだが、どうしてかその色は彼女に良く似合う。

それも”闇”の妖怪故にか。

そんな彼女が出逢いを果たした不思議な妖怪の男性。

彼女と同じく漆黒の氣流しを身に纏い、彼女の羽とよく似た漆黒の髪を靡かせる存在。

それは初めて彼女が自分と同格であろうと感じとった獲物。

生まれて此の方、彼女は自分より格下の存在としか出会ったことがなかった。草食動物や肉食動物、それに知能の低い下級妖怪など、知性を持つ存在は本当に数少なく、彼女が出逢った数で言えば数十に満たないだろう。

フライアード

故に、彼女は自尊心というものは他の妖怪より一線を画していた。自分こそ最高。自分こそが最強。そう信じて疑わなかつた。

だからこそ、彼女はその男性の妖怪に無謀にも戦いを挑んだのだ。初めの内、彼女の胸の中に締めていた感情は格下の相手を見下す蔑みと侮り。そもそも、彼女は生まれて此の方、自分より格上の存在と出逢つたことがなかつたのだから。

だが、ゆつくりとだが確実に、まるで真綿で首を絞めるように胸

の内にある一種の感情が蝕み始めた。

まさか、いやそんな筈はない

そう自分に言い聞かせ、彼女は自分が持てる全ての力を振り絞り、彼を屠ろうとした。

だが、その決意すら彼はいとも簡単に振り払う。突如光り輝く彼の掌に言いようの無い悪寒を感じ、更に彼女の攻撃は熾烈を極める。しかし、それすらも彼は受け流し、終に彼女が危険を感じたモノが世界に形成された。

それは鞘に收まりながらも光を発する一つの長剣だった。それは何の事はない適度に装飾されたただの長剣の筈だ。それだと言うのに、どうしてこの身は警鐘を鳴り響かせるのか。それを理解するのもう少し後のこと。

鞘走りからこの世界に姿を現す長剣。その長剣の刃に彼女には理解出来ない文字が描かれ、その文字が全て眼に見えた頃、つまりは刃の部分が全て表に出た瞬間、世界は光に包まれた。

一瞬の事で何が何だか解らなかつた彼女だが、狼狽しているにも拘らず、頭は冷静そのものだつた。彼女はこの世界に存在する“闇”そのモノ。故に彼女が物理的、彼が持つ長剣で殺されることなど微塵もあり得ないことを理解していたからだ。

それは正しい事で、光が止む刹那の前に彼は彼女の身体を真つ二つに両断した。

だが、そんなことでは彼女は“死ない”。

真つ一つに両断されながらも彼女は嘲笑を零し、彼を見下す。そして、そのまま自身が持ち、自身を形成する始原の闇により彼を滅しようとする。

内面から、外面から彼を拷問り、泣き叫び許しを請うその姿を夢

いたぶ

想し、嗜虐の笑みが浮かぶ。自身が持つ闇とはそれほど強力なものだと、彼女は存在してから最初に学んだ事柄だ。

だからこそ、彼女は絶対的な自信を以てその力行使する。

自分は刈り取られる弱者ではなく、刈り取る側の絶対的強者だと
いう想いを胸に。

そしてその想いは 打ち碎かれる。

「残念だったな。俺にはそういうモノは効かないんだよ」

そんな言葉を残し、彼は彼女を腕を握り締める。それは自分の思い人を決して逃がさないように抱擁する強さではなく、ただ敵を倒すが為、敵を打倒するが為に捕らえる力。

大妖怪の一員たる彼女ではあるが、同じく大妖怪である彼とでは単純な腕力は一步届かず、どうにか振り払おうとするが彼の腕は彼女の服を握りしめ離さない。

そして収縮し始める力の渦。それは次第に光の本流へと移り変わり、最終的には彼女が感じたことがないほどの力がその空間に収縮する。過度の収縮によりその空間は軋みを上げるが、それを彼はまるで知った事ではないとばかりに収縮を止めず、拳げ句の果てにはダメ押しとばかりに圧縮した。

そして、とうとうそれは発射される。

あり得ない程の妖力がこれでもかと言つまで収縮し圧縮したモノだ。想像を絶するほどの一撃となることは誰の目にも明らか。それを彼女は至近距離、いや零距離で打ち出された。そんなモノを喰らつて無事で済む存在など、大妖怪ですら無理。下手すれば中級神すら滅することが可能かもしれない。

「 ッ！？」

声にはならない叫び声を上げ、彼女はそのまま光の奔流に呑みこまれた。

「ガツ、グウ……かはつ」

土手つ腹に大きな風穴を開けつつも、彼女は生き永らえていた。血反吐を吐きながら、惨めに地面に伏せようとも彼女は確かに生きていた。

身体は動かない。それもそうだろう。腹の中央に大きな風穴を作つている存在が悠々と動いていれば、それは誰でも眼を疑うような光景だ。いや、悪夢か。

だから彼女は息を小さくし、出来るだけ痛みを取り除き体力の回復、それに並行し身体の蘇生に時間を費やす。

時間はもうすぐ彼女の独壇場である夜。夜になってしまえば回復速度も昼とは桁違いの速さになるので、彼女は夜が待ち遠しかった。妖怪という存在は本能的に闇を好み、“闇”そのモノである彼女ならばその感情はより一層濃いものだろう。

世界に夜が訪れないなんてことは起こらない。世界は常に廻り、朝から夜へ、夜から朝への一種のサイクルが始原から終焉までの間は続していく。

そしてその時は訪れる。

黒の帳が辺りを覆い、日の光が届かなくなる時間帯。青白い月の光が唯一の光となる時間帯。

それこそが夜。闇に近い存在や“闇”そのモノが行動を開始する、

正真正銘の“夜”。

「ふー、ふー、はつ……、はあ」

そんな時間帯になるつものでも、彼女は自身の回復に全力で務めた。

そんな頃に宿る仄かな想い。チロチロと、ダムの罅割れからほんの少しづつ出てくる水のように、その感情は彼女を支配していく。その感情の色も言葉にしてみれば“黒”。彼女の根源である“闇”の象徴となる色彩。これほど彼女に似合つ感情の色も早々ないだろう。

ただ、その感情に彼女は気付かない。

それが表に出た時、彼女はどのような変貌を遂げるのかは誰にもわからない。

だが、それが表に出て変わらうと、それ全てを含めて彼女を構成する一部分。忌避すべきことなど何一つと手存在しない。ただ、その御蔭で誰かが割を食つかもしれないが。

時刻はそろそろ日の出の時刻。

闇夜の時間はそろそろ終わり、朝日が昇る時間帯。

既にその身の風穴は姿を消し、彼女を傷つけた本人と出逢う前の姿に戻っていた。

「…………」

彼女は無言で立ちあがり、眼を閉じ神経を集中させる。探すは一つの存在。

“圧倒的”強者であつた自分に傷を付けた“絶対的”強者の居場所。彼の力の色は既に覚えた。後はこの世界に広がる闇を使いその

色を探すだけ。

再び眼を開けた時、その顔には笑みが浮かんでいた。

狂った笑みが。

そして彼と彼女は再び出会った。

そこで交わされる会話。それすらも彼女の自尊心を傷つける結果となり、終にダムは決壊する。

彼から教えられた彼の名前を怨嗟を込めるように咳き続ける。その時から彼女は完全に狂気の渦に飲み込まれたのだろう。

“闇”そのモノである彼女は、言つてみればその身に既に狂気を孕んでいた。それは表に出てはいなかつたがいつかは出てきた感情だろう。

それを運悪く彼がそのスイッチを押してしまつただけにすぎない。

「名前も顔も匂いも妖力の質も存在の質も闇の色も 全部覚えたわ

彼女は狂気を身に纏い、狂気を以て彼を屠る事に決めた。

「今日は見逃してあげるけど、次出逢つたら ちゃんと殺してあげるから」

そう言い残し、彼女は闇に溶ける。

これが彼と彼女の数万年続く殺し合いの序曲。
だが、序曲ということはいつかは終曲はやつて来るもの。
その長いようで短い物語を、これから綴つていこう。

喜怒哀楽などは関係なく、ただ狂氣が狂氣を以て、狂氣たる所以の御話。

その狂氣の渦を超えた最果ての場所、そこに彼女が持つ大切な感情が取り残されているのだから。

19・闇（後書き）

どうしてか三人称で書いちやつた。別に大事なのはこの後からなので、次から一人称に戻せばいいだけですが。

今日と明日、下手すれば明後日まではルーミアが主人公の御話。内容はどうしてルーミアが神威と共に行動し始めるか。それに焦点を当てて物語は進行します。

ちゃんとこの話を書かなくちゃ、「何でルーミアと神威が一緒にいるの？」てな質問がきそうなので（汗）まあ当然と言えば当然ですけどね。

それにもしても、やっぱり小説は一人称より三人称の方が書きやすい気がする。

気がするだけでそこまで大差ないような気もしますが。

20・零れ落ちる感情（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

20・零れ落ちる感情

刺殺、撲殺、圧殺、毒殺、磔殺、射殺、絞殺、斬殺、焼殺、扼殺、爆殺、惨殺。

ありとあらゆる殺害方法を頭に浮かべ、それをどのように実行すれば彼 神威を殺し切れるだろうかと考える。

私と神威が出逢つたのは今から一万年ほど前、広い草原に彼は存在した。

ただそこに存在するだけで他の存在を圧倒する者。それは私ですら例外ではなく、今まで自身を”圧倒的存在”だと常々思ってきた価値観が一気に崩れ、彼を”絶対的存在”と感じてしまった。その時に私の敗北は決まっていたかも知れない。

ただ、^{プライド}自尊心の高いは私はそんな存在を決して認めることは出来なかつた。だから無謀にも、千に一つ、万に一つの勝機を手繰り寄せるという儂い幻想を求め、無謀にも彼に戦いを挑んだ。

結果は惨敗。彼には傷一つなく、私が受けた傷は多大なもの。確かにその傷も一日経てば元通りにはなつたが、私が受けた心の傷、^{プライド}自尊心だけは粉々に砕け散り、復元されることはなかつた。

だが、その自尊心が粉々に砕けた代わりに、私の中には一つの新たな感情が芽生えた。

それは黒の感情。人間風に言い合すなら、それは”狂氣”と呼ばれる存在。それが私の中の大半を支配した。

それから私はその感情に突き動かされ、またその感情が赴くまま、そしてその感情から溢れだすモノを受け止め、ただ一人の存在を殺す為だけに生き始めた。

世界に存在する闇を用いて神威を探し、見つけ出しても自身を闇

と同化させその場所まで移動し、そして死闘を挑む。だが、私が持つ力をすべて使い切ろうと、神威を殺すには至れなかつた。

彼はどんな時でも私に一步先んじる。体術を使おうが、大剣を使おうが、妖力を使おうが、私の能力である”闇”を使おうが、それらの全てを神威は的確に対処する。

だが、私はそのような結果であるうと何故か満足していた。

ああでもない、こうでもないと、彼を殺す方法を考える時間は楽しかつた。どのようにすれば彼が泣き叫ぶか、どのようにすれば彼の脳髄を引きずりだせるか、彼と会わない日は一日中そんなことをずつと考えていた。

この頃の私は、身体の半は狂氣が支配し、思考の半は彼神威が支配していた。

今考えてみると、私はこの頃から至ではあるが神威に”恋”をしていたのかもしれない。

それを明確に意識出来たのはいつ頃だったであろうか。

確かあれば、彼と殺し合つてから三万の月日が経つた頃

雨が降つてゐる。ざあざあと、バケツをひっくり返したような豪雨。私は一人洞穴の中。ジメジメと湿氣の匂いが立ち込める陰湿な洞穴。

雨は止まない。どうしてか、そんな小さな出来事が寂しいと感じてしまう。しかし、だからといって私にはその寂しさを埋める方法など持ち合わせてはいない。

寂しい。どうしてだろう。こんな感情、彼と出逢つ前までは感じたことはなかつた。この感情は彼と殺し合つて生まれ始めた感情だ。原因は彼。やっぱり彼は私に不幸しか運ばない。まるで不幸を運ぶ

黒猫だ。態々その前に姿を現すのは私だが。

クスクスと、どうしてか面白可笑しくて苦笑を零してしまった。
ああ、彼に会いたい。彼の傍に居たい。彼の温もりを感じたい。
彼をしたい。彼をしたい。

相反する感情の渦は、互いに互いを呑みこもうと均衡する。

「もう……グチャグチャ」

狂気が身体を蝕むせいで、私は彼をしたいと思うのか、それとも私が持つ心の奥底が彼を求め、そして彼をしたいと望んでいるのか。

何が正しく、何が間違っているのか。何が正義で、何が悪なのか。
何が善で、何が悪なのか。既にこの身は理解出来ないのか。それすらも出来ない場所まで私は墮ちてしまつたのか。

どうしてか、その事が無性に悲しくなる。私は誰もが畏れる大妖怪だと言つのに。私は誰もが懼れる闇だと言つのに。

小さな、ほんの小さな小指の爪にすら劣るが、それでも私は零を零した。生まれて今まで零したことなどなかつた零。

弱くなつたのか、強くなつたのか、それすらも理解出来ない。

ただ、漠然と理解出来る感情が、この寂しいという気持ちのみ。

「あ、はは……。やつぱり私は心まで化物なのかしら？」

剥がれ崩れる心の塗装。

ポロポロと涙を零すその姿は、誰からも恐れられる大妖怪の姿とは到底思えない。それは何かに恐れる少女。

決して届くことの無い深淵の闇に身を浸す彼女。それを救いだせるのは彼女と同じ”闇”か、それを上回り、そしてなお彼女を照ら

し出すことのできる”光”か。

彼女の初めての願い事。それは儂く、そして小さな願い事。”闇”そのモノである彼女が願うと言う行動は可笑しなことかもしれないが、それでも彼女は一縷の望みに託す。

そして願いは　彼に……逢いたい。

「　うわっ、滅茶苦茶濡れたな……。この時期に驟雨に襲われるつて結構運が悪い　お前、ルーミアか？」

私が居座っていた洞穴の入り口から一つの存在が入つて来る。漆黒の気流しを身に纏い、同じく漆黒の髪を靡かせる彼。それは私が欲していた存在。

だが、彼を眼にして瞬間にそのような考えは消え去り、彼と対峙した時の、普段通りの振舞いをしてしまう。

「あら、私がどうかしたの？　それにしても酷い恰好ね、無様に夕立にでも　」

そう捲し立てる私であるが、内心の方ではビクビクしていた。

ただでさえ情緒不安定のこの時なのに、その不安定を大いに加速させる存在を眼にしているのだ。普通の存在なら冷静でいられる筈もなく、私も例外ではなかった。

それでも私はそれを表情には出さなかつた。それは私の最後の意地。

だが、その意地も簡単に崩れさる。

「　お前……泣いてるのか？」

「えつ……？」

「……っ」

私は彼に指摘され、初めて自分が涙を流している事に気付いた。田元に手をやると、確かに水気を帯びた柔らかな肌を触れることができ、そしてその事実を頭が理解した途端、涙は急速に溢れ出る。ボロボロと、まるで外の豪雨と同じよつて、元通りを知ることなく溢れ出る。

「ヤダシ、何で、いらっしゃる……」

田元をこぐら拭おうが、その決壊は止まらない。それどころか、拭えば拭つほどその涙は零れ出る。

みつともない。そんな感情が私を支配する。

宿敵である彼の前でこんな痴態を晒していると詫つだけでも屈辱的なのに。それなのに……

「…………」

ドサッといつ音を立てて、彼は私の隣に座り込んだ。肩が触れ合うくらいの距離。そこから彼の温もりが感じられる。『闇』に唯一温もりを与えられる”光”の温かさ。

どうして？ そんな疑問が頭の中を駆け巡る。私と彼の関係は宿敵。それは倒すべき壁。幾度なく繰り返された死闘を忘れた訳ではないだろう。それなのに、どうして？

そんな考えが表情に出たのか、彼は仏頂面で答えた。

「そんな路頭に迷う少女みたいな表情をしてる奴を放つておけるか。^{かお}

一応お前も知り合いと言えば知り合いといつ仲だし」

その時、私の身体を大半していた狂氣は、彼を恋する私の思考が

その制御を完全に奪い取った。

奪い取ったはいいが、その時に墨線も最高潮に達したのか、私は惨めにも彼の肩を借りて惨めに泣き叫んだ。まるで小さい赤ん坊のように、みつともなく。

だが、その慟哭も幾分かすれば收まりを見せる。

「……ねえ」

「何だ？」

未だ彼は私の隣で座り続け、あまつさえ型を貸してくれていた。

「……貴方は私が不意を擊つたり、さつきの涙が嘘だとか思わないの？」

「思わないな」

「……それは何故？」

「これは俺の自論だが

」

そう言つてゆっくりと語つてくれる。

「涙つてのはその存在の本質を現してゐる、と俺は思つてゐる。だから涙を見ればそいつがどんな感情でそれを流してゐるか大体わかるんだよ。涙にも色々種類があるだろ？ 嬉し涙、嘆泣、さつきのお前みたいな慟哭も」

「…………」

「それにさつきみたいな涙を流されたら俺は放つておけないんだよ。…………あいつと全く同じだったから

「…………」

凍つてついていた私の心は、この時に既に解け飛んで、そして彼へ

の思いで埋まつたのだった。

「どうかしたのか？」

隣を行く神威の声に、私はハッと現実世界へと引き戻される。私は何でもないと彼に返し、彼はそれを見て苦笑を零す。青々と茂る木々を抜ければ広大な草原が眼に入る。蒼海を思わせる雲一つない青空が、その草原を明るく照らし、優しい光が恵みを与える。

まるで神威みたい……

そんな本人聞かれたら卒倒しそうな言葉を胸の内でひそかに零し、一人恥ずかしくなる。

「ねえ、神威」

”闇”の隣を歩くのは、真反対である”光”。しかし、寄り添うその一人の姿は確かに輝いていた。

20・零れ落ちる感情（後書き）

一応これでルーミアが神威と共に行動することになるイベントが完了。

何か大事な部分（狂気が恋心になる）ところが抜けてる気がしないでもないけど、そこは気にしない。気にしないつたら気にしない。

PS・風を引いた。下手すればインフルかも知んない。

tk学校でインフルが大流行しております。私のクラスで、先週末は休みが12人。内、半分がインフルというww

しかも風邪気味のクラスメイトがその半分を占めており、間違いなくうつされたorz

発熱、鼻水、くしゃみ、頭痛、咳と病症がオンパレード。出来るだけ毎日投稿しますが、下手すれば途絶えるかも。

次からはまた本編に突入します。

今度こそはテンプレのオリキャラさんを登場させられる筈つ！

2.1・鬼の母（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

急斜面の山岳を、俺とルーミアは登つていいく。

東の方へ向かうと俺はルーミアに告げたが、特別東のどこそこにいくという目的地は設定していなかつた為、適当に放浪していた結果、眼の前の大いなる大自然に巡り合つた。

迂回路を探しても良かつたのだが、この間は近淡海ちかつあわうみにも行つたことだし、今回は山もアリか、そんな気持ちで入山したのだった。

しかしこの山は”ハズレ”だつたかもしれない。

辺りに漂う妖力。それは長い時を経て風化している筈なのに、今も尚その色を濃く残している。害意はないものの、これだけの妖力を発せられる存在は数が限られてくる。

「神威」

「わかつてる」

口数少なく、ルーミアは辺りを警戒し始めた。

間違いない。この山はどんな存在かまでは分からぬが、それでも大妖怪クラスの存在が居座つている。

段々と近づいてくる莫大な威圧感。この山の主、大妖怪がこちらへゆつくりとではあるが近づいてくる。相手はこちらに気づいているか、それとも気儘に散歩でもしているのか。

それ以上に、こちらに敵意があるのかないのか。これが一番大きな問題であり、厄介な問題だ。

俺はルーミアにいくつか注意し、それをルーミアは頷く。

下手に敵対でもしてしまえば激戦は必至。感じる気配は一つ。つまりは一対一の形に無理矢理でも持つていけるが、無理に戦わざし

て済むのなら、それが一番だ。

一步一歩ゆづくりと歩みを進めて行く。

下手に敵意は見せず、さりとて警戒態勢は一向に解かず。下山するには遅すぎる。結局はこの気配の主に会う他ない。

「 誰じゃ？ 」山に無断で侵入してくる輩は

山の頂上、その頂きに君臨する一つの存在。それは正しく”王”という風貌を兼ね備え、それでいて圧倒的な美も抱擁していた。その存在は、額には綺麗な角が一本生えていて、それが日の光に反射し綺麗な朱色に染めている。

地面まで届きそうな紅蓮の髪は、髪の先端、中央、末端をそれぞれ黒のリボンで留め、前髪を紺碧の簪で飾り付ける。

振り向く姿はルーニアにも劣らぬ美貌で、ルーニアと違い、こちらは熟れた色香を漂わせる。

「……鬼？」

「 然様。妾は鬼の母よ。迷い込んだ侵入者達」

「 鬼の母？ またかつー？」

鬼の母。それは鬼神の一種であり、また鬼の頂点に立つ存在。

天狗の頂点である”天魔”すらも届かぬ力の持ち主であり、安産、子育ての神として後世の日本で奉り上げられるほどの神格の持ち主。鬼という妖怪でありながら、人間に信仰される、鬼であり神であるという種族を身に宿す、矛盾を孕んだ存在。

「お前、いやあんたは鬼子母神か？」
「きしもじん

「中々に博識だな、侵入者よ」

「おいおい……、何でこんな一角に神クラスの妖怪が闊歩してんだ

よ……」

自分の不運に嘆き、口からは苦笑の声しか漏れてこない。このままでは非常に危うい。眼の前の存在 **鬼子母神** きしもじんは完全に俺達を敵対者だと認識してしまっている。このままなし崩しに話を続けてしまうと、高確率で先頭に突入するだろう。

鬼という妖怪は元来、大きな筋力を保有する。それは鬼という存在を人間が勝手に幻想し、恐怖したことが原因だろう。

人よりも一回りの一回りも大きい体躯に、大木のように太い両腕。鉄器すら弾き通す頑強な皮膚、終いには圧倒的な反応速度など。到底、普通の人間では太刀打ちできるはずもない。

本来ならばこのような種族は生まれる筈もないが、妖怪が生まれる原因是ただ一つ。

人間が恐怖し、それで形採られる、ただこの一つだけだ。

恐怖の規模が大きければ大きいほど、その妖怪の強さは増して行く。

そして鬼という存在は古来から日本に存在する有名な妖怪だ。

有名な妖怪ということは、つまりそれだけ多くの人間が鬼に恐怖したという証。

それらの事を踏まえて考えれば、眼の前の存在がどれだけ強いかなどすぐに理解出来る事柄だろう。

日本を代表する妖怪の、その妖怪の頂点に立つ存在。

それが**鬼子母神**なのだ。

「覚悟は

」

「ちょっと待つてくれっ！ 俺達はあんたと争う気なんかさらさらないし、この山に入ったのだって侵入する為じゃなくて、偶然迷い

込んだだけなんだつ！」

「それを妾に信用しようと？」

「別に信用してくれなくても構わない。攻撃しないでくれるなら、俺達はすぐに下山するさ。なあ、ルーミア？」

「……背を見せるのは好きじやないけど、それが神威の決めた事なら私は従うわ」

「ほう？」

その言葉に目を細める鬼子母神。

何か引っかかるところでもあつたのだろうか。

「良く見れば、そなたは”闇夜の王”であるまいか。まさかお主ほどの剛の者が誰かに付き従つとは」

「”闇夜の王”？ 何だ、それ。ルーミアの渾名？」

「渾名といつよりも一つ名といつべきじやろつな。主の横にいるのは、数多くの異形の者に畏れられる妖怪じやよ。妾に”鬼子母神”とこう名があるゆつに、な

成程。

でも、それだと俺にも似たようなモノがあつても可笑しくなんじやないのか？ でも俺自身はそれらしいのは聞いたことがないし。別になくて不満だとかじやないけど、ルーミアも持つてゐるから、俺も欲しいなあと思わなくもない。

「……それに何か問題もある？ 私が誰の隣に居ようど、それは私の勝手でしょ？」

不機嫌そうな顔でルーミアは呟く。

それは鬼子母神に二つ名の事を言われたことに対するものか、それとも俺の隣に居るということを指摘されたことに対するものか。

そんな様子を見た鬼子母神はさも面白ことばかりに大笑いし、目尻からは涙を見せる。

流石にそこまで笑われるとルーミアの堪忍袋も限界になつてきただろう。ピキピキと額に青筋を立て、今にも飛びかかるうとしていた。

「止めとけ、ルーミア。今ここでお前が仕掛けたら折角戦わないで済みそうな空気が」破算になる。てか鬼子母神もそこまでにしどけ。幾等なんでも目に余るぞ、その態度は」

確かに眼の前の存在は俺以上の高みに立つ者だらう。

だが、だからといって、俺は親しい者が馬鹿にされて冷静で居られるほど冷たい存在ではない。どちらかといえば、特定の事に関しては沸点が低い。そして、それが今だ。

俺の身体から漏れる微量の殺気に気が着いたのか、鬼子母神は笑うのを止め、素直に謝る。

「これは済まなんだな。詫びと言つては小さなモノだが、妾の名前を受け取つては貰えないだらうか?」

これは意外な申し出だ。

詫び一つで手打ちにしてわざと山から出で行つて思つていたが、思つたより好意的な返しで些か驚いた。

大妖怪という妖怪に共通するところは、自尊心が実力と同等並みに大きいということ。例にも漏れず、鬼子母神もそうだと当たりを付けていたのだが、それは大きく外れたようだ。

「でもいいのか? 俺達は偶然という結果だが、それでもこの山に侵入したことには間違いないんだが」

「構わんよ。妾はお主については全く聞いたことがないが、”闇夜

の王”に関しては幾許か聞き及んでいる。妾には子は沢山いるのだが、生憎と対等な友という存在は存外少なくてな。これを機に増やしておきたいところなのじゃ。独りといつのは寂しいしの

「……別に俺は構わんが、ルーミアはどうだ?」

「だから私は貴方に合わせるわ。貴方がこれと友好関係を結ぶというなら、私も邪魔にならないくらいは愛想を振りまくわよ

「眼の前にその存在がいるのに、よくそれだけストレートな物言いを出来るな」

もう俺も引き攣った笑いしか出てこない。

だが、そんな物言いも鬼子母神は気にしない。それどころか、また先ほどと同じように大笑いする。

多分であるが、彼女は自分にあれだけ畏れを抱かずに接してくる存在がいなかつたのだろう。当たり前だ。鬼と言えば妖怪の中でも上位種に存在し、その頂点に立つ者にどうして馴れ馴れしい関係を築けるだろうか。大半の存在は彼女に畏れを抱き、彼女の怒りに触れない様に平頭低身で事に当たるだろう。

だが、そんな彼女に畏れを抱かずに接するのがルーミア。

それは大層面白いことで、そして嬉しいことだろう。だからこそ、彼女もこのような関係を結ぼうと言つてきたのだ。

「良い良い。妾の名は祥果、かりも 詞梨母 じょうか 祥果。主達の名も教えてくれぬか?」

良い笑顔を浮かべる彼女 祥果とは良い関係が築けそうだ。

「俺の名前は神威。それで二つちが
「ルーミアよ」

俺達が何万年も続ける関係の、原初種達の邂逅だった。

21・鬼の母（後書き）

少し強引過ぎた気もしますが、まあオリキャラ登場です。

名前は訶梨母かりも 祥果しょうか。由来は鬼子母神の別名“訶梨帝母かりていも”からと、鬼子母神が右手に持つ、人肉の味がすると言い伝えられた“吉祥果（きちじょうか、またはザクロ）”から取りました。

まあ鬼子母神は東方一次のオリキャラとしてはテンプレですね。後は天魔なんかもそうですし。

能力の方は作中で表すので、もう少しお待ちください。

容姿としては恋姫の紫苑みたいな感じで想像して貰えればいいかと。文章で説明出来ればいいのですが、如何せん人の容姿を文章で説明するのが苦手で（汗）
容姿描写も練習しなくちゃいけませんね。これはこれから課題とでもしましょうか。

22・不穏な空氣（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

薪たきぎを焼くべ、暖ぬくを取りながら俺達は何故か盃さかずかを持っていた。並々と注うがれた酒は零れんばかりで、盃さかずかが持つ表面張力がなければ既に溢れ零れているだろう。

「で、何で俺達は酒を酌くわみ交わしてんだ?」

呆れた視線を祥果に送るが、祥果はそれを全く意に介さず、何が面白いのかゲラゲラと笑つていた。

もう既に酔つているのかとも思つたが、相手は酒を命の水と豪語する存在の頂点に立つ者。呑んでもおらず、ただ酒が醸しだす酒気だけで酔つたとは考えにくい。

というより、全く考えられない選択肢だ。

「よいではないか。折角の記念じやんじゃ、こつして酌くわみ交わすのも一興一興。……まさか妾の酒が呑めないと申すのではないじゃうつな?」

「タダ酒を呑めるんなら別に異義はないが……」

俺はそういうつもりで聞いた訳じやじゃないんだがな。

零れんばかりの杯を、俺たちは一斉に掲げた。

音頭おんとうを取るのは主催者であり、この日の主である祥果。

「ふむ 然らば、原初の存在が交わりあつた幸運に、乾杯かんぱい!」

「乾杯かんぱい!」

チンツ、と盃を鳴らし合あわ。

表面張力によつて耐えていた水分も、衝撃により少しだけ零れるが俺達の中でそんな些細な事を気にする輩は生憎と存在しなかつた。

注がれた酒を一気に煽る。遙か昔、永琳が酌をしてくれ、俺に初めて恐怖を味あわせた”神殺し”よりかはアルコール度は低いが、それでも常人にすれば馬鹿げた程の強さを持っていた。

俺達三人の周りにはいつのまに用意したかは知らないが、色々なシマリや酒が所狭しと並んでいる。

用意した存在は、祥果の子供達、つまりは鬼達といつことだ。

流石は鬼といふこと。酒に合つシマリや秘蔵の酒など、酒呑みの種族ではない俺とルー・ニアでは到底届きそうにならない高みに到達していた。

俺はそんなことに舌鼓を打ちながら、シマリを食べたり、呑み干せばすぐに両隣の絶世の美女達が酌をしてくれた酒を呑み干して行く。勿論、俺もお返しとばかりに一人の盃にこれでもかという程に酒を注いでいく。

「良い呑みつぶりよの。鬼達鬼でも中々にキツイ酒だといつのこと、元のいつの」
容易く呑み干して行くとは鬼の名が泣いてしまう

「それは万年以下の鬼達だろ？」といつより、祥果以外は万の時も生きられないだろうに。そんな奴らと比べたらそいつらが可哀想だ、俺達の歳は親と子ほど離れているの」

「まあのお。それも仕方ないと言えば仕方ないという話なんじゃが

「……」

「やっぱり子との別れは辛いってか？」

「当たり前じや。あやつ等は私の大切な愛児よ。こへり用意を重ねよつと、この悲しみだけは一向に慣れぬ

陰鬱な表情をしながら、祥果は盃に残る酒を一気に嚥下していく。

俺はそんな表情を見ながらどう声を掛けていいか解らず、仕方なく次の酒を注いでやる。

偽い笑みを浮かべた祥果のその表情は、どこか永琳と重なつて見えた。

どこかその表情に胸がもやもやした感情を生むも、それをつまべ言葉に出来ない。だから俺は無言を貫いた。

「それでいいじゃないの？」

「なに？」

そんな中、ルーニアは普段通りの表情で、普段通りの口調でそつ祥果に声を掛ける。

「別に悲しみに慣れる必要性なんかどこにも存在しない。それは勝手に貴方が自分は強くないといけないって想い込んでるだけ」

「……主に何が解る」

「貴方のことがわからぬなんて当たり前でしょう。自分の事を須らしく理解出来るのは自分しかいなゐのよ？」

強い感情を以てルーニアは祥果を睨みつけた。

どこか雲行きが悪くなつてくる。先ほどまでは歓談な趣きで包まれていたこの空間は、今ではギシリと殺氣や威圧、妖力などにより軋みを上げる。

面を上げた祥果の顔には、小さくはあるが憤怒が彩られていた。

「妾を愚弄する気か、”闇夜の王”よ。いくら主でもこれ以上の暴言を吐くところのなり」

「吐くところならどうするといひつて言ひの？」

「少しばかり痛い目にあつて貰つことになるが……ッ？」

完全に終わった。

俺はそんな感想を胸の内で小さく漏らし、これからどうのようと動

くかを思案する。

下手に仲裁に入つてしまえば、それは俺が一人から強襲される確率がある。しかも、二人とも何故だか激昂状態。会話も余り意味を成さない。

かと言つて見捨てると言つ選択肢は出現しない。それは当たり前だ。

片方は万の時を共に過ごした存在であるし、もう片方も確かに自分で良い関係を築けると思った。そんな存在を簡単に見捨てられるものか。

「（離れて一端様子見。あいつらの行動次第、臨機応変に対応するしかないか……）」

結局は出たとこ勝負になるが、今はその位しか有効そうな案は出でこない。

そんな思考を展開していると、何時の間にか一人は共に立ちあがる。

それと同時に沸き立つ殺氣。どちらも完全に相手を殺そつとまでは思っていないだろうが、それ相応の手傷を負わせる心算なのだろう。

迸る妖力は風を巻き起こし、山の木々や動植物は鳴き声を上げた。

近くに居たであろう他の鬼達も、自分達の母である祥果の怒りに触れ、怖れをなしてその姿を隠す。

ルーミアは深淵の闇から自身の得物である漆黒の大剣を取りだし、祥果は拳を構えた。

二人の妖力は次第に弾幕を形成していく。

ルーミアは自身の能力を使つた漆黒、祥果は自身の妖力の色が、

珍しい純白。宙に浮かぶ弾の数は次第に数を増して行き、今では百を下らない数まで膨張を果たす。

「やれるものならやつてみることね。 騒れる愚者めッ！」

「泣いて詫びてももう知らぬぞ。 “闇夜の王” よッ！」

両者の力は最高点に高まり、終に爆発する。

中央でぶつかり合い、その衝撃により圧倒的な波動を形成し、その波動は四方向に四散した。

ギチギチと、ルーミアと祥果の拳は噛み合い、両者は中央により拮抗する。完全に密着している二人は剣を振り切る事も、拳を振り切る事も困難。故にこの状態は続く。どうにかしてこの状態を崩そう自論むも、それは下手を打てば自身に帰つて来るという諸刃の剣と云ふことを理解していた。

だが、次の瞬間に一人は最初の勝負に出る。賭け金は自分の身。^{チップ} 得ようとするのは相手の隙。

行う動作は全く同じ。互いに密着状態からの蹴り技。その反動を以て相手から距離を取り、一時的に白紙の状態まで巻き戻す。

「さて、これからどうしたもんかな……？」

ただ俺は一人、自身の妖力で作り上げた結界の中でそう独りごちた。

22・不穏な空気（後書き）

どうしてこうなった……？

一応どこかで戦闘シーンを入れる予定でしたが、当初はこんな劣悪な関係の予定じゃなかつた筈なのに。てか、今回は普通の宴会の話にする予定だつたのに、どこで狂つたんだろう？

そのせいできちんと文の質が落ちてる気が……（汗）

それは次回で取り戻すことにしましょう。

この話の御蔭で、次の話の主人公はルーミアと祥果の二人です。主人公である筈の神威君は殆ど出番はないかも。

23・ぶつかる想い、教えたい感情（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

23・ぶつかる想い、教えたいたい感情

振るわれる大剣から漆黒の斬撃が飛翔する。

二度、三度振るわれることで四方八方から襲う闇刃だが、それを眼の前の鬼は何て事はないかのように撃ち落として行く。

本来ならば、あの刃にも”闇”の性質は付随されている。触れれば闇に犯され、肉体、精神共に汚染される筈なのだが、相手に異常は見られず。

確かに私の闇は効かない相手が存在する事には存在する。現に神威には全くと言つていよいほど効かない。

だが、それは余りにも特殊な場合であつて、そう易々と防げるものでもない。

しかし現実は反して、眼前の鬼はそれを成し遂げている。

「厄介な能力ねえ……」

十中八九、それが祥果の能力なのだろう。

しかしその詳細までは解らない。神威のようく汎用性のあるものもあれば、一点にしか使えない極端な能力も存在する。

私の闇や、自然現象である発火や落雷などであればわかりやすいのだが、如何せん能力というモノは得てして理解し難いものが多い。

「妾の能力は”祓いを扱う程度の能力”じゃよ、”闇夜の王”」

しかし、眼前の馬鹿はそれを易々と敵対している私に告げてきた。

「それは余裕の表れなのかしら?」

「いや、妾だけがそなつの能力を知つてているのは対等ではないじゃ

う？ 鬼ばどのような戦いにおいても正々堂々挑むのが筋というのも」

呆れた。

彼女は私に憤怒の情を向けているというのに。それなのに、正々堂々という馬鹿げた言葉を抜かすのか。

……まあいい。

知りたかった情報を得られたのだ、利はあつたとしてもこひらが害はない。

しかし”祓いを扱う程度の能力”か。これは厄介だ。

祓いを操るとはつまり、私の闇すら”祓われてしまつ”。圧倒的不利な状況。これを見越して彼女は私に戦いを挑んできたのか。

いや、それはないか。態々自身の能力を教えるほど愚直な存在だ。仮に私の方が彼女より有利な状況であろうとも、彼女は私に戦いを挑んだらう。

「……面白いじゃない

ここまで真っ向から挑まれたのなら、私もそれに応じなければ粹ではない。

私は”闇夜の王”。闇の妖怪にして原初の一種。最強の一角。

ブワツ、と私を纏う”気配”が変化する。

それを言葉に表すのなら、人は闘氣と呼ぶだらう。殺意でもなく、また憎悪でもない。純粹な闘志。

その気配を祥果も感じたのか、ニヤつと唇を吊り上げる。

そして同じように変わる気配。

「『闇夜の王』、ルーミア 覚悟なさいッ！」

「『鬼子母神』、詞梨母祥果 いたるツー！」

纏う漆黒は鋭利に飛翔し、迎え撃つ拳は純白の膜に覆われ穿つ。拳にぶつかった瞬間に黒は消え去り、白だけがこの世界に残った。

間違いない。彼女の言葉が事実なら彼女は自身の拳に妖力を纏わせ、そしてその妖力に“祓い”を纏わせ迎撃している。つまり、それは私の能力が効かない特殊な例。

「ならッ！」

だが、生憎と自身の能力が効かないから負けなどと甘い事を抜かずつもりなどさらさらない。

大体、自分能力が効かない相手との経験値は溢れんばかりなのだ。

「私が何年神威と一緒にいると思つていいのツー！」

能力が効かない？ それがどうした。それならば自身の技を以て乗り越える。

能力が効かない？ それがどうした。それならば通用する膨大な“闇”を顕現してやる。

能力が効かない？ それがどうした。そんな些細なことは闘争に於いて関係ない。

高速で祥果の胸元まで侵入し、そのまま刺突を繰り出す。心臓目

掛けで放たれる凶刃は当たれば致命傷を免れない。

それを勿論理解している祥果は、その刃を手を添えるだけで受け流す。そして身体が流れたところに密着し

「破アツ！」

腰を捻る事で密着状態でも何ら問題なく拳を放つ。

本来ならば何の時間差も起きることなく、その拳は私の身体に達し、そのまま私を吹き飛ばすだろうがそうには成らなかつた。

刹那の間に私と祥果の間に闇の障壁を立て、それが消え去るまでのほんの短い時間の間に、私は大剣を引き戻し盾代わりにする。吹き飛ばされはするが、戦闘には全く支障は出ない。

「中々やるのぉ」

「これくらいは準備運動でしそう？ 神威とはもっと激しく燃え上がるもの」

「カカカツ！ ならば一寸速くするとしようか」

彼女の姿が霞む。

不意に後方から感じる殺氣。瞬時にしゃがみ、首を刈り取らうとばかりに死神の鎌を回避する。

シユツ、風を切る音を聞き遂げ、私は後方に目も向けずに大剣を振るう。下段からの逆袈裟。何の障害もなければ特に抵抗なく相手を切断する筈だが、半ばで衝突音。

振り向けば、私の大剣と闘ぎ合っていたのは祥果が髪に差してい
た簪。

普通の簪ならば容易く折れ潰れてしまうだろうが、その簪は鱗一
つ入らずに正常な形を保っていた。

大方、神威の気流しと同じような存在なのだろう。元はただの簪

だつたが、時が経つことにより昇華された存在。それは私の漆黒の大剣も同じ。故に対等。

「……良い簪ね」

「当たり前じゃ。美を愛する妾が愛用する簪じゃぞ？ そんじょそちら一山いくらの凡雜な物と一緒にされては困る」

「そういう意味で言つたんじゃないんだけどね」

苦笑が零れ、それを見た祥果は笑う。

それは純粹な笑み。だからこそ、私は祥果を認められない。

「……続きと行きましょうか」

大剣を水平に構え直す。

腰を落とし、半身を引き気味ながら前屈体制へ。それに対抗する祥果は腕をダランと垂らしたまま、これといった構えには移行しない。

俗に言つ無の構えという奴だ。常時自然体で、どのような斬撃にも対処できるという、一つの極地。

「厄介ね……」

隙がない。それはそうだ。あの構えは極地に至つた存在が、隙を晒し隙を無くす構え。そこに隙などが存在すれば可笑しい。

「からから仕掛けようかしら……」

だが、それも少し危険すぎる。

あの構えは攻ではなく守に重きを置いている。ただの守ならば崩す方法もあるのだが、あの構えはカウンターを真骨頂としている。

下手に攻め入れば、それでわたしの負けが確定してしまうかもしれない。

静か動か。

一瞬の思考の末、私は静でありながら動という選択を取る。

私の後方に浮かび上がる数多くの漆黒の弾幕。それが一気に彼女の下に飛翔した。

だが、それすらも彼女の能力である“祓いを扱う程度の能力”に阻まれる結果に終わった。

実力は拮抗。相性は最悪。完全に私が不利の状況へ追い込まれている。

「 疾ッ！」

ならば方法は一つしかない。

ただ我武者羅に 攻めるのみッ！

「霸アツ！」

「破ッ！」

カウンターを主とする構えに、私は恐れを捨て突撃する。攻撃を合わせられるのなら、その攻撃が合わせられる前に次の攻撃を繰り出す。

攻撃を防がれるのなら、その防御を崩す攻撃を繰り出す。

攻撃を避けられるのなら、その攻撃が避けられない程の速さの攻撃を繰り出す。

ただ我武者羅に、真っ向から鬼の母に私は挑んだ。

熾烈を極める剣戟は烈火を生みだす。火花が飛び散るその光景は、

武を嗜むものが見れば憧憬を焦がし、ただの一般人が見ればその高みに圧巻されるだろう。

上段から唐竹、真横に薙ぎ払い、下段から逆袈裟、四方八方から斬撃を繰り出す。

時に剣術に於いては邪道となる足技などの体術も織り交ぜるが、そのどれもが祥果には届かない。

流石は闘争の申し子とまで呼ばれる種族の頂点だ。

接近面では祥果の方が私より一歩上手。かといって能力は効かず。総合的に、客観的に見積もっても祥果の方が強いか。予想では神威と同等。

思わず笑みが零れた。

自分が最強の存在と信じて疑わなかつた昔が懐かしい。昔の私はこんな想いも胸には抱けなかつただろう。

自分を研磨するという本当の意味。

才能を努力を以て伸ばすという本当の意味。

命を掛け、成し遂げたいことを目指すという本当の意味。

それらの全てを私は神威から教えられた。

「ほら、どうしたのツ！？ 動きが鈍くなつて来たんじゃないのツ！？」

「戯けツ！ そなたの方こそ剣筋が粗くなつて来たんじゃないのかつ！？」

「アハツ！ そんな訳ないじやないつ！ 私はもっと踊り続けられるわよつ！ 祥果、貴方はつ！？」

「心配せずとも妾も同じよツ！ ルー＝ニアツー！」

だから彼女に伝えたい。

私の想いを。

祥果が感じる本来の感情は、喪失感ではなく幸福感であるということを。

彼女が忘れてしまった本当の想いを。
大切な存在が残す、本当の想いを。

「行くわよっ、祥果ッ！」

「迎え撃つまでよ、ルーミアッ！」

23・ぶつかる想い、教えたいたい感情（後書き）

予想通り、我らが主人公神威君は一切出てきませんでしたね（汗）ですが、それも今回で終わりです。この話も次で終了で、次にはちゃんと神威君はレギュラー復帰を果たします。

それが終われば少しだけ日常話を挟んで、次の舞台へ移行。最後の主役の原作キャラを登場させる予定です。

ただ次の原作キャラ。私は詳しく知らないんですね。まあ W.i.K.i 等を活用し、半ばオリキャラとなつて登場すると思います（まあこの小説では常套手段ですよね（笑））。

何となる……といいなあ（逃避）

24・決着（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

満身創痍。その言葉がまさに相応しいほど、私の身体の至るところには小さな傷が付けられていた。

致命傷は未だ貰っていないが、それでも体力に問題がある。あれからどれほどの時間、私達は剣戟を交えたのか。両者とも退くという言葉をどこかに置き忘れたかのように、我武者羅に前へ前へと突き進んだ。

振るわれる漆黒の大剣と鋭利な簪が身に掠るつともその気迫は衰えを見せず、ただただ前を見据えた。

身体が空気を求める、肺が活発に活動する。それは祥果も同じだが、少し肩で息をしていた。

終わりは……近い。

「ねえ、祥果」

「なんじゃ、降参か？」

「そんな訳ないじゃない。ただ、一つ聞きたいことがあるの……」

ガチャ、と大剣を肩に担ぐ。一撃必殺を旨とした私独自の構え。ただの振り降ろしを以て相手を両断する、ただそれだけ。大剣が誇る重量と、世界が齎す重力、そして私の筋力による振り降ろしの速度。それら全てが相乗され、最強の攻撃と成す。

流石に分が悪いと思つたのか、彼女は簪を自身の髪に結いつけた。そして新たにこの場に出したのは扇。

「何故貴方は別れを悲しむの？」

「は……？」

その質問を予期していなかつたのか、祥果はぽかんと口を開けた。

「だつてそうでしょう？ 確かに別れは悲しいわ。けど、それ以上に貴方は幸福な筈。大切な存在との別れつて、大切な存在がいたといつことでしょう？」

「……そなた、何が言いたいのじや？」

「それなのに、何故貴方は涙を流す必要があるの？ いえ、貴方は涙を流しても最後には笑わなくちゃならない」

私はそれが出来なかつた存在を知つてゐる。
泣くことも、笑うことも、何一つ出来なかつた存在を知つてゐる。

「貴方を残して逝つた人達は、皆どう思つてるでしょうね。貴方に悲しんでいて欲しいなんて思つてゐるのかしら？」

残して逝くのは本当に辛いことだらう。

私だつて神威を残して逝くことを想像すればぞつとし、身震いが止まらなくなる。

だけど、それでも

「絶対にそは思つていない筈。貴方に笑つていて欲しい、そう思つてゐる筈よ」

貴方という偉大な存在に愛された存在。

だからこそ、そんな存在が隣に居た貴方は笑つてその存在達を見送つてあげなければならぬ。そうでなくてはその存在達が報われない。

だつて、そうじやなければ、その存在達は彼女を苦しめる楔にしかなつていなかつたもの。

それは余りにも可哀想じゃない。

「 そんな」と、わかつてある……。だがツ！

吼えた。

獣の咆哮、嘆きの慟哭、失意の涙。

「だが、それでも……ツ！ 妻は……ツ！」

そんなこと、彼女もとつゝの昔に理解していたのだろう。
だが、頭で理解していようと、感情が納得していなかつた。
認められる筈がなかつた。自分の愛しい我が子がこの世を去る事
実を。

「その感情は美德でもあり、相手に対する侮蔑よ。受け入れなさい、
その感情を。醜くもどす黒い、それでいて光り輝くその感情を。そ
うすれば私が証明してあげるわ。”闇夜の王”たるこの私が、その
黒の感情が光り輝くモノであるといつことを」

「ルーミア……」

「この世に悠久の存在なんていやしないわ。私や神威、それに貴方
だつて生ある存在。いずれは別れを迎えるモノよ。その別れを喜で
迎えるか哀で迎えるかはその存在次第。貴方はどうち？」

「妻は……」

遠くで息を呑む声が聞こえたが、今はそつちに氣を回す余裕はない。
今はただ、この優し過ぎる鬼に教えてあげよう。

「 妻は笑つて送つてやりたい……ツ！」

「 言えるじゃない……。ほんとに強情な母よね、貴方は。ここままで

言つてあげないと言えないと

「……済まなんだの。そなたに嫌な役目を押し付けてしまつて」

「別に気にしないでいいわ。自分と同格の存在が甘つたれたことを抜かしてたから気に障つただけだもの」

清々しい笑みを浮かべた祥果に私は苦笑を浮かべた。

だが、次の瞬間にはその笑みも消え、ただ眼前の敵を蹴散らす為の眼光へと表情も変わる。

「伝えたいことは既に伝えた。後はただ決着を付けるのみ」

「ああ、そうじゃの。不甲斐無いだけの妾じゃつたが、これは別じや」

「

大地を踏みしめる。

眼前の鬼はただ自然体で扇を構えるだけ。

闇を纏わせる。

眼前の鬼はただ微笑むだけ。

「「いざ 参るッ！」」

裂帛の鬪氣を以て、私は大地を踏みきつた。

微かに宙に浮かび、私は弾丸のように飛翔する。迎え撃つよつて彼女は手に持つ扇を振り翳し

「ちと卑怯かも知れんが、妾の本氣を受け取れッ 舞え、淨化の風よッ！」

荒れ狂う烈風は、圧倒的な暴力を持ちながらも神秘的な薫風でもあつた。

柔と剛を兼ね備えたその風は、真正面から私を呑みこもうと進軍する。

その風には間違いなく”祓い”の能力が付随されており、闇はおろか、直撃すれば私もただでは済まないだろう。だが、私が選べる選択肢は経つた一つしかなく、それは

「全力を以て真正面から叩つ斬るッ！」

自分が持てる全ての力。

妖力、能力、体術、剣術、全てをこの一撃に賭ける。迫り来る烈風に合わせ、上段から一撃を繰り出す。

「霸アアアアアアッ！」

闘ぎ合う大剣と烈風。

大剣には私の妖力でコーティングし強度や切れ味を底上げし、闇によりもう一段階それらを引き上げる。

負けられない。私が負けて良い存在は、後にも先にも神威唯一人と決めたのだ。

相手が鬼の母“鬼子母神”きしもじんだろうが、それは免罪符になり得ない。

故に勝つ。

「始原の闇よ ッ！」

「清らなる淨風よ ッ！」

拮抗するモノも、いつかは終わりは等しく存在する。この世界に不滅なモノはないのだから。

押し負け

「流石に直撃は笑えないからな。スマンが手を出させて貰つたぞ」

私が最後に見た光景は、神威の後ろ姿だつた。

まさかルーミアがあの言葉を言い放つとは……

それはいつか、俺が永琳に向けて言つた言葉。

別離に嘆く永琳に、ただ微笑んで欲しくて、笑つていて欲しくて言つた言葉。

「似た者同士つてことなのかねえ……」

そんなことを言つていれば、いつのまにか模擬戦も終盤に突入した。

祥果が持つ扇、簪。それはどれも魔除けに関する物ばかり。自身が有する“祓いを扱う程度の能力”を最大限に活用する為の媒介具なのだろう。

そして交わる二人。

祥果が巻き起こした淨化を含む烈風に、ルーミアは無謀にも突貫する。下手をすれば致命傷になりかねない筈のそれなのに、彼女は恐れを捨て対峙していた。

相性で言えば最悪。この世界で唯一ルーミアを滅せる可能性を持

つのが祥果だ。

自分を唯一殺せる存在。そしてその殺す技を以て自分と対峙しているといふのに、ルーニアの瞳には全くと言つていいほど恐怖の色は写つていない。

「いや、あいつの方が俺より何倍も強いな。大切な存在を何万年間も放つてる俺よりも何倍もな」

だが、傍観者の立場に見守るのもここまでのようなだ。

「いくら何でも相性が悪すぎたな……ッ！」

風と刃の拮抗が崩れる瞬間、俺はその風の前に立ちはだかった。形成するは、事前に想像^{イメージ}していた盾。何度も使い込んでいる想像^{イメージ}なので、形成に掛かる時間は普通のモノより少しだけ早い。

「“アイギス”！」

本来は災厄から身を守るといつ性質を持つのだが、同性質である属性にも効果はあるだろう。

ドサツという音から見るに、どうやらルーニアは体力が尽き気絶したのか。それも仕方がないと言えよう。あれほどの戦闘を長時間、それでいて相性最悪というハンデを負いながらこなしたのだ。倒れるのも無理はない。

「流石に直撃は笑えないからな。スマンが手を出させて貰つたぞ」「構わぬよ。あれを喰らえば“闇夜の王”でもタダでは済まんからの。それ以上に死ぬ可能性だつて無きにしも非ずだつたしの」

さも疲れたと言わんばかりに祥果は息を付き、そのまま地面にドカッと座り込む。

「まさか妖怪から畏怖を得て大妖怪であり、そして愛しき子からの信仰を以て神という種に入り込んでいる妾と同等とは。些か驚いたわ」

「あれでも“闇夜の王”って畏れられてるらしいからな。それに俺との訓練も無駄じやなかつたつてわけだ」

「フフツ、世界は広いの。次は主ともやつ合ひてみたいものじや、

神威よ」

「暇があれば、な」

祥果もウトウトと眼を凋ませる。

「眠いか？」

「……少し、の」

「それじゃ今はゆっくり休め。それで、次に起きたら宴会の続きをやろう。ルーミアも一緒に、三人で」

「……ああ、そうしようか」

そういうて祥果もルーミアと同じように目を閉じ、そして安らかな寝息を奏で始めた。

一人は重なるように、相手の肩に自身の体重を懸ける。その姿はまるで、姿の似ていない姉妹のよう。

「お休み。ルーミア、祥果」

俺はそんな二人に笑みを向け、近くでゆっくりとその姿を見守っていた。

24・決着（後書き）

本当はもう少し祥果の能力について触れるつもりでしたが、あまり触れられなかつた。○

祥果が扱つた風ですが、祓いには風が強く結び付いているという作者の妄想から引っ張り出してきました。ですので、「祓いで風を起こすとか無理じやね？」という言葉を言われても遅いです。一応、魔除けに関して、風を起こす＝憑きものを落とすという考えがあるので、強ち間違いじやなくね？とも思わなかつたり。

相性に関してはルーミアは可哀想なほどに最悪。作中でも述べた通り、唯一“闇”そのモノであるルーミアを殺し得る存在。というより、妖怪のほぼ全てを殺し得る可能性を持つ能力。神威も例外じゃない。まあ神威も祥果からすれば相性最悪かも知らないけど。

25・宴会（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

騒げや騒げ、今夜は宴会。
手には盃さかずき、中には美酒を。

笑えや笑え、笑顔を持つて笑えや笑え。

人間、動物、植物、妖怪。皆で騒げや騒げ。

今夜は宴会。騒げや笑え

「一寸賑やかすぎる気がするんだが……」

「そうかの？ 折角の宴なんじや、盛大にしないと罰が当たるとい

うモノよ」

「そういうもののか？」

「やつこいつものじや」

そこまでキッパリと言われれば俺も納得する他ない。

手渡される盃にはこの間と同じよう、表面張力により溢れ出ない
ところくらいまで注がれている。

もう少し減らしてもいいじゃないか、そんな考えが浮かぶも、そ
んなことを言つてしまえばこの賑やかな宴会に水を差してしまった
けだ。

隣には先の戦いで気絶したルーミアが座っている。

その姿は深窓の令嬢のようで、上品に手渡された盃を呑み干して
いく。

その真反対に座っているのが祥果であり、こりひは鬼という種族
の性分か、それとも祥果自身の氣質かはわからないが、まるで極道
の女頭のように豪快に嚥下していた。

気質は真反対。だが、それに反して一人の仲は良かつた。

やはり先の戦いが功を奏してのか、それともルーミアの想いが祥果に届いた故にか。俺からしてみればその両方だと思うが。

それに仲が良いというのは悪いことではないので、特に問題にも成るまい。

実際、俺を挟んで二人は座っているというのに、互いが互いに酌をしている。まあその間に居る俺も酌されている訳だが。

そう言えば、どうやら俺たちはここに住んでいる鬼、つまりは祥果の子供たちに認められたらしい。

そもそも。自分達の親である祥果と半ば引き分けた存在達と態々敵対する馬鹿も鬼の中には居ないだろうし。

鬼という種族は性質的に筋が一本通つて奴らばかりで、こうして酒を酌み交わすのもなかなかに楽しい。

ツマミを運んで着てくる鬼に手酌をしてやつたり、少し話をしたりなど、俺としてもこの宴会を楽しませて貰っていた。

「そういうや、もう身体の方は大丈夫か？ ルーミアは勿論のことだが、祥果も中々疲れてただろ」

既に問題はなさそうな一人であるが、結構心配症である俺はこう聞いておかなければ心を休めることが出来ない。

まあルーミアの場合、本質が”闇”なので数時間も経てば体力くらいは元に戻る。それに現在は夜なので、妖怪である俺達からしてみれば最高の時間帯というのも考慮される。

腹部に巨大な風穴があこうとも一日で全快するほどの再生力を持つような奴らだからな、一人とも。俺も同じだし。

「特に問題なんてないわよ。致命傷を貰つた訳でもないし、唯の疲

労による氣絶だもの」

「こつちも同じよ。だが久しぶりだつたわ。妾が体力死くるまでや
り合つたというのは」

「久しぶり? といつことは前にもあつたのか?」

つい口ずさんだその言葉に俺は反応する。

鬼の母である祥果と同等の存在が他にもいるのか?

「ん? それはそうじゃろう? 一応妾にも友といつ存在もいるか
らの」

「へえ。貴方と同等つてことは私達とも同じくらいの強さなの?」
「うむ。神威の方は戦つたことがないから詳しいことは言えんが、
妾やルーミアなら同格じやろおな。何と言つてもあ奴は”魔界神”
とまで称されておるくらいじやし」

「”魔界神”? なに、もしかして”魔界”つて奴がこの世界に存
在してゐるのか?」

普通ならば聞こえてくる筈の無いキーワードを俺の耳は拾い上
げた。

といつか何だよ、”魔界”つて。悪魔とか魔族とかでも居るのか?

「まあの。ただ、”魔界”といつ名称だけで大半の者は悪い心象を
抱ぐが別にそんなことはない。ただ、妾達が住んでゐる世界とは位
相が違うだけで、他は何も変わらん場所よ。そこに住まう存在達も
妾達似たような存在じやしの」

「へえ……。それじゃ、そこの神様が祥果の友達なのか?」

「ああ。あ奴とはかれこれ数万年ほどの付き合いになるかの。数千
年に一回は顔を見に行つたり、あつちが来たりとそんな関係を続け
ておるよ」

「まるで俺とルーミアみたいな関係だな。まあ俺達はずつと一緒に

いるけど」

「そうね。あ、盆が空っぽよ、ほら」

「ん、ありがとう。ほら、お返しだ」

「あら、気が効くわね」

トクトクと、手元に置いてあつた酒瓶でルーニアの盆に注いでいく。

流石に表面張力いつぱいまで注ぐのはどうかと思うので、一歩手前でストップ。ついでに自身の空になつた盆にも注ぐ。

流石は鬼の秘酒。この間も言つたが、酒関連に関しては俺達は一步劣る。

「この出逢いに乾杯、といつといひか……」

俺は一人静かに星々が輝く夜空に盆を小さく振り上げた。

ふと空を見上げると、空の色が漆黒色から群青色へと少しずつ変化していた。

それは夜明けの前兆。黒から紺、そして朱、金へと変わり、最後に蒼、水色へと至る。それが世界の彩り。

日が落ちてから始まつたこの宴会も残すと僅か。

次第に今まで騒がしかつた喧騒も止み、今では静かもの。皆が皆夢の国へと旅立つていた。辺りからは多くの寝息が聞こえ、それが静かな朝を飾り付ける。

静々と少なからず会話はあるが、やはり俺、ルーニア、祥果の三人声だけではあまり響かない。

酒を注ぐ音、酒を嚥下する音、息を吐く音、酒瓶が地面に置かれる音、それが今この場を支配する主な音響だ。

「夜明けが近いな……」

ふと零した一言。

横の二人は特にそれを気にとめず、静かに酒を嚥下していた。

そんな様子の一人を尻目に、俺はふと考えが思い浮かんだ。
ここは山頂。山の頂とも呼ばれ、標高は低く見積もつても千メートル以上。辺りにはこの山以外には存在せず、遮蔽物となる物はない。現代なら高層ビルなどもあつたろうが、俺がいる世界では未だ古代文明に等しい。確かに十万年前に未来都市みたいな馬鹿げたものも存在したがあれは頭の片隅に追いやる。

ということは、ここからなら綺麗な朝日が見えるということだ。

最近は綺麗な朝日は拝んだ記憶がない。

何たつて、野宿する時は何時もルーミアが創り上げる闇の衣の中で横になるからな。保温性があつて、羽毛のように柔らかく包んでくれるあれは凄い。外敵の侵入も拒むしな。ただ欠点として、どの時間帯に起きようが目の前が真つ暗という点のみ。その御蔭で、眼を覚ました時は夜なのか朝なのかが判別し難い。まあ自身の体内時計で大体は解るのでそこまで問題視もしなくていいが。

「ちようどいい。久しぶりに朝日を見よう。

今俺達が座つている場所からでも朝日は見よつと思えば見える。だが、見るのならば一番綺麗に見えるところで見たい思うのが普通の筈。勿論、俺も例にも漏れていない。

「あら、どこか行くの？」

「ちよいと朝日でも拝み行こうかなと思つてな。最近は全然見てなかつたし。二人も来るか？」

「勿論。神威の行き先が私の行き先よ」

「ならば妾も行こうかの。こんな寂しいところで一人で残つてチビチビとやるのも面白くないからの」

「んじや早速行くとするか」

二人とも了承したので、早速見晴らしのいい場所へと移動する。元々が山頂だったので、少しだけ移動すればそれなりの場所には到着する。しかし、見るのなら最高の場所で。その信念のもとに行動し、結局は頂の頂というところまで移動した。

勿論、移動に伴つて酒瓶と各自の盃も持つてゐる。朝日を見ながらの迎え酒つてのも乙なものだらう?まあ意味は全然違うがな。

「お、バツチリのタイミングだな」

ちょうど俺達が最も良い場所に辿り着いた瞬間、雲間から日輪が姿を現す。

世界に齎す最大のエネルギーは違和感なくその光を辺りに注ぐ。朱色の太陽が雲間から出てくるその光景はとても幻想的で、その場にいた誰もが言葉を失つていた。

「綺麗だな……」

そんな陳腐な言葉しか出でこない。

これほど自身の語彙の少なさを恨んだこともなかつただろう。それほどこの光景は素晴らしいかった。

紺色の空がその光を受けて明るさを増していき、眩い光が木々を照らし、そして世界に朝が訪れたことを報せる。

それは世界が常に行う簡単な行動。

しかし、その簡単な行動は人の心を簡単に動かしてしまう。雄大なその光景に魅了されるのは人間だけでなく、妖怪も同じだ。

「そうね……」

「ああ。このような綺麗な朝日は初めて見るかも知れんの……」

「それじゃこの朝日を見ながら一杯やるか

前以て持参していた各自の盃に酒を並々と注いでいく。

「新た友に巡り合えた幸運に 乾杯」

「乾杯」

その言葉を合図にして、俺達は盃を交わした。

ヤバイ。

何がヤバイって試験と頭痛のせいで連續投稿が出来なくなりそう。

ここ数日はその一いつの御蔭で小説は全く手付かずで、溜めてたストックもこれで終了。一応頑張つてはいるが、それでも失速しそうな予感がします。

いつそのこと一月に入つたら一週間くらい休もうかな？

その間にストックを溜めたり、文字通り休んだり。後は最近構想出来た他の小説を気晴らしに書いてみたり……

考え出せばやりたいことなんて多すぎるのこれで切りますか。

まあ、下手すると一日一話投稿が切れるかもということだけ知つていてください。

では。

PS・最近IISの小説が増えてきた気がします。流石はアニメ効果と書いたところ。これに乘じて一本書いてみるかな？ でもネギまが途中で埋まつてんだよね……

26・社の巫女（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「”魔界”の場所とな?」

ある晴れた曇下がり、俺はそつ祥果に問いかけた。
かれこれ数十年の間、俺とルーミアは祥果が支配するこの妖怪の
山に居を構え、起きては呑んで起きては呑んでという、健康という
概念を根本的に破壊するような生活を送っている。

だが、それでは流石にまずいと思い始めたのだ。

思い立つたが吉日、俺はルーミアにその事を打ち明け、数日中に
下山しようと言つたのだがここで問題発生。

確かに放浪の旅も悪くない。だが、如何せん俺もルーミアも本州
は勿論のこと、日本大陸を全て周つた。目新しい土地はない、そん
な場所を当てもなく彷徨い歩くのは効率以前の問題である。

ならば大陸の方にでも渡るか? そうも思つたのだが、今のこの時
世の中、大陸で文明を築いているのは未だ無し。世界最古の文明と
まで呼ばれるメソポタミア文明ですら紀元前3500年前頃に築き
上げられたのだ。

各自の文化を持つ民族ならば存在するだろうが、それらとは意思
疎通も出来ないだろう。それでは面白くない。

そこまで考え、俺は一つの結論へと至つた。

「それが”魔界”つてことよ

「ふむ……」

数瞬の思案に祥果は耽るがすぐに顔を上げる。

「……口で説明するのはチト難しいが、それでも良いかの？」

「勿論。俺が無理に頼んでるんだからな」

「わかった。と言つても、その場所付近まではただこの山から下山し、そのまま北へ向かうだけじゃ」

「えらく単純だな」

「まあの。ただそこから問題なのじゃが……。まず”魔界”へと続く道の近くに社がある。それが最大の目印じゃ。社の西側に大きなミズナラの木があるからそれも目印にすれば良いじゃろ」

この時代に言伝だけでその場所で行けるか少しだけ不安だ。

「その社の周りには湖と裏山があるんじゃ、その裏山の最奥、秘奥とまで呼んでも可笑しくない場所に大きな洞穴ある。そこが”魔界”へと続く扉じゃよ」

「えらく抽象的な説明だつたが……、まあ行つてみれば解るか」

「一度辿り着けば、の。扉の方も大丈夫じゃろ。本来ならば封を施しておかなければならぬ”道”じゃが、どうせあ奴のことじや、面倒臭がつて放つておるじやろ」

「……そんな適当な存在が”魔界”的神様で大丈夫なのかしら」

「力だけは一級品を飛び越えておるからの」

何とも不安が残る言葉を皮切りにその話題は終わりを告げる。そして

周りを見渡してみればどこかしこも木、木、木。

あれから俺達は祥果の言葉通りに下山を果たし北を目指した。別れを本来は惜しむべきだったろうが、永遠の別離でもないし、

また会おうと思えばいつでも会えるとのことで特に涙を流すようなイベントはなかつた。ただ、別れの前日夜、無駄に祥果に絡まれた。ただそれだけだ。

そんな出来事もあつたが、俺達は無事にここまで辿り着けた。

祥果が言つことには、そろそろ日印となる社を見つけてもいい頃合い。だが、それしきものは一切見当たらない。

ただ眼に入るのは、先ほども述べた通り木々だけ。変わらない景色に俺もルーミアも少しうきだりする。

「ん？」

そう思つていたが、不意に田の前が木々が開ける。そして眼に入つたのは石造りの階段。

上を見上げると、そこには小さくだが確かに社が存在した。

「本当にあつたな……。まあ祥果が俺達に嘘をつくとは思つてなかつたけど」

「にしても結構長い階段ね……」

「……飛ぶか？」

「……それは風情がないでしょ。やっぱ階段は自身の足で上がるべきじゃない？」

「……だな」

一人で領き合い、一斉に足を進める。

一步一歩足を進めるが、やはり先は長い。だが、目的地まで後僅かなのだ。諦める理由はない。

幾分かすれば、漸く頂上が見えてくる。

綺麗な空気が肺を満たし、透き通る青の空が優しく照らす。手で

光を遮つて仰げば、雲一つない快晴。

「 おろ? 珍しいね、こんな辺境に足を踏み入れる存在が居る
なんて「
「つ……、人間……?」

それは少女だった。いや、年齢だけで言つてしまえば、俺からしてみればほとんどの存在が赤ん坊のようなのでこの表現は可笑しいかもしれない。

だが、容姿だけを取つてみれば眼の前の存在はそれに近い。大人と子供の境目に立つ、そんな表現が良く似合う年齢だ。

俺の深い闇のような漆黒ではなく、黒曜石を溶かしたような煌く黒髪を肩より少し長い位で靡かせ、人懐っこい笑みを浮かべている。その黒曜石は赤いリボンでコーティングされており、中々の美しさに目を引くが、それ以上に彼女の”奇抜”な衣装に疑問を抱く人が多数だろう。

真つ白な白衣びやくえに身を包み、朱色をした紺袴ひはかまを履くその姿は、まさしく現代で言う”巫女装束”という奴だ。

それはいい。別にそこに俺は疑問を抱かない。現代であつても巫女装束というものは存在したのだから。

だけどもだ。ある一点を除く全ての部分が巫女装束ということで、余計にその一点が異彩を放つていた。

「 何で脇が開いてんだよ……?」

明らかに常識を疑う服装を身に纏う少女。しかし、少女の方は至つて平然としており、まるで俺の方が可笑しいような錯覚に陥ってしまう。

俺が可笑しいのか? や、俺の考えが一般的な見解に違いない筈。あつちが可笑しい。そう、あつちが可笑しいのだ。

無理矢理自身を納得させる。

それから一度息を吐き自身の失態に舌打ち。空に氣を取られ辺りを警戒する事を怠つていた。いや、心の奥底では眼の前の少女が言った通り、このような辺境な場所にやつて来る酔狂な存在はいないだろうと高をくくつていた俺が悪い。

それはルーミニアも同じようで珍しく呆気にとられた表情であちらを見ていた。

しかし可笑しい。

いくら俺達一人が他の存在に氣を取られていたとしても、”ただ”の人間なら接近に気づけたはず。だが、実際は二人ともここまで至近距离に、そして声を掛けられるまでその存在を感知で出来なかつた。

まるで”ヒト”という種を超越したかのような存在。言つてしまえば永琳に近い感覚がこの少女からは漂つ。

「お前は……何者だ？」

「私？ 私は靈花^{れいか}って言つんだっ！ お兄さんとお姉さんは？」

あつけらかんと、まるで俺達一人を友達感覚で眼の前の少女靈花は話しかけてくる。

靈花の身に宿る靈力は常人では到底持ち得ない程、いや、一般的な中の上程の妖怪の妖力と同等。それだけの靈力を持つているのならば、俺達が妖怪だということも既に看破している筈。それなのにどうして少女はここまで警戒なしに振舞える？

「べつにいゝ？ ただお兄さん達から敵意が感じられないから、かな？」

「……読心術？」

「違うよ。ただの勘だよ、勘
「馬鹿げた勘だな……」

最早苦笑しか出てこない。

「まあどうだつていいか。こっちも敵対する気はないし、そっちも
ないだろ?」

「そりやねえ? 流石の私でも一人相手して生き残れる自信ないも
ん。あつても敵対する気はないけどね~」

「ということは俺達が妖怪だつてことも理解してるよな?」

「勿論。結構巧く隠してるけど、私つて鼻が効くし、それ以上に勘
が冴え渡るから大体の妖怪は見破れるよ」

「貴方、それでよく私達の前に立てるわね。私達つて大抵の妖怪か
ら恐怖される存在なんだけど……」

漸く現実世界に戻つて来たルーミアは靈花に呆れた視線を寄越し
た。

にはは、と笑う靈花からは危機感がまるで感じられない。

「敵意がなかつたらどんな存在でも怖くないものだよ?」

「……変わつてゐるわね、貴方」

「そう? 私を知つてる人は皆そつと言つんだけど、そんなに変わつ
てるかな?」

「俺が断言してやるよ。靈花は変わり者つて。というより、その服
装から既に変わつてると思つんだが。それつて巫女装束だよな?」

「うん、そうだよ? 似合つてる?」

見せびらかすように自身の姿を俺に見せる。

その光景は容姿に似合わず幼い子供を幻視させる。しかし、本人
は大人と子供の中間点に立ち、大人では決して出せない、しかし子

供でも出ない。中間点に立つ者だけが出せるその年齢特有の色香があった。

彼女が見せる魅力はルーミアでも祥果でも、永琳でさえ出せないものだ。

「ああ、似合つてゐよ。巫女装束を着てるつてことは、靈花は上の社の巫女なのか？」

「うんつ」

「ふうん……。どんな神様を祀つてゐんだ？」この辺りじや有名な神様はいなかつた筈なんだが……

「えへへ、それは秘密だよう」

「ひ、秘密つて……」

謎が謎を呼ぶとばかりに靈花に対する謎が深まつていく。

「そういえば一人の名前は？ すつかり聞くの忘れちゃつてたつ」

「あへ、俺は神威。それでこつちが」

「ルーミアよ。よろしくね、靈花」

「こつちこそよろしくつ！ それでだけど、何で二人はこんな場所に？ 自分で言うのもなんだけど、こんな辺鄙な場所に来る人つて私以外知らないよ？」

コテンと頭を倒すその仕草に少しだけときめく。

俺の周りには美女の集まりで、美“少女”という若い、いや幼い存在はいなかつたから、こういった仕草一つ取つてみても新鮮だ。

「少し用事でな」

「用事？ こんな場所に？」

「その顔は説明しなくちや動かないって顔だな……？」

「えへへ、正解）。お兄さんも中々やるねつ」

「はあ……」

渋々、出来れば話したくはなかつたが、俺の中のナニカが話さなければ梃子でも動かないと警告してので、仕方なくではあるが説明する。

「……靈花は知らないかもしぬないが、この世界には“魔界”に繋がる道があるらしい。俺達はその“魔界”的神様に用があるんだよ

「魔界」？ ん~、裏山の洞窟の所？」

「知つてゐるのか？」

「流石に中まで入つた事はないけどね。場所は知つてゐるよ」

「へえ、ちょうどいいじゃない。ねえ、靈花。私達をそこまで連れて行つてくれないかしら？」

「いいよ~」

「軽いな……」

そんなこんなで、俺達三人はその“魔界”へと通じる洞穴へと向かい始めた。

あつれえ～？ オリキャラは登場させる気が全くの無かったのに、いつのまにか登場してるぞ？ ｗ

まあ別にいいや。主役が一人増えたところで無問題だよ、多分（汗

まあ氣を取り直してオリキャラの紹介をば。

名前は作中通り靈花。れいが強さは今のところの情報だと大妖怪に少し届かないってところです。

まあ名前とか神社とか魔界への扉とか、靈花がどんなキャラかは読者様はすぐに気がつくことでしょう。

どうせ作中で語るでしょうし、簡単な紹介はここまで。

しかし、どうしてこうなった？

いつのまにか構想上に登場した靈花。私もどうして出したのかイマイチわかりません。ただ、今まで登場したキャラの大半がお姉さんキャラ、または母性を感じさせるキャラで、靈花みたいな子供っぽいキャラはいなかつたからちょうどいいかなと。

あれ？ でも最後の原作キャラも子供っぽいキャラじゃなかつたつけ……？

……よし、気にしないでおこう（逃避

あ、あれはそう、口（ゝ）ｙ

27・魔界（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

長く続く階段を全て上り終え、その頂上に居を構えている社を超えて、その後ろに聳え立つ山々に足を踏み入れる。

案内は全て靈花任せだが、当の本人である靈花は自分の家の庭のように入スイスイと進んで行く。獸道……とギリギリ称せるか否かと微妙な瀬戸際の道を、靈花は苦もなく進んで行つた。

俺もルーミアもそれに倣い歩いていく。登山は勿論のこと、山の中を歩き回るのも大分と慣れたものだ。昔は四苦八苦しながらゆっくりと歩いていたような道も、今では問題にならない。

だが、それも俺やルーミアに多大な時間が会つたからというだけであり、先ほども言つたが最初から歩けたわけではない。

視線を少しだけ横にずらし靈花を見やる。

外見通りの年齢ならば、靈花は二十にも満たない年齢だろう。しかも靈花は男ではなく女。

そんな少女がここまで山の中を歩けるものなのだろうか。

”天才”

そんな言葉が頭に過ぎる。

人では本来持ち得ることが出来ない筈の靈力を身に宿し、俺やルーミアでさえ感知する事の出来なかつた隠密性。果てには読心術すら成し遂げる”勘”。どれをとってもヒトという種から逸脱し過ぎている。

もしこれが俺達同じ妖怪だつたならば、靈花は俺やルーミア、祥果よりも強かつたかもしれない。

しかし、それはたられば　E-Fの話であり、現実ではそうでない。

「ねえねえ、”魔界”つてどんなところなの？ やっぱり辺り血みどろで血が滴る包丁を持った化け物がそこらじゅうを闊歩しているのかなっ！？」

「そんな怖い光景をそもそも楽しそうに語るなよ……。俺の友達が言うのはこの世界と何ら変わらないらしいぞ？」

「そなの？」

「そうなの」

流石のルーニアでも苦笑してると、

俺なんか引き攣った笑いしか出ないし。

そういひしている間に祥果が言ひていたであらう湖を通り過ぎ、光が入り込まない樹海へと到達する。

ざわざわと、木々の爽やかなざわめきなど全く感じられず、薄気味悪い悪音の合奏を聞いている気がして堪らない。

気持ち悪さを感じつゝも、俺は表情には？にも出さない。何故なら、これはただの気持ちの問題だからだ。

「あつ、あれだよ。あそこが多分目的地」

靈花が指差すその先に、確かに洞穴は存在した。
予想よりも小さな、されど漂う力の残滓は強大。間違いない、あそこが”魔界”へと続く”道”。

「ありがとな、靈花。お前の御蔭で特に迷わずここまで来れた」「ん~ん、別に気にしなくてもいいよ。」「

「ま、案内もここまで終了だ。さて、ルーニア。準備は良いか？」

「ええ、勿論」

「いっちはんOK~」

「…………」

「ルーミア”。準備は良いか?」

「え、ええ……」

「どんと来いっ!」

可笑しいな。全く関係がないであろう存在の声まで聞こえてくるぞ?

ギギギ、とまるでブリキの玩具が動くような速度で俺は振り返った。そこには困ったような顔をするルーミアと、戦前の武士のよう意氣高揚とした靈花の一人。

「なあ、靈花。もしかしてもしかするが、お前”魔界”まで付いてくる気か?」

俺は外れて欲しいと必死で祈りながら問いかけた。

「当たり前でしょっ? 折角面白そうな雰囲気なんだから行かなきや損だよっ!」

「はあ……、ルーミア、どうする?」

「私はどっちでもいいわよ。別に思惑があるなら、私達はそれすら呑みこむ力で抑えつければいいだけだし。幸い、靈花自身は敵対する気はないんだから」

じつになつてしまつては梃子でも動かないことが予測される靈化に、ルーミアは普通に付いてくることを了承していた。

幾許か思考の海に埋没する。

確かに俺達が“魔界”に行く理由も、大雑把に言つてしまえば旅行に近い。戦闘は予測されるが、それも限りなく低い確率だ。祥果の友である俺たちなら歓迎はされど追い払われることもない筈。

それに、もし戦闘になつてしまつても俺とルーミアが居れば大抵

の敵は片が付く。祥果が自身が同等言った“魔界神”相手でも、俺とルーミア一人がかりで掛かれれば間違いなく勝利を収められるだろう。

さらに靈花自身、俺達が守らなくても問題ない程度の実力は持ち合わせている筈だ。

「まあ別にいいかねえ。久しぶりにここまで邪氣の無い人間も見たしな」

「やつたつ！」

「とか言いつつ、俺が拒否しても無理やり付いてくるタマだらう、靈花の場合」

「えへへ……、出逢つて一日も経つてないのに良く私の性格を理解してるね？ もしかしてこれは恋の予感ツ！？」

「……ルーミア、バス」

「神威は渡さないわよ？」

「何か違えよつ！」

洞穴の中は案の定光はなく、ただ漆黒の闇が奥まで続いていた。

一歩一歩歩くだけで足音が反響するところを見るに、遮蔽物になりそうなものではなく、また長く続いているようだ。

一応の安全の為、外で松明代わりになりそうな太めの枝を拾い、概念を使ってそれに火を灯している。

別れ道も何本か見当たるが、妖力の残滓を感じられる俺達にとつては正解の道を探すことは容易い。ただ、残滓が濃い場所が辺りなんか外れなのかによつてその答えは変わってしまうのが難点。しかし、祥果も言つていたが、その友達は何千年かに一回じちらにやって来ているという血から考えれば、やはり残滓が濃い場所が正解な

のだろう。

「コツン、と全員の足が止まる。

「これが“魔界”へと繋がる扉か……？」

眼前に佇む大きな門。

鈍色の縁で整えられ、あまり凝つた装飾はされていない。鈍重そ
うな外見とは裏腹に、そこに込められた力は多大なモノ。
間違いない。これが“道”だ。

「開く　か」

ゆつくりとその扉に力を入れてみる。

最初はやや動かなかつたが、力を少し込めれば鈍重そうな扉は音
を立てゆつくりと開き始めた。

「ゴ、ゴ、ゴ」と扉の下が地面を擦りながら漸く開き終える。

「…………洞窟？」

「こっちもあっちも入り口は洞穴ってこと？」

「あ、でもあっちが“魔界”っぽいよ？　何か空気の質みたいな
が違う気がする」

「…………ルーミアの答えが正解だろうし、何より靈花の勘が告げてる
んだ。正真正銘、この先が“魔界”」

ゴクッと三人とも息を呑み、そしてその一歩を踏み出す。
扉を潜り抜けるも特に変わった様子は見られない。気圧、気温、
重力等に変化があるのならすぐに感じられるが特に変わった気配は
ない。祥果が言った通り、“魔界”も世界を構成する条件は全て同
じのようだ。

少しだけ警戒しながら、俺達三人は“魔界”の洞穴を抜けていく。先ほどまでは特に注意をしていなかつた足音も、こちらでは出来るだけ立てないよう歩く。

「 出口だ……」

光が見える。

ずっと感じられなかつた世界の息吹が出口から吹き込んでくるのが感じられた。

だが、それと同時に元の世界で感じられなかつたモノも感じられる。いや、確かにソレを感じる機会は幾度かはあつたが、これほどまで濃いモノはあまり巡り合つていない。

「瘴氣……、それも富士の樹海クラスのかよ。どこが『妾達が住んでいる世界とは位相が違うだけで、他は何も変わらん場所よ』だ。思いつきり違うじゃねえかよ……」

「祥果にとつてはあまり関係ないことだつたら省いたんでしょうね。それに私達にも特に問題ならないし」

「……別に俺もとやかくは言わないが。つと、靈花は大丈夫か？人間にとつては瘴氣は毒なんだが」

「うん？ 別に問題ないよ？」

「……本当にお前は人間か？」

苦笑を零しつつ、どうやら問題ないみたいなので、俺達は足を踏み出した。

元の世界とは別の位相、“魔界”へと。

やつと明日でテスト終了。

これでもう少しゆっくり小説を執筆出来るようになるかな？ まだ体調が芳しくないのが心残りですが。

それにもやつとこさ「魔界」へ突入しました。

大体これで放浪の時代は折り返し地点かな？ 来月半ばには漸く縄文時代あたりに突入できる筈。 ただ、毎日更新出来たらの話ですが。 ですが少しずつ創作意欲が低下して来たのも事実。 息抜きで他の小説を執筆して意欲を取り戻すかねえ。

28・魔界神（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

洞窟を抜けると、そこは一面緑の世界だった。つまりは森。
元の世界から変わり映えしない景色にどこか気持ちが消沈していく。

時間軸もじつやうに同じなのか、鬱蒼と覆い茂る木々の隙間からつすらと木漏れ日が降り注いでいる。

取り合えず、さっさとこの陰湿とした森を出ることを決意する。いつまでもこんな場所に居たらこいつちが先に滅入ってしまう。これもただの気の持ちようなのだが。

ルーミアには目線で合図を送る。それを見た靈花は首を傾げて俺達二人を見比べるが、今日出会った間柄で眼で会話するといつのは些か無理があるだろう。

ルーミアは妖怪なので特に防護は必要なく、俺が靈花に外界の衝撃など諸々を遮断する膜を形成してやる。

それが済めば後は簡単。俺が靈花の手を取り、そして

「きやつ！？」
「舌、噛むなよ？」

手を取った瞬間、俺は地を這うように飛翔する。
田まぐるしく変わっていく景色に眼をやる暇など以外、ただただこの森を抜ける最短ルートを突つ切る。

「速い速い～！ 憐いねつ、流石は大妖怪っ！
「喜んで貰えて何より。ルーミア、進路は？」
「さうね……」

辺りを覆う影にルーミアは介入し、この場所の地理を把握していく。

影も”闇”の一部。云わば闇の眷族のようなモノ。それをルーミアが操れない筈がない。

車をナビゲートするカーナビのように、ルーミアは俺に的確な指示を与えてくれた。

「前方十三秒後、十時の方向に。引き続き三十七秒後、三時の方向」「了解。靈花は振り落とされないようにはけやんと手、握つておけよ？」

「まつかせてつ！」「もうすぐ」

その言葉が聞こえ、最後のルーミアの指示が聞こえた直後、俺達は光の下に突入した。

「これが……魔界……」

眼前に広がる大草原は、この世界に躍動する生命そのものを現しているかのように雄大であり、燐々と照らす太陽はその命を育む。祥果の言う通り、この世界は元の世界と殆ど変りない。生あるモノが必死に生き抜こうとする、そんな息吹が感じられた。

さて、ここまで来れば後はゆっくりと散策をし始めればいい。

「でも”魔界神”ねえ……。そんな大物がどこにいるのやう」「”神”って付くくらいだから……」

そう言って靈花はそれを見上げた。

確かに神と聞けば天界を想像することは難しくない。

だが、それだと確認する手立てが少なすぎる。まだ地上ならばルーミアに頼み、時間さえかけすればルーミアの”闇”が大物を感じ出来る確率がある。それがもしハズレだったとしても、魔界の大物ならば”魔界神”の居場所くらいは知っている筈だ。

やはり一番確率が高い方法はルーミアに探して貰つてとこりか。というより、これより有効的な搜索方が思いつかない。

俺の能力もこういう時はあまり役に立たないのが欠点だ。

「ねえねえ。私の名前、呼んだ？」

「…………はるルーミアに頼むべき つて？」

「…………は？」

いつのまにか俺の気流しの袖を掴む幼女が一人。

靈花より幼さを見せる幼女は、俺の気流しの袖をひっぱりながらそう問い合わせてくる。

ルーミアと靈花は睡然とした表情で固まり、この時間の中で行動しているのは俺と子の幼女のみ。

「一寸待てよ？ さつきこの幼女は何て言つた？」

『私の名前、呼んだ』……だと？

「落ち着け、俺。素数を数える。孤独な数字は俺に勇気を与えてくれる」

1、4、6、8、9、10、12、14、15、16、18
つて、これ全部素数じゃねえしつ！?
待て、本気で落ち着けよ、俺。

混乱は戦場で破滅を招くだけだ。冷静になつて『えられた情報を吟味し、己が必要なものだけをピックアップしろ。

というか、こんな思考を展開してゐる時点ですでに冷静でない気がしないでもないが。

心中で溜息を零し、ようやく自信が落ち付くのを感じられた。

さて、情報を整理しようか。眼の前の幼女は俺に向かつて自身の名前を呼んだかと問い合わせてきた。つまり、それは俺がどのタイミングかは解らないが、それでも幼女の名前らしきモノを呼んだのであろう。それを踏まえ、俺はこの魔界に来て人の名前を呼んだか記憶を掘り返す。

ルーミア及び靈花の名前は省くとして、それ以外に名前らしきモノはただ一つしか零していない。

ギギギと俺は首を動かし、もう一度だけ幼女に眼をやる。ふにやつとした笑みを向ける彼女は、俺が想像していたモノとは大きく異なるものだ。だが、彼女が内包する力は外見とは裏腹に大きい。いや、大きいなんて陳腐な言葉では言い表せない。力の量だけを見れば俺すらを上回つてゐる。

間違いない。コイツが　この幼女が“魔界神”だ。

「……間違つてたら謝るが、あんたが“魔界神”か？」

「そうだよ？　ちなみに名前は神綺しんきね。気軽に呼んでよ」

「……そうか。俺の名前は神威。それであつちで固まつてゐる金髪の方がルーミアで黒髪の方が靈花だ」

「そうなの。それでだけど　」

先ほどまでのふにやけた笑みは消え去り、今では確固たる意志を瞳に光らせ俺を見つめる。

これが“魔界神”としての顔か……。表情には出していないが、

神綺が放つ膨大な圧力に内心冷や汗なのだ。

その圧力に反応したのか、ようやく固まっていた二人は起動する。が、まともに動けるのは俺くらいであり、ルーミアは辛うじて如何にか動けると言つたところ、靈花に至つては行動は不能。

神綺が放つ圧力の正体は“神力”だ。俺達妖怪が一生の内でほとんど扱い統べることは出来ないであろう、五種の力のうち、最も強力な力。それを神綺は発している。

ここで問題になつて來るのが、ルーミアも靈花も神力を直接向けられた事がないというところだ。初めて向けられる力のせいで身体は竦み、自身の意識を奪われる結果となつていて。

ルーミアが辛うじて動けるのも、俺と共に切磋琢磨していた大妖怪であると同時に、妖怪でもあり神でもあつた祥果の力の一端を受けていたからであろう。もしそれらの下地がなければ、ルーミアも今頃靈花と同じようになつていたに違いない。これは俺にも言えることで、過去に神力を受けていなかつたら膝を屈していたかもしない。

一応、未だに神綺はこちらに“敵意”は見せていない。

やつていることは単なる脅し。自身の力を相手に見せつけ、逆らうことすら愚かであると、相手の深層意識に刻みつける行為をしているだけ。

逃れる方法は一つだけ。その圧力を 跳ね除けること。

「貴方達は“世界”からこの“魔界”にやつて來たわね？ あの道を知つていて、尚且つその道を通れるのはそれなりの力を持った存在だけ」

「…………」

「貴方達はこの“魔界”へ一体何しにやつて來たのかしら？ 返答次第では

「

圧倒的な圧力は絶対的な支配を持つて俺達を襲う。先ほどよりも込められた圧力に、既に靈花の顔色は悪く、ルーミアも肩を震わせていた。

「 滅ぼさせて貰うわ」

「 つ……」

圧力に加え、それを超える殺意の奔流が辺りに渦巻く。

ただ気迫を発するだけで周りに乱氣流が起こり、世界自体が悲鳴を上げていた。

もう声すら発せない靈花はただ震える少女でしか無く、ルーミアも氣丈に神綺を睨みつけるが、膝を地面に付き身体を震わせている。

俺は一人と神綺の間の遮蔽物になるように体をずらし、神綺を見据えた。

確かに神綺は強い。力の絶対量だけを見れば俺を超え、総合戦闘力ですらも超えられているかもしない。だが、それでも俺は瞳を逸らさなかった。自身の能力ならば傷を付けられるという自信も確かに存在した。たが、それ以上に俺はこれを超える力の持ち主を知っていたから。だからこそ、俺は立ち向かえる。

大体、どうして思考がここまで喧嘩腰なのだ。元々、俺はこの神綺と仲良くなりに来たのではないのか？

息を吸え。息を吐け。頭を冷やし、冷静に。前を見据える。俺は誰だ？ 俺は俺だ。

目的を違えるな。目的を忘れるな。俺はこの世界で何を成し遂げようと思つたんだ？ ただ、俺は

「 俺は、俺達はあんたに会いに来たんだ」

「 へつ……？」

“魔界”を荒らす気も、あんたと争う気も俺達にはこれっぽちもない。ただ、俺達は祥果の友達であるあんたに会いに来たんだ

「しょ、祥果の……？ なら貴方達は侵入者じやないの？」

「ああ。ただ、俺達は祥果程の大妖怪に友とまで呼ばれる存在が気になつて、それで祥果に教えて貰つたんだ。そして」

告げた。

「俺達はあんたと友達になりにきたんだ……」

はい、最後のこの時代の主役、旧作キャラである神綺さんの登場ですっ！

最初はもっとポヨポヨした感じで書いていたのですが、いつのまにかカリスマ（小）を発する御人になって（汗）まあ、一応種族は神ですから、この位のカリスマはあってもいいですかね？ これがカリスマというのかは微妙ですが。

ここに注意が必要なのが、確かに神綺の種族は神ですが、どちらかというとそれは“悪”。人間が信仰するような神聖な神ではなく、悪魔の王みたいな感じの神様という点に注意が必要です。

今はまだ問題ありませんが、物語が進めばそれが重要になって来るところもある筈ですから。

ここに少し裏話ですが、四人（神威、ルーミア、祥果、神綺）の力関係は、

純粹な力の総量（つまりは能力ありのガチンコ勝負）

神綺 < 祥果 神威 ルーミア

総合戦闘力（つまりは能力ありのガチンコ勝負）

神威 神綺 祥果 ルーミア

となります。

こうなるのも神威の能力が反則臭いのが原因なんですけどね。神殺しの概念なんか付加すれば神綺も一撃ですし、祥果にしても鬼殺し、または神殺しで一撃。ただ、ルーミアだけは良い方法があまりない。反して、ルーミアは祥果が苦手という関係ですし、神威も攻撃、防

御共に優秀ですが、防御面に関しては絶対ではないのが弱点らしい弱点。無効化により特殊攻撃はほぼ防ぎきるけど、物理的な攻撃は普通に通りますし。それでも高いバランスで仕上がってるのもまた事実。

まあ別に誰が一番強かうとそこまで問題にはならないんですけどね、この四人の場合。

PS・今回で30話に達成。ここで現在の小説の状況を。

P V 数	270 , 000	ユニーク数	25 , 0
お気に入り数	409	評価人数	23人
p t		評価ポイント	228
感想	23件	総合評価	1 , 046 p t

東方小説を一ヶ月続けてこれは多いのか少ないのか……
まあこんな稚拙な文ですが、これからも精進していくのでよろしく
お願ひします。

29・魔界探索、開始（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「はえ……？」

先ほどまでの圧力は霧散し、今では年齢通りの雰囲気を纏つていた。

ポカーンと口を大きく開き、まるで俺の言つた言葉を理解出来ないという表情は、より彼女を幼く見せる。

霧散した圧力の御陰で、漸く一人も行動を見せた。だが、当の一人は未だ圧力の無くなつた神綺を警戒したまま動かない。

膠着状態。その言葉が良く似合つ。

俺は神綺が行動するのを待ち、神綺は茫然としたまま動かない。先ほども言つた通り、残りの二人は警戒しているだけ。

「」

「」

漸くその膠着状態も崩れ去る。

何かの言葉を発しようとした神綺。そして

「ゴメンなさいっ！」

「んあ？」

「どういふことだ？」

「いや、あの。てっきり貴方達が侵入者と誤解しちゃつて……」「えーっと、でも一応俺達はそっちからしてみれば侵入者同然なん

だが？」

「つう、私の馬鹿馬鹿つ！ 何でちゃんと聞かないかな。だから皆から『神崎様つてカリスマ（笑）だよね』って言われるのよ！」

.....

既に俺の言葉は彼女の耳に届いていない様だつた。

どうしようかと思い一人に眼をやると、先ほどまでの張りつめていた空気はどこかに霧散し、今では呆れと苦笑が織り混ざった表情がそこにはあった。

俺も似たような表情を神経に向けながら、溜息を付きながら話しかける。

「別にお前は悪くないから落ちつけよ……」

「だ、だつてえ！ 貴方達は祥果ちゃんのお友達でしょう？ なら怖がらせちゃ祥果ちゃんに怒られちゃうじゃないつ！ 怒った祥果ちゃんは怖いのよ～」

もし祥果が怒ってたとしても俺達が庇ってやるからな？」

そう言つて二人にも眼を向ける。

ルーニアは渋々といつたところで、靈花は既に持ち前の明るさを取り戻し、ニコニコ顔で頷いた。

「本当に……？」

「勿論。」の場合、無断で“魔界”に侵入した俺達の方が悪いだろうからな。大体、正体不明の侵入者に対する態度はさつきの神綺ので正しいさ。実際、祥果の時もそうだったし」

といつよつ、同じ轍踏む俺は馬鹿なのか?
よくよく考えてみればこのよつた結果になるのは当然の帰結の筈だ。

チツ、最近は平和ボケし過ぎか？ ビニカで一回元に戻さなくてはいけないな。

「そつか……。うんっ！ とこうじとで、はいっ！」

「何だ、これ？」

「握手だよ。知らないの？」

そう言つて手を差し出しながら首を傾げる神綺。

「いや、握手は知ってるが、何故？」

「仲直りの印と、親愛の印？」

「そこで語尾にハテナマークを付けられるといつちが困るんだが、まあいい。はいよ」

そう言つて俺は同じように手を差し出す。

ゆつくりと握られる神綺の掌は小さく、だがそれでいて力強く俺の手を握った。柔らかくモチモチとした肌は何とも云い難い気持ちよさで、これがクッショーンなら一生離さないと断言しても良いほどだった。

だが時は有限。惜しみながら俺は神綺の掌を離す。

俺の次はルーミアに手を差し出す。一瞬だけ躊躇するルーミアだつたが、相手に既に敵意がないことを理解していたので、こちらも手を差し出し握手をした。最後は靈花。こっちについては語らずとも予想は出来るだろう。まるで姉妹のように和やかに握手をしていた。

「それじゃ、行こうかっ！」

「……主語が抜けて、何処に行くのか全く分からんんだが？」

「あつ、ゴメンゴメン。場所は私の家だよ。ちゃんと三人を歓迎しなくちや、魔界神の名折れだから」

「それじゃ、行こうかっ！」

「やつこいつといひはキッチリしてゐのね……」

「まあね~」

そう言い、神綺は宙に手を翳す。

すると空中に幾何学模様が浮かび始めた。

「……魔法?」

「へえ。神威君は博識だねえ。あつちの“世界”じゃこいつのは

あまり知られていないと思つてたけど

「いや、俺も实物で見たのは初めてだ」

「ふうん。ま、いいや。それじゃ私の家にいじ招たあ~いつ!」

魔術が組み終えたのか、複雑怪奇に描かれた術式が光り輝く。

一瞬空間が泣き声を上げたかと思えば、次の瞬間に空間が歪む。グニヤグニヤとなつた空間は裂け、その裂け目からは違う空間の景色が見えた。

転移ではない。空間と空間を繋ぐ術。それは俺が習得したい術の一つ。一瞬、神綺にその術を尋ねようとしたが、止める。これだけは自身の力の身でどうにかしたい。

それがあいつを悲しませる結果にならうとも、これだけは意地でも一人で。幼い子供の癪癩のようだが、それでもなければ俺は堂々とあいつの前に姿を現す自信がないから。

「お兄さん、どうかした?」

「ん? 何でもないけど、どうかしたのか?」

「べつにい~。お兄さんが何もないのならいいけど。ただちょっと気になつただけ」

「気になつた?」

「うん。どこか寂しそうで、悲しそうな顔をしてたから」

「……何でもないから気にするな」

クシャツと靈花の頭を撫でる。それで靈花は先ほどの事を忘れたのか、うにゃーと猫のよつた鳴き声を上げながら眼を細めた。

何と言つか、本当に靈花の勘は反則クラスだ。最早それは能力といつても差し支えない程のもので、的確に俺の心情を理解している。それを勘の一言で済ますのもどうかと思うが、靈花自身が勘と言つてしているのでそれ以外に言によつがない。

ルーミアが少し心配そうな表情でこちらを見ていたが、俺は笑つて誤魔化しておく。

ルーミアもルーミアで俺の事を内心を言い当てるから悔れない。

「さ、遅れないうちに付いていくか」

俺は裂けた空間に足を踏み入れた

少しだけ生じた悲しみは胸の内に秘めて。

空間が繋がれた先に出ると、そこは先ほどまでの森とは違い、整備された石造建築物。

元の世界とは違ひ文明が進んでいるのか、眼下に広がる光景は村というより町という印象を受ける。その頂点に建てられたこの家は間違ひなく神綺の家だろう。

確かに文明は進んでいるが、依然俺が永琳と共に住んでいた都市に比べればまだまだ稚拙。というより、あれが以上過ぎただけかもしれない。

だが、そんな文明を体験していないルーミアと靈花にとつてはこ

の世界は興味に付きないだろつ。

今でも引っ越し無しに神綺に質問をしていた。普段はクールを装つてゐるルーミアでさえ、だ。

そんな光景に笑みを浮かべつつも、俺はこの世界について少しだけ思考を巡らせていた。

どうしてここまで文明の差が出るのだろつか。

まあ十中八九、魔法の存在の差だろう。どれだけ非力な存在でも、魔法という規格外の力を扱えるだけ労働力は変わる。

例えば、人間十が居て漸く耕すことのできる畠の面積も、魔法を扱える存在一人いれば事足りると言つた風に。

だが、よくそのような文明を支配出来るな。
力があるということは、即ちそれだけ反乱が起きた時に対処し難いといふのに。

これだけの文明を收めているであらう神綺には本当に驚かされし、尊敬の念を抱く。あの馬鹿共も見習つてほしい。馬鹿共は永琳に頼り過ぎなのだ。その御蔭で永琳が割を食つし。

「神威君、どうかしたの？」

「いや、よくこれだけの文明を收められているなと思つてな」「そりやそうよ。だつてここにいる子達は皆私の子供だもの」「は……？」

「あれ、祥果ちゃんから聞いてない？　この“魔界”という“世界”も、この世界に住まつ“存在”も、全て私が創り上げたのよ？」「成る程な……」

それならば納得出来る。

誰も自身の母親に反乱を企てようとも思はないだろし、それ以上に“世界”を構築できるほどの化物に誰が挑むというのだ。

俺でさえもできれば敵対したくない。

「ということは、それが神綺の能力なのか？」

「ええ。私の能力は“創造を操る程度の能力”。これでも一応種族は神だしね」

「……何て言うか、俺の周りは規格外の集まりか？」

始原の闇に鬼子母神、こつちに来ては魔界神と。唯一まともに見える靈花も超越した部分がある。

永琳も永琳で だしな。

「貴方も大概人の事を言えないけどね」

「……それもそうだな」

何だかんだいって、俺も普通じゃ到底ないし。
あれだ、あれ。

「類は友を呼ぶ、という奴だな 」

29・魔界探索、開始（後書き）

一月に入つたんで宣言通りに一週間くらい執筆停止しようと思いま
したが、止めました。

あれですね。どんな内容でも感想をくれたら嬉しいということです。
ここ数日感想が来てなかつたら、まあ間違いなく休暇に入つていた
気がします（爆

自分でも現金奴だな、と思いますが人間なんてこんなものと思います。
褒められれば嬉しいですし、貶められれば悲しいものです。

まあ戯言は置いておいて、今後の予定を少し。

一月は特に用事はない……はず。なのでやる気が無くなるなどの事
がなければ安定して執筆出来るかな。時間が余つたら他の小説も執
筆しているのでそのうち投稿するかも？

30・魔界の風景（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

神綺に案内されるまま、俺達は後を付いていく。

石造建築物は“知識”内にある女神アテナを祀るパルテノン神殿を、人間が住まえるように改造したような造りだ。

パルテノン神殿に近いのは外観だけで、内装は全くと言つていいほど異なつていたが。

石造建築というものは基本的に熱が籠り難い。従つて寒いというのが一つの欠点である。

反面、コストパフォーマンスがいいだとか、防御面にも優れるなど美点も存在する。

しかし、この場所はそれに反して温かさが感じられた。だが、如何せんその温かさは人工的な印象を受ける。太陽が齎す温もりではなく、無理矢理に温かさを生みだしているような、そんな感覚だ。多分、それも魔法の御蔭なのだろう。

便利といえば便利。だが、どこかで何かを消失している気もする。

とまあ、こんなことを脳内でグダグタと垂れているのだが、正直どうでもいい気がしてきた。

使えるモノを全力で使って何が悪い？ それが誰かを害するのならまだしも、誰も害しないのならいいじゃないか。確かに自然の温かみが失われるかもしれないが、文明が進化するということは大方そういうものを切り離すということと同義なのだから。

「お茶入れてくるね」。椅子には適当に座つておいてよ

そう言い残し、既にこの場に神綺はおらず。残つた三人のうち、一人は物珍しい調度品に眼を奪われ、俺はそれを尻目に窓いでいた。

土器……というには風情がなく、壺……というのは少しだけ不器用な出来栄え。

文明の進行度で言えば、今は縄文、弥生文化と行ったところか。ここから見る分には稲作は行われていなかつたが、こんな町の中心でするモノでもない。これが村ならば分からなかつたのだが。中世と表すには些か早く、古代と表すには些か遅すぎる。ちょうどその境目くらい。

ふと、そこまで考えて自分達が住んでいた場所はどうなのだろうかと考えてみる。

未だ文化という生活様式に至っていない世界だが、あとどれくらいで日本初期の文化である縄文文化が始まるのだろうか。

俺がこの世界に存在してから既に五万年以上は経つ筈だが、未だにそれは起こっていない。

いつになれば文化は起こるのか。いつになれば人類は進化するのか。そして、人類が進化すれば俺達妖怪はどうなってしまうのか。

今はまだ大丈夫だ。しかし、“知識”と同等ほどの文化を持つてしまえば妖怪という存在は虚無の彼方に葬り去られてしまう。その時に俺達は果たして生き残っているのか。

先ほども言ったことだが、進化とは云わば切り捨て。何かを捨て、新たに何かを身に付ける。そして、ここで切り捨てられるのが妖怪などという“非科学”であり、身に付けるものが“科学”なのだ。

俺の内心としては苦心なものが、数が多い人間にとつては喜ばしいことだらう。

より豊かに、より安全に。そんなモノを目指す人間ならではの生活。それがその技術力を生んだのだ。

妖怪はそんな物を必要としない。妖怪はただ恐怖さえあれば生きていける。そして身に潜む本能というモノを満足させてやれば。だが、人間はそうはいかない。そう作られているのだ。

「また難しい」と考えて……、どうかしたの？ 何か不安になる事でもあった？」

「別に何もなさい。……本当にこれは悪い癖だ。無駄な事を神経質に、しかも深く考えてしまつ。……永琳の奴にも言われたつていつのに」

「もう少し神威も楽に生きたらいいの。ちよつじわじよこの靈花くらい」

「うにゅ？ 何か言つた、お姉さん？」

「何でもないわ」

そうこう言つていのちに神綺がお盆にカップを四つとお茶受けを乗せて戻つて来た。

「お待たせ〜」

言ひながら、各自が座る席の前にカップを置いていく。その手際離れたものであり、お茶受けであるクッキーも美味しそうだ。

湯気が立ち上るカップを手にして口に含む。柔らかい甘みを感じつつも、それでいてコクがあるそのお茶は、ミルクティーに近いか。他の人々も同じに様に笑みを零し、お茶受けであるクッキーに舌鼓を打つていた。

「招待したのは良いけど、どう御持て成しすればいいのかわからなかつたから、とりあえずティータイムに移行〜」

「おじおい……」

結局、そのままお喋りタイムとなつた。

話題はこの魔界について。質問をルーミニアと靈花の二人がして、その質問に答える形で神綺が話す。偶に俺も疑問になつた事を口に

出し、その回答を神綺から貰つて満足していた。

それは夜まで続き、夕食も馳走になる。お茶やクッキーからもわかつていたことだが、神綺の料理スキルはかなり高い。どれ位かと言えば、俺が届かないクラス。もつと言えば永琳と同クラスというところ。姿姿とはアンバランスな技術には驚きながらも、その料理の腕には感嘆するばかりだった。

夕食も終わり、既に夜も深くなつた頃。

各自に当てられた部屋でゆっくりとしていた。三人共に一室貸してもまだあまりがあるこの家は本当に広い。

「ゴロンとベッドに横になるが睡魔は一向にやつて来なかつた。他の三人の所に行こうにも、既に先ほど就寝の為に別れたばかり。目を瞑ろうが睡魔がやつて来ないのは世界が変わつた故か、それともその事柄に身体が興奮している為か。

しううがないので俺はベッドから立ち上がり、自身の部屋の扉に手を掛ける。

そのまま部屋から抜けだし、静かな家を闊歩していく。

目指す場所は外。冷たい風に当たつて体を落ち着かせよつと思いつ早に、そして足音を殺して歩いていく。

「あら？ 神威君、どうかしたの？」

その場所には既に先客がいた。

明りがなく、ただ月夜の光に照らされているこの世界を構築した神。創造神でありながら女神であり、そして全ての母である神綺がその場には居た。

手にはグラスと血のよつに紅く、それで透き通つた宝石が注がれている。

「少し寝付けなくてな。神綺の方は一人で月見酒か?」「いつのも日課だけね。寝る前に一杯飲むとぐっすり眠れるの。

神威君もいる?」

「じゃあ貰おうかな」

そう言つと神綺は虚空に手を伸ばす。

次の瞬間に現れるグラス。物質^{アボート}転送魔法か? いや、魔力らしき力の残滓は感じられなかつた。

とすると

「それが“創造を操る程度の能力”か……」

俺が今までこの世界に存在し一番強大な能力。ルーミアが持つ“闇を操る程度の能力”よりも格上である、正真正銘の化物の能力だ。能力の詳細は、彼女の口ぶりからすれば殆どなんでも想像出来る筈だ。生命の有無など関係ない。有機物だろうが無機物だろうが、体積面からすれば水滴ほどの大きさであろうが星々の大きさであろうがお構いなし。

俺のような“贋作”ではなく、まさしく神が扱う力。

「まあね。神威君は何か能力持つてないの?」

「俺か? 俺は一応“概念を付加させる程度の能力”つてのを持つてるぞ」

手渡されたグラスを口に運び、宝石を口に含む。

「ふうん。下手したら私も負けるくらいだね。まあその位の強者じゃないと祥果ちゃんも認めないか……」

「そんなもんか?」

「そんなものよ」

静々とワインを嚥下する音だけが響く。

眼下に広がる光景。月明かりに照らされ、少しだけ見えるその光景に俺は素直に賛辞を贈る。

綺麗で、それでいて必死に生き足搔く存在の意地といつモノをそこから感じられた。

「これは祥果ちゃんにも聞いたことだけ……」

「そう前置きし、神綺は俺に聞いたかけた。

「“魔界”は貴方の眼から見てどう思った?」

「そうだな」

心のまま、何の塗装もない俺の偽り無き本心。

「良い」といひだと思つ。生ある存在が必死で生き抜く、生命の躍動が感じられる

「ふふつ。祥果ちゃんと同じことを言つたのね」

「そうなのか?」

「ええ。でも 良かつた。私が創つた世界をちゃんと好きで居てくれる人が祥果ちゃんの他にもいて」

「……多分ルーミアも靈花も同じようなことを思つてゐるや。何たつて」

神綺が創り上げて、そして磨き上げた大事な場所なんだから。

「……ありがとうございます、神威君」
「どういたしまして」

必死になつて何かをやつ遂げるといつのは、それがビのよつた事柄でさえ輝くモノだ。

どれだけ泥臭かろうと、それは数ある宝石より何倍も輝く。だからこそ、どのような存在も努力して、自身を研磨し宝石よりも価値あるモノに変えるのだ。

それが、俺がこの世界に生まれて学んだことの一つだった。

そろそろネタが尽きてきた。。。早く魔界フェイズを終了させて次の場面へと移らなければ。魔界編が終わつたら祥果の話を一つ入れて、その後に靈花の御話。それでラストに持つていて次の時代つていうのが今のところの構成です。

神綺様活躍少ないね（汗）

自分でも少し吃驚です。でもどう扱おうか中々に迷うキャラだ。あんまり魔界を留守にするのも問題だから元の世界には行かせ辛いし、でも神威の行動範囲は基本的に元の世界だし。

ならもつと魔界編やれよとのことなんですが、如何せん魔界じゅやるネタなんてないんですよねえ。微妙な文明という点も扱いにくい。しかも基本的に第三者もいるので喰われる率が高い。

ふむ、本当に困つたものです。

3.1・巡り廻る世界（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

明けの明星の昇る頃、俺は自身に割り当てられたベッドの上で眼を覚ました。

この“魔界”という世界に来てから早十日。幾人かの魔界人と知り合いになるほどに俺はこの世界に馴染んだ。

日課というには少し鳥游おがましい物ではあるが、朝日が出れば町中に降り、そこに住まう人々を眺めながらの散歩。その時に知り合いがいれば声を掛けるし、おらずとも汗を流すその光景を眺めるだけで時間はすぐに潰れてしまう。

その日課から神綺の家へと戻れば温かい朝食と笑顔が迎えてくれる。

朝の挨拶をそこで三人と交わし、そして一緒にいただきますの挨拶を合掌し、温もり溢れる朝食を口にするという訳だ。

毎日神綺だけに作つて貰うのも悪気がするので、一日おきに変わると申し出たがそれは神綺に却下された。俺達は神綺からすれば客人であり、客人に料理をさせるなど以ての外なんだとか。

俺達からすれば居候同然なんだが、それでも聞き入れて貰えなかつた。だが、あの微笑ましい笑顔を見せられれば頷くしかないだろう。

結局は妥協案とし、ルーミアと靈花がその味を盗む為に少しのお手伝いをするということで留まつた。事実、神綺が作る料理は二人のそれを凌駕しているし、また一人はその味を盗みたいという意思があつたので、神綺も渋々とだが了承していた。まあその内に隠れた嬉しさは隠し切れていたが。

朝食を終えれば各自は自由行動となる。

皆が皆予定などあつたものではないのでその日の気分で行動は変

わるのだが、俺は基本的に昼食までは家でゆっくりとしている」とが多い。

神綺と食後の御茶をしたりルーミニアと手合わせをしたり靈花と遊んだりと、本当に楽しみ方は多岐に渡る。

いつか神綺と手合わせをしたのだが今は時期尚早だろう。折角こうして招かれている身分なのに、それでいて手合わせを使用などと無礼な頼みは出来るモノではない。神綺ならばそれでも朗らかに頷いてくれるだろうが、俺の矜持がそれを許さない。

靈花とも手合わせをやつてみたいという気持ちも少なからず存在するが、流石に靈花の身体が持たないだろう。しかし、それでも死合うことにもしなつてしまえば負けはしないという自信はある。だが、苦戦するであろうという確信も俺の内には存在した。それほど、俺は靈花という人間に脅威を抱いているのだ。

そんな戯言をつらつら考えていればいつのまにか昼食時を迎えるモノだ。

今日の昼食は神綺、ルーミニア、靈花三人の合作だ。名目は真っ白でとろりとしたホワイトシチューに新鮮な野菜サラダ。横に添えられているのはふつくらと焼かれたパンがある。

元の世界では少なくとも存在しない料理。それをよくルーミニアと靈花は手掛けたものだ。俺ならば“知識”が存在するのでなんら問題ないだろうが、二人にとつては初めて見る筈の料理。それを神綺のアドバイスがあつたとはいえ普通に手掛けるとは、それだけ一人の料理スキルが高いモノが窺える。

味の方も問題はなく、普通に美味しい、そのことを素直に伝えれば三人は嬉しいそうに御代りをよそってくれる。

お腹が膨れた午後は朝と同じように町に降りて散歩。
時たま三人の内誰かが付いてくることもあるが今日は無し。
一人ブラブラ町中を見て周る。

「おっ、神威の兄ちゃんじゃねえか！」

「ん？ 元さんか、どうだ？ 今日の売り上げは」

声を掛けてきた存在は、この“魔界”に来て神綺以外の初めての知り合い、元さんだ。

頭に巻いた白いタオルはまるで下町の八百屋のおやつさんのよう。しかし、その印象は間違いでなく、この町最大の八百屋の店長なのだ。

物珍しく俺がこの町を歩いている時に元さんが声を掛けってきたのが始まり。他の魔界人は俺が神綺の客人ということを知っていたのか誰一人として畏れ多くて話しかけれないという現状の中、元さんだけは恐れずにこうして話しかけてくれたのだ。

物怖氣しない態度には好印象が持て、それから一日に一回はこうして会話をする仲にまでなった。

「いつも通り大量よつ！ で、今日はお前さん一人かい？ ルーミ

アの姉さんや靈花の嬢ちゃんは一緒じゃねえのか？」

「今日は皆家でゆつくりしてるんじゃないかな？ いつも一緒つてワケじゃないしな」

「そうかいそうかい。で、何か買つてくかい？ 今日は新鮮な人参が手頃だぜ？」

「と言われてもなあ……。俺が台所に立てるならまだしも、神綺は立たせてくれないし」

「神綺様はああ見えて中々に頑固な御人だからな。なら果物でもいつとくか？ 歩きながらにや丁度いい林檎なんかどうだ？」

「アンタも中々に強情だな……。OK、一個買つよ

「毎度ありつ！」

そう言つて手渡された林檎は真っ赤に熟れ、噛み付けば溢れんば

かりの果汁が出る事が見なくても解る。

「流石は元さんが選ぶ商品だな。どれもこれもが一級品の品質だ」
「あたぼうよつ。俺はそういうことには五月蠅い男だぜ？」
「だな」

苦笑しながら俺は元さんに別れを告げ、また散歩を開始する。心地よい環境。しかし、それもそろそろ終わりが近い。

いつまでもこの“魔界”に身を寄せておくわけにはいかない。いや、俺やルーミアはまだいいだろう。しかし、靈花は違う。アイツは人間で、帰る場所もあちらの世界だ。あいつ自身は全く問題ないと言つてはいるが、流石に十日も異世界に身を置くのは問題だろう。明日とは言わない。が、それでも近日中にはこの地を去ろう。別に場所は覚えたのだからいつでもこちらには遊びに来れる。

今度は祥果と一緒に来るのもいいかもしれない。いや、その前に祥果に靈花を紹介する方が先か。

ああ、本当に靈花が人間ということが恼ましい。もし靈花が妖怪ならば俺はここまで恼まなかつたといつのに。

「いつか五人で……、いつか五人で騒ぎたいなあ

そんな言葉は蒼穹の空に吸い込まれて消えた。

この世界に来てから私の身体は少しずつ変貌している気がする。変貌というより肥大化に近いような気もするが、それでも変わっていることは確かだ。

私が持つ力は強大だ。神威や神綺に比べれば単純な攻防では負けるかもしれないが、世界規模に及ぼす効果で見ればタメを張れるほ

ど私の力は強大なのだ。

“闇”。それが私であり、それでいて私が創り出す現象。闇があるからこそ私が存在し、私が存在するからこそ闇がある。どちらが欠けることなどあり得ない。いや、もし欠けてしまえば、そのバランスが崩れてしまえば世界に及ぼす影響は計り知れない。それほど私自身という存在が世界に於いて重要なファクターなのだ。

「つ……」

身体が疼く。内に潜む闇が全てを呑みこもうと躍動する。私の存在と闇の存在が一対一の比率で均衡を保っていたのが瞬く間に崩れ去ろうとする。

駄目だ。それだけは駄目だ。

もし私が闇に呑まれてしまえば、だれがこの闇を抑え込むというのだ。この役目は神綺はあるか、祥果や靈花、神威ですら補えない。そうしてしまえばこの世界は闇に呑まれ、そのまま終焉の一途を辿ってしまう。

それだけはさせない。

「大切なモノを私は知ってしまった。今更その輝きを失わせるワケにはいけないもの」

ああ、そうだ。この世界には祥果がいる、神綺がいる、靈花がいる。

そして

「神威がいるもの。私に大切なことを教えてくれた、私の愛しい人。そんな人が暮らすこの世界を私は崩させはしない」

漏れだす闇を、無理矢理自身の内に抑え込む。

一時的な応急処置ではあるが、これでまた数日は持つ筈だ。

その間に対策を練らねばいけない。私もまたこの世界が大好きだ。絶望知らなかつた世界であつたが、それでも確かに光を教えてくれたこの世界。

最も、私という存在を消してしまえばこの騒動は収まるだろうが、それは嫌だ。

死ぬということは勿論怖い。だが、それ以上に皆に会えなくなるのが怖い。

臆病者？ ああ、確かに私は臆病者だ。それでも失いたくない物は存在する。大切なものは存在する。

「死にたくない、死にたくないよう……」

人知れず涙を流す。心の吐露をぶちまける。

それでもそれを神威達に知られる訳にはいかない。もし知られてしまえば彼は優しいからどうにかして私を助ける道を模索してくれるだろう。だが、私は彼らに心労など掛けたくない。

これは私個人の問題。私が乗り越えらなければならぬ壁だ。それを誰かに助けてもらうなど論外。

私だけで、乗り越えて見せる。

3.1・巡り廻る世界（後書き）

旗立て完了しました。

これでいつでも放浪の時代の最終展開に分岐出来るようになります。
結局はまたシリーズ（笑）な展開になりますが、そこはご容赦お願いします。

まあまだまだ放浪の時代は続くんですけどね。この間も書った通り、
靈花の御話なんか普通に残つてますし。

次で「魔界編終了」と祥果の話に入るかなと言つたところ。祥果の御話
は戦闘パートなので頑張つて執筆しないと。最近あまり書いてなかつたから腕が落ちてるかもということで少々心配気味。
まあなんとかなるでしょう……多分（笑）

32・いつか出逢づ、またその日まで（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「といふことで、そろそろお暇するか」「どうしてといふとかわからないんだけど……」

俺は数日前に考えたことを神綺に伝える。

ポカーンとした神きに少し微笑ましい気持ちになるが、俺はその決断を下した。

俺の内心を既に理解していたルーミアは何も話さずただ黙するのみで、その考えに動搖するのは神綺と靈花の一人だけ。

「靈花は人間なんだからいつまでも居座り続けるのも問題だろ？」

俺とルーミアは問題ないが、ちゃんと祥果に辿り着けたことも連絡しないといけないしな

「私は別に問題ないんだけど……。どうせ家族もいないし……」

「それでも知り合いはいるだろ？」

「う、うん……」

「ならやっぱり戻らないと。いくらお前がそう思つても一度繫がつた縁は決して途切れることはないんだ」

俺が永琳と何万年と別れて暮らすとも、一人に繫がっている縁は決して途切れないように。

それが愛情によつて繫がれたものでも、憎悪によつて繫がれたものでもそれは変わらない。

縁とは人との繫がり合いであり、そしてその集合体こそが運命と呼ばれる存在だ。そして運命とは開闢の時から既に決まっている。後はそのレールをただ走るのみ。故に運命を形作る縁もまた決まつてているのだ。

それはどう足搔こうが切る事は敵わない。

「そうね。一度は戻った方がいいかも。それにもう一度と来ないと
いう訳ではないんでしょう？ なら今度は祥果ちゃんを連れて四人で
来てよっ。その時はまた精一杯御持て成しするから！」

「神綺ちゃん……」

「心配しないで？ 私達はもう皆お友達。そう、大切な大切な友
達。何も心配する事なんてない。靈花ちゃんが怖がっていること、
私には良く解るわ。けど、それは乗り越えなくちゃいけない。私で
も神威君でもルーミアちゃんでもない。靈花ちゃん、貴方自身が乗
り越えなくちゃいけない壁」

俯く靈花の両手を握り、神綺は優しき語りかける。

普段なら仲の良い姉と妹に見えるその光景も、今だけは真逆だ。
弱氣でいる靈花を年長者として優しく導いている。それは優しく、
そして美しいモノ。本来なら決して交わる事のない種族が、どんな
運命か混じり合い、そして互いを友と呼ぶ。

「大丈夫。靈花ちゃんならきっと出来る。なんたって”魔界神”で
ある私や”闇夜の王”であるルーミアちゃん、そしてその存在達と
対等に渡り合う神威君のお友達でしょう？ そんな凄い存在の御友
達なんだから靈花ちゃんもきっとやり遂げられるよ」

絶対的な信頼。

それは時として相手に牙を向けることもあるが、今回はそうでは
ない。ある意味諸刃の刃であるそれを神綺は巧みに操り切った。

だからこそ、靈花の瞳には決意の光が灯る。自身を信頼してくれ
ているからこそ、その信頼を裏切りたくない。そんな思いがありあ
りと見られた。

だが、それは靈花にとつてはプラスに働く。彼女は自身の為より
も他人の為に行動した方が良い結果を残すのだとこの十日ほどで理

解した。

それは元來のモノなのか、それとも彼女が住まう環境がそうであることを強制させたのかはわからない。

「……私、頑張つてみる」

だが、それがどちらとしても俺は構わない。

それが靈花であるとこどが変わらないのであれば、俺は靈花を信じてみよう。

偽つたものではなく、その根本こそ靈花であるのならば、それは靈花なのだから。元來ならばそれで良し。環境がそうさせたのであっても、それを自身を以て彼女はその姿こそが自分なのだと宣言出来るのであれば、それは間違いなく彼女。

「頑張つてつ」

優しく微笑む神綺のその微笑は、容姿が幼くともそこには確かに母性が感じられた。

世界を構築し、育て上げた”世界の母”。その姿がまさにそこには存在する。

「世話になつた。次来るときは祥果を連れて、”五人”で騒ごうな
「ええ。その時が来るのを楽しみに待つてるわ」

最後にそう言葉を交わし、俺達はこの世界へと辿り着いた世界と世界を繋ぐ唯一の道に移動する。

一週間も経過していないというのに、その場所は本当に久しく感じられた。それはこの世界での生活がそれほど濃密であつたという証。そしてこの世界に来たことが無駄ではなかつたという証。

薄暗いその洞穴も慣れたもので、迷うことなく正解の道を選び続

ける。

既にこの場には神綺はない。別れを告げる言葉など彼女との間には不要。

「またすぐに逢うんだからな……」

そして世界を繋ぐ道、あちらの世界といひの世界を隔てる門がその姿を現す。

振り返りは しない。

何も思い残すことなく、俺達はこの場にやつて来たのだ。もう後ろを向く理由も存在しない。

「またな 」

そう言い残し、俺達はその門を潜り抜けた。

世界が変わる。

魔が色濃く残る“世界”から、未だ何からも犯されることなく平穀を享受する“世界”へと。

あちらと比べると幾分か抑え込む力が楽になつた事から、あちらの世界では普通に存在していた“瘴気”こそが私の身体を蝕む原因だつたのだろう。

しかし、あちらから戻つて来たのでもう心配はない…… といふことでもない。既にこの身は瘴気に犯され、内に潜む闇は徐々にではあるが肥大化して行つている。

こちらの世界でも気を抜けば持つていかれる。これでは神威との

模擬戦もしばらくは無理だらう。神威は訝しむかもしないが、それはどうにかして誤魔化す必要がある。

幸い、こちらには祥果もいるので興味は私だけには集中しないだらう。……それはそれで勘に障る事だが。

だが、今はそんな事を考えている余裕はこれっぽっちもない。神威は色恋事には鈍感なのだが、身体の異変や心の変化などには驚くほど敏感だ。下手を見せれば即座にバレることに繋がってしまう。

そんな強敵から失態を犯さず、尚それでいてこの問題を解決……か。

「難しいわね……」

「この問題は今まで生きてきた中でも最難関なモノだ。

「靈花も頑張ってるんだし、私も頑張らなくちゃいけないわよね？」

“魔界”から戻り、久しぶりに元の世界の空気を吸い込む。こちらはあちらとは違い瘴気が蔓延していることはなく、清々しい気分にさせてくれる。まああちらでも早朝などの深呼吸は普通に清々しいのだが。

そんな小さな幸福を享受する暇は今はなく、俺はそのまま靈花が住まう場所、つまりはあの小さな社へと連れていく、そしてそこで別れを告げた。

別れを告げた時、靈花は何が言いたげな表情をしていたが、何か踏ん切りがついたのか「またねっ！」との言葉を残し、そのまま社に続く階段を高速で駆け下りて行つた。

一瞬茫然としながらも、最後には苦笑が零れ、俺は靈花には聞こえないだろうが小さく「またな……」と呟いく。ついでに手頃な木々を見つけ出し、そこに書置きを残した。

書置きの内容は大したものではなく、今この場で言つたりでもないだろ？。

「さて、俺達もそろそろ移動するか。久しぶりに祥果の酒も恋しくなつて来た頃だし」

「そうね。……そういえば、こつして一人でいるのも久しぶりね。いつもは大抵近くに他の誰かが居たし」

「そういえばそうだな……」

数万年間一緒に暮らしつづけていたルーミニアとだが、近頃はその間に誰かがいることが多かった。

「ま、しばらくすればまた騒がしくて、それでいて楽しい日常が返つて来るさ」

「……別に私は今みたいな静かなのも好きだけだ」

「そうなのか？」

「そうよ。……ま、神威は鈍感だから理由はわからないかもね」

クスッと、久しぶりに見た彼女の小悪魔な微笑は綺麗でありながら儂く、そして哀しそうだった。

俺はそんな表情に何も言葉を発する事は出来ず、ただルーミニアの手を握り締めることしか出来ないでいた。

その行動に些か驚いていたルーミニアであるが、すぐに緊張を解き、そのまま体重を俺に掛けてくる。

どうして俺はこんな行動を取ったのだろう。それは全くわからな
い。

ただ、漠然とだが嫌な予感がしたのだ。まるでルーミアが俺の指が届かないどこかに行ってしまいそうで。俺が何もしなければ消えてなくなってしまいそうで。

あり得ない筈の光景なのだが、俺はそれを幻視してしまった。

いつも隣に居てくれた彼女が居なくなる未来。

そんな未来を納得することなど出来る筈もなく、俺は柄にもなく彼女の手を握り締めるのだった。

だが、運命は残酷だ。

時として優しく甘い運命は、時として激しく哀しい未来を呼び寄せる。

そして、それを俺が知った時には既に手遅れで、取り返しのつかない所まで進行していた。

だからこそ、俺達は決断をしたんだ。いつかまた“五人”で笑い合える日常を送れるようにと。

だからこそ、俺達はルーミアを

とうあえず魔界編はこれにて終了。

魔界編の癖に神綺様の影が薄かった気が。最後の方なんて靈花とルーニアに喰われ気味。でもちゃんとカリスマといつより母性で目立つた、筈っ！（笑）

今後のプロットは殆ど完成しました。途中で変更などがなれば下記通りで進行の予定。

- 1・祥果との模擬戦
- 2・靈花主役のお話
- 3・五人揃つた宴会
- 4・シリアルズ展開（笑）
- 5・閑話「一柱の出逢い」

でお送りする予定です。

ただ、祥果の模擬戦の前に靈花の話を一話か二話くらい挟むかも知れない。そこだけが悩んでるといつで、他は大体上記通りで進行する筈です。

ちなみに上記のイベントをこなす話数は予定のところは一十話以内に収める予定。靈花のお話とシリアルズ（笑）にどれくらい取られるかで話数は激変します。

他の三つは基本的に一話か二話で収められるくらいの内容ですからね。

後は何かやつてほしい企画等がありましたら感想にでもどりが。時間と私の妄想が出来る次第頑張ってみます。ただ、無理なこともありますのでそこそこはご容赦を。

PS・一円と言えばバレンタインネタが鉄板ですが、この小説はどうしましょうか？正直やらなくともいいかな？なんて思つていますし（笑）

何たつて、やるなら間違いなく時間軸が合わないので未来の出来事になりますし、そうなると辻褄合わせが結構大変という（汗）まあやつてほしいという声が多ければやります。その場合はやつてほしいキャラ（バレンタインのお話の前日、1~3日までに登場したキャラ限定）を一名をほど感想欄にでも書いてください。

全員書くと一話で收まりきれなさそうだし、かと書いて一人だと少なすぎる可能性があるので一応ふたりほど候補を上げてくれれば幸いです。

3.3・神の威を扱い統べる者 VS 鬼子母神（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

33・神の威を扱い統べる者 VS 鬼子母神

向かうは鬼の母。

ただただ自然体でこちらと相対し、その風貌は鬼の頂点に相応しい。だが、それはこちらも同じ。手には漆黒の長剣が一本握られ、その腕はダランと宙に放りだされている。

合図はない。互いが攻め込むと決めたその瞬間からこの鬪争は開始される。

ここ最近、ルーミアはやることが出来たのか、俺との手合わせを断る事が多くなつた。俺の視点から見れば、それは断るというよりも何かを危惧している雰囲気。だが、迂闊にその場所に踏み込むわけにもいかないので、俺は黙して待つのみ。

俺を嫌いになつた　　という訳ではない筈、だ。断る時も終始申し訳なさそうな表情をし、それでいて何かを堪えるように我慢している雰囲気が伝わってくる。

俺に打ち明けることのできない問題にルーミアは直面し、それを一人で乗り越えようとしているのだろう。

ならば俺はそれを邪魔するわけにはいかない。精々出来ることを見守つて、辛くて挫けそうなときに声を掛けてやるくらいだ。

だが、そんな日常だからこそ俺は一人暇を持て余していた。

ルーミアは厄介事があつて近い間は無理。靈花に逢いに行くにしても会話だけでは物足りない現状。ならば残されている選択肢は一つであり、一つは使えない。

最終的俺が選べる選択肢はたつたの一つ。そして、それは俺が望んでいたことでもある。

それこそが”鬼子母神”^{きしもじん} 詞梨母祥果との手合わせ。

鬼の母でありながら、その鬼の子達に信仰され神へと至った矛盾を孕む存在。妖怪でありながら神であるといつ、ある意味反則の種族。

内に抱擁する能力は俺達妖怪からしてみれば天敵に近い。それは俺にも言えることであり、まともに食らえば大ダメージは必死。

久しぶりのルーミア以外の血沸き肉踊る相手。戦う前から既に身体は興奮状態で、いつでも準備は完了だ。

「先手は……貰うッ！」

地を蹴飛ばし、一気に祥果の懷に入り込もうとする。それと同時に自身の後方に十を超える剣軍を形成し、突撃と同時に射出。

祥果はそれを慌てずに即座に対応してくる。一番危険度が高い俺を迎撃に向かい、他の剣軍は一切無視。当の剣軍は俺に当たらない配置で射出している。つまり、祥果が居る地点に辿り着く前に俺に接近すれば全く脅威はないということであり、祥果はそれを一瞬で見抜き反対に俺の懷に侵入して来た。

零距離からの手刀。狙いは人体の弱点の一つである喉元。最早狂氣と化すそれを俺は首を傾けるだけで回避し、その反動と一緒に身体を回転させ側面に蹴りを放つ。それを防がれることは既に予測済みだったので、第二波に移行。漆黒の長剣が日の光に輝く。

「つー？ 被え、淨化の風よッ！」

その言葉と共に祥果の能力である“被いを扱う程度の能力”が発動。先の戦いで見た時は扇を使っていたのだが、別に扇を用いらずとも発動出来るようだ。

淨化が含まれた風が漆黒の長剣と激突し、長剣は音も立てずに崩れ去る。

一瞬の、そして致命的な隙。それを逃すほど祥果も戦いの素人で

はない。妖怪が持つ特別な嗅覚、本能的に於ける闘争心が狙い違わず牙を剥ぐ。

だが、その程度の致命的な隙で勝敗を決するほど、俺は柔な存在ではない。

迫り来る剛腕に合わせるように右足を軸に身体を回転させ、回転と同時に蒼海の大剣を形成。それを回転の速度と筆の振り抜きの速度を相乗させ放つ。

ドコン、と衝撃波が辺りに撒き散らされ、両者共に吹き飛ばされた。

「つ……、何で剛力だよ。てか何で切断出来ないんだ？ 確かに切断の概念を付加する余裕はなかつたが、それでも分厚い鉄すら豆腐のように斬り飛ばすほどの切れ味はあるって言うのに……」「

「それは妾のセリフじゃ……。何故拳に祓いを纏わせておるのに、元の神威の剣と同格なんじや……。普通なら問答無用に破壊じやうおに」「それはこっちのセリフだ

「妾じや

「

「潰すッ…

「一度痛い目見たいといけないようじやのッー」「

再度激突。

衝突による砂埃の粉塵が辺りに漂うが、俺と祥果はそんな物に目もくれず、ただ相手を打倒する為だけに前を向く。

「凍結の概念の付加」

蒼穹の槍を十数本形成し、そのどれもに凍結の概念を付加させる。触れれば即座に凍りつく極寒の槍が上空から祥果を射抜かんと撃

ち出された。一本目を軽やかに避ける祥果だが、避けた槍は地面に直撃にするのは必然。そしてその地面が凍りつくのまた必然だ。

「ぬつ！？」

凍つた地面に足を取られるという懸念をしていなかつた祥果は一瞬体勢が崩れる。

その刹那の隙を狙い、残つた槍軍も射出させる。小さな時間差が起ころる連続攻撃。それに伴う凍結による二次災害。

俺の能力に最大の強みは殆どの相手に対しても弱点を付け、それでいて汎用性の高さもある攻撃の豊富さ。一撃が弱いのなら相手の弱点を付き、弱点がなくとも豊富な攻撃により翻弄することも出来る。相手の攻撃も殆どを無効化出来るといった、ある意味反則の能力。

“虚”でありながら“実”である。それが俺の能力。

形成しこの世に物質化された力に“偽”的力を与え、それを“真”と力と成す。

それが俺が扱える唯一無一の能力であり、そして俺を最強とまで伸し上げた究極の能力。

「霸アツ！」

新たに形成された雷色の槍に感電の概念を付加させ、それを足を取られて迎撃出来ない祥果に投擲する。

迎撃のすることのできない祥果はその槍に直撃。傷を負うことはないが、それでも付加された感電の概念により一時的に行動不能に陥つた。

「想像開始」
「イメージスタート」

想像するは刀。^{イメージ}

平安時代の伯耆国^{やすつな}の刀工 安綱作であり、大包平と共に“日本刀の東西の両横綱”と称される最も優れた名刀。

刃長二尺六寸五分（約80・3cm）、反り九分（約2・7cm）。刃文は小乱れで佩表に“安綱”二字銘を切る。

彼の昔、丹波国大江山に住み着いた鬼、酒呑童子の首をこの刀で切り落としたから“童子切”の名に由来し、その切れ味は六人の罪人の死体を積み重ねて振り下ろすと、六つの死体を切断しただけではなく、刃が土台まで達したというほど。

“鬼殺し”の異名を最も濃く受け継ぐ、天下五剣の一つ。

「“童子切安綱”！」

鬼に対しても最凶であり最悪の刀。それを俺は形成する。その黒光りする鞘に収まった刀を祥果は目撃し、そして顔を引き攀りさせながら問いかけてきた。

「そ、それはちと酷いのではないかの？ 身体のありとあらゆるところから危険信号が発しておるのじゃが……？」

「俺つて負けず嫌いなんだよ。少し卑怯かも知れんが、これも俺の能力の一つということで大目に見てくれ。元々、俺の能力の真骨頂はこういう使い方だしな」

祥果からしてみればこの刀の登場は予想外過ぎたのだろう。自身を問答無用に斬り滅ぼす刀がこの世界に存在しているなど誰が想像できようか。

そんな顔を引き攀らせている祥果などはスルーし、俺は鞘から天下五剣の一つ、“童子切安綱”を抜刀。

近代の日本刀よりも反りが深い刀身を現せ、波紋が美しいことこの上ない。美術価値が高いことも然り乍ら、切れ味も想像通りならば良い筈だ。

伝承では達人が扱えば人間六人を両断してもお釣りが来るほど。人間という本来ならば両断し難い筈のそれを容易く両断出来るのだ。ならば妖怪である俺が扱えばどうなるか？ それは想像に容易い。

「さあ、フィナーレ終幕と行こうか」

「クツ！ ならば来いッ！ その刀諸共お主を打ち碎いて見せようツ！」

「いい覇氣だ……ツ！」

交錯は一瞬。

握る刀が祥果の肩を少しだけ斬り、俺はそのまま後ろへと流れる。勿論、俺の身体には一片の傷も無し。

残心を解かずに血振りをし、そのまま後ろを振り返る。そこには苦笑いの祥果。

「掠つただけでも随分と力を持つていかれおったわ……」

「まあ俺が使える中で一番お前に對して攻撃力がある奴を選んだからな」

流石は“鬼殺し”。鬼の母である祥果にすらその効果は絶大か。祥果で掠つただけでこれなのだから、どの存在にもまともに斬り伏せれば一太刀で滅する事も可能だろ？ 別にやる気などさらさらないが。

俺はとりあえず祥果の下に駆け寄り、そのまま肩を貸してやる。フラフラとしている姿はこっちが見ていて不安になる。

「ほり、大丈夫か？ 結構時間も経つたからルーニアも心配するだ
うつしそうそろ帰ろうと思つんだが……」

「こまま肩を貸してくれれば問題ないの。一人で歩くこはチト無
理があるが」

「ならこまま歸るか。ほり、ちゃんと寄りかかれ」

「スマンの……」

「別に気にするな。この原因を作つたのは紛れもない俺なんだから」

そのまま俺達は祥果達の根城である妖怪の山へとゆっくつと帰つ
ていく。

帰りつけば祥果の惨状を見てルーニアに小言の貰つたのは完全な
余談だ。

33・神の威を扱い統べる者 VS 鬼子母神（後書き）

とりあえず祥果とも模擬戦は終了。

若干に不完全燃焼な気もしますが、鬼に対する鬼札を切ったのでこうなったということにしてください。

というか、元々この話はしなくても特に問題はなかったのですが、一応入れておこうかなと思い執筆した話なので、あまり気にする事もないような気がします。

本命としては次の靈花の話。

まあ五話もあれば十分終わる気がしますね。昨日は二十話以内に收めるとか言つていましたが、全体を合わせても十話くらいで終わる気がしてます。一気に半分になった事には気にしてはいけません。気にすれば負けです。

34・靈なる花（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

靈なる花。

それが私に名付けられた名であり、そして唯一親が私にくれた贈り物。

親の顔は知らない。私を引きとつてくれた婆様は、私は籠の中に入れられ、森の奥底に捨てられていたと言っていた。名前が解つたのも、その籠に申し訳ない程度に刻み込まれていたからで、下手すれば見つけられなかつたかも知れないと苦い笑みを零しながら語つてくれた。

そのような経緯を経たせいか、自我が芽生えて数年の間は全くと言つていいほど感情を顕わにせず、肉親とも言つて過言ではない婆様にすら笑みを向けることも出来なかつた。

そんな可愛げのない私。それでも婆様は一生懸命に私を育て上げてくれた。毎日毎日私に語りかけ、ご飯の作り方や着物の織り方、冬の山での過ごし方等々、私が生き抜くための術を全て教えてくれた。感情は出ずとも、私は内心では感謝していたので、何の文句も零さずにそれらを積み重ねて行つた。

だが、そんな日常も不变であることはあり得ない。

元々、私を引きとつた時から高齢であつた婆様は老化による衰弱で亡くなつた。勿論、婆様は私とは違い、近くに住んでいた村々の人々から尊敬されており、小さいながらもきちんとした葬式は行われた。

その時に、初めて私は感情が表に出す。

零れ出る涙は止まる事を知らず、静かな部屋の中に私の慟哭の声が響く。婆様の亡骸にしがみ付き、ただずつと叫び続けていた。

私を愛してくれてありがとう。私をここまで育ててくれたありがとう、と。

しかし、村の人々は無言でその場を立ち去つて行く。確かに婆様はその人達からは好かれていた。反して私は気味悪がられていたのだ。

感情を顯わにしない、まるで人形のようだ。それがその人達が口々にする言葉。

たつた独りとなつた広い空間。

ただ独りで家の近くの丘に穴を掘り、ただ独りで婆様の墓を立てる。

泣き事などもう言える時間ではない。既にこの世界に私を愛してくれ、いつでも味方であつてくれた婆様は存在しない。

私は前を向いた。

「婆様……。今まで育ててくれて、本当にありがとうございました」

初めて私は笑みという感情を表し、それを自ではなく他に向けたのだった。

それからは大変だった。

毎日毎日が生きることとの戦い。金を得る手段など持ち得ない私にとつて、日々の食料を得る方法は自給自足。

畑を耕し野菜を植え、川に行つては魚を釣り、リスやキツネ、ウサギなどの動物を狩り生活を送る。

時たま村の方に出掛け、自身が作った野菜と生活用品などの物々

交換などもする。初めの頃は気味悪がっていた村の人々も、漸く感情を表すことの出来た私に幾分か安心し、それなりの対応に応じてくれた。

それが齢12までお話を。

そして、また私の生活は激変する事になる。

そもそも、齢12以下の小娘がたつた独りで、それも大の大人でさえ生き抜くことが難しい世界を生き抜けるか？

普通ならば、一般人の思考から考えてみればそれは即座に否の回答に至るだろう。しかし、現に彼女は生き足搔いている。

それは何故か？ そんな問いは簡単だ。彼女は一般人から逸脱した人間だつたからに過ぎない。

逸脱した人間はどの世界でも”異常”と見られ、そして迫害を受ける。それはこの世界この時代でも変わることなく、同じように彼女も迫害を受ける。

雨が降っていた。珍しくバケツを返したような雨。

私はその時身体を震わせながら、申し訳ない程度の毛布を身体に纏い寒さを凌いでいた。時期は真冬。これだけでは到底暖を得るとは敵わないが、暖を取る燃料の薪は切らしていた。

寒い。ブルリと身体を震わせつつ、これ以上身体の熱を奪われないよう一層毛布を強く握りしめる。

……

「声……？」

このような土砂降りの雨の中で歩く酔狂な人間でもいるのだろう

か。

耳を澄ませ、もう一度聞こえないかどうかを確認する。この近くは山が多く、これだけの雨ならば土砂崩れなどの災害に逢う可能性も捨てきれない。しかし、この近くの村に住んでいる人間ならば子供でも知っている実情。

ならば通りすがりの旅人か？　いや、旅人だからこそ、こういう時の入山の危険性は私達よりも熟知している筈。ならば誰？

ア……！

叫び……声？

いや、どちらかといつと……悲鳴つ！？

私は自身の身体に纏わせていた毛布を投げ捨て、土砂降りの雨の中に身体を放り投げる。

雨にぬれ徐々に体温を奪われていくが、今はそんな事に気をまわしている余裕は欠片もない。

間違いない。この土砂降りの中で山に籠る人間がいる。そして

「……この気配、間違いないつ！」

その人間は不用意に山に入山したわけではない。

何かに追われ、なし崩しでこの山に入山してしまったのだ。

そしてその人間を追いかける何か。それは肉食動物……などではなく、それ以上に恐怖の塊。

「妖怪つ！」

妖怪は自身の瞳で見たことがある。というのも、婆様がそれと戦っている光景を遠巻きに目撃したのだ。

猿のように素早い身のこなしと、大木のよくな腕から繰り出される剛腕。そんな異形な化物と婆様は相対し、それで尚勝ちを拾っていた。

後で聞いたことだが、元々婆様はこの近くの山々に出現する妖怪を退治する妖怪退治屋のような仕事で生計を立てていたようだ。

その帰り道に私を拾い、そして育てた。その御蔭で、私は村の人々よりも妖怪については詳しい。

詳しいだけ、知識があるだけでその化物と相対出来るかといわれれば否と答えるしかないが。それでも放つておくわけにはいかない。

「私が婆様に助けられたように、私も誰かを助けたい」

山の中を駆け巡る。二つの存在の場所は近く、両者共にいたしごっこを繰り広げ、距離が離れることはない。

「いた　っ！」

その二つの影を発見する。片一方は成人の男性。服装から村の人間だろう。

そしてもう一方が気配の予測通り、紛れもない妖怪。それも、私が初めて目撃した妖怪と同位種。

だが、それは時既に遅く。妖怪が持つ剛腕が村の人を襲

「駄目っ！」

そこからは無我夢中だったからよく覚えていない。はっきりとしているのは、その村の男性は助かり、私は靈力という力を扱えるようになつたこと。そして、その御蔭で村の人から畏

れた目で見られるようになつたこと。一〇の三つだけ。

微かに覚えているのは、私の身体から青白い光が発光し、その光が妖怪を撃ち貫き、血が雨のように降り注いだこと。そして、その男性の化け物を見たかのような視線だけ。

後は例にも漏れず、その出来事は村の中で広まり、その村の村長が提案したこと。それはその山の山頂に小さな社を作り、そこに私を住まわせること。

大きすぎる力は災いを呼ぶと言わんばかりにその提案は即座に可決され、私は強制的に家を立ち退かされた。

だが、私は後悔していなかつた。

確かに結果的に私は迫害をうけことになつた。だが、それでも私は一人の人間の命を確かに守り切る事が出来たのだから。貰うことしか出来なかつた私が初めてできた誰かの為に生きること。

それが出来たのだ。

それから私は村の人々が建ててくれた社を住居とし、婆様がやつていたように妖怪退治屋を始めた。

別に誰かに感謝される為にやろうと思つた訳ではない。ただ誰かの為に役に立ちたかつた。だから妖怪を退治してやつたからといってお金を取る気などなかつた。だが、村の人達は畏れるように平身低頭で私に接し、野菜などの食料を手渡される。

右往左往しながらそれを見るが、私も人間であり、食べ物がなければ餓死してしまう。仕方なくそれを受け取ることに決め、その場から立ち去る。

そんな出来事が起つて一年が経過した。

私はそんな生活を全く変えていないし、村の人々の私に対する接し方があまり変わつていない。ただ、多大な畏れのなかに、小さな

敬意が芽生えているかなと思つへり。

村の守護者。そんな呼び方が定着してから早数カ月。

私はその呼び名に相応しい服装を手掛けた。神に侍する巫女服。ただ、単なる巫女服では面白みが感じられなかつたので、ちょっととしたお茶目を出し、腋を出してみた。それが思つた以上に自分にフィットし、それが私の普段着ともなつた。

「さ、今日も一日頑張ろつかなつ！」

変わり者の村の守護者。

それが私、靈花に対する印象だつた。

34・靈なる花（後書き）

……思つていた以上に薄い内容になつた気がします。……当初はもっと重く、濃い内容を考えていた気がするのですが、結局こうなつた。やはり文才が足りなさすぎた。

靈花主役の御話第一弾は、神威達と出逢つ前。どうやつて生きてきただかのお話です。……特にこれ以外に書くことないな。どうしようつ。

……今日はここまでにしておひつか（汗）

言つなれば、私のコーナーページを覗けば幸せになれるかも？ 大

半の人が不幸になる気もしますがね（汗）

35・変化の兆し（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

人という種はナニを定義してヒトと表せるのだろうか。

筋力？脚力？それとも五感？そのどれもが当て嵌り、そしてそのどれもが当て嵌まらない。

多分だが、人という種は平凡であるからこそヒトと表されるのだろう。

そして、私は”平凡”という枠には当て嵌まらず、真反対である”非凡”、いや”異質”と言いつて間違いではない。

筋力、脚力。それは確かに平常時ならば普通の人間と何ら変わりはないだろう。

しかし、我が身にはヒトという種が到底内包し切れる筈もない力が眠っている。その総量は尊敬されていた婆様すら霞み、大妖怪と呼ばれる異形の化物に近いほど。

その力で底上げされた筋力や脚力は既に人のモノでは非ず、一介の化物。

多大なる力とはそこの存在するだけで脅威を増す。それが力と云われる所以。

だが、人によつてはその力も使い方だと反論するかもしれないし、私もそう思う。しかし、その反論が出来るのは力の所持者だけであり、何の力のない存在はそんな戯言を零していい余裕などない。いつ、その力で自分が害されるのか解らない。目に見えない恐怖は刻々とその存在の内側を削っていく。

力在る者と力無き者。

それは互いの想いを理解し合つことなど生涯ないものだろう。最早それは種族の違う者同士。種族が違うということは思想が違うと同じ事。そして思想が違う者同士とは交わる事など到底出来やしな

い。

元々、人間という種は自身と違う種や思想の持ち主を排他する思考を持つ種族だ。それは人間という種が創り出された時、その根本に植え付けられた思考。そんなモノをそう簡単に変える事が出来る筈もない。

だから、私と村の人々は最早違う種族なのだ。

仲が良くなくて当然。いや、もっと強制的に迫害をされないだけマシというもの。

それは私の力に怯えているからなのだろうが、それでも数が多いればそれだけで私は押し切られてしまう。力は在つても、所詮私の身体は一つ。目など二つしかなく、前方の敵をやり過ごす隙に後方から攻撃を仕掛けられるだけで私は死に至るだろう。力が在るといつても、元が人間である私は所詮その程度の力しか持ち合わせていない。

だが、その程度の力しかこの身にはなくとも、私は誰かを守る事が出来るのだ。

歪な私に出来る、唯一の恩返し。それだけ、それだけしかこの身にはない。

「つ……」

私の周りを囲む妖怪の群れ。力だけを見れば下級妖怪の群れなのだが、如何せん数が多い。目に見える範囲だけで十数匹。後方にも同じ数くらいは存在する。

生来の五感の良さと、第六感 所謂”勘”の良さの御蔭で不意を突かれる事はないが、それでもこの数を捌ききるのは骨を折る。

武器らしい武器はない。私の武器はこの身体。私の体躯全てとその身に宿る靈力だけ。それだけが私が持つ唯一の武器。

ジリジリと僅かながらにその包囲網を縮ませてくる。下級妖怪ながら、そういう姑息な知能は有しているようだ。

元々群れで獲物を狩る種なのか、誰一人として突貫してくる様子もない。そうであつてくれたのならまだやりやすかったものを。独りだけ突貫すれば、それだけその包囲網に穴が出来るということ。穴が出来ればそれだけ隙も生じ、その隙を付けばすぐに下級妖怪の群れなど壊滅に追いやれる自信もある。

待てばジリ貧。なら攻めることしか私が生き残る術は無いということでもある。

下級妖怪達にはバレないよう腰を落とし、脚に力を込める。幸い、私の今着ている服は巫女服で在り、腰及び足の状態は相手に悟られ難い。脚がピンと張っているのか、力を込め前屈姿勢になつているのか悟られなければ、それだけ相手の不意を突くことが出来る。出来るだけ悟られることないよう靈力による身体能力の強化。準備は整つた。後は拍子を測るだけ。次に相手が距離を詰めたその瞬間が勝負時。

参、弐、壱、零ッ！

「疾ッ！」
「ギャッ！？」

前方に突つ立つていた一匹を蹴り倒し、そのままバク宙で体勢を整え、かかと落としどもう一体の脳天をぶちまける。

不意を突かれた妖怪達は即座に巣崩れを起こし、包囲網が緩み穴が生まる。瞬時のその穴を駆け巡る。これにより包囲網は完全に

崩れ、眼前に二十体ほどの妖怪が眼に収まつた。

掌に進る力。人間が持つことの出来る力。それを莫大な量をこの身宿して、尚且つ扱う術を持つ私は、人からしてみれば“天才”という奴なのだろう。

初めてその力の存在を自覚したその時から、私はこの力をまるで自分の手足のように扱えた。

使い方次第では、その力を用いて空を飛ぶことだって可能だ。それは婆様ですら出来なかつた所業。それを私みたいな小娘が一日経たずと至る。

それを“天才”と言わずに何という？

そこからは戦いと言わない、“言えない”モノだつた。

無理矢理言い表すのならば、それは“殺戮”。圧倒的強者が弱者を屠る、ただそれだけの行為。

妖怪であつたであろう物体はそこかしこに散乱し、血肉だけがその空間を彩る。獣の死臭を集めればこの場所のような臭いになるのだろう。

そんな感想抱きながら、私は身体に付着する妖怪の血肉を鬱陶しく扱う。

「汚れちゃつたな……」

帰ろり。この時期なら裏山の湖で水浴びをしても風は引かないはずだ。

歩くたびにグチョという音に眉を顰めつつも、態々空を飛んで帰るのもどうかと思う。無駄に靈力を使うのは出来るだけ避けた方がいいだろう。

村の人達への報告は明日でも構わないだろうし、今はこの汚れを

落とす方が先決だ。

こんな物騒をしているが、これでも私は乙女なのだ。自身を出来るだけ綺麗に飾りたいという欲求も確かに存在する。

まあ、綺麗に着飾つた所で見せる相手がいないのが玉に瑕きずだが。

そんな現状を省みて憂鬱な溜息を吐く。

巫女服を脱ぎ捨て、一糸纏わぬ姿で私は湖の中に身体を沈める。女性らしい、とは未だ言えないが、それでも発達してきた二つの女性の象徴。鳥の濡れ羽色とまで婆様に称された私の髪は、自身の中で一番気に入っている部分であり、人に自慢できる身体的特徴。舞、なんて仰々しい呼び方はしない。ただ自分が赴くまま、生まってきた姿のままで私は湖の中で踊る。

観客など誰一人おらず、舞台に上るのは私ただ一人。月明かりが照らす幻想的な空間で、私は一人踊り続ける。

懺悔？ 後悔？ そんな感情が胸の内に渦巻くのをただ誤魔化しているだけかもしれない。

「淋しいなあ……」

それは誰しもが抱える感情。孤独はどんな存在にも平等な病だ。どんな存在にも苛ませ、そして徐々に内から腐らせていく、最後に狂わせる。

私は後どれほど持つだろう。一ヶ月？ 一年？ 十年？ それとも誰にも看取られずに朽ち果てるその時まで、私は平常でいられるのだろうか。

普通、異常、平凡、非凡、常人、狂人、狂う、狂わない。
ぐるぐるグルグルそんな言葉が頭を駆けめ、それでいて霧のように

姿を消す。

考えれば考えるほど深みに陥つていくような、そんな悩み。それは創造神が考えた狡猾な罠か。

一瞬だけ冷たい風が吹き、漸く私は出口のない迷路から抜け出すことが出来た。

湖から上がり、靈力により体に纏わり付く水分を一瞬で蒸発させる。こんな使い方は罰当たりかもしけないが、使えるモノを使って何が悪い。

数瞬で着慣れた巫女服に着替え、そのまま帰路へと着く。

翌日、村の村長の家へ昨日の報告に向かう。

返される言葉は恐怖、そして何故か敬意。村の人からの接し方も初めの頃とは大分と変わった気がする。

だが、今の私はこれらの人間が一体何なのか全く解らなかつた。向かはれることのなかつた感情に名前を付けるなどと、些か無茶ぶりにも程がある。

それに悪い気は……しない。

「それじゃねっ」

「巫女様もご無事で……」

そう言って、私は村長の家からお暇し、自分の家である山頂の社に戻る。

戻る途中、いつものように村の人々から野菜などの食べモノを渡され、いつものように笑顔でお礼を言つた。

どうしてこのよつた扱いを受けるのか。全く解らなかつた。

けど、これを境に、私の世界は一変する。

帰り道で出逢つた、黒い気流しを着た一人の男性と、漆黒の羽を

生やした一人の女性との出来事によつて

35・変化の兆し（後書き）

靈花主役の御話第一弾。主人公である筈の神威はいつ主人公復帰が出来るのだろうか。

にしても、この話は特にあとがきに書く内容があまりなくてちょっと困り気味。

無理矢理捻りだすなら、靈花のグロシーン注意つてとこくらい？
妖怪を粉碎！玉碎！大喝采！やつちやいましたね。二十数体の下級妖怪を瞬殺。まあ人間離れしてますね、靈花も。

あとはそうですね……。私が馬鹿みたいにもう一つ小説を投稿したこと位でしょうか。

本当に何やつてんだろうね？まだまだ完結の兆しとこより、原作開始の兆しすら見えてないつて言つのに○△

36・交わる種族（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

綺麗な黒髪。それが初めてお兄さんにお会いした時の感想だつた。無造作に晒されている筈の黒髪は風に靡き、全てを黒で纏う彼は奇異そのモノ。その横に立つお姉さんに至つては人間にはあり得ない筈の漆黒の羽を持つていた。

考えるまでもない。彼達は私達と同じ人間ではなく忌避すべき妖怪。それを認識する事に至つた瞬間、私は体を強張らせる。

力量差が違い過ぎる。ただ遠巻きから一人の姿を確認しただけで、私は自分が無残に地に伏せる光景を夢想した。

ヒトという種では手で触れる、いや見ることすら敵わない高みに存在する“絶対的強者”。それを私は初めて知つた。

だが、どうする？

自分が億に一つの確率でも敵わない相手をここで見逃せば、村の人達はどうなる？ 彼らが一般的な妖怪の思考回路を携えていたのなら、村の人達は物言わぬ屍に成り果てる。

だからといって、ここで私が仕掛けた所で状況は好転する筈もなく。いや、反対に悪化させる可能性だつてあるのだ。

時間は有限でしかなく、無限には存在しない。彼らの歩みもまた留まる事はなく、あと私の心臓が百数えれば私すら視認されてしまう距離まで至つてしまつ。

そうして悩み悩み、悩んだ末に私はもう一度だけ一人の方を凝視し、そして黒い気流しを纏うお兄さんと瞳を見たのだ。

今まで見たことがなかつたほどの邪気のない瞳。純粹……というワケではなく、ただ本来ならば妖怪の本能とも呼べる邪気が見られなかつた。

不思議な瞳……

そんな感想を持った時には、既に私は彼らの下に姿を晒していた。純粹に私は一人に興味を持つたのだ。常人から考えてみればこの行為は自殺行為に思われるだろう。だが、私には確信があった。

彼らは普通の妖怪とは違う、と。

その根拠はどこから来るのかと問われれば、私には答えられる解は無い。ただ、私の“勘”がそう囁いたのだ。

「 おろ？ 珍しいね、こんな辺境に足を踏み入れる存在が居るなんて」

急に話しかけられあちらさんも吃驚したのか、眼を見開き驚きを顯わにする。

私より強いであろう存在達がそんな様子をしたことがどこか可笑しくて、私は笑みを零してしまった。零した瞬間、気を悪くさせたかな、とも思ったが彼らにはその事に気をやる暇もなく、ただただ私を凝視していた。

後になつてからその理由を聞けば『“ヒト”という種を超越したかのような存在に感じたから』と答えられたが、私はそんな高尚な存在でじゃない。

ただ普通の人より力の在る、どこにでもいる小娘でしかないのだ

……

一人と出逢つてから数時間。それだけの短い間だというのに、私はどこかこの空間に安らぎを感じていた。

それは少し前、婆様が生きていた頃に感じていた安らぎ。私と言う存在に畏れを抱かず、対等な存在で接してくれる存在が居た時間。

本来なら相容れない筈の種族の筈なのに。同じ種族である人からは殆ど感じられなかつた安らぎを彼らは与えてくれた。

最早彼らに対する警戒心など露にもなく、まるで仲の良い友達と接するが如く私は一人に話しかける。

「敵意がなかつたらどんな存在でも怖くないものだよ?」

ただ普通の人間より私はそう言つた悪意ある感情に敏感だ。それは種が異なれど変わりなく通用する。

生來の五感の良さか、それとも“勘”的の良さ故にか。どちらかはわからないが、それでも感じとる事に関しては超一流である自負がある。

そんな言葉に呆れた視線を向けるのは止めて欲しい。私が馬鹿な子みたいで少し悲しくなつてくる。

変わり者。二人から見ても、やはり私に印象は変わらない。反対にいえば、村の人達はキチンと私の内面を理解していることと同じなような

「ああ、似合つてるよ。巫女装束を着てるつてことは、靈花は上の社の巫女なのか?」

「うん?」

初めて異性から それが妖怪であろうとも 壊められた。
形容しがたい恍惚が私の脳髄を駆け巡る。

女と言う本能が喜悦を表し、我慢しようとも表情は崩れ、締りのないにやけ顔を浮かべてしまつ。

「ふうん……。どんな神様を祀つてゐるんだ? ここ辺りじゃ有名な

神様はいなかつた筈なんだが……」

「えへへ、それは秘密だよう」

「ひ、秘密つて……」

形としてだけは社としているが、中身は唯の偽物。

小娘一人が住まう小さな住居でしかない。だが、それを口にすることはなかつた。どうしてかそうする気が出なかつたのだ。

そんな感情を持て余しつつも、一人の名前を教えて貰い、ここにきた理由をさりげなく聞いてみる。

もしも一人の理由が近くの村を襲うというものならどうにかして説得を試みる。そうでなければ問題ない。

「それでだけど、何で二人はこんな場所に？　自分で言うのもなんだけど、こんな辺鄙な場所に来る人つて私以外知らないよ？」

出来れば外れていて欲しい。

力押しになつてしまえば私に出来ることなどある筈もないのだから。

「少し用事でな」

「用事？　こんな場所に？」

……ヤバいかな？

「その顔は説明しなくちゃ動かないって顔だな……？」

「えへへ、正解）。お兄さんも中々やるねつ」

「はあ……」

出来るだけ笑顔を振りまき、平常心を焦る心持ちのなか装う。爆発するのではないかと言う位に私の心臓は胸を叩き、近くに居

る一人にまで鼓動の音が聞こえんばかりに刻み続ける。

「……靈花は知らないかもしだれないが、この世界には“魔界”に繋がる道があるらしい。俺達はその“魔界”的神様に用があるんだよ」

その言葉を聞いた瞬間、私を覆っていた緊張感や恐怖感と言つたものを霧散する。

息を一人に悟られない様に吐き、それと一緒に心を落ち着かせる為に新鮮な空気を吸い込んだ。

それにも“魔界”か……

婆様が近寄つてはいけないと私に毎日言い続けていたあの洞窟のことかな？

「“魔界”？ ん~、裏山の洞窟の所？」

「知ってるのか？」

「流石に中まで入った事はないけどね。場所は知ってるよ」

あれやこれやとばかりに話は進み、いつのまにかに私がそこまで案内する事に。

まあ二人と一緒に居るのは楽しいし、私には問題ないかな？

出来れば“魔界”っていう場所にも付いて行つてみたいし。ね？

私をピッタリと追つて来る一人には流石とばかりに感心する。

常人ならば絶対に付いてこる事が叶わない山道の獸道を歩いていたが、妖怪である一人が手古摺る筈もなく、何ら苦労することなく歩いていた。

山道を歩くなかも会話は続き、久しぶりにこれほど長い時間他の存在と触れ合つた氣がする。気がする、ではなくそうなのだが。

私がお兄さんに話掛け、それをお兄さんが返し、お姉さんが時たま混ざる。ただそれだけ。どこにでもありそうな、有り触れた光景。

そして、それは最も私が渴望していた出来事。

長らく空虚だった私の中身が急速に満たされていくのをハッキリと感じられる。

現金な奴だと自身でも甚だ呆れてしまう。人間と交わる事が出来なければ、人間の敵である妖怪と交わり、あまつさえそんな関係に安らぎを感じるとは。

「あつ、あれだよ。あそこが多分目的地」

私が指差すその先に、禍々しくもどこか優しい雰囲気がする洞穴が悠然と存在する。

それを確認した二人は少しの間思案し、そして口を開いた。

「ありがとな、靈花。お前の御蔭で特に迷わずここまで来れた」「ん~ん、別に気にしなくてもいいよ?」

「ま、案内もここまで終了だ。さて、ルーミア。準備は良いか?」「ええ、勿論」

「いっちはも〇〇~」

「.....」

私もお兄さんの号令に倣つて声を発したのだが、何かいけなかつただろうか。

「ルーミア。準備は良いか?」

「え、ええ.....」

「どんと来いっ！」

一度田にやつと通じたのか、お兄さんは石像の様な動作でゆっくりとこちらを見る。

横には困ったような表情をしたお姉さん。

「なあ、靈花。もしかしてもしかするが、お前”魔界”まで付いてくる気が？」

その言葉を待つてましたと言わんばかりに、私はお兄さんに猛アピール。

それが功を奏したのか、といつとうお兄さんは根負けし、私の同行も許可してくれた。

道中にちょっとしたジョークを交えながらも、私はやつと得ることの出来た温かさを離さずに済んだ。

そのこと、本当に安心したのだ。

「まあ別にいいかねえ。久しぶりにここまで邪氣の無い人間も見たしな」

ただ、この言葉だけには反論したかった。

邪気がないのはお兄さん達の方で、私は邪氣塗れだったのだから。自分のことを第一と考える、意地汚い小娘だったのだから。

婆様に禁じられていた洞穴を進み、漸く目的の場所に辿り着く。

洞穴の内部構造までは流石に知らなかつたので先導をお兄さんに譲つたが、まさか一発でここまで別れ道が沢山あつた中から正解の道を引き当てるとは。私並みに“勘”が良いのか、それとも私が知ら

ない方法で内部構造を調べたのか。

眼前に聳え立つ門は、唯の門ではなく、下級妖怪に遭遇した時以上の威圧感を私に与える。門自体は普通に作り上げられたのか、石造りの門は所々劣化し、欠けている部分も多い。

少しの警戒の下、お兄さんは門に手を掛ける。それに力を入れると、鈍重そうな見た目通りの重さを發揮するが、少しづつそれは開かれていく。

「…………洞窟？」

門が開いたその先の光景は、今私達が居る場所に近い風景。ただ、私の感覚か、それとも“勘”かはわからないが、告げている。

正真正銘、この先は“魔界”であると。

「こっちもあっちも入り口は洞穴ってこと?」

「あ、でもあっちが“魔界”っぽいよ? 何か空氣の質みたいなのが違う気がする」

「…………ルーミアの答えが正解だろうし、何より靈花の勘が告げてるんだ。正真正銘、この先が“魔界”」

三人同時に唾を呑み、そして同じタイミングで足を踏み出した。終わりのない道などなく、どれほど幸せだろうが悲しかろうが最後は等しく訪れる。

闇が続くその先に、微かな光が灯った。

「 出口だ……」

お兄さんの言葉と友、漸く私達はこの長くジメジメとした洞窟も終わりだということを認識する。

しかし、それを認識したと同時に新たに認識する事象。元居た世界では滅多なことでは感じることは出来なつた感覚。下級妖怪などの死骸などから発せられる独特の力。

人はそれを“瘴気”と呼ぶ。

「瘴気……、それも富士の樹海クラスのかよ。どこが『妾達が住んでいる世界とは位相が違うだけで、他は何も変わらん場所よ』だ。思いつきり違うじゃねえかよ……」

「祥果にとつてはあまり関係ないことだつたら省いたんでしょうね。それに私達にも特に問題ならないし」

「……別に俺もとやかくは言わないが。つと、靈花は大丈夫か？」

人間にとつては瘴気は毒なんだが「

そう。本来ならば人間である私には毒にしかならない筈のそれを、私は吸い込んで平然としている。

耐えている……ワケではなく、これにはちゃんとした理由が存在した。ちゃんとした理由といつても簡単なものでしかなく、人がこの瘴気に耐えられないのは等しく抗原となる力がないのが原因なのだ。そして、ここで抗原となる力とは一般的に差すモノで靈力。

瘴気とは負の力であり、人間を内から苛む。だが、私みたいに正の力である靈力を宿している人間は、その力が抗原となり、瘴気を無効化出来るのだ。

勿論、対抗出来るのにも限界があるが、それは自身が宿す靈力の総量に關係してくる。つまり、私は馬鹿みたいに靈力だけはあるので、この世界に漂う瘴気に犯される心配はないというワケだ。

「うん？ 別に問題ないよ？」

「……本当に前は人間か？」

けど、その呆れたような視線には少し傷ついた。私を傷つける日

的で言つたのではない事を理解してこののどいやかくは言わないが。

36・交わる種族（後書き）

靈花主役第三弾！

今回は何時もより文字数が多くなつてしましました。多くなつたといつてもたつた1,000文字だけだけどね（汗）

一、三話ぶりの神威も登場しました。本当に久しぶりのような気が……
同じくルーミアも一、三話ぶりの登場。次の話に神綺の登場。祥果が靈花と出逢うのは後何話かかるかな？ 多分そんなに掛からないはずです。

ああ、燃料（感想）が恋しいなあ……

どうやつたら一日十もの感想が来るようになるんだろうな？

37・カリスマって何だらう？（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

37・カリスマって何だらう？

そこは私が想像していたような、”魔の世界”といつ肩書きには全く及ばない、ただの静かな世界だった。

元の世界と違わない風景。緑が鬱蒼と覆い茂る空間が私を優しく包む。

お兄さんは景色が変わらなかつた事に若干氣落ちしているようだが、私からしてみれば自然是揺り籠に近い。生まれてから共にあつた自然。これほど私を落ち着かせてくれる存在もそうはないだろう。

そんなことを思つていると、お兄さんとお姉さんは田線で何かしらの合図を取る。

どういった内容なのかはまだ数時間しか一緒に居ない私が読み取ることなど不可能であり、首を傾げるのも当然のこと。

そのことについて問い合わせよつとした瞬間に、私は温かいに温もりに包まれた。

もう訳がわからない。

「舌、噛むなよ？」

本当に訳が解らなかつた。

お兄さんは私の腕を取り、そのまま地面を滑空する。普通ならこのような森でそのような速度で飛翔してしまえば皮膚はおろか、身体を深く傷つけるのだろうが、どうしてか私の身体は傷一つ付くことはない。反対にぶつかっている木々の枝が折れてしまつほど。

妖怪であるお兄さんたちならばまだ理解出来る。しかし、どうして私がまだが。まさか”魔界”に来たせいで私の身体能力等が向上したとか？ それこそまさかの話だ。どうせ、先ほどの温もりが原因か。あが私の身体を保護するよつこの役目を果たしているのだろう

う。

考えるのも馬鹿らしくなり、私は一度疑問を捨て置き、この今を楽しむことにする。

「速い速い～っ！　凄いねっ、流石は大妖怪っ！」

時折、お兄さんがお姉さんに進路を尋ねる。それと同時に辺りの影がうねうねと動くのが確認出来る。

多分だが、これが妖怪達が持つ固有の能力と言つ奴だろう。稀に人間でも持つてゐる存在がいるとか。

的確な指示を出すお姉さんに、その指示を疑うことなくキッチリと従うお兄さん。これだけの信頼関係を築くのに、いつたいどれほど年月を費やしたのだろう。

「もうすぐ

」

私もいつかこれだけの信頼関係を築けるようになつてみたい。

そう心に誓つた瞬間、眼前が開けた。

「これが

”魔界”……」

お兄さんの言葉は、この場に全員の心の代弁だっただろう。綺麗な碧の海。そう表現してもいいように、眼前に広がる大草原は美しかつた。

その光景に圧倒され、私は呼吸をすることすら忘れる。

「でも”魔界神”ねえ……。そんな大物がどこにいるのやう

その言葉で私は漸く正気に戻り、止まつたいた生命維持活動は開

始された。

酸素不足によりボオッとした頭に酸素を巡らせ、思考をクリアにする。

「”神”つて付くくらいだから……」

私はその言葉と共に雄大な大空を見上げる。
神と名のつく存在は大抵ヒトが届かない場所を住処にする事が多い……と私は思う。

事実、高天原などは雲の上に逢つたとされている。反して、地獄と言つ場所は地中深くに存在していると殆どの人間は想像している。その法則から則つて言えば、ここに存在する神も天か地のどちらかにいる、と思う。

だが、現実はそんな幻想を簡単に裏切るものだ。

「ねえねえ。私の名前、呼んだ？」

そんな言葉が聞こえた瞬間、私の身体は石になつた様に動きが封じられた。

封じられたといつても、お兄さんの袖を掴む私より幼い女の子が何かしたワケではない。ただ、彼女が内包する力に私が圧倒されているだけ。

妖力よりも力強く、それでいて靈力よりも神聖な力。それを人は“神力”と呼び、その少女はその力を馬鹿みたいに有している。それこそ、一撫ですれば私という存在が跡形もなく消し飛ぶほどに。初めてお兄さん達を見かけた時以上に自身の死を鮮明に夢想してしまう。

身体に力が入らず、ただ惨めに震えるだけしか出来ない。

お兄さん達は未だに平常に対応するが、私は人より、妖怪より感覚が鋭敏だ。だから、だから……

「……間違つてたら謝るが、あんたが“魔界神”か?」

「そうだよ? ちなみに名前は神綺しんきね。気軽に呼んでよ」

「……そうか。俺の名前は神威。それであつちで固まつてる金髪の方がルーミアで黒髪の方が靈花だ」

朗らかに会話を展開するお兄さん。

駄目、駄目だよ。その存在は……

「そうなの。それでだけど……」

その瞬間に、私は確実に死んだと思った。ただ彼女が内包する力の片鱗が外界に影響を及ぼし、それで、たつたそれだけで私は死を見（魅）せられた。

こんな圧力に蝕まれてているのなら、いつそのこと死んでしまった方が乐じやないのか。そんな死神の甘い誘惑が私を惑わす。

膝を付き、手を付き、頭さえも地に付きそう。歯を食い縛りながら周りを見渡せば、お姉さんが私と同じように歯を食いしばりながら、それでもなお自身の両の足で相手を睨み、お兄さんはいつもの澄まし顔。

これだけでも解る、私と他三人の圧倒的力量差。億劫となる思考の中で私は考える。

もしかすると、私はこの場に居てはいけない存在だつたのかもしない

「貴方達は“世界”からこの“魔界”にやつて来たわね? あの道を知つていて、尚且つその道を通れるのはそれなりの力を持つ

た存在だけ

「…………」

お兄さんは答えない、答えられない。

「貴方達はこの“魔界”へ一体何しにやつて来たのかしら？返答次第では」「

そして、彼女はその圧力に殺氣すらも交え、既に私は思考するという行為すら封じられた。

後はもう流れに身を任すだけしか出来ない。

「滅ぼさせて貰うわ」

その言葉と共に、隣に立っていたお姉さんも崩れ去る。残るはお兄さんとこの現状を作り出す一人だけ。

どうなるのか。このままなし崩しで先頭が勃発してしまうのか、そうではないのか。

一瞬だけお兄さんの瞳に交戦の色が宿るが、それはすぐに消える。代わりに宿つた光は決意の色。

戦うことで解決するのではない。本来ならば妖怪であるお兄さんが用いるべきものでない手段。それは本来人間が用いるべき手段。人類が生んだ、そして人類が生態系の王者として君臨することを可能にした、唯一にして至高の存在。

「俺は、俺達はあんたに会いに来たんだ」

それこそが“対話”。

弱肉強食ではなく、和を作ることを主にするものであり、そして

人間だけが使いこなせる最高の武器。

それを弱肉強食の世界で生きるお兄さんは使う。

「へつ……？」

だが、その手段を用いたからこそ、彼女から圧力は消える。

「“魔界”を荒らす気も、あんたと争う気も俺達にはこれっぽちもない。ただ、俺達は祥果の友達であるあんたに会いに来たんだ」「しょ、祥果の……？ なら貴方達は侵入者じゃないの？」

「ああ。ただ、俺達は祥果程の大妖怪に友とまで呼ばれる存在が気になつて、それで祥果に教えて貰つたんだ。そして」「

そして、その手段を用いたからこそ、お兄さんの言葉は彼女の胸に届いたのだ。

「俺達はあんたと友達になりにきたんだ……」

それから一悶着があつた。

それを説明するのは割愛するが、簡潔に纏めれば彼女 神綺ちゃんが幼児退行した。ああ、そうだ。この一言で済むだろ？

圧倒的強者の雰囲気を纏つていた神綺ちゃんは急にオロオロしだし、挙げ句の果てには泣きだしそうになるまで。

そんな姿を見たせいで私達が持つていた先ほどまでの彼女の印象は崩れ去つた。

今では捕食被食の関係でもなく、敵対する関係でもなく、一つの友達として枠に収まつた。

「それじゃ、行こうかつ！」

急なその言葉に私達は混乱するが、神崎ちゃんの言葉を聞いて納得する。

そして驚く光景。神崎ちゃんが宙に手を翳すとそこには私では読めない文字の羅列と幾何学的な模様が浮かび上がる。お兄さんはそれを“魔法”と呼び、神崎ちゃんもそれに頷いていた。

神崎ちゃんの言う通り、お兄さんは物凄く博識だと私も思う。横に居たお姉さんでも驚いた顔をしていたというのに、お兄さん一人だけが冷静。

そして魔法が組み上がったのか、空間が断絶され、一つの道が出来あがる。

流石は“魔界神”。いつも容易く私たちではあり得ない現象を起こしてしまうモノなのか。すっかり私は感心して神崎ちゃんにテンション高めで話しかけていた。

ただ、その時に浮かべていたお兄さんの表情が甚く気になつた

37・カリスマって何だらう？（後書き）

靈花主役の御話第四弾。いつまで続くのか、この話は〇・〇・〇
久しぶりの神綺の登場。それに伴いカリスマ（小）を発揮。それも
千数百文字で霧散する結果となりましたが（笑）

出来れば後一話。無理でも三、四話くらいで終わりたい。
流石にいつまでも靈花視点の話もなあ、と思う今日この頃。そろそ
ろ影が薄いと言われ始めそうな神威君にもスポットライトをあてた
げないと、ね？

38・決意（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

神綺ちゃんに案内されるまま連れてこられた場所は、私が住んでいた村では見られなかつた石造りの住居。

興味深い家の作りに私は興味津津で辺りを隈なく見渡す。石造りの家とはつまり洞窟と同じようなモノ。それを考へると隙間風などが入り肌寒く感じる筈なのだが、ここはそうではなかつた。反対に温かみを感じる。

不思議な造り。人工的に作られた温かさを感じながら、私達は神綺ちゃんに進められるままに椅子に付く。

神綺ちゃんはそのまま裏へと回り、お茶を入れてくる模様。その場でも私の興味は尽きず、お姉さんと一緒に周りに置かれている調度品に眼を奪わっていた。

土器のような、何かを入れておくよつた壺。何かの絵が描かれた絵画。誰かを形採つた人形等々。

「また難しいことを考へて……、どうかしたの？ 何か不安になる事でもあつた？」

そんな物に眼を奪われていた私は若干反応が鈍つていた。

「別に何もないさ。……本当にこれは悪い癖だ。無駄な事を神経質に、しかも深く考へてしまつ。……永琳の奴にも言われたつていうのに」

「もう少し神威も楽に生きたらいいのよ。ちよつと忙しくて忙しくるくらい」

「うにや？ 何か言つた、お姉さん？」

お姉さんが確かに私の名前を呼んでいたようだが、私には聞きと

ることが出来なかつた。

微笑ましいような表情で私を見る一人に、どうしてか氣恥かしくなり、私は何も気にしてない風を装い、調度品に眼を傾ける。

若干顔が赤くなつてゐるのをバレないよう一人から見えない位置の調度品に眼を向けていると、お茶を入れに行つてゐた神綺ちゃんが戻つて来る。

手にはお盆を持ち、その上には湯気が立ち込めるカップと、見たことのないお菓子。

初めて見る飲食物を恐る恐る口に運ぶ。

「美味しい」

飲み物の方は優しさのある甘さで口の中を癒し、食べ物の方は外はサックリ中は柔らかく、またこちらも甘い。

そんな言葉を零した私に、神綺ちゃんは母性ある笑みを浮かべてくれる。容姿こそは私より年下に見えるが、積み重ねてきた時間は私などとは比べ物にならず、まだまだ私が子供であると実感させられる。

少し遅めのお茶会が終わり、各自ダラダラ。

夕食を迎へ、お兄さんやお姉さん。それに私も手伝おうとしたけど家主である神綺ちゃんが却下。

仕方なく、それも渋々であるが私達は神綺ちゃんの言葉に納得し、ゆっくりと待つことにする。

結論から述べてしまえば、神綺ちゃんの料理の腕は破格だつた。明日から教えて貰おうかな?

深夜、たまたま寝付けなくて私は割り当てられた部屋を抜け出す。別に深夜に部屋から抜け出せば罰則があるわけでもないので、特に抜け出すなどと言つ必要もない。

「あれ……？ お兄さんと、神綺ちゃん？」

偶然出歩いた先に一人の影。

月明かりに照らされる二人は容姿もあつて幻想的に見えた。二人の手にはグラスと赤い紅い飲み物。それは血のようになじく、少しだけ恐怖感が私を襲う。

何かしらの会話をしているのだが、この距離からでは聞きとることが出来ず、かといってこれ以上近づけば私が此処に居ることがバレてしまう。

何も悪い事をしているわけでもないのだが、どうしてか素直に出て行くことも出来ず。

私は胸の内にモヤモヤを抱えたまま、自身が辿つて来た道の逆戻り。部屋に入り、ベッドにダイブし、そして眠りに付いた。

「靈花ちゃんはこいつの野菜を切つて、つここの盛りつけとおいてね」

「了解~」

「ルーミアちゃんは私のサポート

「任せておいで」

三人が入つても余裕がある台所。

そこで私達は今日の朝食の準備に取り掛かっていた。

こちらの世界に訪れて早十日。流石にずっとご飯などを神綺ちゃんだけに任せておくのは心苦しくなつた。だが、その旨をいくら伝

えようと神綺ちゃんは首を縦に振らない。最終手段として、私とお姉さんが神綺ちゃんに弟子入りした。勿論、料理関係の。

それにより、毎日の食事の手伝いをすると共に、神綺ちゃんが持つ料理の技術を教えてもらつたり、また各自で盗んだりしているといつワケだ。これならば流石の神綺ちゃんでも納得するしか選択肢はなく、苦笑気味に『ありがとう』と言われた。

朝食が仕上がる頃、お兄さんの日課となつている散歩からお兄さんは帰つて来る。

お兄さんは着実にこの世界にも根を降ろし、知り合いで幾人か作つたよう。あまり社交的ではない私は一日の大半を神綺ちゃんの家で過ごす。時たま、神綺ちゃんと一緒に食料の買い出しなどに出るくらい。その時に八百屋の元さんとは知り合いになつた。どうやらお兄さんもお姉さんもこの人とは知り合いで。

昼までは各自適当に過ごすことが多く、私も決まった行動は特に決めてない。お兄さんと遊んだりお姉さんと遊んだり神綺ちゃんと遊んだり。……遊んでばかりのような気もするけど、気にしない。ま、その中でも神綺ちゃんと過ごすのがやっぱり多い。今では神綺ちゃんとは親友のような仲までなつた。

昼食時なれば朝食事と同じように神綺ちゃんのお手伝いの為に私とお姉さんは台所に入る。
今日のメニューは私達の世界には存在しなかつたモノ。ホワイトシチューといつ名前らしい。

「鶏肉を手頃の大きさに切つて、ジャガイモ、人参、玉ねぎも手頃の大きさにね」

神綺ちゃんの指示通りに私とお姉さんは体を動かしていく。
テキパキと出される指示なので、私とお姉さんは特に戸惑つこと

なくスムーズに調理は進んで行く。

いつもして料理して思うのだが、~~置いた~~たはいいが、活かす機会が訪れないような気がする。未だ私達の世界では生産されていない食材を神崎ちゃんは使うことが多い、どう足掻いても再現することは不可能。もつと文明が進化すれば話は変わるが、今の時点では意味がないかな。

そんなことを考えていると、いつのまにか調理は終盤。後はお皿に盛り付けて行くだけだ。

「「「召し上がり」「」」

「いただきます」

三人の合作であるホワイトシチューにお兄さんのスプーンが掬う。人に料理を作つてあげたことのなかつた私にとって、この瞬間は緊張する。美味しいのか不味いのか。そんな疑問がつらつらと。だが、お兄さんの顔を見ていればそんな考えはすぐに吹つ飛んで行つてしまつ。本当にいしそうに、それで笑顔で食べててくれる。

「うん、やっぱり上手いな」

そんな言葉を聞きたくて。私達は頑張つて料理をするのだ。

その言葉こそ、私達が欲しい言葉であり、最高の称賛。

だから我先にとお兄さんの椀に御代りをよみがおうとするのだ。

幸せな日常。こんな幸せだからこそ、私は壊れることはないと思つていた。

けど

「といつ」とで、そろそろお暇するか

その言葉をお兄さんが何の戸惑いもなく口にした瞬間、私は地面が崩れ去つたような喪失感に襲われた。

「これから……帰る？　あの、優しさのない世界に戻らないといけないの？」

その光景を想像しただけで、私の身体は震えてしまつ。この優しさを、この温かさを経験した私にとって、この空間は手放したくない宝物になつてゐる。

「靈花は人間なんだからいつまでも居座り続けるのも問題だろ？」

問題じゃない！　そう声高に叫びたかった。

でも、私はそれを為すことは……出来ない。余りにも、お兄さんの瞳が純粋だつたから。余りにも、お兄さんの瞳には悲哀が籠つていたから。

だから私は小さく儂い抵抗しか出来ない。吹けば飛ぶ、そんな小さなモノ。やるだけ無駄と私自身も思う抵抗。

でも、抵抗しなければ私の中のナニカが崩れ去つてしまいそうだったから。

「私は別に問題ないんだけど……。どうせ家族もいないし……」

「それでも知り合いはいるだろ？」

「う、うん……」

「ならやつぱり戻らないと。いくらお前がそつ思つても一度繫がつた縁は決して途切れることはないんだ」

けど、返つて来たお兄さんの否定の言葉。

その瞳には私では到底測りきることが出来ない程の悲哀が込められていた。

体験したことのあるのだらう。想像を絶するほどの悲しみを。それを私に体験させたくないが為、お兄さんはそのような言葉を言うのだ。

だが、それは本当に私の為になるのだらうか？
この温もりを捨てるほどの価値は

「心配しないで？」

だが、私は馬鹿だつた。何も解つていなかつた。

「私達はもう皆お友達。 そう、大切な大切な友達。 何も心配する事なんてない。 霊花ちゃんが怖がつてのこと、私には良く解るわ。 けど、それは乗り越えなくちゃいけない。 私でも神威君でもルーミアちゃんでもない。 霊花ちゃん、貴方自身が乗り越えなくちゃいけない壁」

ああ……、私は本当に馬鹿だ。

何でこの場を離れるだけでこの温もりを一生手放すと思つてしまつたのだ。

この馬鹿みたいに優しい人達が、どうして離れて行くと思つてしまつたのだろう。

優しく俯く私の手を包んでくれる神綺ちゃん。

優しく私を見守つてくれているお姉さん。

優しく私が行くべき先を照らしてくれるお兄さん。

どうして私はこの人達の事を信じ切れなかつたのだらう。

「大丈夫。 霊花ちゃんならきっと出来る」

ああ。もう大丈夫だよ、神綺ちゃん。

私はもう一人で立てるよ。前を向いて歩けるよ。

だつて、私はこんなにも優しい人達に守られているから。

「なんたつて”魔界神”である私や”闇夜の王”であるルーニアちゃん、そしてその存在達と対等に渡り合う神威君のお友達でしょう？ そんな凄い存在の御友達なんだから靈花ちゃんもきっとやり遂げられるよ」

「 私、頑張ってみる」

そんな人達に恥ずかしい姿を見せてる暇はないんだ。

いつの日か、私はその横に対等に立てるようにな。私は進むよ。

涙は見せず、私は神綺ちゃんに別れを告げる。

それはつまり、一時的な”魔界”との別離。それでも、私は前を向いて歩くと決めた。

この世界に連れて来てくれた洞穴を潜り、そして

「 帰つて来たんだね、私達の世界へ」

見慣れた裏山の姿が、私の目に飛び込んできた。

靈花主役の御話第五弾。とうとうこの話も佳境に。遂に次で終了を迎えるか？

それにもしても、私が書くシリアルはどうしていつもシリアル（笑）になるんだろうか。やっぱりもつと人物の心理描写を増やすべきか。か文才が足りないのが根本的な原因か（笑）まあいいや。読者様達が楽しんでくれる文章が書けてるならシリアル（笑）でも問題ないはず！ww

PS・バレンタインネタはやらないことに。その代わりに、番外編をバレンタインの前日に入れる予定。本来ならバレンタインの日でも書けばいいのに、このまま予定通りに話が進むと13日からシリアル（笑）の話が入る為です。

途中に空気が壊れるような話を挟むのは私自身本懐じやないし、読者様達も萎えると思いますので。

ですので、13日は特別編をお送りします。内容は……ひつじ期待！かもしねないww

39・縁(えんじ)(前書き)

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

終にお兄さん達との別れの時。

名残惜しさは消えることなく私の胸の内に渦巻く。それと同時に
お兄さん達に泣き付く、付いていきたい衝動にだつて駆られる。
だが、それでも 私は選択した。声を掛けることはない。

神崎ちゃんに言つたように、私は頑張つてみる。

最後にお兄さん達を見つめる。網膜に焼き付け残すよつて、しつ
かりと、まるで今生の別れのように見つめた。

喉が掠れる。最後、最後に伝えるべきことは……

私は一人を見つめながら、今掛けるべき言葉を探し、止めた。
また出逢うのだ。それなのに、懃々特別な言葉など、この場に不
要だらう。

ただ一つ。次にまた出逢える」とを期待して

「 またねつ！」

私は走り出す。後ろを振り返る事は決してしない。もし振り返つ
てしまえば、折角決意した心が崩れてしまうだらうから。
だから……

「 またな」

その言葉が聞こえてきた瞬間、私の瞳から大量の涙が溢れてきた。
悲哀ではなく、歡喜。彼は約束してくれた。私と、私ともう一度
逢つてくれる。

走りだし幾時か。溢れ出た涙もいつしか收まり、今ではいつも通りの心理状態に落ち付く。

表情からも察せられることはないだろう。ただ、幾分瞳が赤くなつているのが気掛かりだが。

目指す場所は我が家。十日と少しも開けていたのだから汚れや埃が溜まつてはいるだろう。“魔界”から帰還したばかりなので休みたい居持ちも少なからず存在するが、汚れている場所で休息を取るのも気持ち悪いし体にも悪い。

疲れで休息を欲する身体に鞭打ち、私は空元気を振舞つて掃除をしようと決意する。

だからこそ、私は次の光景を目撃して眼を剥いた。

「巫女様っ！」

そんな大声を発し、私に駆け寄つて来るのは村の村長。その他にも大勢の村の人々が私の家の周りに佇んでいた。

何か問題でも起つたのか？ それとも妖怪でも出現したのだろうか？

そんな疑問を胸に抱きつつも、私は意氣揚々、いつも通りの天真爛漫な態度で村長に対応する。

「はえ？ どうかしたの、村」「どうかしたのではありませんっ！」
ふえ……？

駆け寄つて来た村長は私の身体を頭の天辺から爪先まで見渡し、そして

「御無事で、御無事で本当に良かつた……っ！」

私を抱きしめながらそう言った。

この時の私は大層混乱していたのだろう。どうしたことか全く理解出来ず、脳は伝達能力を失い、ただ成すがままの状態で呆然と突つ立っている。

次々と村の人々も私の周りに集まり、村長と同じ言葉を口づけに発し、中には涙流す人も存在した。

「えっと、村長さん……？」

「心配しましたぞ……。十日と少し前、急に巫女様が社から姿を消したことには、」

震える声で、村長の言葉は続く。

「あの巫女様にそう簡単に危険が及ぶことはないと私や村の者どもはわかつていました。ですが、それでも心は納得しなかつたのです」

「あの、話の道筋がよくわからないんだけど……？」

「……そうでした。巫女様はご自身がどれだけ村の者どもから尊敬されていたか知りませんでしたな」

「尊……敬？」

「ええ。確かに私共は幼い頃の貴方を見て人形のようだとか言つて不気味に思つておりました。これは覆しようのない事実」

そう、そのはずなのだ。

私は村の人達からは嫌われているはず

「…………ですが、巫女様の御婆様、博麗様が亡くなつた時から貴方は変わり、そしてその時から私達の貴方に対する考え方はずつと変わった」

「変わつた……？」

「ええ。貴方も我々と何一つ変わらない人間。そう、私達は思いま

した。ですが「

村長の独白は続く。

それを、私は真剣に、そして真摯に受け止める。周りの人達も誰一人言葉を発することなく、事の経緯を見守っていた。

「その考えすらも改めねばならない事件が起きました

「……私の力の発現、かな？」

「そうです。我々は人間、それも力無き人間です。故に力を持つ巫女様を一時期は畏れ、恐怖しました。その結果が、この社に巫女様を追いやること」

「……でもそれが普通の対応でしょ？ それに無理矢理住むとこを壊されたり、その場所を追い出されたりされなかつただけマシだつたと思うけど。事実、貴方達は私の為にこうして住む場所すら造つてくれた」

「そう言つて頂けると幸いです。ですが、本来ならばそういう対応に力在る貴方は反抗しても良かつた、いえ……する方が普通だつたのです。ですが、貴方はしなかつた

「

ああ、これがお兄さんが言いたかつたことなのかな。
これこそが”縁”^{えにし}。切れることがない、ただ一つの繋がり。

「それどころか、貴方は我々に笑みを向けください、そして我々を守つてくださいました。本来ならば滅ぶべき事態であつた妖怪の襲来などから、貴方はたつた一人だけで我々を守つてくださいました」
「け、けど……。それは私がそうしたかつたから。婆様が私にしてくれたように、私も誰かを助けたかつたから。ただの偽善であつて、私の自己満足にしか過ぎない行為だよ？」

「それでもです。我々に害にしかならない”善”よりよっぽど好意的ですよ、巫女様」

ああ、温かい……

これが、これが人の温もり。私が欲しくて悩まなかつた、たつた一つのモノ。

「命すら懸かっているというのに、貴方は何一つの見返りを求める
ことなく、私達を助けて下さいました。そんな御人を、そんな御人
をどうして我々が嫌う」とが出来ましょうか」

۲۰۰

ポロッ、と私の瞳から今日二回目の涙が零れる。

「巫女様、貴方は私達が敬愛する御人なのです。そんな御人が急に居なくなつて、私達は本当に心配したんですよ？」

「……………あアアアアアアアアアアアアツ！」

「スミマセン。これは我々にも問題があった。巫女様に信頼される

ことのなし振舞をしてした私達にも

違うつ！ 貴方達は悪くない

そう声高に叫びたいが、私の慟哭がそれを邪魔する。

「いえ、両方が悪かつた、そう言いましょうか。私達も巫女様も、両方悪かつた。信じ切れなかつた巫女様も、信じられなかつた私達も。……我々からしてみれば巫女様に何一つの過失はないのですが、ね。ですが巫女様は頑固ですから」

苦笑しながら、村長は私の頭を優しく撫でてくれた。
もう、勘定だ。私は二の動揺を止める二^トが出来ない。

「ですが、この言葉だけは送らせて頂きます

村長は私を抱きしめながら、優しい声色で、告げてくれた。

「今まで、本当にありがとうございました。貴方の御蔭で私達は生きているのです」

「「「「巫女様、本当にありがとうございました」「」「」「」

それに追随する村人の感謝の声。

ああ、私は本当に馬鹿だつたんだ。こんなにも迷惑されてるって言うのに、それを自覚出来ていなかつた。

これだけ愛されていたというのに……、本当に私は馬鹿だ。もし、あの時に私が帰るという選択肢を取つていなければ、私はこの温かさを一生得ることは出来なかつただろう。お兄さんはちゃんとこれ理解してて、私に告げてくれたに違いない。

ありがとう、お兄さん。

お兄さんの御蔭で、私は道を踏み外すことはなかつたよ。お兄さんの御蔭で、私は温かさを得ることが出来たよ。

本当に、ありがとう

それからはいろいろなことがあつた。

波乱万丈、二転三転、流転の時とは「いつに使うのだろう。

まず、何は変わつたかと言つと、私の村人に対する価値観が変わつた。

前まではただ婆様と同じように誰かを助けたいといつも満足しか持ち合わせていかつた私だが、今では自分の意思で彼らを助け

たいと思つようになつた。

私に温もりを与えてくれた彼ら。そんな力無き彼らを守りたいと、心の底から思えるようにあつた。

次に、村の人々の態度。

前までは恐る恐るだったのが、今では自然と私と接してくれるようになつた事。

そして最後に、私は現人神あらひとがみへと昇りつめた。

これは、本来ならばずっと昔からなつていなければ可笑しかった話だ。村の人達は昔から私の事を敬愛してくれていたのだから。しかし、その敬愛を私は全く無自覚で過ごし、そのせいで現人神あらひとがみへと至れなかつた。だが、先日の出来事により、私は村の人達の温もりと敬意を知つた。その敬意は信仰となり、私を現人神あらひとがみへと昇華させたのだ。

元々、神になる方法は他の存在より信仰を集めること。これを成し遂げられるのならどのような存在であろうと神へと至れる。ただ他の存在から信仰を得るのはよっぽどのことがなれば不可能なことで、私みたいに神へと至れる存在が少なかつただけに過ぎず、私が特別というワケでもない。

私が現人神あらひとがみに至つた事により、私が住んでいた社も改修され、今では立派な神社へと建て替えられた。

それと同時にその神社には名前が付けられることになり、その名前の案は私が提案した。

「この想いをくれたのは婆様です。だから、私は婆様の名を受け継ぎ、その名をこの神社に宿します。そして永劫その名が続き、この地を安寧の地へと守れるよう、私、そして新たな巫女によつて守れるように」

その結果、私の名は博麗靈花となり、私が祭神となつたこの神社には博麗神社と名付けられた。

つまり、私はこの神社の祭神となつた御蔭で巫女で居続けることは出来ず、新たに巫女を迎えた。代々この地と神社を守つていく、守護者。それがこの神社の巫女の役目。

あらひとがみ
現人神へと至つた私は人間でありながら神であるという矛盾を孕んだ存在へと変化した。

それは老いることがなく、靈力の他に神力も扱えるようになったことも意味している。これ以外にも変化したことはあるのだろうが、如何せんまだまだ自分の事を理解し切れていない。

ただ、私は漸くお兄さん達の隣に立てるようになつたと思う。力が無く、何一つ理解していなかつた小娘はもういない。ここにいるのは、自身の本当の大切なモノを見つけた、一人の人間であり神様なのだから

ちょっと展開が早すぎたかな、と思わないでもないですが、よつやく靈花主役の御話も最終話をを迎えることが出来ました。

うん、やつぱりシリアル(笑)になりましたね。

ま、これでいいや。書き直すのも面倒……といつより、この話を書き終えたのが深夜4時前、早朝4時と言つても過言ではない時間帯。もう眠いよ……。r_n

もう少し踏ん張つて、次からの予定を少し。

次の話は漸くこの時代の主要人物大集合の御話。約一週間は靈花主人公でしたが、漸く主人公は神威君に戻ります。

神威、ルーミア、祥果、靈花、神綺が揃う初めての宴會。それが次の御話。

そして、ラストへのカウントダウンもすぐそこ。この時代もようやく終盤戦へと突入します。急展開な事態へと迎える五人は、どういった決断を下すのか。

それを緊迫感とともに伝えきれば、私としては幸いですね。

40・羨望した願いは “五人”での宴会（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

俺は目的地へと足を伸ばす。

今回の目的地は祥果が根城とする妖怪の山。今日は底で宴会が行われる予定なのだ。参加者は“五人”。

俺やルーミアや祥果は勿論のこと、十数年前に別れた靈花や神綺も一緒に、だ。

神綺とはあれから顔を合わせたことはないが、靈花とは数度顔を合わせた。そして驚いたが、まさかあいつが現人神へと至っていたとは俺もルーミアも思いもよらなかつた。

話を聞くに、どうやらあの別れの後に村の人達の温もりや敬愛を知り、それを経て現人神へと至つたよう。

偶に顔を出せに行けば、天真爛漫な笑顔は失われず、今はあの地を守る守護者、靈花に変わる巫女の育成に励んでいるようだ。自身はあの社の祭神となつてしまつた為、その祭神に仕える巫女が居ないのは問題らしい。というより、あの社つて最初は形だけだつたんだな。そのことに一度吃驚したな。

まあ祭神という重要な役割に付いたため早々に遊んだりすることは出来ないようだが、もうすぐ新たな巫女の育成も済むようで、その育成が済めばもう少し伸び伸びと過ごせるようになると笑顔で話してくれた。

今回の宴会は特別に村から離れることを容認されたらしい。社に自身を一時的括る依り代を置き、それを目印に転移の準備をしてくるからこそ容認され来れるようになつた荒技だ。

神様は基本的に社に自身を括るらしいが、自由奔放な靈花には性に合わないのだろう。だが、今回は特別ということで一時的に置くことによってそれも解決した。

俺とルーミアは基本的に昔と変わらず。西へ行つたり東へ行つたりとそこかしこを巡つてゐる。

時たまルーミアが一人になりたいと申し出るときだけは各々の個人行動を取るが、基本的には一人一緒に常だ。

それを申し出る時のルーミアの表情が甚く気になるが、話していくのだからには踏め込めない領域。モヤモヤとした感情を抱きながらも待ち続ける他ない。

祥果は常変わらず。自身の根城で毎日宴会騒ぎのようだ。偶に顔を出せばいつも顔を赤くし、口からは酒気が漂う。若干周りの鬼達が辟易としているのが印象的。

神綺がどうしてかは解らないが、彼女もそう簡単に変わることなどないだろう。神綺への連絡は祥果が送ったようで、俺は関わっていない。祥果が何も言わない所を見るに、神綺も特に変わった事はないのだろう。

「今日の宴会は楽しみなのは楽しみなんだが、そこはかとなく嫌な予感がするんだよなあ……」

腕にベッタリと引っ付くルーミアはそこまで酒癖は悪くない。勿論、鬼である祥果は言わずもがな。

だが神綺、それ以上に靈花はどうだ？ 二人とも容姿だけで判断すれば、まあ酒に強そうに見えない。特に靈花なんかはまだ子供。神綺は外見に似合わず年月を重ねてるが、靈花は外見通りの人間しか過ごしていない。そんな子供が酒を呑めばどうなる？

……間違いなく、俺の黒歴史（永琳の御乱心）の再来だ。

若干憂鬱になりながらも、足取りはそれに反して軽いものだ。やはり、それほど彼女達に逢うのが楽しみなのだろう。

横に居るルーミアの表情にはそれがありありと現れ、そのうち鼻

歌すら歌つてしまつそつなほゞの陽炎^ハ。

「セレ、もう誰か着こてるかな つと」

目的地である妖怪の山の頂。

その場にいたのは主である祥果。そして

「あ、お兄さんとお姉さんつー！」

「よつ、靈花」

「久しぶりね、靈花」

勢い良く俺の身体にしがみ付く現人神^{あらひとがみ}。

黒曜石の髪が煌き、その容姿はあの頃から変わらな^いまま。頭一つと少し小さいな身体は俺の胸辺りにぶつかる。

クシャクシャと一通り撫でてやると靈花はつにゅーと猫のような鳴き声を上げ、身体を離す。

「その様子だと祥果とは仲良くなれるようだな？」

「うんつー！祥果さんもお兄さん達と一緒に優しいし、お母さんのような感じがするからつー！」

「まあ妾も母と言えば母じやが……」

「そう恥ずかしそうにしなくていいじゃない。こんな良い娘は早々いないわよ?」

ルーミアも俺と同じように祥果の頭を撫でてやつてこむ。その姿は最早愛玩動物に近いか。

実際、靈花の印象は小動物に近いので、やつ捉えても左程問題ではない。

「ま、まあ一人ほゞ娘が増えたといひで問題はないがの」

そんな恥ずかしそうな祥果の姿は新鮮に感じる。

「あら。靈花ちゃんは私の娘だよ?」

虚空の歪みの先から聞こえる声は、十数年ぶりに聞いた声。

一つの世界を創造し、その世界の神であり、その世界で母である存在の声だ。

「神綺つ!」

「久しふり、神威君。ルーニアちゃんも久しふり」

「久しふりね、神綺」

「祥果ちゃんも久しふり。」
「ひして顔を合わせるのは何年ぶりかしら?」

朗らかな笑みを浮かべ、”魔界神”神綺はここにいる存在全てに声を掛けて行く。

窮地の友である祥果と神綺は気の置けない相手にしか向けない笑みを浮かべ、会話の風呂敷を広げる。

「さあのお。妾は年月など気にしたことなどないから。やうじやの……、数千年ぶりというくらいじゃの」「やつぱりそのくらいになつちゃうか……」

二人の顔に浮かぶのは苦笑。よしんば、共にそう簡単には拠点から離れられない二人だからこそ浮かべる表情だ。

流れ者である俺やルーニアでは到底浮かべることは出来ない。

「といつよつ靈花ちゃん。いつのまにか」

神綺は靈花の変化に気付き、驚いた。

それを靈花が手短に、それでいて解り易く説明する。その説明が終わると、神綺が零した言葉は

「頑張ったね……」

そう優しく声を掛けて靈花を抱きしめる。

あの時、あの言葉を投げかけ、靈花はそれをしつかりと成し遂げた。それに対する労わりとちゃんと乗り越えられたという安心感がそこにはあった。

あの頃の靈花は確かにそこに存在したが、それは存在していただけでどこか脆く崩れそうだった。

話を聞いた今だからこそ解るが、あの頃の靈花は他者の温もりに飢えていた。たった独り、孤独と戦かいながら生きていた靈花にとって、俺達との出会いは初めての温もりとの出逢いに等しかったのだろう。だからこそ、あの別れ際にあれほど取り乱したのだ。

「うん……。私、頑張ったよ。それで、やっと欲しかったモノが手に入ったの……」

「うん、うん。靈花ちゃんは頑張ったね、偉いよ

だが、それすらも、孤独すらも靈花は乗り越え、温もりを得ることが出来た。そして、靈花は村の人達との繋がりを得た。

それは疑うまでもなく成長だ。確かに、それでいて正しい成長。

俺達三人はそんな一人の光景を優しく見守っていた。
温かな光景、温かな安らぎ。それがここにはある。

「よしつ！ 湿っぽいのはここまでじゃつ。今日は田出度い宴会。涙は不要で、在るべきモノは笑顔のみ！」

パンと祥果が空氣を変えるように手を打つ。

それと同時に優しげな風が吹いた。多分、祥果が”祓いを扱う程度の能力”でこの場を空氣を清め、本当の意味で空氣を変えたのだ

う。恥ずかしそうにはにかむ一人は本当の親子のように錯覚してしま

うほど。

「さあ、今日は無礼講じやつ！ 朝まで騒ぐぞつ！」

次々と運び込まれてくる酒、酒、酒。それと同じ量の料理。酒は酒樽に積み込まれ、その酒樽が山を築きあげるほど運び込まれる。

「乾杯の音頭はお主に任せんぞ、神威」

「ああ つて、俺かよつ！？ タクツ……」

普通に返事した俺もあれだが、いつも何食わぬ顔でバスする祥果も祥果だ。

若干呆けつつも、任されたた仕事はキッチリと成し遂げてやろう。折角初めて”五人”が出逢えた日出度い日なんだ。締めるとこうは締めなくては。

「 ”五人” が再び相見えたことに、乾杯つ！」

「 乾杯つ！」

五人の声が揃い、手に持つ盃が掲げられた。

その五人の顔には、皆等しく笑みが浮かんでいた。

予定では宴会の話は一話で締める予定が、いつのまにか一話構成へ変更。このまま一話に収めても良かつたんですが、そうすると文字数が普段の一倍以上になりそただつたので断念。その御蔭でこの話はいつもより文字数が少ない仕上がり。

まあ前話、前々話が普段より文字数が多かつたので良しとしましょう。

ですので、繰り上げて番外編は14日、完全にバレンタインネタの代わりとなります。まあ元々バレンタインネタの代わりに上げる予定だったので気にしない、気にしない

にしても、漸くここまでやつて来ることが出来ました。

これを超え、最後のイベントとなせば原作キャラ登場まで眼と鼻の先になります。

新たな章の展開はちょっととずつ考えています。最初に出す原作キャラも決まりました。ただ、間違いなく色んな所から非難が飛び交う気もしますが（汗

余りにも酷いようだとしたら訂正しますけど。

ま、なんにせよこの『放浪の時代』もようやくラストスパート。このまま最後まで突っ走ります！

4.1・予想通りの展開。そして 既に賽は投げられた（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

41・予想通りの展開。そして 既に賽は投げられた

ドンチャヤン騒ぎ。

誰もが騒ぎ、酒を酌み交わす。この場に居るのは多種多様な種族。本来交わることなどあり得ない、人、妖怪、神の三種が互いに笑顔を浮かべ酒を酌み交わしていた。

次々と運び込まれてくる酒や料理をそれぞれが持つ胃袋の力を遺憾なく発揮し消し去り、笑顔を絶やすことなどない。

座席は既にバラバラ。宴会の始まり当初は、俺が音頭を取ったことにより俺を中心に据え、その左右にルーミアと靈花が。真正面を半分に割り、その左側に祥果、右側に神綺と座っていた。だが、今はどうだ？ 俺の横にいるルーミアは変わりない。ああ、これだけが変わつてない。

靈花は俺の膝の上に座り、猫のような鳴き声を上げながら摺りつき、神綺が最初に靈花が居た場所に陣を取る。祥果は祥果で俺と靈花の向かい側。靈花が壁となつてるのでそこまで近く感じないが、靈花がいなければ密着しているだろと言つほどに身体を寄せている。

予想通り、混沌カオスだ……

「お兄さあ～ん」

「やつぱり靈花にはまだ酒は早すぎたか……？ いや、普通に考えて、鬼の酒を呑ましたのが間違いか」

「そりやの。いくら現人神あらひとがみと言えど、肉体を構成する基はヒトのそれと同じじや。人間が妾たち鬼の酒を呑んでどうかしない方が可笑しいというもの」

完全に酔っぱらつて居る靈花の対処をどうしようか迷いつつも、

小動物のような靈花を手放すには少し惜しい。

頭を撫でてやれば喉を鳴らして喜ぶその姿は、気儘な子猫。

「ふふつ、可愛い子猫ね……」

皆が皆、今の靈花を可愛がる。元々そういう性質が強かつた靈花だが、今では完全に愛玩動物と化していた。

「いいなあ。ねえねえ神威君つ、私も撫でて撫でて」

「……性格が崩れてるぞ、神綺?」

「お酒のせいってことだつ。さあさあさあつー」

そう言つてにじり寄る神綺からは鬼気迫るモノが感じられる。マジで怖え……。俺自身の言動が崩れるほどの恐怖を感じるぜ。だが、如何せん俺は身動きが取れない。膝の上には靈花が、横に座るルーミアがその光景を面白がり腕を取り、じりじりとにじり寄る神綺がルーミアと逆方向から進行する。

……苦心する俺。別に頭を撫でるだけなのだからやつてやればいいじゃないかと思うのが多数の意見だろつ。俺自身、もし神綺が平常心を保っていたのならすぐさま実行している。だが、今の神綺はヤバい。何がヤバいつて眼がヤバい。俺が恐怖を覚えるほどヤバい。もつと詳しく言えば喰われそう。肉体的な食人嗜好ではなく性的な意味で。

にじり詰める神綺との距離は既になく、肩が密着し、顔に吐息が掛かるほどだ。

幼い容姿をしていながら、纏う霧囲気は熟れた美女が纏うそれ。酒のせいか少しだけ涙目になつているその瞳と、掛かる熱い吐息が俺を魅了する。が、俺は顔を引き攣らせるしか出来ない。手段は最早一つしか残されていない……か。

「はあ……、ほり」

「えへへ~」

「可愛いのは可愛いんだけど……、身の危険を感じるのはどうよ~。」「いいんじゃない? ほら、私もお願いね?」

「はいはい。わかりましたよお姫様つと」

神綺を撫で、それを見たルーミアが同じように催促。

抵抗するのも馬鹿らしくなってきたので俺も普通に対応してやる。どちらも撲つたそうに、それでいて気持ちよさに眼を細めた。

両手に花。いや、四人いるし両手足に花とでも言つべきか。……

語呂が酷いから楽園でいいや、面倒臭い。

撫でてやるのは結構なのだが、そうなると両手が塞がつて飲み食いが出来ない。

靈花は既に俺の膝の上で包まり、気持ちよさそうに寝転んでいる。^{くね}時折近くに置いている皿や盆に手を付けたりしていた。料理や酒自体は周りの鬼達が運んでくれていいし。

横に引っ付くるミアと神綺は自分達は撫でて貰いながら空いている両の手で手を付けていた。

俺だけが……食えない。

「ふむ、仕方ないの。ほれ、口を開けんかい」

そんな心情を察したのか、祥果が箸に摘みを掴み、俺の口元に運んできた。

「……流石に恥ずかし過ぎるんだが?」

抱き付かれるのも撫でるのも仕方なくではあるが許容範囲だ。

だが、だが所謂”あーん”は駄目だろ？ とか無理だろ？

祥果の方をチラリと覗きこんでみると、これまら面白そつた顔でニヤケニヤケ見ている。間違いなく俺の今の現状を楽しんでいた。

「だが食べられんことは事実じゃ？ それとも口移しの方が神威の好みじゃったかの？」

「くちうつ？！？ ……頼むから心臓に悪い冗談はやめてくれ。本気で心臓が止まりかけた」

「ん？ 妾は神威なら別に口移しなど構わないんじゃが？ それとももつと濃厚な奴の方がよいかの？」

「……俺の負けだ」

酒の席での祥果には勝てないと今日悟った。いや、前から薄々とは気づいてはいたが、いつまで前面に押し出していくと気がなかつたから油断していた。

俺は恥ずかしいの我慢し、祥果が差しだす端に口を寄せ、そのままその摘みを口に含む。横にへばり付く一姉は向やら嬌声を上げているが無視。

咀嚼するが、恥ずかしさのせいでイマイチ味が解らなかつた。

「どうしたかの？ 顔が幾分赤いようじゃが？」

「……酒に酔つたんだよ。断じて、断じてさつきの行為が恥ずかしかつたわけじゃない」

「ククク、それはすまなんだな。ほれ」

「ふう」

笑いながら差し出される盃を嚥下していく。

若干口から零れ服を汚すが、どうせこの気流には清浄の概念を付加してあるから、一日の終了と共に自動的で綺麗になるので問題ない。

「ああ……、俺の予感はやつぱり当たるもんだな」

苦笑氣味に、俺はそう呟いた。

いつしか靈花が寝息を立て始め、俺達の声量も共に小さくなる。俺の膝の上で包まるように寝ている靈花は本当に幸せそうだ。気持ち良さそうに寝言も漏らし、四人を微笑ましい気持ちにさせてくれる。

年長者である集まり。この四人は間違いなく世界に存在する妖怪たちの中で頂点に立つ存在達だろう。

”鬼子母神” 詞梨母 祥果。

”魔界神” 神綺。

”闇夜の王” ルーミア。

そして、俺こと神威。

万を年月を生きる最強に近い存在達。神綺を妖怪の枠に加えるのはどうかと思うのだが、神綺自身が自分は妖怪に近い存在と述べていたので加えても問題ないだろう。

月日さえ経てばこの輪に”現人神” 博麗 灵花が加わるだろうか。こんな化物級の存在に勝てそうな存在など、俺からしてみれば永琳くらいしか思いつかない。

永琳のことをふと思い出し、俺は空を見上げた。

今宵は朔。現代風に言い表すのならば、それは新月。仄かに照らす月明かりがない今、この場所を照らしているのは松明だ。

時たま、俺が月を見上げるといつも朔の日だつたり雲が懸かつたりと、まるで世界が俺と永琳の再開を邪魔しているように感じられる。

あれから幾程の年月が経つただろう。永琳は元気だらうか。最近はそんな感傷的な気分になり易い。それがこんな目出度い宴会の席であろうと例外ではない。

どうしてだろうか。胸がざわつく。

第六感、虫の知らせ、英語風に言えばシックスセンス。言葉では言い表せない”嫌な予感”が拭えない。

周りを見る。

そこには幸せそうな靈花、嬉しそうな神綺、楽しそうな祥果、見守っているルーミア。

俺の、俺の大切な存在達。

俺は守る。今度は誰一人として欠かすことなどさせはしない。祥果も神綺も靈花もルーミアも。皆、俺の大切な存在だ。絶対に繫いだ絆を離させたりするものか。

寝静まつた四人の寝顔を見て、俺は見えない月　永琳に誓つた。大切な存在を泣かすことなど一度きりでいいのだから。

そしていつか、この五人の中に永琳も混ざり”六人”で騒ぎ合いたい。それが俺の小さな願いだ。

「持つて千年といつとこりかしら……？」

誰もいない暗闇の森の中で膝を付く。

何か特別な激しい運動をしたワケでもないのに、私は息が上がり

肩で息をしていた。

ゼエゼエと、込み上げる不快感を無理矢理捩じ伏せる。洩れ出す

”闇”を強制的に従える。

この症状 いえ、私の身体が壊れ始めてどれほどの時間が経過しただろう。今までそれを精神力だけで何とか抑えることが出来た。だが

「 それも終わりに近いわね……。対処法は依然と見つからないまま。手詰まりね……」

いや、最終手段に近い手段は残つている。それも、私をこの世から消滅させる”以外”の手だ。

だが、その手段も絶対に成功するという確信がある筈もなく。また、その成功率を上げるための布石も打つことも出来ず。

一生に一度きりの出たとこ勝負というのに懸念が残る。だが、私が思いついた策でこれ以上の上策は無く、またこれ以外に有効な手立てがなかったのも真実。

あの四人が手伝ってくれさえすれば心配はない。後は私が無理矢理掌握してしまえばいい。もし失敗してしまったのなら、私をこの世から消滅させるという保険も残せるのだ。

だが、あの四人にどれだけ泣かれたり怒られたりするかは解らない。

靈花は泣くだろう。あの子は優しい子だから。

祥果は笑うだろうか。鬼だし『分の悪い賭けは嫌いじゃないわい』とか言って、ね。

神綺は励ますだろう。あの子、いえあの人には根つからの母親だから。

そして

「 神威は怒るでしょうね。誰よりも優しいあの人は。 ”闇” の化物でしかなかつた私に”光”を魅せてくれたあの人は」

私は知つてゐる。

あの人は一度大きな喪失をしたということを。聞いた訳でも能力を使って知つた訳でもない。

ただ、偶に面に現れる表情が雄弁に物語つているもの。そんな悲しみを経ても前を向いて歩いたあの人は本当に強い。

「 そんな人に 私が最初で最後に愛した人に私自身が悲しみを与えないといけないなんて……」

”光”を与えた私が、与えてくれたあの人に”闇”を与えないといけないなんて。
どれほどの皮肉と言うのだ。

「 もしこれが決まり切つた運命だつたのしたら、私はこの運命を作つた神を恨むわ。いえ、もし出逢うことがあつたのなら……私の手で葬り去る」

だが、もう四の五も言つていられない。
決断を下すべき時間はもう近い。

迷つてはいられない。彼の怒りを受けたくはないが為に、この世界を崩壊に導くわけにはいかないのだ。

「 恨んだつて構わない。でも、それでも私は貴方を 神威を愛し続けるから」

漆黒の羽をもつ美女は決断を下した。

自分の身と引き換えに 世界を救うと。
自分のせいでの自身が愛する存在達が住まう世界を壊させたりはない、と。

参加費アンテイは巻き込まれた原初種の四人と一人の人間の決断。
賭け金ベッドは原初種の一人の命。

チエックパス（パス）も辞めるも上乗コールせも吊上げレイズも出来やしない。
既に終幕ショードウを迎へ、後は流れに身を任せるだけ。

世界の前に屈服するか、それとも世界を屈服させるか。
それを知る者は誰もいやしない

4.1・予想通りの展開。そして 既に賽は投げられた（後書き）

これにて宴会編も終了。

明日は番外編か。内容はギャグ系統なのでシリアルス前最後のギャグになるのかな？

それが終わればシリアルス（笑）に入つて、最後に閑話を挟めば終了。終わりの秒読みも近い。

話に変わりますが、神威の一つ名みたいのはどうしよう……

考えはあるんですが、どうも語呂が悪い気がして使う気がorz
その一つ名も使う機会はまだまだ後なのでそこまで悩む必要はない
のですが、いざ必要となつて考えてなくては困りものですからね。
ということは、何かいいアイデアはないですかね？

番外編1 ある日常の一幕。それは俺の黒歴史（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

番外編1・ある日常の一幕。それは俺の黒歴史

今日は2月14日。

つまりは世の男性諸君が自身のプライドを懸けて一日を戦う日です。通称“血のバレンタインデー”。

女の子からチョコを貰つて一喜一憂する、明らかにチョココレート会社の陰謀ですが、それを理解していてもその戦いに身を投じてしまうのは男の性でしょう。

ちにみに私の戦績は母親から一個、実姉から一個、従姉一人から一つずつ、リア友から三つ、ネトゲ友達からオングで十数個。……十分な戦績ですよね。前半後半はカウントされることはないでしょうが（笑）

話は変わりますが、その為に今日の内容は前々からお知らせしていたように番外編です。

時系列は考慮していません。ただ、永琳分を攝取していなかつたのでその補給。

内容としては悠【JUNS副代表】様が提案して下さったものです。稚拙な内容ですが、今日といつ日をこの小説を読んで楽しんで頂ければ、幸いです。

PS・本編には全く関係しないモノなので読まなくとも大丈夫です。

眼が 覚めた。

若干身体に違和感を覚える俺だが、特に体が不調を訴えるワケでもない。寝ていた部屋がいつのまにか違う場所に來ていたとかでも

ない。

だが、確かに俺は違和感を覚えた。

疑問を胸に残しつつも、いつまでもこの疑問に暇を取られているわけにはいかない。

今日の朝食の当番は永琳。時刻は自分の体内時計を信頼するのならば、毎朝の朝食予定十分前という所。着替えをする必要はない。元々、俺は寝る時もこの世界に存在した時から俺と同じように、俺の身体の一部のように纏っている黒の気流しを着用しているからだ。だから俺がこの朝の時間にこなさなくてはならない行為は洗面のみ。

その為に洗面所に向かう行為は当然のこと。勿論、俺もそれに従つて洗面所に向かい、そして

「~~~~~つ！？！？」

見つとも無く、俺は声にはならない悲鳴を上げた。その声を聞き付けた、というより待つてましたと言わんばかりの表情で洗面所に突撃してくる永琳。間違いなく、永琳が俺の違和感の原因を作り、今現在俺がここまで悲鳴を上げることになった張本人だ。

「あらあらあら やっぱり良くな似合つわね、神威。“短いスカートは脚が細く引き締まつた神威に良く見える”わ」

俺の今の姿は永琳が言った通りのスカート姿。上はシックな灰色と模様が描かれたのタンクトップに薄手の青いライダースジャケット。

いつもの和風の姿ではなく、完全に“女の子”的姿をした俺がそこには存在した。

「神威つて力ある割に細いから身長の高いカツコイイ女性つて感じね。細マツチヨつて言うのかしら？ 極限まで引き絞られた肉体は一種の様式美を生むのね。それに顔も可愛い……とは言えないけど、カツコイイから綺麗とも言い変えられるし。やっぱり私の見立ては正解だつたわね」

「待て待て待て！ 何勝手にヒトの服を変えてんだ！？ というより永琳が着替えさせたのかよつ！？」

「そりやそうよ。流石にこんなことに手伝いの人間にやらせるわけにもいかないし」

何で俺はそれに気付かないんだよつ！？ 何だかんだ言つても俺は妖怪の中でも強者の部類の筈だろ？ しかも気配察知なんか部類は厳しい世界の中たつた一人で生き抜いてきた御蔭もあって得意分野のはずなのにっ！

そんな俺から一切気配を感知させず、あまつさえ身体の接触や震動等々あるはずなのに気付かせないってどんな魔法だよ？

「流石の私でもそこまで器用なことは出来ないわ。単純に貴方が昨日飲んだハーブティーに短期即効性の睡眠薬を仕込んだだけよ」「それは間違つても“だけ”で解決出来る問題じやないからつ！ 何でお前は同居人に薬を仕込んでんだよ……」

「理由は言つたでしょ？ 私がただ単に貴方の女装姿を見たからに決まつてるじやない。あ、貴方の裸は綺麗だったわよ？ それはもう抱き付いて食べたい位に」「……もう死にたい

鬱だ……

最早俺には着替える気力もなく、ただただその場に呆然と突つ立つている選択肢しか残されてはいなかつた。

億劫となる思考の下、最後に覚えていたのはそのまま朝食を永琳と一緒に食べている光景だつた。…………着替えないまま。

「ああ……、お茶が上手いな……」

縁側に座り、俺は永琳が入れてくれたお茶を啜る。

それにしても、本当にこの家は何なのだろうか。洋風の外観の造りの癖して、内観は和洋折衷。まさか誰も洋館の屋敷の中に日本庭園があるとは思わないだろう。俺も思わなかつた。

ちなみに、現在の俺の姿は未だに女装姿のまま。無論、俺に女装癖がある筈もなく。単純に着替える気力が出ないだけである。無気力、脱力、倦怠、虚脱、色々な負のオーラが俺を覆う。

「現実逃避をいくらしたところで現実には変化が及ばないわよ？ 何しろ幻想から逃げてるのだから」

「逃げてる訳じゃない。……ただ幻想の方角に全力疾走してるだけだ」

「それを世間一般的に逃亡」というのだけね
「……もう完全に鬱入つたわ」

口調も崩れ、縁側でダレる。

生まれて此の方スカートなど穿いたことは当然なかつたので下から入つて来る風に気持ち悪さを感じる。

「そんな脱力した神威も私は好きよ」

「……どうもありがとうね。はふう」

「フフフ……。ちょうどいいから髪の毛も弄りましょが」

「……もつ勝手にして」

少しの間、永琳は俺の元から離れどこかへ行く。言葉通り俺の髪を弄る為の道具を自身の部屋に取りに行つたのだろう。

俺はもう流れに身を任せることにして、ただただ縁側に寝そべつていた。

数分すると永琳は両手に様々な道具を以て帰還を果たす。正直、今日に限つてだけ言えば来てほしくはなかつた。

「ほり、ちゃんと座つて。体重は私に倒しちゃ黙日よ?」

「……了解

結局一日中、俺は永琳に玩具にされていたことは言つまでもない。勿論、風呂に入る時に服を全て脱ぎ、寝巻は何時もの氣流しに戻したことも同様に、だ。

番外編1・ある日常の一幕。それは俺の黒歴史（後書き）

完全にギャグ回と化したこの御話。

上でも紹介したように、今回の御話は悠【JAZ副代表】様がネタを出して下さった『女装』です。

神威の容姿はうん、何て言うんだろうね。説明するタイミングを逃して結局皆さんの想像にお任せみたいになつてますね。私の妄想では鋼のレギオスのリンテンスを若くした感じかな。あの髪色を黒に変えて気流しを着せたのを想像してください。それで大丈夫なはず……（汗）

原作キャラはイメージしやすい分、オリキャラは私の拙い文だけで説明せねばならないので些か困ります。誰か絵でも書いてくれないかなあ……。友達に頼んでみるか？

今回はハツチャケるのが目的だったので、いつもより執筆時間は短く済みました。というより、最近何故か深夜に執筆しているのであまり筆が進まないのが現状。眠気も相まってね。ですが今回はそんなことなくスラスラと執筆出来てストレスも溜まりませんでした。まあ書き始めた時間が早朝4時でしたけどねつ○る

残す所、あとはルーミアの伏線を回収して最後を迎えるのみ。量にして三日から一週間というところです。

……明日からずっとシリアス（笑）展開つてのも少し気が滅入る。

PS・ギャグって言つたけど、何かギャグじゃない。ただの日常だな。まあタイトル通りつてことで一つ（笑）

42・崩壊へのカウントダウン（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

宴会からまた幾分の時間が経ち、俺達は各自の生活へと戻つて行つた。

祥果は妖怪の山での呑んだくれ、神綺は魔界の統治、靈花は巫女の育成、並びに村の守護、そして俺とルーミアが放浪の旅。

しかし、この数百、いや約千年間はルーミアと共に行動してない。どうやら何かを成し遂げたいことがある模様。

仕方なく俺は一人で北は渡島国、南は薩摩国まで足を伸ばしてみたり。その道中で幾人かの知り合いができ、今回の旅は中々に満足いく結果となつた。

そうこうしている内に、俺達五人が出逢つてから太陽が365000日がもうすぐ経過する。もつと詳しく言いなおせば千年が経過する。

”千年祭”、そんな名前を付け、俺達五人は久しぶりに妖怪の山に集まつて皆で記念日を祝おうと計画を立てた。

勿論、それは他の五人にも既に連絡し、既に了承を貰つている。後は”千年祭”の当日を待つばかり。日数で表せば30日後と残り僅かとなつた。秒読みは既に数え始められ、久しぶりに出逢う四人に俺も胸を躍らせながらその日を迎えるのを待ちわびていた。

だが、不可解にも一本の連絡が入る。

それはルーミアからの言伝。内容は単純で、”千年祭”を迎える前に一度顔を見たいといつ。どうせすぐに見られるのだからそれはどうかと俺や皆も反論したのだが、何やら切羽詰まつっていたのかルーミアは頑なに折れなかつた。

そうなれば後は俺達四人が折れるしかない。

渋々とだが、俺達は数日後、妖怪の山に集まる手筈となつた。

関係ない話だが、ルーミアとの意思の伝達は世界に存在する闇を媒介として機能される。

世界に存在する”闇”は全てルーミアにとつては身体の一部のようなモノ。それを用いて連絡をするというワケだ。その”闇”に向かって声を発すればルーミアに届き、反対にその”闇”に耳を澄ませばルーミアの声が聞こえるという。”魔界”には本来伝わらない筈なのだが、それは互いの世界に通じる道がない場合のみで、この世界と”魔界”には一本の道が繋がっている。その為に”魔界”的闇もルーミアは使役出来るのだ。どの世界の”闇”であろうと、ルーミアにとつてそれは”闇”に変わらない。

「それにしても、どうにも嫌な予感がする……」

多分その感覚はルーミアを除く四人が感じていたであろう感覚であり、そしてその嫌な感覚は現実となる。

築き上げたナニカが崩れる、断末魔の叫び声がハツキリと俺の耳には聞こえた。

俺がその場所に辿り着いた時には既に他の四人も終結していた。呼びだした本人であるルーミアは眼を瞑り木の凭れ、呼びだされた他の三人は困惑の眼差しでこちらを見る。どうやら他の三人が到着した時からあの様子らしい。

だが、俺がこの場所に辿り着いたことによりその均衡は破られた。そして、ルーミアが口を開き始める。

「まず最初に、我儘を言ってごめんなさいね」

真摯な謝罪。それはどうでもいい。

何だ？この途轍もない悪寒は。心臓は暴れ出したかのようにバクバクと鳴り、背中からは嫌な汗が噴き出る。周りの三人も同じなのか、少しだけ顔色が悪い。

だが、ルーミアはそんなことに眼も向けずに世間話を広げる。

これだけで終わってほしい。そんな俺の願い。だが

「ねえ、皆」

その言葉と共に、漸くルーミアは俺達四人の顔を見た。

そして俺は息を呑む。ルーミアの瞳にはナニカを決意した光を灯していたからだ。だが、ただ決意の光を灯していただけならば俺はここまで嫌な予感しない。

その俺の予感通り、ルーミアの瞳には悲哀の決意が宿っていた。

待て、ルーミア。その先を口にするな……

そんな願いは無残に引き裂かれ、俺が危惧していた事態が俺達に振りかかろうとする。

「私のお願ひ、聞いてくれないかしら？」
「お願ひ……？」

四人を代表して俺がルーミアとの会話を進める。

「そう、単純なお願い。そして私の一生で一度のお願いよ

いつも俺たちならばそんな水臭いことは言つなどばかりにその願いを聞き入れたところだろう。

だが、今の俺達にはそんな決断を下せないでいた。

間違いなく、その願いを聞いてしまえばナーナーが壊れる。そんな予感が俺の中には存在したから。

「……内容は？」

だが、それでも俺は「」の言葉を口にしなくてはいけなかつたのだろつ。

それがルーミアの願いであり、そして本題なのだから。聞いてはいけない。体中の至るところからそんな警鐘を打ち鳴らす。

だが

「簡単よ。 私を封印してくれないかしら？」

崩壊の序曲は既に演奏されてしまつていた。

「ふつ……いん？ ハハッ、お姉さんでもそんな小粋な冗談を口にするんだね？」

その言葉に対し、最初に反応して口を開くことができたのは靈花だつた。

だが、そんな言葉とは裏腹に靈花の顔は引き攣り、声は震えていた。俺も祥果も神綺も同じ心境で、靈花の言葉は俺達全員代弁であった。

外れていて欲しい。『冗談よ、冗談。まさかこんな嘘を本気にするなんて』とかいつものルーミアの口調で言ってくれるのを願う。しかし現実は残酷だ。

「流石の私もこんな性質の悪い冗談は口にしないわ。私は本気であなた達に私という存在を封印して貰いたいの。”闇夜の王”たるこの私を。私を封印出来そうな知り合いは貴方達しかいなのよ」

ルーミアの表情も、声、雰囲気も、全てが冗談ではなく本気。絶句といった表情しか浮かべられない俺を除く三人。

そんななか、俺は口を開く。

「……ルーミアを封印しなくちゃならない理由は何だ？ 何も説明されずに『私を封印して』と言わっても俺達はどうする事も出来ない。お前は俺達にとって大切な存在だぞ？ まさかお前にとつては俺達はそんな軽い存在なのか？」

「そんな訳……ないでしょ？」

悲しそうに、本当に哀しそうにルーミアはこちらを見る。

「私だけ出来る事ならこんなことほしだくないし、こんなことを貴方達にやらせたくない。でも、もうそんな泣き事を言つていられる時間は過ぎ去ったの」

「何を言つてるんだ？」

「時間がないの。タイムリミットは多分”千年祭”くらいまで」「だから何を言つてるんだ……？」

俺は困惑することしか出来ない。

ルーミアの発する言葉を俺達の中の誰一人として正しく理解出来た存在はいない。

ただただ、ルーミアは時間がないと繰り返し呟く。一体何が時間がないというのだ。

「だから何が「崩壊するの」は……？」

「世界がね……。世界が、崩壊するの」

「つ……！」

その言葉にルーニア以外の存在は絶句する。

世界の……崩壊、だと？ 一体、どうして？

そんな考えが頭の中をぐるぐる回る。

ぐるぐるグルグル回る思考は次第に全体の思考を停滞に導き、確かな思考が纏まらない。

だからこそ、俺はルーニアの言葉を聞くしかなかつた。

「私のせいな」

悲しみを堪えた声でルーニアは告げ、俺達はその言葉を聞き、もう一度絶句したのだった。

42・崩壊へのカウントダウン（後書き）

終に始まってしまったシリアルス（笑）。

本来なら色々と書くのですが、書く気力が出ない。

何しろ私の今の状態は徹夜。その状態で毎日投稿の偉業を壊したくなかったので執筆を開始したのでそろそろ限界（汗）
そんな状態で執筆したもんだからクオリティは下がっているやも知れぬ。

もしかすれば深夜に大幅改稿するかも？ まあ批判がなければそのまま押し通りますがねw

4.3・我儘な願い（前書き）

この作品は原作「東方project」の一次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多くあると思います。

そういうのが嫌な方は早々にプラウザバックすることを推奨します。

「どういづ…… ことだ？」

俺はそう喉をカラカラにして問いかけるしか出来なかつた。体中から冷や汗と嫌な脂汗が噴出し、ルーミアが言つた言葉を頭が上手く理解しない。既に周りの三人は顔面蒼白。俺も鏡がないから確實には言えないだろうが、三人と同じような表情に違いない。悲しみと決意を秘めたルーミアの瞳がこちらをジッと見る。その表情から、ルーミアが冗談でこのような事を口にしたのではないと理解出来た。

ルーミア以外の四人はただただその言葉を壊れた機械のように繰り返し、ルーミアは答えた。

「皆は私がどういった存在かは理解してるわよね？」

「お姉さんは”闇夜の王”とまで称される大妖怪でしょ？……？」

「そう。靈花が言つ通り、私は大妖怪。けど、私を構築している本質、根底に横たわる根源とは何か？」

それは……

「……”闇”……そのモノ」

「そう、私は妖怪であると同時に”闇”そのモノもある。それは私が”闇”であるからこそ妖怪であり、妖怪であるからこそ”闇”であるということ。それは切つて切り離すことは出来ない事象」

そんなことはここにいる四人は当の昔から理解している。それに、そこに付いて何一つの問題も見られない筈だ。

それなのにどうしてルーミアは追い詰められ決断した表情を浮か

べる？

可笑しい、可笑し過ぎる。そもそも、ルーミアがこの世界に存在していることが理由により世界が崩壊するのなら、もつと早くに世界は崩壊しているはず。それとも何だ？ 世界がルーミアを受け入れるだけの許容量を食み出したのか？

「私＝闇の等式は、私と闇の力関係が対等であつて初めて成り立つ等式。もしもその等式が崩れてしまえば？」

「……ルーミアの方が力関係が強かつた場合は問題らしい問題はない筈だ」

「そうね。」私の方が力が強ければ問題ないかもしれないわね。でも

逆の場合はどうかしら？

その声は悪魔の囁きという甘く誘惑してくるようなモノではなく、神による無慈悲な判決に聞こえた。

ルーミアは俺達にこう言いたいのか？

ルーミアの能力であつた”闇”を自身では抑えきれなくなつた、と。

「神威は既に理解したと思つたが、そうこうひとよ

外れて欲しかつた懸念はルーミアによつて残酷に告げられる。

「……待つてくれ。なら今まではどうして大丈夫だったんだ？ それほどの大事、そう易々と耐えられるものじゃない」

「そうね。でも、無理をすれば耐えきれないモノでもないことは事実。そして私は無理をした。たつたそれだけ」

ルーニアの言い分は正しく、そして確かにことなのだろう。

瞳に宿る光は濁つたものではなく、それだけで嘘を付いていないと無理矢理に理解させられた。

しかし、それに未だ納得できないのか神綺は顔を顰めながらルーニアに尋ねる。

「……ルーニアちゃん。その問題は生まれつきの問題だったの？ それとも突然的な事故か何かの要因によつて起じつた事？」

そうだ。

俺はルーニアと出逢つてから数万年と立つが、今までそのようなそぶりを見せたことは あつた。そうだ、この約千年間、もつと遡ればルーニアはいつから俺と模擬戦をしなくなつた？ どうして俺と模擬戦をしなくなつた？ いつから何かを齒むくみうなそぶりを見せるようになった？

「……後者よ。でもこれは誰が原因といつ者じやなくて、然るべきことだつたのよ」

「その口ぶりからすれば原因は解つてゐるんじやな？」

「……

沈黙。

その沈黙は肯定と捉えて間違ひではない。

「……多分だけど、環境の変化が原因だつたのでしょうかね」「環境の変化……？ つー？ まさか

「

ルーニアのヒントが俺の記憶を蘇らせる。

環境の変化、つまりは自身が住まう場所が移り変わったということだ。だが、この世界を旅していった当時にそのような症状が発症したことはない。これは断言出来る。

ならば、もつと具体的、根本的に環境が変化したことはなかつたか？

例えば一時とはいえ”魔界”に身を寄せたなど。

「”魔界”……いや、”魔界”に存在した大量の”瘴氣”が原因か？」

「やつぱり神威だとすぐに解るのね。そう、あの時から身体が変調した事から顧みて、間違いなくそれが原因。といつより、それ以外の原因が見当たりないもの」

ルーミアはあの時から既に自身の身体に異変が起きていることを理解していた。

つまり、一万年近くの間、ルーミアはその事を俺達に黙っていたということ。理由はすぐに思いつく。どうせ俺達に多様な心配を掛けたくなかつたのだろう。

だからこそ、俺が差そう模擬戦も断りを入れ、また時たま一人で行動をしていた。前者は平常時でさえ無理矢理に自身から溢れる”闇”を制御しているというのに、戦闘という一種の闘争状態に老いては制御出来ないことを理解してのこと。後者はどうにかしてその制御法を見つけようとしていたことだらうか。

「あの時からどうにかしようと必死になつたけど、さつきも言つたようにタイムアップみたい

優げな笑みを浮かべるルーミア。

「無理して”闇”も抑えるけど、今も気を抜けばあつといつ間にこの世界が私の”闇”で覆い尽くされる　いえ、呑み込まれる」「そして世界が崩壊する……とこいつとか」

「ええ

「え

俺は振り返つた。

背中から溢れ出る怒気に驚いたからだ。そこには涙を堪え、そして堪え切れずに零す靈花の姿があつた。

わなわなと震わせる口元。それは今にも噴火しそうな活火山のようだ。

「どうして……どうしてそんな大事なことを黙つてたのつー？　そんなにお姉さんにとって私達は役に立たない存在だったのつー？」

「靈花……」

「どうしてつー！？　私はまだいい。だつて私はお姉さんからしてみればヒヨウ同然だつてことは理解してるから。でも、でもお兄さん達は違う筈でしょー！？　お兄さんたちはお姉さんたちと同じ存在なんだよつー！？　それなのに、どうしてつー？」

「……迷惑や面倒、それに心配を掛けたくなつたの」

これはルーミアの本心。

だが、そんなものは関係ないとばかりに靈花は吠える。

俺や他の二人は蚊帳の外。何たつて、俺達が言いたいことは靈花が代わりに叫んでくれるから。

「迷惑を掛けたくなかった？　いつ、誰が！　それを迷惑だつたって言つたのつー！？　そんなのお姉さんの独善や自己満足でしかないじゃないつー！」

「……ならどうすれば良かつたというの？　素直に話せば良かつた

？ それが出来れば苦労はしなかつた。私にとつて、貴方達は本当に大切な存在なの。そんな人達に心配なんて掛けたくは

」

「それが勝手つて言つてるのにつ！ 何でお姉さんはそこまで頑固で融通が効かないのつ！？ 誰だつて自分以外の他人と暮らすならどう足搔いたつて迷惑や心配を掛けるのは当たり前でしうつ！？ 他人に迷惑を書けない存在なんてこの世にはいない！ 私も、神綺ちゃんも、祥果さんも、勿論お兄さんだつて自分じやない誰かに迷惑をかけて生きてるのつ！」

ああ、そうだ。

「それなのにどうしてお姉さんは肩肘を張るのつ！？ 何で、ただ素直に」

靈花の瞳から涙が落ち、一番言いたかつた言葉を放つた。

「 ”助けて” つて言つてくれないの……？」

「うがお前を助けよう。

だが、言つてくれなければ俺達にはどうしようも出来ない。だつて、それが本当にお前の為になるかどうか解らないから。

だから……俺達はその言葉を待つてるんだ。

たつた一言お前が願つてくれれば。

「……私だつて出来る事なら叫びたかった！ 怖くて怖くて発狂しそうだつたわつ！ でも、それでも」

涙をその瞳に湛えたルーミアは叫ぶ。

「 駄目なのよ。貴方達に迷惑を掛けてしまえば貴方達が私から離れて行ってしまうように思えて……。勇気を振り絞って言おうと思つても、どうしてかそんな夢を見てしまうの。そんなことはしないつて頭じゃ理解しているわ。でも、心が納得しなかつた。心の奥底で私の中のナニカが囁くの……」

それは贖罪か。それとも昔の自分を映した鏡を思い浮かべたのか。

「私は恐怖を与える存在でしかなかつた。そんな私の生き様を変えてくれたのは神威、貴方よ……。そしてそんな私でも貴方達という得難い大切な存在を得れた。それなのに……、それなのにどうして迷惑を掛けられるというのつ！？」

「ルーミア……」

「私だつてつ！ 叫びたかつたつ！ 助けて欲しいつてつ！ 消えたくないつてつ！」

幾千幾万もの想いが込められた言葉。

喜びも悲しみも、憎しみも後悔も、全ての感情が込められた言葉。そして、その言葉こそが俺達が欲しかつた言葉。

「 祥果」

「 ……何じゃ？」

「 神綺」

「 ……どうしたの？」

「 霊花」

「 ……なに？」

だからこそ俺は残りの二人に問いかけた。

「ルーミアの叫び声は、願う想いはお前達の下に届いたか？」

聞くまでもなかつた言葉。

「無論」

「当たり前ね」

「当然つ」

だから返つて来る言葉も俺が予想していた言葉通り。

「俺達の大切な存在が願つた想い。我儘など漏らさなかつたルーミアが初めて零した、身勝手で恣意的で自分本位で自己中心的な願い」

「

俺は悠然とルーミアに問いかけた。

「プランは？ 俺達はお前がこの世界から姿を消すなんて計画に加担するつもりはない。だが、絶対に帰つて来ると誓えるなら、俺達はお前の ルーミアの力になろう」

43・我儘な願い（後書き）

一週間ぶりとなりましたが何とか投稿出来ました。

本当ならちやつちやと書きたかったのですが、どうしても書き終えることが出来ませんでした。まあ睡眠不足が最大の原因でしょうね。

とりあえずシリーズ（笑）第二弾。予定では第五弾辺りには終わらせる予定。

でも予定は未定つてよく言つので、ぶっちゃけわかりません。また投稿速度が戻る……といつワケでもないので、二章完結は三月入つてからかな？

スランプは脱出できたのかよくわかりませんし。」

まあISのストック分を週一で投稿してるので「死んでんじやね？」とは思われない筈。ただISも執筆意欲は無くなってるし……。いざとなつたらネギまのストックを放出してその場凌ぎとしますか（汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911p/>

東方夢幻抱影

2011年7月27日22時38分発行